アンデルセンの世界

人魚姫と雪の女王

（完全版）

はじめに

さて、本年の最初は、『アンデルセンの世界』（人魚姫と雪の女王）を予定していましたが、なかなか想うように前に進まず、そこで、「前半部」（マッチ売りの少女、人魚姫、裸の王様）と「後半部」（雪の女王、みにくいアヒルの子）の「二部」に分けて発表しましたが、その「二つの作品」を「一つに統合」して、本来の『アンデルセンの世界』（人魚姫と雪の女王）完全版にしたものであり、その「内容」は、次のようなものである。

まず、『マッチ売りの少女』という作品は、すでに多くの人たちがよくご存知の内容であり、それゆえ、あらためて書く必要もないのかも知れないが、ただ、その一つ一つの細かな内容まではよく知らない人も多いかと思い、敢えてその一つ一つを丁寧に読み解いたものであり、また、『人魚姫』という作品は、これも非常に有名な作品であり、それゆえ、多くの人たちがよくご存知の内容かと思うが、ただ、多くの場合、それは、様々な「絵本やアニメ」などですでに何度か見たり読んだりしたものであって、アンデルセンの「童話」そのものを直接読むということは意外に少ないのではないでしょうか。そこで、今回は、アンデルセンの「童話」そのものの「本文」をできるだけ丁寧に読み解いたものであり、そして、『裸の王様』という作品は、ほとんどの人たちが、いくらなんでも、「……このようなことは現実にはあり得ない」と思いがちであるが、しかし、「……現実にもいくらでもあり得る話」だからこそ、まさに「興味深い話」になるのである。

一方、『雪の女王』という作品も、非常に有名な作品であり、その内容は、「七つの話」からできていて、第一話は、鏡とそのかけらのこと、第二話は、男の子と女の子、第三話は、魔法を使うおばあさんの花園、第四話は、王子と王女、第五話は、山賊の小娘、第六話は、ラップ人の女とフィン人の女、第七話は、雪の女王のお城であったことと、その後の話、となり、そして、もう一つは、有名な『みにくいアヒルの子』になりますが、その場合、これらの作品についても、例えば、様々な「絵本やアニメ」などですでに何度か見たり読んだりして、その内容も多くの人たちがよくご存知だろうと思いますが、しかし、アンデルセンの「童話」そのものを直接読むということは意外に少ないのではないでしょうか。そこで、今回も、アンデルセンの「童話」そのものの「本文」をできるだけ丁寧に読み解いたものであり、それゆえ、アンデルセンの『童話』に何らかの「興味や関心」がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

平成三十年九月吉日（完全版）

如月翔悟

目　次

アンデルセンの世界
はじめに
前半部
一、　マッチ売りの少女
二、　人魚姫
三、　裸の王様（皇帝の新しい着物）
後半部
四、　雪の女王（七つのお話からできている物語）
五、　みにくいアヒルの子
※　参考文献

アンデルセンの世界

人魚姫・その他

マッチ売りの少女

マッチ売りの少女

一、冒頭の文章

それは、たいへん寒い日でした。雪が降っていましたし、あたりは、もう暗くなりはじめていました。それは、また、一年のいちばんおしまいの夜、つまり、大みそかの晩でした。……この寒い、そして、暗いなかを、一人のみすぼらしい身なりの年のいかない少女が一人、帽子もかぶらず、おまけにはだしで、通りを歩いていました。――でも、家を出た時は、それでも木ぐつをはいていたのです。けれども、そんなものがなんのたしになるでしょう。それはとても大きな木ぐつでした。むりもありません。ついこのあいだまではお母さんがはいていたのですから。だから大きかったのです。しかも、それすらさっき往来をいそいで横ぎろうとしたとき、なくしてしまったのです。なにしろ二台の馬車がおそろしい勢いで走ってきたものですから。こんなわけで、木ぐつは、片方は見つかりませんでしたし、もう片方は、男の子がすばやく拾っていってしまい、そして、「……いまに赤ん坊が生まれたら、これをゆりかごにして使えるよ」と言って去ったのです。（本文）

＊　＊

さて、ここまでを考えてみたいと思うが、それは、「……たいへん寒い日でした。雪が降っていましたし、あたりは、もう暗くなりはじめていました。それは、また、一年のいちばんおしまいの夜、つまり、大みそかの晩でした」とある。――まず、今日は、とても寒く、雪も降っている。そのような十二月三十一日（つまり「大晦日（みそか）の晩《夜》」）のことであり、そして、「……この寒い、そして、暗いなかを、一人のみすぼらしい身なりの年のいかない少女が一人、帽子もかぶらず、おまけにはだしで、通りを歩いていました」となっている。――ここで大事なことの一つは、「……年のいかない少女が一人」とあり、これという年齢が明記されていないことである。これは、年齢に幅を持たせているとともに、あとは読者の自由な想像力にまかせているのである。ふつうに考えれば、小学生ぐらいかと思うが、この「アンデルセン童話」を母親から読み聞かされたり、自ら好んで読むのは、大体、二、三歳の幼児の頃から、十二歳ぐらいまでの学童期（小学校時代）頃が中心であり、それらの子供たちにあてはまるような「年齢設定」になっているのである。

しかも、その「年のいかない少女」は、「……みすぼらしい身なりで、帽子もかぶらず、おまけにはだしで、通りを歩いていました」とある。これは、本来であれば、外は非常に寒いのであり、それゆえ、例えば、防寒着をはじめ、帽子、マフラー、手袋、その他、何らかの「寒さ対策」をしてから外に出るのがふつうかと思うが、この少女の場合には、それらのものは何も身につけず、ただ、「……みすぼらしい身なりで、帽子もかぶらず、おまけにはだしで、通りを歩いていました」とある。――だとすれば、親からは何も買ってもらえていないということである。それは、なぜなのかと問えば、それは、極めて貧しいことが最大の理由ではあるが、もう一つは、いわば親の「愛情の欠如」であり、この少女は、親からの「愛情をあまり受けていない」という「設定」になっているのである。

しかも、はだしとある。もちろん、家を出る時には、「……それでも木ぐつをはいていたのです。けれども、そんなものがなんのたしになるでしょう。それはとても大きな木ぐつでした。むりもありません。ついこのあいだまではお母さんがはいていたのですから。

だから大きかったのです。しかも、それすらさっき往来をいそいで横ぎろうとしたとき、なくしてしまったのです。なにしろ二台の馬車がおそろしい勢いで走ってきたものですから。こんなわけで、木ぐつは、片方は見つかりませんでしたし、もう片方は、男の子がすばやく拾っていってしまったのです」とある。――まず、この少女は、大きな木ぐつをはいていた。この「木ぐつ」というのは、一般的には、下級労働者や農民などが履く安価な靴とみられがちであるが、高級なものもあり、その特徴は、まず、丈夫で、水に強く、すぐに履けて、汚れも一拭きでぬぐえる。そして、なぜ労働者が好んで使用するのかと言えば、それは、足を守ってくれる安全性が高く、また、水に強いという防水性もあるからである。それはともかく、この少女は、子供用の「くつ」も買ってもらえず、「……ついこのあいだまではお母さんがはいていたものを履き、だから大きかったのです」とある。

さて、この、「……ついこのあいだまではお母さんがはいていたもの」とあるが、まず、ここで熟慮すべきは、この少女の「母親」というのは、そもそも「生きているのか？　死んでいるのか？」という問題であり、その「設定」があいまいになっている。ただ、「……ついこのあいだまではお母さんがはいていたもの」とあるので、少なくても「ごく最近までは生きていた」ことになり、ごく最近までは生きていたが、今は、亡くなっているのか？　それとも、今も生きているのか？　その「設定」があいまいになっている。これも、読者の自由な想像力にまかされているのである。それでは、なぜ、母親の存在をもっとはっきりと「設定」していないのだろうか？　ここにこそ、作者（アンデルセン）の深い「思いや考え」などが奥深く秘められているのであり、それは、次のようなことである。

まず、母親という存在は、子供たちにとっては「絶対的な存在」であり、それゆえ、その母親に「大事にされる」のと「粗末に扱われる」のとでは、まさに「天国と地獄」ほどの違いがあるということである。一般的に、母親と言えば、当然のごとく、子供に「やさしい存在」というイメージになるが、作者（アンデルセン）という人は、実はそうではなく、やさしい母親もいれば、そうではない母親もいる、という極めて「現実的な認識」の上に立っているのである。誰も彼もが「母親の愛情」を受けているのではなく、「母親の愛情」を受けていない子供たちもいるということである。そして、この少女の場合も、母親の「愛情を十分には受けてはいなかった」という「設定」になっているのである。それでは、その「証拠」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、物語の終盤のところで、「……もうとっくに死んでいますが、この世の中でたった一人自分をかわいがってくれた、年とったおばあさん」という文章がある。だとすれば、母親からは「十分にかわいがってもらってはいなかった」ということになるのだろう。だからこそ、「……みすぼらしい身なりで、帽子もかぶらず、おまけにはだしで、通りを歩いていました」ということにもなるのである。

＊　　＊

例えば、この『マッチ売りの少女』という作品は、一般に、経済的には全く恵まれなかったアンデルセンの実の母親の「少女時代」をモデルにして描られたということであるが、それに加えて、この作品では、父親にぶたれたり、また、母親の「愛情も十分には受けてはいなかった」という「設定」になっているのである。それでは、なぜ、そのような救いようのない「設定」に敢えてしているのかと問えば、それは、一般的に、母親と言えば、当然のごとく、子供に「やさしい存在」というイメージになるが、作者（アンデルセン）

という人は、実はそうではなく、やさしい母親もいれば、そうではない母親もいる、という極めて「現実的な認識」の上に立っているのである。誰も彼もが「母親の愛情」を受けているのではなく、「母親の愛情」を受けていない子供たちもいるということである。つまり、富める者もあれば、貧しい者もある。親の愛情を受けるものもあれば、親の愛情を受けないものもある。それが、まさに「現実」なのだ、と言いたいのである。そして、この少女の場合は、家は極めて貧しく、また、両親の「愛情も十分には受けてはいなかった」という「設定」になっているのである。――ちなみに、木のくつがどうして赤ちゃんの「ゆりかご」になるのかはよく分からないが、例えば、一般に、両手で赤ちゃんを抱いて、両手を左右に大きく揺さぶれば、その両手が、まさに「ゆりかご」になるかと思うが、一方、例えば、赤ちゃんが入っている大きめのかごの下に木のくつを置いて揺らせば、それが、いわばギッタンバッコンの「ゆりかご」になるということなのかも知れない。

二、おなかをすかし、寒さにふるえながら歩いている

さて、こうして、今、この少女は、小さいはだしの足で歩いているのです。その足は、寒さのために、赤く、また青くなっていました。そして、古ぼけたエプロンのなかには、マッチをたくさん持っていました。また、手にもひとたば持って歩いていました。今日は、一日中、だれも買ってくれませんでしたし、また、だれ一人、わずか一シリングのお金さえめぐんでくれる人はいませんでした。おなかをすかし、寒さにふるえながら歩いているようすは、いかにも痛々しく、ほんとうに、あわれでした。――雪がひらひらと、少女の長くて金色の髪の毛に降りかかりました。その髪は、首のあたりで、とてもきれいにカールしているのでしたが、女の子は、今はそんな見かけのことなんか考えていませんでした。あたりの窓という窓からは、明かりが外にさしてきて、ガチョウの焼き肉のにおいが、とてもおいしそうに、通りにまでもにおってきました。それもそのはずです。大みそかの晩ですもの。そのことだけを、女の子は考えていました。（本文）

＊　＊

さて、少女は、「……小さいはだしの足で歩いていたので、その足は、寒さのために、赤く、また青くなっていた」とともに、「……古ぼけたエプロンのなかには、マッチをたくさん持っていて、また、手にもひとたば持って歩いていました」とある。――まず、「古ぼけたエプロン」とあるので、かなり「使い込んだエプロン」になるのかも知れない。また、ここでの「マッチ」というのは、日本のように箱に入った小さな「マッチ」ではなくて、むしろ、マッチ棒の長い何かにこすって火を付けるものであり、それを何本か束ねて「一束（ひとたば）」にし、それを売っていたということである。ところが、「……今日は、一日中、だれも買ってくれませんでしたし、また、だれ一人、わずか一シリングのお金さえめぐんでくれる人はいませんでした」とある。――つまり、午前中からマッチを売り歩いて、今は、もう晩（夜）になっているが、今日は、一日中、誰も買ってくれる人もなく、また、誰一人、わずか一シリングのお金さえめぐんでくれる人もいなかったという最悪の日になっているのである。しかも、「……おなかをすかし、寒さにふるえながら歩いている様子は、いかにも痛々しく、ほんとうに、あわれでした」となるのである。

そして、「……雪がひらひらと、少女の長くて金色の髪の毛に降りかかり、その髪は、

首のあたりで、とてもきれいにカールしているのでしたが、女の子は、今はそんな見かけのことなんか考えていませんでした」とある。そして、「……あたりの窓という窓からは、明かりが外にさしてきて、ガチョウの焼き肉のにおいが、とてもおいしそうに、通りにまでもにおってきました。それもそのはずです。大みそかの晩ですもの。そのことだけを、女の子は考えていました」とある。――さて、そのことだけとは、むろん、おなかをすかし、寒さにふるえている少女にとっては、ガチョウの焼き肉のおいしそうなにおいこそは、何よりも心惹(ひ)かれるものであったということである。……

三、家が二軒並んでいるところで……

さて、家が二軒並んでいて、一軒の家が、もう一軒の家より通りへ少し出ているところがありました。その二軒の家のあいだのすみに少女はからだをちぢめて、うずくまりました。そして、小さい足を、からだの下にひっこめました。けれども、やっぱり寒くなるばかりでした。でも、少女は家へ帰ろうとはしませんでした。マッチはまだ一つも売れていませんし、お金だって一文ももらっていないからです。お父さんにきっとぶたれるでしょう。それに、家のなかも寒かったのです。屋根だって名ばかりで、大きなすきまには、わらや、ぼろきれがつめてありましたが、それでも、風はピューピュー吹き込んできました。

（本文）

＊　　＊

さて、少女は、「……家が二軒並んでいて、一軒の家が、もう一軒の家より通りへ少し出ているところがありました。その二軒の家のあいだのすみに少女はからだをちぢめて、うずくまりました。そして、小さい足を、からだの下にひっこめました。けれども、やっぱり寒くなるばかりでした」とある。――これは、家と家との間の狭い「隙間(すきま)」に身を置いて、少しでも「寒さ」を凌(しの)ごうとしたが、結果は、やっぱり寒くなるばかりでした、となるのである。そして、ここで最も大事なのは、その次であり、「……でも、少女は家へ帰ろうとはしませんでした。マッチはまだ一つも売れていませんし、お金だって一文ももらっていないからです。お父さんにきっとぶたれるでしょう。それに、家のなかも寒かったのです。屋根だって名ばかりで、大きなすきまには、わらや、ぼろきれがつめてありましたが、それでも、風はピューピュー吹き込んできました」とある。

まず、少女は、おなかをほんとうにすかして、また、寒さに真底ふるえながらも、家へ帰ろうとはしませんでした。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、「……マッチはまだ一つも売れていませんし、お金だって一文ももらっていないからです。お父さんにきっとぶたれるでしょう」と、そのために、家に帰りたくても帰れないのである。それは、そこに「暖(あたた)かな家庭」というものがないからである。この少女にとって、マッチを売ることがつらいのではなく、そうではなく、この少女をやさしく迎え入れてくれる「暖(あたた)かな家庭」というものがないのがつらいのである。それに、「……家のなかも寒かったのです。屋根だって名ばかりで、大きなすきまには、わらや、ぼろきれがつめてありましたが、それでも、風はピューピュー吹き込んできました」とある。――つまり、彼女の「家」（或いは家庭）というものは、まさに風がピューピュー吹き込むような、結局、彼女の「身も心」も真に温めてくれるようなところではなかったということである。

四、一本目のマッチで（暖かなストーブが……）

少女の小さな手は、寒さのために、もうほとんど死んだようでした。ああ！　一本の小さなマッチでも、こんな時は、どんなに役に立つでしょう。それには、マッチのたばから一本抜いて、壁にこすって、指先をあたためさえすればいいのです。少女は一本抜きました。シュッ！　なんという火花でしょう。なんとよく燃えること！　あたたかい明るい炎は、まるで小さなロウソクの火のようでした。少女は、そのまわりに手をかざしました。ほんとうに不思議なロウソクです！　なんだか、ピカピカした真鍮（しんちゅう）のふたと、真鍮（しんちゅう）の胴のついている大きな鉄のストーブの前にすわっているような気がしました。火は気持ちよく、あたたかに、そしてきれいに燃えました。ほんとうに、なんという火でしょう！　――少女は、足もあたためようと、そっとのばしました。そのとたんに、炎は消えました。ストーブも見えなくなりました。――少女は、手に燃えきったマッチの燃えさしを持ってすわっていました。（本文）

＊　　＊

さて、少女の小さな手は、「……（今や）寒さのために、もうほとんど死んだようでした。ああ！　一本の小さなマッチでも、こんな時は、どんなに役に立つでしょう。それには、マッチのたばから一本抜いて、壁にこすって、指先をあたためさえすればいいのです。（そこで）、少女は一本抜き出しました」とある。――つまり、少女は、余りの「寒さ」に耐えかねて、手に持っていた「マッチの束（たば）」からマッチ棒を一本抜き出しては、それを壁にこすって、火を付けたということである。すると、「……シュッ！　なんという火花でしょう。なんとよく燃えること！　あたたかい明るい炎は、まるで小さなロウソクの火のようでした。少女は、そのまわりに手をかざしました。ほんとうに不思議なロウソクです！」とある。――さて、ここで大事なことは、最初の一本目の「マッチ棒」を壁にこすって、火を付けてみると、それは、「……なんとよく燃えること！　あたたかい明るい炎は、まるで小さなロウソクの火のようでした。少女は、そのまわりに手をかざしました」とある。――つまり、「マッチ棒の火」は、まるで「小さなロウソクの火」のようでした。これは、マッチの火が「ロウソクの火」のようであり、それ自体何も不思議なことはない。

ところが、次の、「……なんだか、ピカピカした真鍮（しんちゅう）のふたと、真鍮（しんちゅう）の胴のついている大きな鉄のストーブの前にすわっているような気がしました。火は気持ちよく、あたたかに、そしてきれいに燃えました。ほんとうに、なんという火でしょう！　――少女は、足もあたためようと、そっとのばしました。そのとたんに、炎は消えました。ストーブも見えなくなりました」とある。――この「ストーブ」は、目の前には「実際」には存在していないものである。それでは、これは、一体、何なのかと敢えて問えば、一つは、余りの「寒さ」だったので、たった一本の「マッチ棒の火」でも、ストーブのような「暖かさ」を感じたということである。そして、もう一つは、寒さに震えている、この少女の「想像したもの」（或いはイメージしたもの）ではあるが、そのような「想像」（イメージ）をするということは、できれば、そうであってほしいという、この少女の「願望」（希望）でもあったのである。つまり、暖かなストーブが「あればいいな」ということである。そして、この少女が何よりも「最初に望んだもの」は、余りの「寒さ」にふるえ上がってい

る自分の「手、足、身体」を少しでも温めようとしたことである。そして、少女は、「……足もあたためようと、そっとのばしました。そのとたんに、炎は消えました。ストーブも見えなくなりました」とある。――これは、マッチ棒が燃え尽きることで「現実へと引き戻されてしまった」からであり、「……少女は、手に燃えきったマッチの燃えさしを持ってすわっていました」となるのである。

五、二本目のマッチで（白いテーブルの上に焼きガチョウが……）

また、新しいマッチをこすりました。マッチは燃えあがって、あかるく光りました。その光がそばの壁を照らすと、その壁は、まるで紗（ヴェール）のように、すきとおりました。少女がそのなかを見ますと、そこには、輝くばかりに白いテーブル掛けをかけたテーブルがありました。その上にはきれいな磁器がならべてあって、スモモやリンゴをつめた焼きガチョウが、ほかほかとおいしそうな湯気を立てているではありませんか！　そして、もっとすばらしいことには、そのガチョウがお皿からとびおりて、背なかにフォークとナイフをさしたまま、床の上を、よたよたと歩きだしたことです。そして、あわれな少女のほうへ、まっすぐにやってくるではありませんか。その時、マッチの火が消えました。そして、ただ、厚いつめたい壁が見えるばかりでした。（本文）

＊　＊

さて、少女は、「……また、新しいマッチをこすりました。マッチは燃えあがって、あかるく光りました。その光がそばの壁を照らすと、その壁は、まるで紗（ヴェール）のように、すきとおりました」とある。――むろん、ふつうであれば、あり得ないことであるが、しかし、彼女の場合は、今やどこか「臨死状態」にも近い「精神状態」でもあり、それゆえ、何か「幻覚」を見るという可能性もないとは言えないのである。それはともかく、腹をすかして、寒さにふるえている少女が第二番目に心の底から「望んだもの」は、まさにその「空腹」を満たすための「食べ物」であり、それは、次のようなものである。つまり、「……少女がそのなかを見ますと、そこには、輝くばかりに白いテーブル掛けをかけたテーブルがありました。その上にはきれいな磁器がならべてあって、スモモやリンゴをつめた焼きガチョウが、ほかほかとおいしそうな湯気を立てているではありませんか！　そして、もっとすばらしいことには、そのガチョウがお皿からとびおりて、背なかにフォークとナイフをさしたまま、床の上を、よたよたと歩きだしたことです。そして、あわれな少女のほうへ、まっすぐにやってくるではありませんか。その時、マッチの火が消えました。そして、ただ、厚いつめたい壁が見えるばかりでした」となるのである。――これは、少女の「頭の中」（或いは「心の中」）で「想像したもの」（或いはイメージしたもの）であるとともに、少女の「願望」（希望）でもあったということである。

六、三本目のマッチで（クリスマスツリーが……）

少女は、また、新しいマッチを燃やしました。今度は、この上もないきれいなクリスマスツリーの下にすわっていました。それは、この前のクリスマスに、金持ちの商人のところでガラス戸越しに見たのよりは、ずっと大きく、そして、ずっときれいに飾りたててあ

りました。何千というロウソクが緑の枝の上で燃えていました。そして、商店の飾り窓を飾っている色あざやかな美しい絵が、こちらを見おろしていました。少女は思わず両手をのばしました。――そのとたんに、マッチは消えてしまいました。たくさんのクリスマスのロウソクは、高く、どこまでも高く、空へのぼってゆきました。少女の目には、それらが明るい星になって見えました。そのうちの一つがとんで、空に長い光の線をひきました。

（本文）

＊　　＊

さて、少女は、三番目のマッチを燃やすと、「……今度は、この上もないきれいなクリスマスツリーの下にすわっていました。それは、この前のクリスマスに、金持ちの商人のところでガラス戸越しに見たのよりは、ずっと大きく、そして、ずっときれいに飾りたててありました。何千というロウソクが緑の枝の上で燃えていました」とある。――まず、そもそも「クリスマス」というのは、一体、何かと問えば、それは、イエス・キリストのまさに「誕生日祝い」であり、その時に飾るのが「クリスマスツリー」であり、この「クリスマスツリー」というのは、もともとはアダムとイブの「知恵の樹」を模したものであり、その緑の枝には様々なものを飾り付けるとともに、当時は、ロウソクを、今日では、数多くの豆電球やＬＥＤ照明などで明るく飾り立てているものである。そして、この少女が第三番目に心の底から「望んだもの」は、まさに「クリスマスツリー」であったのです。

これは、一体、何を意味するのかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。まず、この少女は、恐らく、一家団らんで楽しく「クリスマス」を過ごすというような経験が、ほとんどなかったのではないかと思う。少なくとも今年はなかったということである。それは、「……この前のクリスマスに、金持ちの商人のところでガラス戸越しに見たのよりは、ずっと大きく、そして、ずっときれいに飾りたててありました」とある。――つまり、自分の家では様々に飾り立てた「クリスマスツリー」は見ていないのであり、また、何かクリスマスプレゼントなどをもらうということも恐らくなかったということである。だからこそ、この少女は、「クリスマスツリー」を「想像」（イメージ）することで、まさに一家団らんで楽しく「クリスマス」を過ごすという、そのような「暖（あたた）かな家庭」というものを、まさに「願望」（希望）したということでもあるのである。

さて、そのマッチの火が消えると、「……たくさんのクリスマスのロウソクは、高く、どこまでも高く、空へのぼってゆきました。少女の目には、それらが明るい星になって見えました。そのうちの一つがとんで、空に長い光の線をひきました」とある。――まず、今（現在）は、十二月三十一日（つまり「大晦日（みそか）の晩《夜》」）であり、しかも、雪が降っている。それゆえ、このままでは、当然のことながら、夜空に「星」を見ることはできず得ない。そこで、作者（アンデルセン）は、次のようにするのである。それは、「……たくさんのクリスマスのロウソクは、高く、どこまでも高く、空へのぼってゆきました。少女の目には、それらが明るい星になって見えました」という展開にして、「……そのうちの一つがとんで、空に長い光の線をひきました」とするのである。――これは、少女がいわば「流れ星」を想像（イメージ）することで、次のような展開へとなるのである。

七、空に長い光の線（いわば流れ星）を見て……

「あっ、だれかが死ぬんだわ！」と、少女は言いました。もうとっくに死んでいますが、この世の中でたった一人自分をかわいがってくれた、年とったおばあさんが、星が一つ落ちると、そのたびに、一つの魂が神様のところへのぼってゆくんだよ、と言っていたからです。――少女は、またまた一本のマッチを壁にこすりました。あたりがぱっと明るくなりました。すると、そのあかるい光のなかに、年をとったおばあさんが立っているではありませんか。その姿は、いかにもやさしく、幸福そうに、光り輝いて見えました。（本文）

＊　　＊

さて、少女は、そのいわば「流れ星」（正確には空に長い光の線をひいたもの）を見て、「……あっ、だれかが死ぬんだわ！」と言う。（これは、実は自分のことになるが）、それは、「……もうとっくに死んでいますが、この世の中でたった一人自分をかわいがってくれた、年とったおばあさんが、星が一つ落ちると、そのたびに、一つの魂が神様のところへのぼってゆくんだよ、と言っていたからです」とある。――まず、ここに突然「おばあさん」が出て来る。しかも、この「おばあさん」は、「……もうとっくに死んでいますが、この世の中でたった一人自分をかわいがってくれた、年とったおばあさん」とある。――だとすれば、実の父親からも、また、実の母親からも、この少女は、十分な「愛情は受けてはいなかった」ということであり、唯一、「……この世の中でたった一人自分をかわいがってくれた」のは、まさにこの「年とったおばあさん」だけであったということである。

そして、またまた一本のマッチを壁にこすると、「……あたりがぱっと明るくなりました。すると、そのあかるい光のなかに、年をとったおばあさんが立っているではありませんか。その姿は、いかにもやさしく、幸福そうに、光り輝いて見えました」とある。――つまり、この少女が第四番目（最後）に心の底から「望んだもの」は、まさに「……この世の中でたった一人自分をかわいがってくれた、年とったおばあさん」に会いたいということであり、それゆえ、一本のマッチを壁にこすれば、当然のことながら、「……あたりがぱっと明るくなり、そして、そのあかるい光のなかに、年をとったおばあさんが立っているではありませんか。その姿は、いかにもやさしく、幸福そうに、光り輝いて見えました」となるのは、当然のことなのである。――ただ、ここで大事なことは、「……その姿は、いかにもやさしく、幸福そうに、光り輝いて見えました」というところであり、それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、「……この世の中でたった一人自分をかわいがってくれた、あの昔と少しも変わらないままの、いかにもやさしく、幸福そうな、年とったおばあさんの姿」であったからこそ、次のような「言葉」になるのである。

八、少女は、「おばあさん！」と、……

少女は、「おばあさん！」と、叫びました。「……わたしをつれてってちょうだい！だって、わたし知ってるわ。おばあさんは、マッチが消えると、いってしまうんでしょう。ちょうど、あのあたたかいストーブや、おいしそうな焼いたガチョウや、あの大きくて、すてきなクリスマスツリーのように！」、――そして、少女は大いそぎで、たばのなかの、残りのマッチを全部こすりました。こうして、おばあさんをしっかりとひきとめておこうと思ったのです。マッチはとても明るく輝いて、あたりは真昼よりも、もっと明るくなり

ました。そして、この時ほど、おばあさんが美しく、大きく見えたことは、ありませんでした。おばあさんは小さい少女を腕にだきあげました。こうして、二人は光とよろこびとにつつまれて、高く高くのぼってゆきました。そこにはもう、寒いことも、おなかがすくことも、こわいこともありません。――二人は神様のみもとに、召されたのです。（本文）

＊　＊

さて、いよいよ「クライマックス」へと向かうことになるが、それは、次のような内容である。――つまり、少女は、「おばあさん！」と叫び、そして、「……わたしをつれてってちょうだい！　だって、わたし知ってるわ。おばあさんは、マッチが消えると、いってしまうんでしょう。ちょうど、あのあたたかいストーブや、おいしそうな焼いたガチョウや、あの大きくて、すてきなクリスマスツリーのように」と言うのでした。――まず、この少女の、「……わたしをつれてってちょうだい！」というこの言葉は、余りにも「衝撃的な言葉」であるが、それは、「……この世でこのままつらく生きるよりは、むしろ、あの世でやさしいおばあさんと一緒に暮らしたい」という、この少女の、いわば最後の「願望」（希望）そのものであり、そのために、少女は、「……大いそぎで、たばのなかの、残りのマッチを全部こすりました。こうして、おばあさんをしっかりとひきとめておこうと思ったのです。マッチはとても明るく輝いて、あたりは真昼よりも、もっと明るくなりました。そして、この時ほど、おばあさんが美しく、大きく見えたことは、ありませんでした。おばあさんは小さい少女を腕にだきあげました。こうして、二人は光とよろこびとにつつまれて、高く高くのぼってゆきました。そこにはもう、寒いことも、おなかがすくことも、こわいこともありません。――二人は神様のみもとに、召されたのです」となるのである。

さて、少女は、「……おばあさんの腕にだきあげられて、二人は光とよろこびとにつつまれて、高く高くのぼってゆきました。そこにはもう、寒いことも、おなかがすくことも、こわいこともありません」とある。――少女は、光とよろこびとに充ちた「天国」へと高くのぼったのであり、「地獄」へと堕ちたわけではない。……そして、「……そこにはもう、寒いことも、おなかがすくことも、こわいこともありません」とある。逆に言えば、「……寒いこと、おなかがすくこと、こわいこと、その他」が少女を苦しめていたということであり、それは、人間が生きていくための最低限の「衣食住」と「暖かな家庭」というものがなければ、小さな子供たちというのは、まさに「生きてはいけない」ということである。――つまり、小さな子供たちが心の底から「望んでいる」ことは、何よりも「暖かな家庭」というものであり、この少女も、「暖かな家庭」というものがあれば、家へと帰ることはでき得たのである。そうであれば、何も急いで「天国」へと向かう必要もなかったのである。……それゆえ、何よりも大事なのは、もちろん、最低限の「衣食住」というものはどうしても不可欠ではあるが、それとともに、親の「愛情」（つまり「暖かな家庭」）というものであり、親の「愛情」（つまり「暖かな家庭」）というものがあれば、小さな子供たちは、十分に生きていけるということである。……そして、最後は、次のように締めくくられているのである。

九、あたらしい年の始めの朝に……

けれども、家のわきのすみっこには、寒い朝、小さい少女が赤いほおをして、口もとには、ほほえみさえ浮かべて、――死んでうずくまっていました。ふるい年の最後の晩に、こごえ死んだのです。あたらしい年の朝が、小さいなきがらの上にのぼってきました。そのなきがらはマッチを持ったまま、うずくまっていました。そのうちのひとたばは、ほとんど燃えつくしていました。この子は、あたたまろうとしたんだね、と、人びとは言いました。だれも、この少女が、どのような美しいものを見たか、また、どのように光につつまれて、おばあさんといっしょに、新しい年の喜びをお祝いしにいったか、それを知ってる人はいませんでした。（完）

＊　　＊

さて、この最後の「描写」というのは、われわれの「目」にはっきりと見えている「現実の情景」であり、それは、「……家のわきのすみっこには、寒い朝、小さい少女が赤いほおをして、口もとには、ほほえみさえ浮かべて、――死んでうずくまっていました。ふるい年の最後の晩に、こごえ死んだのです。あたらしい年の朝が、小さいなきがらの上にのぼってきました。そのなきがらはマッチを持ったまま、うずくまっていました。そのうちのひとたばは、ほとんど燃えつくしていました。この子は、あたたまろうとしたんだね、と、人びとは言いました」とある。――これは、われわれ人間のごくふつうの「ものの見方」であるが、われわれ人間というのは、どうしても相手のいわば「外的事実」などを主に見て、ああだこうだと言っているのである。例えば、この少女の場合であれば、家のわきのすみっこで、冬の寒さでこごえ死んでいたわけだから、他人から見れば、ただただもう「かわいそうな女の子」としか見えないものである。……

一方、少女自身はどうだったのか？　本文では、「……だれも、この少女が、どのような美しいものを見たか、また、どのように光につつまれて、おばあさんといっしょに、新しい年の喜びをお祝いしにいったか、それを知ってる人はいませんでした」とある。――つまり、この少女自身は、一体、どのようなことを思い、また、どのようなことを経験していたかなどは、誰にも分かりようがないのに、われわれ人間というのは、ちょっと見だけで、勝手にああだこうだ、と、決め付けてしまう傾向があるということである。――つまり、この少女は、この世では、たとえ十二分に「仕合わせ」ではなかったとしても、あの世では、やさしかったおばあさんの胸に抱かれながら、光とよろこびとに充ちた「天国」へと高くのぼっていき、そして、そこで永遠の「仕合わせ」を得たという物語（ストーリー）になっているのである。

＊　　＊

希
望

希望

例えば、パンドラの箱を開けて、最後に残ったものは、まさに「希望」であったが、その「希望」さえあれば、われわれは、まだ十分に生きていける。しかし、その「希望」さえも絶たれてしまうと、それは、まさに「絶望」へと堕ちていくしかない。しかし、われわれは、たとえ「絶望」へと堕ちても、いわゆる完全なる「絶望」ということはあり得ない。なぜなら、何らかの「希望」を抱かずに、われわれ人間は、一時たりとも生きてはいられないからである。それは、例えば、今、まさに死んでいくような人でさえ、何らかの「希望」を抱いているものである。それは、なぜなのか？　それは、われわれ生命体は、絶えず生きようとしている。そのように「絶えず生きようとしている生命体」は、たとえいかなる「状況・状態」におかれても、なお「生きようとしている」ものだからである。それゆえ、たとえ「絶望」のどん底にうち沈んでいても、なお最後の「望み」を捨てることはできない。しかし、その最後のかすかな「望み」さえも絶たれてしまうと、最後の最後の最後には、「諦め」という心的状態になるかと思うが、そのような心的状態に落ち込んでも、なお「希望」を捨てることはでき得ない。なぜなら、それが、まさに「生命体の生きようとする本能（遺伝子）の働き」だからである。それゆえ、例えば、「自殺」という行為は、まさに「生命体の生きようとする本能（遺伝子）の働き」に、敢えて「逆らおうとする行為」になるということである。

それでは、「希望」そのものというのは、一体、どういうものになるのかと問えば、それは、次のようなものになるかと思う。つまり、われわれ人間にとって、いわゆる「これがなければもう生きられない」というような、まさに最後の最後の《心の「光」》のようなものであるとともに、その最後の最後の《心の「光」》さえも消えてしまえば、われわれ人間は、もう生きられないということである。それゆえ、「希望」そのものというのは、消えるということがないものである。――例えば、『マッチ売りの少女』という作品では、最後、売れず残った「マッチの束（たば）」からマッチ棒を一本一本燃やしては、一つは、「暖（あたた）かな火（ストーブ）」を想像（イメージ）し、一つは、「美味（おい）しい料理」を壁越しに想像（イメージ）し、また、一つは、大きくて素敵な「クリスマスツリー」を想像（イメージ）し、その何千のロウソクは、やがて、高く空へとのぼって、その一つが「流れ星」のようになるのを見て、優（やさ）しかったおばあさんのことを想い出し、そこでまたマッチをこするとそのおばあさんが現れるとともに、最後には、そのおばあさんの胸に抱かれながら天へとのぼっていくという、それは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、その一つ一つが、それこそは、まさにこの「マッチ売りの少女」が心の底から「望んだもの」であり、それは、まさに最後の最後の彼女の「願望」（希望）そのものであったということである。

そして、それをもっと言えば、生きるための最低限の「衣食住」というものは、もちろん、どうしても必要不可欠なものではあるが、それに加えて、いわゆる「暖（あたた）かな家庭」というものがなければ、小さな子供たちというのは、まさに「生きられない」ということである。つまり、小さな子供たちにとって最も大事なものとは、すなわち、何よりも「暖（あたた）かな家庭」というものであり、その「暖（あたた）かな家庭」というものこそは、小さな子供たちが心の底から望んでいる、まさに「希望」そのものなのである。

例えば、有名な『フランダースの犬』というテレビのアニメなども、その内容を辿れば、

やはり、やさしい「おじいちゃん」が生きている間は、幸せであったが、そのおじいちゃんが亡くなり、いわゆる「暖(あたた)かな家庭」というものが崩壊したあとは、少年ネロと一匹の犬（パトラッシュ）は、それでも一生懸命に生きようとするけれども、結局は、「生きられなかった」ということである。――それは、小さな子供から少年少女（つまり「子供たち」）が生きていく上で、最も大事なものとは、すなわち、何よりも「暖(あたた)かな家庭」というものであり、その「暖(あたた)かな家庭」というものこそは、小さな子供から少年少女（つまり「子供たち」）が安心して生きていける、まさに「希望の光」そのものである、ということである。

＊　　＊

心の底(そこ)
灯(とも)る明(あか)りぞ
希望かな

二、人魚姬

目　次

アンデルセンの世界

人魚姫

一、　本文の「冒頭」
二、　人魚姫の家族と生活
三、　人魚姫と五人のお姉さんたち
四、　庭のそれぞれの花壇
五、　十五歳になったら……
＊　＊
六、　一番上の姫
七、　二番目の姫
八、　三番目の姫
九、　四番目の姫
十、　五番目の姫
十一、六番目の姫
＊　＊
十二、若い王子との出逢い
十三、王子の誕生祝いの後の船
十四、王子の乗った船の難破
十五、海に落ちた王子の救助
十六、一人の若い娘が王子を発見する
十七、人魚姫の憂うつ
十八、自分の想いを一人のお姉さんに打ち開ける
＊　＊
十九、王子が住んでいる御殿
二十、人魚の世界から人間の世界へ
二一、人魚と人間の違い
二二、人魚が人間の「不死の魂」を得るには
二三、人魚たちの舞踏会
＊　＊
二四、海の魔女の所
二五、魔女の家と二匹のペット
二六、海の魔女と人魚姫
二七、海の魔女と飲み薬
二八、魔女のお礼として声を……
二九、魔女の所から王様のお城に帰る
＊　＊

三十、王子の御殿へと
三一、王子の御殿での生活
三二、王子の想いと人魚姫の想い
＊　＊
三三、王子の結婚話
三四、りっぱな船の上で……
三五、ある国のお姫様
三六、王子の結婚式
三七、船の上でのパーティー
三八、ふと波間にお姉さんたちが……
三九、お姉さんたちの想い
四十、王子の寝ている所へ……
＊　＊
四一、空気の娘たちの所へ
四二、空気の娘たちとは何か？
四三、人間の不死の魂を得るには……
＊　＊

人魚姫

人魚姫

例えば、実に数多くとある『アンデルセン童話』作品のその中でも、最も有名な作品の一つは何かと敢えて問えば、それは、何と言っても、まさに『人魚姫』という作品があるかと思うが、その『人魚姫』の本文の「冒頭」は、次のような内容から始まるものである。

一、本文の「冒頭」

まず、最初は、「……海をはるか沖へ出ますと、水は一番美しい矢車草の花びらのように青く、この上なく透きとおったガラスのように澄んでいます。ところが、その深いことと言ったら、どんなに長い錨づなでも届かないくらい深くて、教会の塔を幾つも幾つも積み重ねて、ようやく水の上まで届くほどです。このような深い海の底に、人魚たちは住んでいるのです」。――つまり、深い深い海の底にこそ、人魚たちは住んでいるという設定になっているのである。そして、その「……海の底は、何も生えていないで、ただ白い砂地だけだろう、などと思ってはいけませんよ。いいえ、そこには、それは珍しい木や草が生えているのです。その茎や葉のなよなよしていることは、水がほんの少し動いても、まるで生きもののように、ゆらゆら動くのです。そして、小さいのや大きいのや、ありとあらゆる魚がその枝のあいだをすいすいとすべって行きます。それはちょうど、この地上で鳥たちが空を飛びまわっているのと同じことです」とある。これは、例えば、地上とはまた違った色彩鮮やかな珊瑚や海藻などの生い茂るところを大小多彩な魚たちがすいすいと泳いでいるような海の底という想像になっているのかも知れない。

そして、「……海の底の、そのまた一番深いところに、人魚の王様のお城が建っているのです。お城の壁は珊瑚で築いてあり、上の尖った高い窓は、この上もなく透きとおった琥珀でできています。また、屋根は、貝殻でふいてありましたが、それが水の動くにつれて、開いたり閉じたりする様子は、全く見事なものでした。なぜなら、その貝殻の一つ一つには、きらきら光る真珠が入っているのですから。それ一つだけでも、女王様の冠の立派な飾りになるくらいでした」とある。――これは、作者（アンデルセン）自らが想像（イメージ）した「人魚たちのすみか」の描写であり、今日のわれわれから見れば、かなり浅い「海の底」のように思えるけれども、しかし、われわれ読者は、作者（アンデルセン）自らが想像（イメージ）したその「人魚たちのすみか」を尊重して、そのまま素直に受け入れれば、それでよいのであり、例えば、浦島太郎の「竜宮城」なども、恐らく、「海の底」にあったという設定になっているのだろう。

二、人魚姫の家族と生活

さて、「……このお城に住まっている人魚の王様は、もう何年も前から、やもめ暮らしをしておいでした。それで、お年寄りのお母様が、いっさい、おうちの世話をしていました。お母様は賢い方でしたが、家柄のよいのが、ご自慢で、尻尾にはいつもかきを十二も付けていました。ほかの者は、どんなに身分が高くても、たった六つしか付けられないのです。――けれども、そのほかのことでは、ほんとうにほめて上げてよい方でした。と

りわけ、お孫さんの小さい姫たちを大事にすることは、大したものでした。姫は、みなで六人で、どれもきれいな方ばかりでしたが、わけても末の姫は、一番きれいでした。膚は、バラの花びらのように、透きとおるほどきめが細かく、目は深い深い海のような青い色をしていました。けれども、おねえさんたちと同じく、足というものがなくて、胴の下は魚の尻尾になっているのでした」とある。（本文）

＊　　＊

さて、女主人公（人魚姫）のその「家族構成」であるが、それは、まず、「……海の底の、そのまた一番深いところに、人魚の王様のお城が建っていて、そのお城に住まっている人魚の王様（人魚姫の父親）という人魚は、もう何年も前から、やもめ暮らし（恐らく王妃を亡くして）いて、それで、お年寄りのお母様が、いっさいの、おうちの世話をしているのでした。そのお母様は賢い方でしたが、家柄のよいのがご自慢であり、尻尾にはいつもかきを十二も付けていましたが、ほかの者は、どんなに身分が高くても、たった六つしか付けられないのです」とある。――例えば、王様は、なぜ「やもめ暮らし」なのか？

それは、それだけ「亡くなった王妃を愛していたという設定になっている」のかも知れない。また、その王様のお年寄りのお母様という人は、家柄のよいのがご自慢であり、それゆえ、自分の尻尾にはいつもかきを十二も付けていましたが、ほかの者は、どんなに身分が高くても、たった六つしか付けることを許さなかったということである。

しかし、そのほかのことでは、ほんとうにほめて上げてよい方であり、とりわけ、お孫さんの小さい姫たちを大事にすることは、大したものでした。姫は、みんなで六人であり、どれもみなきれいな方ばかりでしたが、わけても末の姫は、一番きれいでした。――というのも、膚は、バラの花びらのように、透きとおるほどきめが細かく、目は深い深い海のような青い色をしていました。けれども、おねえさんたちと同じく、足というものがなくて、胴の下は魚の尻尾になっているのでした。

それでは、なぜ、人魚の「姿」というのは、上半身が「人間の姿」であり、一方、「下半身」は、「魚の姿」になっているのだろうか？　これは、例えば、古代エジプトの「スフィンクス」というのは、人間の顔とライオンの姿をしていたが、それは、人間のような「知恵」（知力）を持ち、一方、姿は、百獣の王のような雄々しい「肉体」を兼ね備え持っていた「神獣」（怪物）であり、また、古代「ギリシア神話」に登場する、例えば、「ケンタウロス」というのは、上半身が「人間の姿」であり、一方、下半身は「馬の姿」をしているが、それも、上半身は、人間のような「姿と能力」などを持ち、一方、下半身は、馬のような逞しい「姿と能力」などを持ち合わせた「半人半獣」（つまり「半分は人間で半分は獣）ということであり、野蛮で酒と好色に耽るとされているが，ケイロンのような賢者もいる。それは、基本的には「人魚」でも同じことであり、上半身は、人間のような「姿と能力」などを持ちながら、一方、下半身は、魚のような「姿と能力」などを持ち合わせているのである。――ちなみに、人魚伝説のモデルとなったのは、有名な海に棲む「ジュゴン」ということになるかと思う。

三、人魚姫と五人のお姉さんたち

さて、みんなは、一日中、海の底の広々した部屋で遊び暮らしました。部屋の壁には、

生きている花が咲いていて、大きな琥珀の窓を開けますと、魚が泳いで入って来ます。ちょうど、わたしたちが窓をあけると、ツバメが飛んで入ってくるように。魚は小さい姫たちの方へ泳いできて、みんなの手から食べものを食べたり、また、なでてもらったりしました。――お城の外には、大きな庭があって、真っ赤な木や真っ青な木が生えていて、木の実は金色に光り、花は燃える火のように輝き、たえず茎や葉をそよがせていました。地面はごくこまかい砂地であり、それが硫黄の炎のような青い光を放っていました。こうして、庭全体に不思議な青い光が漂っているので、海の底にいるというよりは、上を見ても下を見ても青々とした大空に高く浮かんでいるような感じでした。風のないでいる時には、お日様を仰ぐこともできました。そういう時、お日様は紫色の花のように見えて、そのうてな（上の方）から、あたり一面に光がさして来るようでした。（本文）

＊　＊

さて、みんなは、一日中、海の底の広々した部屋で遊び暮らしました、とある。そして、大きな琥珀の窓を開けますと、魚が泳いで入って来て、ちょうど、わたしたちが窓をあけると、ツバメが飛んで入ってくるように。魚は小さい姫たちの方へと泳いできて、みんなの手から食べものをもらって食べたり、また、なでてもらったりしましたとある。――例えば、人間の小さな子供たちであれば、ふつう一般にはよく、かくれんぼや鬼ごっこ遊びなどで追ったり追われたりして楽しく遊び合うことも多いかと思うが、小さな人魚たちも、時には、そのようにして楽しく遊び合ったり、また、大きな琥珀の窓を開けますと、魚たちは、小さい姫たちの方へと泳いできて、みんなの手から食べものをもらって食べたり、また、なでてもらったりしましたとあるが、それは、「人魚」というのは、まさに上半身が「人間の姿」をしているからこそ、その「人魚の手」から食べものをもらって食べたり、また、なでてもらったりすることも可能になるのである。

一方、お城の外には、大きな庭があって、真っ赤な木や真っ青な木が生えていて、木の実は金色に光り、花は燃える火のように輝き、たえず茎や葉をそよがせていました。地面はごくこまかい砂地であり、それが硫黄の炎のような青い光を放っていました。こうして、庭全体に不思議な青い光が漂っているので、海の底にいるというよりは、上を見ても下を見ても青々とした大空に高く浮かんでいるような感じでした。風のないでいる時には、お日様を仰ぐこともできました。そういう時、お日様は紫色の花のように見えて、そのうてな（上の方）から、あたり一面に光がさして来るようでした。――これらが人魚姫たちが棲んでいるお城のまわりの風景（様子）ということになるのだろう。

四、庭のそれぞれの花壇

さて、「……小さい姫たちは、この庭の中に、めいめいの小さな花壇を持っていて、そこを好きなように掘り返して自分の好きな花を植えることができました。一人の姫は花壇をクジラの形につくるかと思えば、もう一人の姫は小さい人魚にした方がいいと思いました。ところが、一番末の姫は、お日様のようにまんまるな花壇をつくって、お日様のように赤く輝く花ばかりを植えました」とある。――まず、六人の小さい姫たちは、その「大きな庭」の中に、それぞれめいめいの「小さな花壇」を持っていて、そこを好きなように掘り返して自分の「好きな花」などを植えることができたのである。そこで、一人の姫は、

花壇をクジラの形にし、また、一人の姫は、小さい人魚の形にし、そして、一番末の姫は、お日様のようにまんまるな花壇をつくって、お日様のように赤く輝く花ばかりを植えました。これらは、結局、それぞれ自分の「好きな形」の花壇をつくって、そこにそれぞれ自分の「好きな花」などを植えていたということであり、それは、花壇とその花のことでは何らの規制もなく自由であったということである。

ところで、「……この末の姫は、もの静かな、考え深い、少し変わった姫でした。おねえさんたちが、沈んだ船から持ってきた、珍しい物で飾って遊んでいる時、この姫は、遙か上の方に見えるお日様に似たバラ色の花のほかには、たった一つ、美しい大理石の像を大切にしていました。それは、透きとおるように真っ白な大理石に彫った、美しい少年の像で、難破した船から海の底へ沈んで来たものでした」とある。――もちろん、この美しい少年の「大理石の像」こそは、これからまさに「運命的な出逢い」をする「ある国の王子」ということになるのだろう。そして、「……姫はこの像のそばに、バラ色のしだれ柳を植えました。それは見事に成長して、若い枝を像の上にたれ、その先は青い砂地に届きそうに垂れていました。砂地に映った影は、枝の動くにつれて、紫色にゆらめいて、丁度、枝の先が根とたわむれて、お互いにキスをしようとしているようでした」とある。

そして、「……姫たちにとっては、海のそとの人間の世界のお話を聞くくらい楽しいことはありませんでした。お年寄りのおばあ様は、船や町や、人間や動物のことなど、知っていることは何でもお話をさせられました」とある。――つまり、六人の小さな姫たちは、まさに「好奇心の塊（かたまり）」であって、それゆえ、「……お年寄りのおばあ様は、船や町や、人間や動物のことなど、知っていることは何でもお話をされられました」となるのである。そして、「……なかでも、姫たちにとって不思議な美しさに思われたのは、海のそとの地上では、花がよい香りで匂（にお）っているということでした。海の底では、そういうことはありませんでした。また、地上では、森は緑色で枝の間に見え隠れする魚が、高い美しい声で歌をうたうことができて、それを聞くのがそれは楽しみだということでした。おばあ様が、魚、と言ったのは、小鳥のことなのです。なぜなら、そう言わないと、まだ鳥というものを見たことのない姫たちには、おばあ様のお話がわからなくなるからでした」と続くのでした。

五、十五歳になったら……

さて、「……おまえたちが十五になったら」と、おばあ様は言いました。「……そうしたら、海の上に浮かび上がって行くのを、許してあげますよ。その時は、岩の上にすわって、お月（つき）様の光を浴びながら、そばを通る大きな船を見たり、物や町をながめたりすることができますよ」と言うのでした。さて、次の年に、一番上の姫が十五になりました。ほかの姫たちは一つずつ年が下でした。ですから、一番下の姫は、海の底から浮かび上がって、わたしたち人間の世界がどんな様子だか見られるようになるまでには、まだ、まる五年もありました。そこで、みんなのあいだで、海の上に浮かんだ最初の日に見たことで、一番美しいと思ったことを、帰ってきたら、妹たちに話してきかせるという約束をしました。なぜなら、おばあ様のお話だけでは、もう満足できなくなったからです。それほど、姫たちには、知りたいことがたくさんあったのです。

ところが、一番強いあこがれを抱いていたのは、よりによって一番長く待たなければならない、もの静かな、考えぶかい末の姫でした。幾夜も、姫は開かれた窓ぎわに立って、魚がひれや尾を動かして泳いでいる、まっさおな水をすかして、上の方を見あげるのでした。そこからは、お月様や星が見えました。その光は、たしかにぼんやりしていましたが、そのかわり水をとおしてくるので、わたしたちの目に映るよりは、ずっと大きく見えました。時には、黒い雲のようなものが光をさえぎって、すべって行くことがありました。それが頭の上を泳いで行くクジラか、でなければ、たくさんの人を乗せた船だということは、姫も知っていました。でも、船の人たちは、下の方に可愛らしい人魚のお姫様が立っていて、白い手を船の方へさしのべていようとは、夢にも思っていなかったでしょう。（本文）

＊　＊

さて、ここは非常に大事なところであり、まず、「……おまえたちが十五になったら」と、おばあ様は言いました。「……そうしたら、海の上に浮かび上がって行くのを、許してあげますよ。その時は、岩の上にすわって、お月様の光を浴びながら、そばを通る大きな船を見たり、物や町をながめたりすることができますよ」と言うのでした。――つまり、これまでは、海の中や海の底の様子やそこでの暮らしぶりなどの描写であったものから、いよいよ「地上の世界」へと話題が大きく変化していくことになるのである。そして、「……次の年に、一番上の姫が十五になり、ほかの姫たちは一つずつ年が下でしたので、一番下の姫は、海の底から浮かび上がって、人間の世界がどんな様子だか見られるようになるまでには、まだ、まる五年もあり、そこで、みんなのあいだで、海の上に浮かんだ最初の日に見たことで、一番美しいと思ったことを、帰ってきたら、妹たちに話してきかせるという約束をしました。なぜなら、おばあ様のお話だけでは、もう満足できなくなっていたからであり、それほど、姫たちには、知りたいことがたくさんあったのです。

ところが、「……一番強いあこがれを抱いていたのは、よりによって一番長く待たなければならない、もの静かな、考えぶかい末の姫でした」とある。――この、何度も何度も繰り返される末の姫の「性格づけ」というのは、これからの「物語」（ストーリー）の展開になかで、どうしても必要不可欠な「性格づけ」となり、例えば、「……騒がしい性格ではなく、（むしろ）、もの静かな性格であった」がゆえに、嵐で難破した船から海に落ちた王子を救い出したのは、誰でもない、この自分であると強く積極的に主張することをしないでいるのであり、また、「考え深い」性格というのは、例えば、前後の見境もなく、すぐに「行動」（言動）するのではなく、（むしろ）、よく考えてから「行動」（言動）するような「性格」であったということである。そして、「……みんなのあいだでは、海の上に浮かんだ最初の日に見たことで、一番美しいと思ったことを、帰ってきたら、妹たちに話してきかせるという約束をしました」となっていくのである。

そして、「……幾夜も、姫は開かれた窓ぎわに立って、魚がひれや尾を動かして泳いでいる、まっさおな水をすかして、上の方を見あげるのでした。そこからは、お月様や星が見えました。その光は、たしかにぼんやりしていましたが、そのかわり水をとおしてくるので、わたしたちの目に映るよりは、ずっと大きく見えました。時には、黒い雲のようなものが光をさえぎって、すべって行くことがありました。それが頭の上を泳いで行くクジラか、でなければ、たくさんの人を乗せた船だということは、姫も知っていました。でも、船の人たちは、下の方に可愛らしい人魚のお姫様が立っていて、白い手を船の方へさしの

べていようとは、夢にも思っていなかったでしょう」と続くのである。

＊　＊

六、一番上の姫

六、一番上の姫

さて、「……一番上の姫は、十五になりましたので、いよいよ海の上へと浮かび出ていいことになりました。そして、姫が帰ってきた時には、お話が山ほどありましたが、その中でも、一番楽しかったのは、月の明るい夜、静かな海べの砂浜にすわって、海ぞいの大きな町に、何百というあかりが、星のようにまたたいているのをながめて、音楽に耳を傾けたり、車や馬や人々のざわめきを聞いたり、また、方々の教会や塔を仰いで、鐘がなるのを聞いたりすることだった」と言いました。――これは、一番上の姫にとって、月の明るい夜、静かな海べの砂浜にすわって、海ぞいの大きな町の、その全体の「夜景や様子」などをながめる（見聞きする）のが何よりも一番楽しかったということである。

それを聞いて、「……しばらくは、そこへのぼっていくことができないだけに、末の姫は、誰よりも熱心にこうしたことにあこがれを感じました。――ああ、どんなに熱心に、姫は、この話に聞きいったことでしょう。それからというものは夕方になると、開いた窓のそばに立って、まっさおな水の中を見あげては、いろいろの物音が聞こえるという大きな町のありさまを心に描くのでした。すると、気のせいか、教会の鐘の音までが、この海の底まで響いて来るような気がするようになっていく」のでした。……

七、二番目の姫

さて、次の年は、二番目の姫に、海の上に浮かんで行って、好きなところを泳ぎまわってもよろしい、というお許しが出ました。そして、「……姫が浮かび上がった時は、ちょうどお日様が沈むところで、そのながめは、このうえなく美しいものに思われました」。姫の話では、「……空一面が金色に輝いていて、雲の美しさといったら、とても言葉では言いあらわすことができなかったと言い、その雲は赤に、また、スミレ色に、染まって頭の上を流れて行くのでした。ところが、その雲よりもはやく、一むれの白鳥が長い白いヴェールのように、遠く波の上を入り日の方へ飛んで行き、姫もその方へ泳いで行きました」とある。――これが二番目の姫が見聞きした、最も美しいものであったということになるのである。そして、まもなく、お日様は沈んで、海の上や雲の上に漂っていた。バラ色の輝きも消えてしまいました。

八、三番目の姫

その次の年は、三番目の姫が海の上に浮かびましたが、この姫は、みんなのうちで一番勇気がありましたから、海にそそいでいる大きな川をさかのぼって行きました。――つまり、「……海から川へとさかのぼって行く」と、そこには、「……ブドウのつるにおおわれた、美しい緑の丘が両岸に見え、お城や農園が、みごとな森のあいだに見え隠れしました。しかも、いろいろの鳥が歌をうたっているのも聞きました。お日様が、あまり暖かに照りつけるので、姫はなんども水の中にもぐって、ほてった顔をひやさなければなりません」でした。そして、「……とある小さな入江では、人間の子供たちがいました。子供たちは、真っ裸ではねまわったり、水をバチャバチャさせたりしていました。姫がいっしょ

に遊ぼうとすると、みんなはびっくりして、逃げてしまいました。そこへ、一匹の小さい黒い動物がやってきました。それは犬でしたが、もちろん姫は犬というものを見たことがありません。犬は姫にむかってひどくほえたので、こわくなって、またひろびろとした海へもどったのでした。けれども、あの美しい森や、緑の丘や、また、魚の尻尾を持っていないのに泳ぐことのできる、可愛らしい子供たちのことは、いつまでも、忘れることができませんでした。――つまり、三番目の姫にとっては、海から川へとさかのぼって行った時に見聞きした、あの美しい森や、緑の丘や、また、魚の尻尾を持っていないのに泳ぐことのできる、可愛らしい子供たちのことが、いちばん強く印象に残ったということである。

九、四番目の姫

さて、四番目の姫は、三番目の姫ほどの勇気がなかったので、ずっと大海原のまん中にばかりいましたが、しかし、姫の話では、そここそ一番美しいところだったと言いました。というのも、ぐるりと何マイルもさきまで、目をさえぎるものはなく、空は大きなガラスの丸天井のように、おおいかぶさっていました。そして、ときどき見える船は、はるか遠くの方に、まるでカモメのように見えました。おどけもののイルカは、とんぼ返りをするし、大きなクジラどもは、鼻のあなからシオをふきあげて、あたり一面に何百という噴水をつくっていました。――つまり、四番目の姫にとっては、大海原のまん中からの見晴らしこそは、最も美しいところだったということである。

十、五番目の姫

さて、今度は、五番目の姫の番になりました。この姫の誕生日は、ちょうど冬のさなかでしたから、おねいさんたちの見なかったものを見ることができました。海は見わたすかぎり、緑色で、まわりには大きな氷山が浮かんでいました。姫の話によりますと、氷山の一つ一つは、ちょうど真珠のように見えますが、その大きさときたら、人間の建てた教会の塔よりも、ずっと大きかったと言います。また、その形にも、いろいろ不思議なのがありました。しかもそれが、ダイヤモンドのように輝いているのでした。姫はそのなかでも一番大きい氷山の上にすわりました。そばを通る船びとたちは、姫が氷山の上で長い髪の毛を風になびかせているのを見て、びっくりして、おじけをふるって船の向きをかえて行ってしまいました。日が暮れると、空は雲でおおわれてしまい、稲妻がひらめき、雷がとどろきわたりました。そのあいだ、大きな氷のかたまりは、まっ暗な海の上に高く持ちあげられながら、赤い稲妻の光に照らしだされるのでした。船という船は帆をおろして、人々は恐れおののきました。けれども、姫は、波に漂う氷山の上にじっとすわって、青い稲妻が、きらめく海面にジグザグに落ちるのを見ていました。――つまり、五番目の姫にとっては、波に漂う大きな氷山の上などにすわって、例えば、空が一面雲でおおわれて、突然、青い稲妻の光がジグザグに走り、雷が激しくとどろき渡るという、そのような「大自然の驚異の情景」などをながめているのが、一番楽しかったということになるのだろう。

＊　＊

こうして、おねえさんたちは、はじめて海の上に出た時はいずれも、自分の見た新しい

ものや美しいものに夢中になるのでした。けれども、年ごろになって、いつでも好きな時に行けるようになりますと、たちまち熱がさめてしまって、またもや家が恋しくなり、ひと月もたちますと、海の底がやはり一番美しく、住みよいなつかしいところだと、言うようになるのでした。――五人のおねえさんたちは、夕方になると、よく一緒に手をつないで、海の上へ浮かんで行きました。姫たちは、どんな人間よりも美しい声を持っていました。あらしになって、船が沈みそうになりますと、その前を泳ぎながら、どんなに海の底が美しいかということを、それはそれはいい声でうたいました。そして、海の底へ行くのをこわがらないでください、と頼むのでした。けれども、船びとたちには、その言葉がわかりません。あらしの音だとばかり思いこんでいるのでした。それにまた、人間は、海の底の美しさを見ることはできないのです。というのは、船が沈みますと、人間はおぼれて、人魚の王様のお城へ着く頃には、もう死んでしまっているからです。（本文）

＊　＊

さて、ここまでの概略であるが、それは、「……海の底の、そのまた一番深いところに、人魚の王様のお城が建っていて、そのお城に住まっている人魚の王様（人魚姫の父親）という人魚は、もう何年も前から、やもめ暮らし（恐らく王妃を亡くして）いて、それで、お年寄りのお母様が、いっさいの、おうちの世話をしているのでした。そのお母様は賢い方でしたが、家柄のよいのがご自慢であり、尻尾にはいつもかきを十二も付けていましたが、しかし、そのほかのことでは、ほんとうにほめて上げてよい方であり、とりわけ、お孫さんの小さい姫たちを大事にすることは、大したものでした。姫は、みんなで六人であり、どれもみなきれいな方ばかりでしたが、わけても末の姫は、一番きれいでした。

そして、「……おまえたちが十五になったら」と、おばあ様は言いました。「……そうしたら、海の上に浮かび上がって行くのを、許してあげますよ。その時は、岩の上にすわって、お月様の光を浴びながら、そばを通る大きな船を見たり、物や町をながめたりすることができますよ」と言うのでした。――さて、次の年からは、一番上の姫が十五になるとともに、ほかの姫たちは一つずつ年が下でしたので、一番下の姫は、海の底から浮かび上がって、人間の世界がどんな様子だか見られるようになるまでには、まだ、まる五年もありました。そこで、「……みんなのあいだで、海の上に浮かんだ最初の日に見たことで、一番美しいと思ったことを、帰ってきたら、妹たちに話してきかせるという約束をするのでした」。そして、毎年、毎年、一番上の姫から五番目の姫まで、それぞれ海の上に浮かび上がっては、そこで見聞きして来たものをそれぞれ想い想いに語り終えて、いよいよここから女主人公の「六番目の末の姫」の出番となり、まさに「人魚姫の物語」（ストーリー）がここから本格的に始まるという展開になるのである。

十一、六番目の姫

さて、「……こうして、おねえさんたちが毎晩、お互いに腕を組んで海の上へ浮かんで行く時、末の姫は、たった一人あとに残されて、みんなのあとを見送るのでした。そんな時は、泣きたいような気持ちになりました。けれども、人魚には涙というものがないのです。それだけに、いっそう苦しい思いをするのでした」とある。――この「人魚には涙というものがない」というのは、いわば作者の「考え方」であり、われわれ「人間」には「涙

というもの」があるが、半人半魚の「人魚」には（人間のような）「涙というもの」は、ないという設定になっているのである。

そして、「……ああ、早く十五になりたいわ！」と、末の姫は言いました。「……わたし、海の上の世界と、そこに住んでいる人間が、きっと好きになれると思うわ」。……そのうちに、とうとう姫も、十五になりました。「……さあ、おまえも、いよいよ、一人前になるんですよ」と、王様の母君の、おばあ様が言いました。「……（こちらに）いらっしゃい！　おねえさんたちと同じように、お化粧をしてあげましょう」。こう言って、おばあ様は、白ユリの花冠を姫の頭にのせました。その花びらは一つ一つが、真珠を半分にしたものでした。その次に、おばあ様は、姫のりっぱな身分をあらわすために、八つの大きなかきに、姫の尾をしっかりはさませました。「……まあ、痛いわ！」と、人魚姫は言いました。「……りっぱになるんですから、すこしは、がまんしなくてはいけません」と、おばあ様は言いました。――ああ、姫はどんなに、こんなけばけばしいものなんか、みんなふり捨て、重たい冠もぬいでしまいたかったことでしょう。自分の花壇に咲いている赤い花のほうが、ずっとよく似合うに決まっています。けれども、いまさら、どうしようもありません。姫は、「……行ってまいります！」と言うと、すきとおったあわのように、かるがると、水の中を上へ上へとのぼって行きました。（本文）

＊　　＊

さて、とうとう姫も、十五歳（誕生日）になりました。「……さあ、おまえも、いよいよ、一人前になるんですよ」と、王様の母君の、おばあ様が言いました。「……（こちらに）いらっしゃい！　おねえさんたちと同じように、お化粧をしてあげましょう」。こう言って、おばあ様は、白ユリの花冠を姫の頭にのせました。その花びらは一つ一つが、真珠を半分にしたものでした。その次に、おばあ様は、姫のりっぱな身分をあらわすために、八つの大きなかきに、姫の尾をしっかりはさませました」とある。――これは、いわば「人魚の世界」の一つの「冠婚葬祭」（決まり事）であり、例えば、日本では奈良時代以降、時代によりその年齢は違って来るが、多くは「十一歳～十六歳」の間であり、昔の公家や武家の子であれば、男子はその年齢に達すると、「元服」（成人として、髪形、服装を改め、初めて冠を付けて、幼名から諱《実名》になる儀式）を行ない、また、女性の場合でも、公家の女子の成人式では、裳着（成人した女子に初めて裳を着せる儀式）を行なったものである。そして、今の日本では、二十歳になると男女とも着飾って「成人式」を行ない、いわば「大人の仲間入り」となるが、将来は、十八歳で「成人式」ということも十分にあり得ることであり、その年齢は時代によっていくらでも変化し得るものである。

＊　　＊

十二、若い王子との出逢い

十二、若い王子との出逢い

さて、姫が頭を水の上に出したときは、今しもお日様が沈んだところでした。けれども、雲という雲はまだ、バラ色に、また金色に輝いていました。うすもも色の空には、宵の明星がキラキラと美しく光っていました。空気はおだやかで、すがすがしく、海は鏡のように静かでした。その時、むこうに、三本マストの大きな船が浮かんでいました。風がすこしもないので、帆はたった一つだけしか、あげてありませんでした。帆げたの上や、帆づなのまわりには、水夫たちが腰を下ろしていました。やがて、音楽と歌が聞こえてきました。夕やみがこくなりますと、何百という色とりどりのちょうちんに火がともりました。それはちょうど、万国旗が風にひるがえっているようでした。人魚姫は船室の窓の近くへ、泳いで行ってみました。からだが波にもちあげられるたびに、すきとおった窓ガラスの中を見ることができました。そこには美しく着飾った大ぜいの人がいました。

けれども、なかで、ひときわ目立って美しいのは、大きい黒目がちの目をした若い王子でした。年はたしかに十六より上ではありませんでした。ちょうどきょうは、この王子の誕生日だったので、それで、このようににぎやかにお祝いをしているのでした。水夫たちが甲板でダンスをはじめました。そこへ若い王子が出て行きますと、打上げ花火が百以上もあがりました。そのため、あたりが、昼間のように明るくなりました。人魚姫はびっくりして、あわてて水の中にもぐりましたが、すぐまた顔を出してみました。そのとたんに、空の星がみな頭の上に落ちてきたような気がしました。花火というものを、姫はまだ見たことがなかったのです。大きなお日様がいくつも、シューシューと音を立ててまわっています。すばらしい火の魚が、青い空におどりあがりました。そして、それらがみな、静かな、すみきった海に映るのでした。船の上は、人間はもとより、どんな細い帆づなでさえ一本一本かぞえられるくらい明るく照らされました。ああ、どんなに若い王子はきれいだったでしょう！　王子は人々と握手をして、ニコニコほほえんでいます。そのあいだも、音楽はこのはなやかな夜の空になり響いているのでした。（本文）

＊　　＊

さて、いよいよ「王子との出逢い」になるが、それは、「……姫が頭を水の上に出した時には、今しもお日様が沈んだところでしたが、雲という雲はまだ、バラ色に、また金色に輝いていました。空気はおだやかで、すがすがしく、海は鏡のように静かでした。その時、むこうに、三本マストの大きな船が浮かんでいて、風がすこしもないので、帆はたった一つだけしか、あげてありませんでした。帆げたの上や、帆づなのまわりには、水夫たちが腰を下ろしていて、やがて、音楽と歌が聞こえてきました。夕やみがこくなりますと、何百という色とりどりのちょうちんに火がともり、それはちょうど、万国旗が風にひるがえっているようでした。人魚姫は船室の窓の近くへ、泳いで行ってみると、からだが波にもちあげられるたびに、すきとおった窓ガラスの中を見ることができました。そこには美しく着飾った大ぜいの人がいました。……

そして、その中にこそ、つまり、そもそもの最初は、そのすきとおった窓ガラス越しにこそ、若い王子と「運命的な出逢い」をするのであり、それは、まさに「……ひときわ目立って美しく、大きい黒目がちの目をした若い王子であり、年はたしかに十六より上ではありませんでしたが、ちょうどきょうは、この王子の誕生日だったので、それで、このよ

うににぎやかにお祝いをしているのでした」となるのである。――まず、「……年はたしかに十六より上ではありませんでした」とある。だとすれば、年は、十五、六歳であり、人魚姫の十五歳とほぼ同程度の「年齢」ということになるかと思う。

さて、水夫(すいふ)たちが甲板でダンスをはじめ、そこへ若い王子が出て行くと、打上げ花火が百以上もあがり、そのために、あたりが昼間のように明るくなり、人魚姫はびっくりして、あわてて水の中にもぐっては、すぐまた顔を出してみると、そのとたんに、空の星がみな頭の上に落ちてきたような気がしました。花火というものを、姫はまだ見たことがなかったのであり、大きなお日様がいくつも、シューシューと音を立ててまわっています。すばらしい火の魚が、青い空におどりあがりました。そして、それらがみな、静かな、すみきった海に映るのでした。船の上は、人間はもとより、どんな細い帆づなでさえ一本一本かぞえられるくらい明るく照らされました。その明かりに照らされて、ああ、どんなに若い王子はきれいだったでしょう！　つまり、この上もなく美しく見えたということであり、しかも、王子は、人々と握手をして、ニコニコとほほえんでいます。それを見ていた、女主人公の人魚姫は、まさに「恋に深く落ちてしまった」ということであり、そのあいだも、音楽は、この華(はな)やかな夜の空(そら)に美しく鳴り響(ひび)いていたのでした。……

十三、王子の誕生祝いの後の船……

夜はふけました。けれども、人魚姫はいつまでも、船と美しい王子とから目をはなすことができませんでした。もう、色とりどりのちょうちんの火は消え、花火もあがらず、祝砲もとどろかなくなりました。ただ、海の底の方で、にぶいうなりがしているだけでした。それでも、姫は水の上に浮かんで、波のまにまにゆられながら、船室の中を見ていました。そのうちに、船がいままでより、はやく走りはじめました。そして、帆が一つ、また一つと、張られました。気がつくと、波がいままでより高くうねり、大きな黒雲が押しよせてきて、遠くで稲妻(いなずま)が光りました。ああ、いまにも恐ろしいあらしになりそうです。水夫たちは、またもや帆をたたみました。大きな船は、荒れ狂う海の上を、はげしくゆれながら、矢のように走って行きます。波は黒い大きな山のようにもりあがり、いまにもマストの上にくずれかかるようでした。船は大きな波と波とのあいだを、白鳥のようにくぐり抜けると、すぐまた、塔のように盛りあがる波のてっぺんに持ちあげられました。（本文）

＊　＊

さて、夜もふけましたが、人魚姫は、いつまでも船と美しい王子から目をはなすことができませんでした。（それだけ強烈に心惹(ひ)かれ魅入られてしまったのであり）、もう、色とりどりのちょうちんの火は消え、花火もあがらず、祝砲もとどろかなくなりました。ただ、海の底の方で、にぶいうなりがしているだけでしたが、それらのことは、もう女主人公の人魚姫にとっては、どうでもよいことであり、唯一大事なのは王子のことだけであり、それゆえ、姫は水の上に浮かんで、波のまにまにゆられながら、船室の中を見ていました。つまり、それだけ人魚姫は、美しい王子に自分でもどうしようもないほど心を奪われてしまったのであり、だからこそ、やがて人間になる決心までしてしまうのである。

そのうちに、船が今までよりも速く走りはじめ、そして、帆が一つ、また一つと、張られました。気がつくと、波が今までより高くうねり、大きな黒雲が押しよせてきて、遠く

で稲妻が光りました。ああ、いまにも恐ろしいあらしになりそうです。水夫たちは、またもや帆をたたみました。大きな船は、荒れ狂う海の上をはげしくゆれながら、矢のように走って行きます。波は黒い大きな山のように盛りあがり、今にもマストの上に崩れかかるようでした。船は大きな波と波とのあいだを、白鳥のようにくぐり抜けると、すぐまた、塔のように盛りあがる波のてっぺんに持ち上げられるのでした。――それは、もう恐ろしく波の荒れ狂った本格的な海のあらしになってしまったということである。

十四、王子の乗った船の難破

これは人魚姫には、たいそう愉快な波乗りでしたが、しかし、船びとたちは、それどころではありません。船はきしんで、メリメリと音をたてました。大波が船にぶつかるその強い力で、厚い船板がたわみ、水がどっと流れこんできました。マストが、アシのように、まっ二つに折れて、船は横たおしになって、海水がキャビンの中まで、流れこみました。この時ようやく、人魚姫は、これはただごとではないことに気がつきました。それどころか、姫自身も、海の上に投げ出された材木や板ぎれなどに、気をつけなければなりませんでした。そのとたんに、あたりが炭のようにまっ暗になって、何もかも見えなくなりました。と、すぐまた、稲光がして、ぱっと明るくなり、船の上がすっかり見えました。なんという騒ぎでしょう！　姫はその中で若い王子の姿を捜しました。しかし、見つかったと思ったとたんに、船がまっぷたつに割れて、深い海に沈んでしまいました。その瞬間、姫は、王子が海の底へおりて来たものと思って、たいそううれしくなりました。けれども、すぐまた、人間は水の中では生きていられないということを思い出して、この王子もお父様のお城へつくまでには死んでしまうにちがいないと考えなおしました。死ぬなんて、そんなことになってはなりません！　そこで、海の上に漂っている材木や板ぎれのあいだを、かきわけて泳いで行きました。もしその一つにでもぶつかったら、からだが押しつぶされてしまうことも、すっかり忘れて。……（本文）

＊　＊

さて、荒れ狂う波は、人魚姫にとってはたいそう愉快な波乗りでしたが、しかし、船びとたちは、それどころではなく、船はきしんで、メリメリと音をたて、大波が船にぶつかるその強い力で、厚い船板がたわみ、水がどっと流れこんできたり、また、マストがアシのようにまっ二つに折れて、船は横たおしになって、海水がキャビンの中まで流れこみました。――これは、もうまさに船が転覆しそうなほどの状態であり、それゆえ、人魚姫も、これはただごとではないことに気がつきました。それどころか、姫自身も、海の上に投げ出された材木や板ぎれなどに、ぶつからないように気をつけなければなりませんでした。

そのとたんに、あたりが炭のようにまっ暗になって、何もかも見えなくなりました。と、すぐまた、稲光がして、ぱっと明るくなり、船の上がすっかり見えました。なんという騒ぎでしょう！　その騒ぎの中に、姫は、当然のように一番関心のある若い「王子の姿」を捜し求めましたが、しかし、見つかったと思ったとたんに、船がまっぷたつに割れて、深い海に沈んでしまいました。その瞬間、姫は、王子が海の底へおりて来たものと思って、たいそううれしくなりましたが、すぐまた、人間は水の中では生きていられないということを思い出して、（これは、半人半魚の人魚とは違って）、この王子もお父様のお城へつ

くまでには死んでしまうに違いないと考えなおしました。死ぬなんて、そんなことになってはなりません！　その「一心」（一念）から、姫は、わが身の危険をも忘れて、夢中になって、海の上に漂っている材木や板ぎれのあいだをかきわけて泳いで行きました。……もしその一つにでもぶつかれば、からだが押しつぶされてしまうことも、すっかり忘れて、となるのである。

十五、海に落ちた王子の救助

姫は、一度深く水の下にもぐって、ふたたび波のあいだに浮かび上がりました。こうして、とうとう若い王子のところに泳ぎつきました。王子は、このあらしの海の中を、もうそれ以上泳ぐだけの力がなくなり、腕も脚もぐったりし、美しい目はかたく閉じていました。もし人魚姫がきてくれなかったならば、死んでしまったことでしょう。姫は王子の頭を水の上にささえて、波のまにまに、どこへともなく漂って行きました。

あけがたになって、あらしはやみましたが、船は、もう影も形も見えませんでした。お日様があかあかとのぼって、水の上を照らしますと、気のせいか、王子のほほにも、命の光がさしてきたように思われました。しかし、目はやはり閉じたままでした。人魚姫は、王子のひいでた美しい額にキスをして、ぬれた髪の毛をかきあげてあげました。姫には王子が、海の底のあの小さい花壇にある大理石像に似ているように思えてなりませんでした。姫はもう一度キスして、どうぞ生きかえりますように、と心の中でお祈りしました。

やがて、むこうに、陸地と高い青い山が見えてきました。山の頂には、白い雪が、白鳥の寝ているような形に輝いていました。下の方の海岸には美しい緑の森があって、その手前に、教会かそれとも僧院か、よくはわかりませんが、建物が一つ立っていました。その庭には、レモンとオレンジの木が茂っており、門の前には高いシュロの木が立っていました。海はそこで静かな小さい入江をつくっていました。けれども、水はたいそう深くて、まっ白いこまかな砂が打ち上げられている入江の奥の岩のところまでつづいていました。姫は美しい王子を抱いて、そこまで泳いで行くと、頭の方を高くして、暖かい日の光にあたるように気をくばりながら、王子を砂の上に寝かせました。（本文）

＊　　＊

さて、人魚姫は、一度深く水の下にもぐって、ふたたび波のあいだに浮かび上がりました。（これは、当然のことながら、海の上に漂っている材木や板ぎれなどにぶつからないようにするためとともに、もともと人魚姫というのは、海の中はまさに自由自在に泳ぐまわることができ得る存在だからであり）、そして、とうとう若い王子のところに泳ぎつきました。王子は、このあらしの海の中を、もうそれ以上泳ぐだけの力がなくなり、腕も脚もぐったりし、美しい目はかたく閉じていました。もし人魚姫がきてくれなかったならば、死んでしまったことでしょう。（そういう意味からすれば、人魚姫こそは、王子にとっては、まさに「命の恩人」そのものになるのである）。そして、人魚姫は、王子の頭を水の上にささえて、波のまにまに、どこへともなく漂って行くのでした。……

あけがたになって、あらしはやみましたが、船は、もう影も形も見えませんでした。（つまり、船は、海の底へと沈むことになるが、例えば、かつての小さな姫たちは、そのように難破して沈んだ船から持ってきた、珍しい物などで遊んでいたということである）。や

がて、お日様があかあかとのぼって、水の上を照らしますと、気のせいか、王子のほほにも、命の光がさしてきたように思われました。（顔の皮膚温度が少し上がって）、しかし、目はやはり閉じたままでした。人魚姫は、王子のひいでた美しい額（ひたい）にキスをして、ぬれた髪の毛をかきあげてあげました。（人魚姫は、何度かキスをしているが、それはやはり人魚姫の「愛情表現」の一つになるのだろう）。そして、人魚姫には王子が海の底のあの小さい花壇にある大理石像に似ているように思えてなりませんでした。（これは、当然のことながら、何らかの記念として、王子を模して制作された大理石像になるからであろう）。そして、人魚姫は、もう一度キスをして、どうぞ生きかえりますように、と心の中でお祈りしました。これは、いわば心の底からの「祈願のキス」になるのである。

やがて、むこうに、陸地と高い青い山が見えてきました。山の頂には、白い雪が、白鳥の寝ているような形に輝いていました。下の方の海岸には美しい緑の森があって、その手前に、教会かそれとも僧院か、よくはわかりませんが、建物が一つ立っていました、とある。（教会というのは、牧師がキリスト教などの教義を説き広め、また礼拝するための建物であり、一方、僧院というのは、キリスト教の修道僧たちがいる場所。つまり、修道院ということである）。そして、その庭には、レモンとオレンジの木が茂っており、門の前には高いシュロの木が立っていました。（だとすれば、比較的暖かな地域であるが、熱帯地域ではない。もし熱帯地域であれば、必ず椰子（やし）の木があるはずだからである）。海はそこで静かな小さい入江をつくっていました。けれども、水はたいそう深くて、まっ白いこまかな砂が打ち上げられている入江の奥の岩のところまでつづいていました。姫は美しい王子を抱いて、そこまで泳いで行くと、頭の方を高くして、暖かい日の光にあたるように気をくばりながら、王子を砂の上に寝かせました。（もちろん、王子はまだ生きているのであり、それゆえ、暖かい日の光にあたるように気をくばりながら、王子を砂の上に寝かせることによって、王子の体温を少しでも上げる効果があるということである。）

十六、一人の若い娘が王子を発見する

その時、大きな白い建物の中で鐘が鳴りました。そして、大ぜいの若い娘たちが庭に出てきました。そこで、人魚姫はずっとあとへ泳ぎもどって、水の中から突き出ているいくつかの大きな岩のかげにかくれました。そして、海のあわを髪の毛や胸の上にかぶって、だれにも顔を見られないようにしました。こうして、この気の毒な王子のところへ、どんな人がくるかと、気をつけていました。

ほどなく、そこへ一人の若い娘がやってきました。娘はたいそうびっくりしたようでしたが、それもほんのつかの間で、すぐにほかの人たちを呼んできました。人魚姫がなおも見ていますと、王子はとうとう正気にかえって、まわりの人たちにほほえみかけました。けれども、肝心の姫のほうへは、ほほえみかけてくれませんでした。それもそのはず、姫に救ってもらったとは、夢にも知らなかったのですもの。姫はすっかり悲しくなりました。そして、王子が大きな建物の中へ運びこまれてしまうと、泣く泣く水の中に沈んで、お父様のお城へ、帰って行きました。（本文）

＊　＊

さて、「……その時、大きな白い建物の中で鐘が鳴りました」とあるが、この大きな「白

い建物」は、教会ではなく、キリスト教の修道僧たちがいる「修道院」であり、その中から、大ぜいの若い娘たちが庭に出てきました。そこで、姿を見られないように、人魚姫はずっとあとへ泳ぎもどって、水の中から突き出ているいくつかの大きな岩のかげにかくれました。そして、海のあわを髪の毛や胸の上にかぶって、誰にも顔を見られないようにしました。――それは、一体、なぜなのか？　それは、人魚姫は、まさに「人魚であって、人間ではない」からである。もし、人間であったならば、当然、王子が目が覚めるまでそこにいたでしょう。しかし、人魚だからこそ、その身を隠したのである。そのようなことからも、やがて、「……人魚を捨て、人間になりたいという思いが募って来る」のである。こうして、この気の毒な王子のところへ、どんな人がくるかと、気をつけていました。

ほどなく、そこへ一人の若い娘がやってきました。娘はたいそうびっくりしたようでしたが、それもほんのつかの間で、すぐにほかの人たちを呼んできました。人魚姫がなおも見ていますと、王子はとうとう正気にかえって、まわりの人たちにほほえみかけましたとある。――ここで大事なことは、一人の若い娘というのは、たまたま「王子」を浜辺で見つけ、すぐにほかの人たちを呼びに行っただけであったが、一方、王子は、この「若い娘」こそは、自分の「命の恩人」そのものだと思い込んでしまうのである。それゆえ、ほんとうの「命の恩人」である、肝心の「人魚姫」のほうへは、ほほえみかけてくれませんでした。それもそのはず、人魚姫に救ってもらったなどとは夢にも知らなかったからです。人魚姫はすっかり悲しくなりました。そして、王子が大きな建物の中へ運びこまれてしまうと、泣く泣く水の中に沈んで、お父様のお城へと帰って来るのでした。

十七、人魚姫の憂うつ

もともとこの姫は、静かな、考え深いたちでしたが、今では、それがいっそうひどくなりました。おねえさんたちは、海の上で最初に何を見てきたかと、しきりにたずねましたけれど、姫は何の話もしませんでした。

それからは、姫は、幾晩も、幾朝も、王子と別れた浜べに浮かび上がりました。庭のくだものが、いつしか熟して、摘みとられるのも見ましたし、高い山々の雪がとけてゆくのも見ました。けれども、王子の姿だけは、見ることができませんでした。そのたびに姫は、よけいに悲しみをつのらせて、家へ帰ってくるのでした。姫のたった一つの慰めといえば、小さい花壇の中にすわって、王子に似ている美しい大理石像を両腕に抱くことでした。そのため、花の世話は、すっかりおるすになり、草花は荒野のように、ぼうぼうと茂って、路の上までおおいかぶさってしまいました。そして長い茎や葉が、木の枝とからみあって、あたりをすっかり、暗くしていました。（本文）

＊　　＊

さて、お父様のお城へと帰った人魚姫は、一人うち沈んでいたが、それは、「……もともとこの姫は、静かな、考え深いたちでしたが、今では、それがいっそうひどくなり、お姉さんたちは、海の上で最初に何を見てきたかとしきりにたずねましたが、姫は何の話もしませんでした」とある。――これは、まさに重度の「恋煩い」であって、「……それからは、姫は、幾晩も、幾朝も、王子と別れた浜べに浮かび上がりました。庭のくだものが、いつしか熟して、摘みとられるのも見ましたし、高い山々の雪がとけてゆくのも見ました。

けれども、王子の姿だけは、見ることができませんでした。そのたびに姫は、よけいに悲しみをつのらせて、家へ帰ってくるのでした」とある。――さて、庭のくだものが、いつしか熟して、摘みとられるのも見ましたし、高い山々の雪がとけてゆくのも見ましたとすれば、それだけの月日が流れたということであり、そして、人魚姫のたった一つの慰めといえば、小さい花壇の中にすわって、王子に似ている美しい大理石像を両腕に抱くことでした。（つまり、王子以外のことはもう何も考えられなくなってしまったのである）。そのため、花の世話は、すっかりおろすになり、草花は荒野のように、ぼうぼうと茂って、路の上までおおいかぶさってしまいました。そして、長い茎や葉が木の枝とからみあって、あたりをすっかり暗くしていたのでした。

十八、自分の想いを一人のお姉さんに打ち開ける

とうとう姫は、もうこれ以上がまんができなくなりました。そこで、おねえさんの一人にそれをうちあけました。すると、すぐ、ほかのおねえさんたちも知ってしまいました。けれども、知っているのはおねえさんたちと、ほかにほんの二三の人魚の娘たちだけでした。そして、この娘たちは、ごく親しい友だちのほかには、だれにもそれをもらしませんでした。ところが、その友だちのうちに、王子のことを知っている娘がいました。その娘も、いつかの船の上のお祝いを見ていたのでした。そして、王子がどこの人で、その国はどこにあるかということも知っていました。

「……さあ娘よ！　行きましょう」と、おねえさんたちが言いました。そして、みんなで肩を組んで一列になって、王子の御殿があると聞いた海辺へのぼって行きました。

その御殿は、つやのあるクリーム色の石でつくられていました。そして、大きな大理石の階段がいくつもあり、その一つは海の中へおりていました。りっぱな金いろの円屋根が屋根の上にそびえていました。建物のまわりをとりまいている円柱のあいだには、まるで生きているような大理石像が立っていました。高い窓の、すきとおったガラスから、中を見ますと、そこは、りっぱな大広間で、高価な絹の窓掛けや絨毯が、かかっていました。まわりの壁には、いくら見ても見あきない大きな絵がいくつも飾ってありました。一番大きな広間のまん中には、大きな噴水が、さらさらと音をたてていました。その水柱は、高いガラスばりの円天井にむかって、吹き上げていました。天井からさしこんでくるお月様は、水の上や、大きな水盤に浮かんでいる美しい水草を照らしていました。（本文）

＊　＊

まず、静かで、考え深いたちの人魚姫も、「……（とうとう）もうこれ以上がまんができなくなり、そこで、おねえさんの一人にそれをうちあけると、すぐにもほかのおねえさんたちにも知られてしまいますが、ほかにはほんの二三の人魚の娘たちだけでした。そして、この娘たちは、ごく親しい友だちのほかには、だれにもそれをもらしませんでしたが、その友だちのうちに、王子のことを知っている娘がいて、その娘も、いつかの船の上のお祝いを見ていたのでした。そして、王子がどこの人で、その国はどこにあるかということも知っていた」のでした。――まず、人魚の王様やお年寄りのお母様などは、まだこのことは知らず、知っているのは五人のおねえさんと、ほかにはほんの二三の人魚の娘たちだけでしたが、その娘の友だちのうちに、「……王子がどこの人で、その国はどこにあるか

も知っている娘がいた」ということであり、そこで、「……さあ娘よ！　行きましょう」と、おねえさんたちが言い、そして、みんなで肩を組んで一列になって、王子の御殿があると聞いた海辺へのぼって行ったということである。

その御殿は、「……つやのあるクリーム色の石でつくられていました。そして、大きな大理石の階段がいくつもあり、その一つは海の中へおりていました。りっぱな金いろの円屋根が屋根の上にそびえていました。建物のまわりをとりまいている円柱のあいだには、まるで生きているような大理石像が立っていました。高い窓の、すきとおったガラスから、中を見ますと、そこは、りっぱな大広間で、高価な絹の窓掛けや絨毯が、かかっていました。まわりの壁には、いくら見ても見あきない大きな絵がいくつも飾ってありました。一番大きな広間のまん中には、大きな噴水が、さらさらと音をたてていました。その水柱は、高いガラスばりの円天井にむかって、吹き上げていました。天井からさしこんでくるお月様は、水の上や、大きな水盤に浮かんでいる美しい水草を照らしていました」というような、そういう実に壮大かつ豪華な「御殿の様子」であったということである。

＊　　＊

十九、王子が住んでいる御殿

十九、王子が住んでいる御殿

さて、人魚姫は、「……王子の住んでいる御殿がわかりますと、それからというもの末の姫は、幾夜も幾夜も、水の上に浮かんできました。そして、ほかのだれもが、とてもそれだけの勇気が出ないくらい、陸の近くまで泳いで行きました。しまいには、狭い掘割をさかのぼって、水の上に長い影を映している、りっぱな大理石のバルコニーの下まで行きました。そして、その下に身をひそめて、若い王子を見あげました。王子の方は、そんなこととは夢にも知らず、ただひとり、明るい月の光を浴びているのでした」（本文）とある。――これは、余りにも有名な『ロミオとジュリエット』の名場面などを彷彿と思い出させるような場面であり、また、「……人魚姫は、幾度か王子が旗をなびかせた美しいボートを夕方の海へこぎ出して、音楽を楽しむのを見ました。姫は緑のアシの葉かげに身をひそめて、じっとその方を見ていました。そのような時、風が吹いてきて、姫の長い銀色のヴェールをひらひらさせることがありました。それを見た人たちは、白鳥が翼をひろげたのだと思うのでした」（本文）とある。

もちろん、こういうことも十分あり得ることであるが、ただ、なぜ王子は、海の方ばかりであり、一方、山や森の方への遊びはしないのかと問えば、むろん、山や森への遊びなども行なっているのであるが、人魚姫は、当然のことながら、水のない「地上」ではその身を自由に移動させることができないからである。また、「……人魚姫は、幾夜も、たいまつを灯して海に漁に出た漁師が、若い王子のことを、たいそうほめているの聞きました」（本文）とあるが、これも、本来であれば、「海の漁師」ではなくて、例えば、町の人たちの「評判」などもたいそうよかったとするところかと思うが、人魚姫は、町の中を歩いて王子の評判などを聞くということはできないのであり、そこで海に漁に出た漁師が、若い王子のことをたいそうほめているという設定になっているのだろう。そして、「……その評判のよい王子が死んだようになって荒波に漂っていた時に、自分が救ってあげたのだと思うと、うれしくてなりませんでした。そして、王子の頭がどんなにじっと自分の胸の上にもたれていたか、また、どんなに心をこめて王子の額にキスをしてあげたか、を思い出すのでした。（これはもう恋に深く落ちている何よりの証拠であるが）、けれども、王子のほうでは、そんなことは何も知りませんでしたので、夢にも姫のことなど思っているはずもありませんでした」（本文）となるのである。

二十、人魚の世界から人間の世界へ

さて、人魚姫は、「……次第に人間をいとしく思うようになり、ますます人間の中に、はいって行きたくなりました。人間の世界は、人魚の世界よりもずっと大きいように思われました。人間は船に乗って海の上を走ることもできれば、高い山を雲の上まで登ることもできます。また、人間の住んでいる陸は、森や畑をのせて、姫の目のとどかないほど遠くまでひろがっています。そこには、姫の知りたいと思うことが、それはたくさんありました。それなのに、おねえさんたちは、それにみんな答えることはできませんでした。そこで、おばあ様にたずねることにしました。おばあ様は、上の世界のことはよくご存じでした。上の世界というのは、海の上の陸地に、おばあ様がつけた、なかなか上手な名前

だったのです」（本文）とある。――つまり、人魚姫は、「……次第に人間をいとしく思うようになり、ますます人間の中に入って行きたくなった」ということである。これは、まさに「人魚の世界」から「人間の世界」への憧憬（あこがれ）であり、「……姫の知りたいと思うことが、それはたくさんありましたが、おねえさんたちは、それにみんな答えることはできませんでした。そこで、おばあ様にたずねることにしたのであり、おばあ様は、上の世界のことはよくご存じでした。上の世界というのは、海の上の陸地に、おばあ様がつけた、なかなか上手な名前だったのです」となるのである。

二一、人魚と人間との違い

「……おばあ様、人間というものは、おぼれて死にさえしなければ、いつまでも生きていられるのですか」と、姫はたずねました。「……わたしたち海の底の者のように、死ぬということがないのでしょうか」、「……なんの、おまえ、人間だって死ななければならないのですよ」と、お年寄りは言いました。「……おまけに、人間の一生は、わたしたちの一生よりもずっと短いのです。わたしたちは三百年も生きていられるのですからね。そのかわり、わたしたちは、一生が終わると、水の上のあわになってしまいます。そのため、この海の底のなつかしい人たちのところで、お墓に眠るということができないのです。わたしたちには、不死の魂というものがないのです。あの世に生まれかわるということもありません。わたしたちはちょうど、緑のアシのようなもので、一度、刈りとられたら、もう二度と緑の芽を出すことはありません。ところが、人間には、魂というものがあって、肉体が死んで土になったあとでも、それはいつまでも生きているのです。そして、澄んだ大気の中を、キラキラ光っているお星様のところまでのぼって行くのです。わたしたちが海の上まで浮かんで行って、人間の国々をながめるように、人間の魂は、わたしたちの決して見ることのできない、未知の美しい世界へのぼって行くのです」。

「……どうして、わたしたちには、不死の魂がさずからないのでしょう？」と、人魚姫は悲しそうに言いました。「……たった一日でも人間になれて、死んだらその天国とやらへ行くことができますなら、わたしにさずかった何百年という命だって、残らず、捨てても惜しいとは思いません」。「……そんなことを考えるものじゃありません」と、お年寄りは言いました。「……わたしたちは、あの世の世界の人間よりもずっと仕合わせなんですよ」、「……では、わたしも、死んだら、海のあわになって漂わなければならないのでしょうか。もう波の音楽も聞かれず、きれいな花や、赤いお日様を見ることもできないのでしょうか。永遠の魂をさずかるための方法は、何もないのでしょうか」と聞くと、「ありませんよ！」と、お年寄りは言いました。（本文）

＊　＊

さて、この場面は、非常に大事なところであり、それゆえ、丁寧に読んでみたいと思うが、まず、人魚姫は、「……おばあ様、人間というものは、おぼれて死にさえしなければ、いつまでも生きていられるのですか」と聞いている。これは、例えば、船が難破して海に人間が落ちてやがて溺れ死ぬということは、人魚姫も、実際に見聞きしたりしてよく知ってはいたが、しかし、それ以外の人間の「死に方」というものは、まだ何も知らなかったということであり、だからこそ、「……人間というものは、おぼれて死にさえしなければ、

いつまでも生きていられるのですか」と聞いているのである。また、「……わたしたち海の底の者のように、死ぬということがないのでしょうか」とも聞いている。この「わたしたち海の底の者のように」とは、すなわち、「人魚のように」ということであり、それゆえ、人魚姫は、「……人魚は、やがては死ぬ」ということは知っているが、一方、「……人間はどうなのか？　いつまでも生きていられるのかどうか？」と聞いているのである。

すると、おばあ様は、「……なんの、おまえ、人間だって死ななければならないのですよ」、「……おまけに、人間の一生は、わたしたちの一生よりもずっと短いのです。わたしたちは三百年も生きていられるのですからね」と言うのでした。――これは、人間の「寿命」は、約「百年」程度であるが、一方、人魚の「寿命」は、何と「三百年」もあるということである。――これは、作者（アンデルセン）個人の「考え方」なのか？　それとも他に何か「根拠のある話」なのかはよく判らないが、ともかく、人間は約「百年」、人魚は約「三百年」の寿命を持っているが、しかし、人間も人魚も、必ず「寿命」まで生きていられるということでは決してなく、当然のことながら、病気や不慮の事故その他などで、若くして死ぬということは十分にあり得ることであり、――例えば、お城に住まっている人魚の王様は、「……もう何年も前から、やもめ暮らし」とあるが、これなどは、恐らく、王妃を「若くして」（三百歳に達する前に）亡くしているということである。

そして、大事なのは、ここからであり、「……わたしたちは三百年も生きていられるのですからね。そのかわり、わたしたちは、一生が終わると、水の上のあわになってしまいます。そのため、この海の底のなつかしい人たちのところで、お墓に眠るということができないのです。わたしたちには、不死の魂というものがないのです。あの世に生まれかわるということもありません。わたしたちはちょうど、緑のアシのようなもので、一度、刈りとられたら、もう二度と緑の芽を出すことはありません。ところが、人間には、魂というものがあって、肉体が死んで土になったあとでも、それはいつまでも生きているのです。そして、澄んだ大気の中を、キラキラ光っているお星様のところまでのぼって行くのです。わたしたちが海の上まで浮かんで行って、人間の国々をながめるように、人間の魂は、わたしたちの決して見ることのできない、未知の美しい世界へのぼって行くのです」とある。

つまり、「人魚」というのは、三百年も生きていられるが、しかし、一生が終わると、水の上のあわになってしまい、もう二度と「生まれ変わる」ということができないのである。一方、「人間」というのは、魂というものがあって、肉体が死んで土になったあとでも、それはいつまでも生きていて、そして、澄んだ大気の中を、キラキラ光っているお星様のところまでのぼって行くのです。――つまり、人間には「不死の魂」というものがあり、死んだ後も、あの世に「生まれ変わる」ということができ得るということである。

二二、人魚が人間の「不死の魂」を得るには

さて、おばあ様は、「……けれども、ただ一つ、こういうことがあるんだよ。人間のうちのだれかが、おまえを心から愛して、両親よりもおまえのほうをいとしく思うならば、そして、まごころと愛情とをすっかりおまえにそそいで、やがて、神父さんにお願いして、その人の右手をおまえの右手におきながら、この世でもあの世へ行っても、いつまでも変わらないまごころと誓いとを立てさせてくださるならば、その時こそ、その人の魂がおま

えのからだにのりうつって、おまえも人間の幸福にあずかることができるんだそうだよ。つまり、その人はおまえに、魂をわけながら、自分の魂はそのまま持っているというわけなのね。けれども、そんなことは起こりようがないよ。なぜって、この海の底では美しいとされている、おまえのその魚の尻尾だって、陸の上では、みにくいものと思われているんだからね。人間にはその使いみちがわからないんだね。それで、二本のぶかっこうな、突っかい棒なんか持って、それをお上品ぶって、脚なんてよんでいるんですよ」と言う。

人魚姫はため息をついて、悲しそうに自分の魚の尻尾をじっとながめました。「……さあ、くよくよしないで！」と、お年寄りは言いました。「……わたしたちにさずかった三百年の一生をたのしく踊ったり、はねたりして暮らすことですよ。三百年といえば、ずいぶん長い年月ですもの。そのあとは、なんの未練もなく、ゆっくり休めるというものさ。では、今夜は舞踏会をひらきましょう」と言うのでした。（本文）

＊　＊

さて、人魚が人間の「不死の魂」を得るには、ただ一つ、こういうことがあり、それは、「……人間のうちのだれかが、おまえを心から愛して、両親よりもおまえのほうをいとしく思うならば、そして、まごころと愛情とをすっかりおまえにそそいで、やがて、神父さんにお願いして、その人の右手をおまえの右手におきながら、この世でもあの世へ行っても、いつまでも変わらないまごころと誓いとを立てさせてくださるならば、その時こそ、その人の魂がおまえのからだにのりうつって、おまえも人間の幸福にあずかることができるんだそうだよ。つまり、その人はおまえに、魂をわけながら、自分の魂はそのまま持っているというわけなのね」とある。――つまり、教会（神の前）で、お互いに「永遠の愛」を心の底から誓い合う神聖な「結婚式」を挙げることができ得れば、その時には、人魚が人間の「不死の魂」を得ることもでき得るということである。しかし、「……そんなことは起こりようがないよ。なぜって、この海の底では美しいとされている、おまえのその魚の尻尾だって、陸の上では、みにくいものと思われているんだからね。人間にはその使いみちがわからないんだね。それで、二本のぶかっこうな、突っかい棒なんか持って、それをお上品ぶって、脚なんてよんでいるんですよ」と言うのでした。

人魚姫はため息をついて、悲しそうに自分の魚の尻尾をじっとながめました。「……さあ、くよくよしないで！」と、お年寄りは言いました。「……わたしたちにさずかった三百年の一生をたのしく踊ったり、はねたりして暮らすことですよ。三百年といえば、ずいぶん長い年月ですもの。そのあとは、なんの未練もなく、ゆっくり休めるというものさ。では、今夜は舞踏会をひらきましょう」と言うのでした。

二三、人魚たちの舞踏会

その晩の舞踏会は、陸の上ではとても見られないはなやかなものでした。大きな舞踏室の壁や天井は、厚いすきとおったガラスばりでした。何百というバラ色や草色の大きな貝殻が、青々と燃えるあかりを一つずつともして、四方の壁にずらりとならんでいました。その光は、広間じゅうを明るく照らした上、壁をとおして、そとまでさしていました。そのため、まわりの海までが、明るく照らし出されていました。数かぎりない魚が、大きいのも小さいのも、ガラスの壁の方にむかって泳いでくるのが見えます。緋いろのうろこを、

キラキラさせてくる魚もあれば、金いろや銀いろのうろこを光らせてくる魚もありました。——広場のまん中を、幅の広い流れが、さらさらと音を立てて流れていました。その流れの上で、人魚の若者や娘が、美しい歌をうたいながら、おどっていました。こんなきれいな声は、地上の人間は持っていません。ことに、末の人魚姫の声は、だれよりも一番きれいだったので、みんなは手をうってかっさいしました。姫は、陸の上でも海の中でも、自分ほど美しい声を持っているものがないと思うと、一瞬間、心に喜びを感じました。けれども、すぐまた、上の世界のことが思い出されるのでした。そして、あの美しい王子のことや、王子のように不死の魂を持っていない悲しみを、どうしても忘れることができませんでした。そこで、姫はお父様のお城をそっとぬけ出して、みんなが広場で陽気に歌ったり、おどったりしているあいだ、自分の小さな花壇に、しょんぼりすわっていました。するとその時、角笛の音が水をとおして響いてきました。姫はそれを聞いて、こう思いました。「……きっといま、あのかたが、上を船で通っていらっしゃるのだわ。お父様よりもお母様よりも大好きな、あのかたが。わたしがひとすじに思っているあのかたが、あのかたと不死の魂とが、わたしのものになるならば、わたし、なんでも思い切ってやってみるわ！　そうだわ、おねえさんたちが、お父様のお城で踊っているあいだに、海の魔女のところへ行ってみよう。あの魔女は、いつだって、恐ろしくてしかたがないけれど、たぶん、いい知恵をかしてくれるかもしれないわ」と思うのでした。（本文）

＊　＊

さて、「……その晩の舞踏会は、陸の上ではとても見られないはなやかなものでした」とあり、その具体的な内容が、まさに「華やかに描写されています」が、その中で気になるところは、まず、「……人魚の若者や娘が、美しい歌をうたいながら、踊っていました」とある。——つまり、人魚の世界でも、われわれ人間の世界と全く同じように、当然のことながら、まさに「老若男女」は存在するのであり、そして、男性の人魚は、一般に、「マーマン」と呼ばれ、一方、女性の人魚は、一般に、「マーメイド」と呼ばれているものである。また、女主人公の「人魚姫」の歌声は、誰よりも一番きれいだったので、みんなは手を打って喝采しました。そして、人魚姫は、陸の上でも海の中でも、自分ほど美しい声を持っているものがないと思うと、一瞬間、心に喜びを感じるのでした。もちろん、これは、やがて、海の魔女にその「美しい声」（舌）を奪われてしまうのであるが、そのためのいわば「伏線」にもなっているのだろう。

さて、女主人公の「人魚姫」は、上の世界の、あの美しい王子のことや、王子のように不死の魂を持っていない悲しみを、どうしても忘れることができず、そこで、姫はお父様のお城をそっとぬけ出して、みんなが広場で陽気に歌ったり、踊ったりしているあいだ、自分の小さな花壇に、しょんぼりすわっていました。その時、角笛の音が水をとおして響いてきて、姫はそれを聞くと、「……（ああ）きっといま、あのかたが、上を船で通っていらっしゃるのだわ。お父様よりもお母様よりも大好きな、あのかたが。わたしがひとすじに思っているあのかたの手に、わたしの一生の仕合わせをおまかせしてもいい。あのかたと不死の魂とが、わたしのものになるならば、わたし、なんでも思い切ってやってみるわ！　そうだわ、おねえさんたちが、お父様のお城で踊っているあいだに、海の魔女のところへ行ってみよう。あの魔女は、いつだって、恐ろしくてしかたがないけれ

ど、たぶん、いい知恵をかしてくれるかもしれないわ」と、まさに「一大決心」をするのであるが、その「一大決心」とは、すなわち、「……あのかたと不死の魂とが、わたしのものになるならば、わたし、なんでも思い切ってやってみるわ！」ということである。

＊　＊

二四、海の魔女の所へ

二四、海の魔女の所へ

こうして、人魚姫はお庭を出ますと、ごうごうと音を立てて流れている、うずまきの方へ歩いて行きました。魔女はこのうずまきのむこうに住んでいるのでした。この道は、まだ一度もきたことがありません。そこには、花も咲いていなければ、海草さえ生えていません。ただ、灰色のはだかの砂地が、うずの流れているところまで、ひろがっているだけでした。そこへきてみますと、海の水が、ごうごうとはげしい音を立てる水車のように、うずをまいていました。そして、渦の中にはいって来るものは、どんなものでも深い底へ引きずりこんでいました。海の魔女の領地へ行くには、なにもかも粉々(こなごな)にくだいてしまう、このうずのまん中を通りぬけなければなりません。おまけに、かなり長いあいだ、道らしい道もなく、ぶくぶくと熱くあわだつ泥、つまり魔女のいう水苔(みずごけ)、の上を行くほかはありません。ここを通りぬけると、不思議な森があって、そのまん中に魔女の家がありました。

（本文）

＊　＊

さて、女主人公の人魚姫は、まさに「一大決心」をして「海の魔女」のところへ行くことに決めるが、その「海の魔女」のいるところへ行くには、まず、「……人魚姫はお庭を出ると、ごうごうと音を立てて流れている、渦巻きのほうへ歩いて行かなければなりませんでした。なぜなら、その渦巻きの向こうにこそ海の魔女は住んでいる」からである。そして、「……この道（渦巻きの所へと行く道）は、まだ一度もきたことはなく、そこには、花も咲いていなければ、海草さえ生えていません。ただ、灰色のはだかの砂地が、うずの流れているところまで、ひろがっているだけでした。そして、そこ（渦巻きの所）へ来てみると、海の水が、ごうごうと激しい音を立てる水車のように、渦を巻いていました。そして、その渦の中に入って来るものは、どんなものでも深い底へ引きずりこんでいる」のでした。しかし、「……海の魔女の領地へ行くには、何もかも粉々(こなごな)にくだいてしまう、この渦のまん中を通りぬけなければならず、おまけに（その後(あと)も）、かなり長いあいだ、道らしい道もなく、ぶくぶくと熱くあわだつ泥、つまり魔女のいう水苔(みずごけ)、の上を行くほかはありませんでした。そして、ここ（水苔(みずごけ)）を（何とか）通りぬけると、不思議な森があって、そのまん中に魔女の家がありました」となるのである。そして、その「森の様子」が次に具体的に描写されているのであり、それは、次のようなものである。

＊　＊

この森の中の木ややぶは、どれもみな、半ば動物で半ば植物のヒドラでした。それはちょうど、頭が百もあるヘビが、地から生え出ているようでした。枝という枝はみな、長いねばねばした腕で、ミミズのようにまがりくねる指を持っています。そして、根もとから枝のさきまで、節ごとに動かすことができるのでした。こうして、なんでも水の中でつかまえたらさいご、それにからみついて、もう二度とはなすことはありません。人魚姫はそれを見ると、こわくなって、そこに立ちすくんでしまいました。恐ろしさに、胸がどきどきしました。そして、もうすこしで、あとへ引きかえすところでした。けれども、王子のことや、人間の魂のことを考えると、また勇気が出てきました。そこで、ふさふさした長い髪を頭にしっかりまきつけて、ヒドラにつかまえられないようにすると、両手を胸の上に重ねて、ちょうど魚が水の中を泳ぐように、うすきみの悪いヒドラのあいだを、突きぬ

けて行きました。ヒドラたちは、うねうねした腕と指とを姫のほうへのばしました。見ると、どのヒドラも、つかまえたものを、何百という小さな腕で、丈夫な鉄のたがのように、しめつけていました。海で死んで、底深く沈んだ人間が、白骨となってヒドラの腕のあいだから、のぞいていました。船のかいや箱をしっかりつかまえているものもあれば、陸の動物の骸骨も見えました。なかでも、一番恐ろしく思ったのは、小さい人魚の娘がつかまって、しめ殺されていたことでした。（本文）

＊　　＊

さて、「……この（海中の）森の中の木ややぶは、どれもみな、半ば動物で半ば植物のヒドラでした」とある。――この「ヒドラ」という生き物は、最近、（二〇一六年）、米国科学アカデミーの正式機関紙『米国科学アカデミー紀要』に発表された共著論文のなかで、「永遠の命を持つ生物」の存在が明らかになったという。その生物こそは、まさに「ヒドラ」であり、ヒドラというのは、体長一センチほどの淡水産無脊椎動物の総称であるが、ヒドラは身体のほとんどが幹細胞からできており、細胞には断続的に分裂を繰り返す能力がある。つまり、ヒドラは自分の身体を常に更新し続けることで「永久に生存する」というのである。これは、今までの「……すべての生命体（有機体）は老いて死ぬという、これまでの定説は崩れたことになる」というのである。しかし、マルティネス教授は、「……ただし、これが自然界で起こる確率は低いでしょう。なぜなら、実際の世界では天敵、汚染、病気があるからです」と語っている。それゆえ、この微小な生命体（ヒドラ）は、理想的な環境に生育した場合は、老化の兆候もなく、死亡率は一定かつ著しく低い（殆ど死なない）という結論になったというのである。（ウェブからの引用）。

一方、古代ギリシア神話の「ヒドラ」というのは、アルゴル近くのレルネの沼地に住んでいて、しばしば人里を荒し回った。そこで、ミケーネ王エウリュステウスは、ヘラクレスにヒドラの退治を命じた。これは、ヘラクレスの二番目の難行となったものである。そして、ヘラクレスは、ヒドラの吐く毒気にやられないように、口と鼻を布で覆いながらヒドラの住むアルゴス近くのレルネの沼地へとやって来た。そして、ヒドラの巣に火矢を打ち込み、ヒドラに立ち向かった。しかし、ヒドラの首を棍棒で叩き潰しても、傷口からすぐに二つの首が再生し、倒せば倒すほど首が増えてしまうことにヘラクレスは気が付いた。そこで、ヘラクレスは、甥のイオラオスに助けを求めた。そのイオラオスは、首の傷口を松明の炎で焼き焦がす方法を思いつき、次々に傷口を焼いて再生するのを防いだ。ヒドラを殺すには、真ん中にある一つの不死身の首を何とかしなければならなかったが、ヘラクレスはその首を切断し、巨大な岩の下敷きにして倒した。そして、ヒドラは、うみへび座になったというのである。――そして、このアンデルセン童話の中の「ヒドラの様子」というのは、まさに本文に書いてある通りであったということである。

二五、魔女の家と二匹のペット

やがて姫は、森の中の、ぬかるみの広場にきました。ここには、大きなあぶらぎった海ヘビが、とぐろをまいて、きみの悪い、うす黄色の腹をみせていました。広場のまん中に、難破して死んだ人間の白骨でできた一軒の家が立っていました。その家で海の魔女が、ちょうど人間がカナリヤにお砂糖をなめさせるように、口うつしでヒキガエルにえさをやっ

ているところでした。また、きみの悪い、あぶらぎった海ヘビを、ヒョッコと呼んで、自分のだぶだぶした大きな胸の上を、はいまわらせました。（本文）

＊　＊

さて、人魚姫は、やがて森の中の、ぬかるみの広場にやって来ました。そこには大きなあぶらぎった海ヘビが、とぐろをまいて、きみの悪い、うす黄色の腹をみせていましたが、この「海ヘビ」は、実は「海の魔女」のいわば「ペット」であり、そして、広場のまん中に、難破して死んだ人間の白骨でできた一軒の家が立っていたのでした。その家で「海の魔女」は、今、ちょうど人間がカナリヤにお砂糖をなめさせるように、口うつしでヒキガエルにえさをやっているところでした。この「ヒキガエル」も、まさに「海の魔女」の「ペット」であったのである。――つまり、海の魔女は、二匹のペットを飼っていて、一匹は、大きなあぶらぎった海ヘビであり、そして、もう一匹は、ヒキガエルであったが、そのヒキガエルには口うつしでえさをやってみたり、また、もう一匹の、きみの悪い、あぶらぎった海ヘビを、ヒョッコと呼んで、自分のだぶだぶした大きな胸の上を、はいまわらせていたのでした。

二六、海の魔女と人魚姫

さて、魔女は、「……わたしには、おまえさんが何の用事できたか、ちゃんとわかってるよ」と、海の魔女は言いました。「……ばかなことはしないがいいよ。わがままをとおすのもいいが、そのために不仕合わせになるよ。きれいなお姫さん！　おまえさんは、魚の、尻尾（しっぽ）を捨てて、そのかわり、人間が歩くときに使う二本の突っかい棒がほしいと言いなさるんだろ。つまり、あの若い王子を惚（ほ）れさせて、王子と不死の魂とを手に入れようというこんたんさね！」、こう言って、魔女は、大きなぞっとするような声を立てて笑いました。そのため、ヒキガエルと海ヘビがころげ落ちて、あたりをのたくりまわりました。（本文）

＊　＊

さて、ここからは大事であり、それは、まず、「……わたしには、おまえさんが何の用事できたか、ちゃんとわかってるよ」と、海の魔女は言いました。「……ばかなことはしないがいいよ。わがままをとおすのもいいが、そのために不仕合わせになるよ。きれいなお姫さん！　おまえさんは、魚の、尻尾（しっぽ）を捨てて、そのかわり、人間が歩くときに使う二本の突っかい棒がほしいと言いなさるんだろ。つまり、あの若い王子を惚（ほ）れさせて、王子と不死の魂とを手に入れようというこんたんさね！」と言うのでした。――つまり、海の魔女にしてみれば、「……人魚姫が何の用事でここにきたのか？　また、魚の尻尾（しっぽ）を捨てて、人間が歩く時に使う二本の突っかい棒をほしがっていることも、それは、あの若い王子を惚（ほ）れさせて、王子と不死の魂とを手に入れようというこんたんさね！」、そんなことはとうにすべて分かっているのさと、魔女は、大きなぞっとするような声を立てて笑うのでした。そのために、そのぞっとするような余りに大きな笑い声に驚いて、傍（そば）にいたヒキガエルも海ヘビもころげ落ちて、あたりをのたくりまわりましたとなるのである。

＊　＊

ところで、魔女というのは、一体、どのような存在になるのと問えば、それは、次のよ

うになるかと思う。――まず、魔女というのは、一般には、「魔法使い」の女ということになるが、何らかの「魔法」（不可思議な力）を使って、常人には不可能な結果を実現する力を持っているのである。――例えば、有名な（ディズニーの）『シンデレラ』であれば、「カボチャ」を「馬車」に変えたり、また、この『人魚姫』であれば、人魚の「尻尾」を人間の「二本の脚」に変えられるということである。ただ、その「魔法」は、『シンデレラ』の場合であれば、深夜の十二時を過ぎると、その「魔法」は解けてしまい、また、『人魚姫』の場合であれば、歩くたびに足に「鋭い痛み」が伴うということになっている。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、「魔法」を使うというのは、やはり正当な「方法」ではないからであり、それゆえ、その「効力」は、ある程度限定されてしまうということになるのかも知れない。例えば、魔女の「毒リンゴ」を食べた（ディズニーの）「白雪姫」は、仮死状態になってしまうが、白馬に乗った王子様のキスによって、その「白雪姫」にかけられた「魔法」は解けてしまうのであり、それは、真実の「愛」は、魔女の「魔法」をも解く力があるということであり、例えば、アンデルセンの『雪の女王』という作品の「ゲルダ」が、「カイ」を助け出すというのも全く同じことになるのである。

二七、海の魔女と飲み薬

でも、「……おまえさんは、ちょうどいい時に、きたというものさ」と、魔女は言いました。「……あすになって、おてんと様が出たらさいご、あと一年たたないと、おまえさんに手をかしてあげるわけにはいかなくなるんだよ。どれ、飲み薬をつくってあげるからね、それを持って、おてんと様の上がらないうちに陸に泳ぎついてな、それから、岸に上がって、その薬をお飲み。そうすると、その尻尾がちぢこまって、人間の言う、きれいな脚というものになるのさ。けれども、そのときの痛さときたら、おまえさん、鋭い剣で突き刺されるようなんだよ。そのかわり、おまえさんを見た人間はだれでも、こんなきれいな娘は、いままで見たことがない、と言うことだろうよ。おまえさんの軽やかな歩きぶりときたら、まるですべるようで、どんな踊り子でも、とうていかなわないよ。けれども、ひとあしごとに、鋭いナイフを踏んで、血を流す思いをするだろうよ。それでも、おまえさんが、がまんするというなら、手をかしてあげてもいいがね」と言う。すると、「……はい、どうぞ！」と、人魚姫はふるえ声で言って、王子と不死の魂のことを、じっと思いつめていました。（本文）、――さて、ここまでは、書いてある通りであり、特に説明はいらないと思うが、「……だが、ことわっておくがね」と、魔女は言い続けるのでした。

＊　＊

それは、「……いったんおまえさんが人間の姿になったら、もう二度と人魚にはなれないんだよ、二度と水の中をくぐって、姉さんたちや、お父さんのお城へは、帰ってこられないんだよ。また、王子が、両親を忘れてしまうほど、おまえさんが好きになって、心の底からおまえさんのことばかり思うようにならなけりゃ、そして、坊さんがきて、おまえさんたち二人の手を握らせて、夫婦約束をするようにならなけりゃ、不死の魂なんてものは、決してさずかりっこないんだよ。もし、王子が、ほかの女と結婚するようなことにでもなったら、あくる朝、おまえさんの心臓は破裂して、おまえさんは海のあわになってしまうんだよ」と言う。すると、「……それでも、かまいませんわ」と、人魚姫はこう言い

ましたが、顔は死人のように青ざめていました。（本文）

＊　　＊

さて、ここで「魔女」が説明していることは、「……一度人間の姿になってしまうと、二度と人魚には戻れないということ、それゆえ、水の中をくぐって、姉さんたちや、お父さんのお城へは、もう帰ってこられないということ。また、王子と不死の魂を得るためには、王子が、両親を忘れてしまうほど、おまえさんが好きになって、心の底からおまえさんのことばかり思うようにならなければならない。そして、教会（神の前）で、お互いに「永遠の愛」を心の底から誓い合う神聖な「結婚式」を挙げることができ得た、その時だけ、人魚が人間の「不死の魂」を得ることもでき得るが、そうでなければ、不死の魂なんてものは、決してさずかりっこないんだよ。それどころか、もし、王子が、ほかの女と結婚するようなことにでもなったら、あくる朝、おまえさんの心臓は破裂して、おまえさんは海のあわになってしまうんだよ」と言うのでした。人魚姫は、「……それでも、かまいませんわ」と言うが、その顔は死人のように青ざめていたのである。

二八、魔女へのお礼として声を……

それから、「……わたしにお礼のことも忘れないでもらいたいね」と、魔女は言いました。「……しかも、わたしのほしいってものは、ちょっとやそっとのものじゃないんだよ。おまえさんは、この海の底にいるだれよりも、一番いい声を持っておいでだね。その声で王子をまよわすつもりだろうが、わたしのほしいっていうのは、じつは、その声なんだよ。わたしだって、とびきり上等の飲みものをつくってあげるんだもの、おまえさんも、一番いいものをくれなけりゃいけないよ。なにしろ、飲み薬を、両刃（もろは）の剣みたいに、よくきくようにするためには、わたしは、自分の血をそれにまぜなけりゃならないんだからね」と言うのでした。……

姫は、「……でも、声をあなたにあげてしまったら、あとに何が残るでしょう？」と言うと、「……そんなに美しい姿や、軽い歩きぶりや、ものをいう目があるじゃないか。それだけあれば、人間の心を夢中にさせるくらい、なんでもないやね！　おや、おまえさん、勇気がなくなったのかえ。さあ、その可愛い舌をお出し。よくきく薬の代金に、切り取らせてもらいましょ！」と言う。すると、「どうぞ！」と、人魚姫は言いました。魔女は魔法の飲みものを煮るために、大なべを火にかけました。「……あたしゃ、きれい好きでね！」と、こう言いながら、魔女は、ヘビをくるくるとむすんで、たわしのかわりにして、大なべをみがきました。それから、自分の胸をひっかいて黒い血を、その中へたらしました。湯気が、ぞっとするようなあやしい形になって、もうもうと立ちのぼりました。魔女は、ひっきりなしに大なべの中へ、何か新しいものをいれました。やがて、じゅうぶんに煮立ちますと、ちょうど、ワニの泣くような音（ね）を立てました。（本文）

＊　　＊

さて、魔女は、突然、それから、「……わたしにお礼のことも忘れないでもらいたいね」と言い出し、そして、「……わたしの欲しいってものは、ちょっとやそっとのものじゃなくて、おまえさんは、この海の底にいる誰よりも、一番いい声を持っているが、わたしの欲しいっていうのは、実は、その声なんだよ。わたしだって、とびきり上等の飲みものを

作って上げるんだもの、おまえさんも、一番いいものをくれなけりゃいけないよ」と言うのであった。すると、人魚姫は、「……でも、声をあなたにあげてしまったら、あとに何が残るでしょう？」と言うので「……そんなに美しい姿や、軽い歩きぶりや、ものをいう目があるじゃないか。それだけあれば、人間の心を夢中にさせるくらい、なんでもないやね！　おや、おまえさん、勇気がなくなったのかえ。さあ、その可愛い舌をお出し。よくきく薬の代金に、切り取らせてもらいましょ！」と言う。すると、「どうぞ！」と、人魚姫は言い、魔女は魔法の飲みものを煮るために、大なべを火にかけました。（中略）、それから、自分の胸をひっかいて黒い血を、その中へたらしました。湯気が、ぞっとするようなあやしい形になって、もうもうと立ちのぼりました。魔女は、ひっきりなしに大なべの中へ、何か新しいものをいれて、やがて、じゅうぶんに煮立ちますと、ちょうど、ワニの泣くような音（ね）を立てましたとなるのである。

二九、魔女の所から王様のお城に帰る

こうして、とうとう、飲み薬ができあがりました。ちょっと見たところは、すんだきれいな水としか思われませんでした。「……やれやれ、お待ちどうさま」と、魔女は言いました。そして、人魚姫の舌を切り取りました。姫はおしになって、もう、歌もうたえず、ものも言えなくなってしまいました。「……おまえさん、森の中をぬけて帰るとき、ヒドラにつかまりそうになったらね」と、魔女は言いました。「……そのときは、この飲み薬をたった一たらしでいいから、かけておやり。そうすりゃ、そいつらの腕や指は、粉々（こなごな）に飛び散ってしまうからな」と言うのでした。けれども、人魚姫はそんなことをする必要はありませんでした。ヒドラたちは、姫の手の中で星のようにぎらぎらしている薬を見ますと、おそれをなして、ひっこんでしまいました。そこで姫は、森や、泥沼や、激しいうずまきの中を無事に通りぬけて行きました。

やがて、お父様のお城が見えてきました。大きな舞踏室も、もはやあかりが消えていました。きっと、みんなは、もう寝てしまったのでしょう。けれども、姫は今では口がきけませんし、また、このまま永遠に立ち去ろうと思っていたので、みなに会う勇気はありませんでした。姫の胸は悲しみで、いまにも張り裂けるばかりでした。姫はそっとお庭の中にはいって、おねえさんたちの花壇から、花を一つずつ、摘みとって、お城の方へ幾度も幾度も、投げキスをしました。そして、青い青い海の中を、上へ上へとのぼって行きました。（本文）

＊　　＊

さて、とうとう「飲み薬」が出来上がると、魔女は、それと引き替えに人魚姫の舌を切り取りました。人魚姫はおしになって、もう、歌もうたえず、ものも言えなくなってしまいました。「……おまえさん、森の中をぬけて帰るとき、ヒドラにつかまりそうになったらね」と、魔女は言いました。「……そのときは、この飲み薬をたった一たらしでいいから、かけておやり。そうすりゃ、そいつらの腕や指は、粉々（こなごな）に飛び散ってしまうからな」と言うのでしたが、人魚姫はそんなことをする必要もなく、ヒドラたちは、姫の手の中で星のようにぎらぎらしている薬を見ると、おそれをなして、ひっこんでしまいました。そこで姫は、森や、泥沼や、激しいうずまきの中を無事に通りぬけて行きました。

やがて、お父様のお城が見えて来て、大きな舞踏室は、もはやあかりが消えていました。きっと、みんなは、もう寝てしまったのでしょう。けれども、姫は今では口がきけませんし、また、このまま永遠に立ち去ろうと思っていたので、みなに会う勇気はありませんでした。姫の胸は悲しみで、いまにも張り裂けるばかりでした。姫はそっとお庭の中にはいって、おねえさんたちの花壇から、花を一つずつ、摘みとって、お城の方へ幾度も幾度も、投げキスをしました、とある。――さて、人魚姫は、なぜ、おねえさんたちの花壇から花を一つずつ摘み取ったのだろうか？　それは、もう二度とこの海の底には戻って来られないのであり、それゆえ、いわば五人のおねえさんたちの「想い出の品」として、それぞれのおねえさんたちの花壇から花を一つずつ摘み取ったということであり、人魚姫は、お城の方へ幾度も幾度も「投げキス」をして、そして、青い青い海の中を、上へ上へとのぼって行ったということである。

＊　　＊

三十、王子の御殿へと

三十、王子の御殿へと

さて、人魚姫が王子の御殿を仰ぎながら、りっぱな大理石の段の上にあがって行ったときは、お日様はまだのぼっていませんでした。お月様が明るくあたりを照らしていました。人魚姫は、燃えるような強い薬を飲みました。すると、まるで両刃の剣が、華奢なからだに突き刺さったような気がして、たちまち気が遠くなり、その場に死んだように倒れてしまいました。しばらくして、お日様の光が海の上を照らしはじめるころ、姫は目をさましました。そして、からだにひりひりする痛みを感じました。ふとみると、目の前に、あの美しい若い王子が立っているではありませんか。王子は、黒い目をじっと姫の上にそそいでいました。姫は思わず、目を伏せました。と、驚いたことには、魚の尻尾がいつのまにか消えてしまって、可愛らしい人間の娘しか持っていないような美しい白い脚にかわっているではありませんか。姫はなんにも身につけていなかったので、長くてふさふさしている髪でからだをかくしました。王子は、あなたはだれか、どうしてここへきたのか、とたずねました。姫は、青い目でやさしく、けれども悲しそうに、王子を見あげるだけでした。口をきくことはもうできなかったからです。王子は姫の手をとって、御殿の中へつれてはいりました。ひとあし歩くごとに、魔女の言ったとおり、とがったきりと、鋭いナイフの上を踏んでいるような気がしました。けれども、姫はこの苦しみを喜んでがまんして、王子の手にひかれて、水のあわのようにかろやかに、階段をのぼって行きました。王子もほかの人々も、その可愛らしい、すべるような歩きかたに驚きの目を見はりました。（本文）

＊　＊

さて、人魚姫が、王子の御殿を仰ぎながら、りっぱな大理石の段の上にあがって行った時には、まだお日様はのぼっておらず、お月様が明るくあたりを照らしていました。これは、魔女が、「……おてんと様の上がらないうちに陸に泳ぎついて、それから、岸に上がって、その薬をお飲み」と言っていたが、それに間に合ったということである。そこで、人魚姫は、燃えるような強い薬を飲み干すと、まるで両刃の剣が、華奢なからだに突き刺さったような気がして、たちまち気が遠くなり、その場に死んだように倒れてしまいました。――これは、人間には強烈な「痛みや苦痛」などに耐えられる「許容範囲」というものがあり、それを遙かに超えてしまうと自動的に「電気のブレーカー」が落ちるように気を失って、その「痛みや苦痛」などを回避するようにできているのである。例えば、交通事故などの「激しい衝突」の時にも一時的に気を失うのは、そういうことである。

しばらくして、お日様の光が海の上を照らしはじめるころ、人魚姫は目をさましました。そして、からだにひりひりする痛みを感じました。ふとみると、目の前に、あの美しい若い王子が立っているではありませんか。王子は、黒い目をじっと姫の上にそそいでいました。人魚姫は思わず、目を伏せました。と、驚いたことには、魚の尻尾がいつのまにか消えてしまって、可愛らしい人間の娘しか持っていないような美しい白い脚にかわっているではありませんか。――これは、飲み薬が効いて、人魚の「尻尾」から人間の「二本の脚」へと「大変身」したということであり、しかも、人魚姫は、身に何も付けていなかったので、長くてふさふさしている髪でからだを隠しました。王子は、あなたはだれか、どうしてここへきたのか、とたずねました。これは、御殿の敷地内（大理石の所）にいたからであり、すると、人魚姫は、青い目でやさしく、けれども悲しそうに、王子を見あげるだけ

でした。それは、口をきくことはもうできなかったからです。

例えば、もし口がきけて話ができたとして、人間の言葉をしゃべることはでき得たのだろうか？　少なくとも王子の言葉は理解出来ているのであり、それゆえ、魔女に「舌」を抜かれなければ、王子ともふつうに会話が出来て、私こそ、王子の「命の恩人」なのよと告白できたのかも知れない。そうであれば、美しい人魚姫にとって、恋しい王子と不死の魂とを手に入れることは、それほど難しいことではなく、逆に、極めて簡単なことになってしまう。それを許さないのが魔女であり、魔女（或いは作者）は、人魚姫の「舌」を抜いて、直接「告白」できないようにし、しかも、王子が「両親を忘れてしまうほど」人魚姫を好きになり、また、心の底から「人魚姫のことばかり思う」ようにならなければならず、さらには、教会（神の前）で、お互いに「永遠の愛」を心の底から誓い合う神聖な「結婚式」を挙げることができ得た、その時だけ、人魚が人間の「不死の魂」を得ることができ得るとしたのであり、そうでなければ、不死の魂なんてものは、決してさずかるものではなく、それどころか、もし、王子がほかの女と結婚するようなことになれば、あくる朝、人魚姫の心臓は破裂して、人魚姫は海のあわになってしまうという、実に厳しい設定になっているのである。

それはともかく、王子は人魚姫の手をとって、御殿の中へ連れて入りました。ひとあし歩くごとに、魔女の言ったとおり、とがったきりと、鋭いナイフの上を踏んでいるような気がしました。けれども、人魚姫はこの苦しみを喜んでがまんして、（それは王子と一緒にいられるからであり）、王子の手にひかれて、水のあわのようにかろやかに、階段をのぼって行きました。王子もほかの人々も、その可愛らしい、すべるような歩きかたに驚きの目を見はりました、となるのである。

三一、王子の御殿での生活

さて、姫は、絹やモスリンの美しい着物をいただきました。御殿じゅうで、姫ほどきれいな者はいませんでした。けれども、可哀そうにおしですから、歌もうたえず、お話をすることもできません。絹や金で着飾った美しい女奴隷たちが出てきて、王子と王子のご両親の前で歌をうたいました。その中の一人は、とりわけいい声でうたいました。王子は手をたたいて、その女にほほえみかけました。人魚姫は、前だったら、もっと美しくうたえるのに、と思って、たいそう悲しくなりました。「……ああ、王子様！　わたしはあなたのおそばにいたいばかりに、わたしの声を永久に捨ててしまったのです。せめてそれだけでも、おわかりになっていただけたら！」と、姫は心の中で思うのでした。

こんどは、女奴隷たちが、すばらしい音楽にあわせて、あでやかな踊りをはじめました。そこで人魚姫も、美しい腕をあげて、つまさきで立ちながら、いままでだれ一人踊ったことのないくらい上手に、ゆかの上をすべるように踊りました。ひとふし舞うごとに、その美しさは、いよいよますばかりでした。また、姫の目は、女奴隷たちの歌よりも、もっと深く、人の心にしみとおりました。

人々はみな、うっとりと見とれていました。とりわけ王子は、姫が気に入って、「可愛い拾いっ子さん」とよびました。姫は、足がゆかにふれるたびに、鋭いナイフの上を踏むような気持ちでしたが、それでも、がまんして踊りつづけました。王子は姫に、いつまで

もそばにいるようにと言いました。そして、王子の部屋のそとのピロードのしとねで寝てよろしい、というお許しも出ました。（本文）

＊　＊

さて、王子の御殿での生活がいよいよ始まり、まず、人魚姫は、絹やモスリンの美しい着物をいただき、それを身に付けると、御殿じゅうで、姫ほどきれいな者はいませんでしたとなる。ところが、人魚姫は、哀そうにおしですから、歌もうたえず、お話をすることもできません。絹や金で着飾った美しい女奴隷たちが出てきて、王子と王子のご両親の前で歌をうたい、その中の一人は、とりわけいい声でうたいました。王子は手をたたいて、その女にほほえみかけました。（それを見ていた）人魚姫は、前だったら、もっと美しくうたえるのにと思って、たいそう悲しくなりました。「……ああ、王子様！　わたしはあなたのおそばにいたいばかりに、わたしの声を永久に捨ててしまったのです。せめてそれだけでも、おわかりになっていただけたら！」と、人魚姫は心の中で思うのでした。

これは、若しも前の「声を出せる自分」であったならば、王子と王子のご両親の前で、絹や金で着飾った美しい女奴隷たちよりももっともっと美しい声で歌をうたい、そして、王子や王子のご両親の「興味や関心或いは愛情」などを一身に集めることができ得たのにという想いであり、また、人魚姫は、生まれながらのおしではなく、理由あってのおしであり、そのこともぜひともわかってほしいと、人魚姫は心の中で思うのでした。

次に、今度は、女奴隷たちが、すばらしい音楽にあわせて、あでやかな踊りをはじめました。そこで人魚姫も、美しい腕をあげて、つまさきで立ちながら、今までだれ一人踊ったことのないくらい上手に、ゆかの上をすべるように踊りました。ひと節舞うごとに、その美しさは、いよいよ増すばかりでした。また、姫の目は、女奴隷たちの歌よりも、もっと深く、人の心にしみとおりました。

例えば、人魚姫は、哀そうにおしですから、歌もうたえず、お話をすることもできず、さらに、踊りもだめということになれば、唯一の「とりえ」は、ただかわいいということだけになってしまい、それでは他人（特に王子）の心を強くとらえることは出来にくい。そこで、歌は歌えなくても、その「踊り」は、今まで誰一人踊ったことのないくらい上手に、ゆかの上をすべるように踊り、ひと節舞うごとに、その美しさはいよいよ増すばかりとし、しかも、人魚姫の目は、女奴隷たちの歌よりも、もっと深く人の心に染み通るものでした。それによって、人々はみな、うっとりと見とれてしまい、とりわけ王子は、姫が気に入って、「可愛い拾いっ子さん」と呼ぶようになるのである。これは、王子の心を確実にとらえたということであり、だからこそ、王子は、人魚姫にいつまでもそばにいるようにと言い、しかも、王子の部屋のそとのピロードのしとねで寝てよろしい、というお許しまで得るのである。――ただ、人魚姫は、足がゆかにふれるたびに、鋭いナイフの上を踏むような気持ちでしたが、それでも、がまんして踊りつづけたということである。

＊　＊

また、「……王子は姫のために、男の服をこしらえさせて、馬で遠乗りのお供をさせました。ふたりは、かんばしいにおいのする森を通りました。みどりの枝が肩にふれ、小鳥がすがすがしい葉かげでさえずっていました。姫は王子と一緒に高い山にも登りました。かよわい足からは、誰の目にもつくほど血が出ましたが、それを見ても、姫はただほほえむばかりで、せっせと王子のうしろからついて行きました。とうとう、ふたりは頂上の雲

の上に出ました。雲は二人の足の下の方を、遠い見知らぬ国に行く鳥の群れのように飛んで行きました。――王子の御殿で、夜、人々が寝てしまいますと、姫は幅の広い大理石の段を降りて行って、燃えるような足を、冷たい海の水の中にひたしました。そうしていると、自然に深い海の底にいる、なつかしい人たちのことが思い出されてくるのでした。

そうしたある晩のこと、お姉さんたちが手をつないで海の上に出てきて、波まに浮かびながら悲しい歌をうたいました。姫が手まねきしますと、おねえさんたちの方でも、それに気がついて、口々に、下ではみんなが姫のいなくなったことをどんなに悲しがっているか、訴えるのでした。それからというものは、毎晩のように、おねえさんたちはたずねてきました。ある夜などは、もう何年も海の上に浮かんできたことのない、お年寄りのおばあ様と、頭に冠をかぶった人魚の王様の姿が、遠くに見えました。お二人とも、姫の方へ手をさしのばしましたが、おねえさんたちのように、陸に近よろうとはしませんでした」と続くのである。（本文）、

＊　＊

さて、今度は御殿の外の野外へと、王子は人魚姫のために、男の服をつくらせて、馬で遠乗りのお供をさせました。ふたりは、かんばしいにおいのする森を通って、みどりの枝が肩にふれ、小鳥がすがすがしい葉かげでさえずっているのを聞いたり、また、王子と一緒に高い山にも登り、足からは血が出ましたが、人魚姫は、ただほほえむばかりで、それは、王子と一緒にいられることが何よりも嬉しいのであり、それゆえ、せっせと王子のうしろからついて行きました。そして、人魚姫は、王子の御殿で、夜、人々が寝てしまいますと、（誰にも知られないように）、幅の広い大理石の段を降りて行って、燃えるような足を、冷たい海の水の中にひたして癒やすのでした。

そうしたある晩のこと、お姉さんたちが手をつないで海の上に出てきて、波まに浮かびながら悲しい歌をうたいました。人魚姫が手まねきをすると、お姉さんたちの方でも、それに気がついて、口々に、下ではみんなが姫のいなくなったことをどんなに悲しがり心配しているかを訴えるのでした。それからは毎晩のように、お姉さんたちはたずねて来ましたが、ある夜などは、もう何年も海の上に浮かんで来たことのない、お年寄りのおばあ様と、頭に冠をかぶった人魚の王様の姿が、遠くに見えました。（これは、当然のことながら、お二人とも人魚姫のことを心の底から心配しているのであり）、姫の方へ手をさしのばしましたが、お姉さんたちのように、陸に近よろうとはしませんでした。――それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、お姉さんたちに比べて、それだけ「人間世界」に対する警戒心がより強かったということである。

三二、王子の想いと人魚姫の想い

さて、王子は日一日と、姫が好きになりました。といっても、賢い、可愛らしい子供を可愛がるように、愛していたので、お妃にしようなどとは、すこしも思っていなかったのです。けれども、姫のほうでは、どうしても王子のお嫁さんにならなければなりません。さもないと、不死の魂が得られないばかりか、王子がほかのかたと結婚したあくる朝には、死んで海の上のあわにならなければなりません。――王子が人魚姫を腕に抱いて、その美しい額にキスをするとき、姫の目はこう言っているように思われました。「……王子様は

わたしを、だれよりも一番お好きではないの？」と、「……ああ、僕はおまえが一番好きだよ」と、王子は言いました。「……なぜなら、おまえはだれよりも心がすなおで、僕によくつかえてくれるもの。それに、おまえは、僕がいつか見たことのある、ある若い娘さんに似ているからさ。その娘さんには、きっともう会うことはないだろう」。（本文）

＊　＊

さて、ここは非常に「大事な場面」であり、それは、まさに「王子の想い」と「人魚姫の想い」とが「微妙に食い違っている」からであり、例えば、「……王子は日一日と、姫が好きになりましたが、しかし、それは、賢い、可愛らしい子供を可愛がるように愛していたのであり、それゆえ、お妃（きさき）にしようなどとは、少しも思っていなかったのです」。一方、人魚姫の方では、「……どうしても王子のお嫁さんにならなければなりません。そうでなければ、不死の魂が得られないばかりか、王子がほかのかたと結婚したあくる朝には、死んで海の上のあわにならなければならなかったからです」とある。そして、王子が人魚姫を腕に抱いて、その美しい額（ひたい）にキスをするとき、姫の目はこう言っているように思われました。「……王子様はわたしを、だれよりも一番お好きではないの？」と、「……ああ、僕はおまえが一番好きだよ」と、王子は言いました。「……なぜなら、おまえはだれよりも心がすなおで、僕によくつかえてくれるもの。それに、おまえは、僕がいつか見たことのある、ある若い娘さんに似ているからさ。その娘さんには、きっともう会うことはないだろう」と言うのでした。――つまり、王子が「心の底から愛しているのは、ただただ浜辺で出逢ったあの命の恩人と思い込んでいる若い娘さんだけだった」のである。それには、次のような「運命的な出来事」があったからである。

＊　＊

ある時、ぼくは船に乗っていたのだが、その船が難破して、僕はあるりっぱなお寺の近くの浜べに打ちあげられたのだ。そこには若い娘さんが大ぜいおつとめしていたが、そのうちの一番若い娘さんが、浜べに倒れている僕を見つけて、命を助けてくれたのだよ。そのひとを、僕はそのとき二度しか見なかったが、僕がこの世で一番いとしく思うのは、ただその娘さん一人きりだ。ところが、おまえはそのひとによく似ていて、僕の心の中にあるそのひとのおもかげを押しのけてしまいそうだよ。その娘さんはあのお寺に一生をささげたひとなのだ。それで幸福の神様が、そのかわりに、おまえを僕のところにおよこしになったんだ。だから、僕たち二人は、決して離れずにいようね、と言うのでした。

一方、人魚姫は、「……ああ、王子様は、わたしが命を助けてあげたことをご存じないのだわ！」と、人魚姫は心に思いました。「……わたしが海の上を、あのお寺のある森のところまで、王子様を抱いておつれしたのだわ。わたしは海のあわのかげにかくれて、だれか人間がこないかと、見ていたの。そこへ、王子様がわたしより好きだとおっしゃる、そのきれいな娘さんがきたんだわ」。人魚姫は深いため息をつきました。けれども、泣くことはできませんでした。「……その娘さんはお寺に一生をささげたからだと、王子様はおっしゃったわ。そんなら、もうこの世の中へは出てこられないのね。お二人は、もうお会いになれないのだわ。それなのに、わたしはおそばにいて、毎日お目にかかることができるのよ。わたしは、王子様のお世話をしてあげよう。王子様をお慕いしよう。そして、このわたしの命を喜んでささげよう！」と想うのであった。（本文）

＊　＊

三三、王子の結婚話

三三、王子の結婚話

ところが、そのうちに、王子は結婚することになったのです。なんでも、お隣りの国の王様の美しい姫君をお迎えになるという、うわさでした。そのため、すばらしくりっぱな船を仕立てなさったというのです。王子は、お隣りの国を見物するためということになっていましたが、ほんとうは、その国の姫君にお会いになるためでした。おともの人々も大ぜいきまりました。けれども、人魚姫は、頭をふってほほえむばかりでした。なぜなら、王子の心の中は、ほかのだれよりもよく知っているつもりでしたからです。「……旅に出なければならなくなったよ」と、姫に言いました。「……僕は美しい王女に会ってこなければならない。父上と母上のおいいつけだもの。でも、ぜひ、そのひとを僕のお嫁さんにして家につれてくるようにとは、おっしゃらない。僕がそのひとを愛するなんてことは、ありえないよ。なぜって、そのひとは、あのお寺で見た美しい娘さんに似ているはずがないもの。あの娘さんに似ているのは、おまえだけだよ。もし僕がいつか、お嫁さんを選ばなければならないとしたら、ねえ、もの言う目をした、かわいいおしの拾いっ子さん、僕はいっそ、おまえを選ぶよ！」と、こう言って王子は、姫の赤いくちびるにキスをしました。そして、姫の長い髪の毛をなでながら、姫の胸に顔を押しあてました。姫の心は、人間としての幸福と不死の魂とを夢みごこちに思いつめていました。（本文）

＊　＊

さて、突然、王子の結婚話が持ち上がることになる。それは、「……なんでも、お隣りの国の王様の美しい姫君をお迎えになるという、うわさでした。そのため、すばらしくりっぱな船を仕立てなさったということであり、王子は、お隣りの国を見物するためということになっていたが、ほんとうは、その国の姫君にお会いになるためでした。（つまり、お見合いをするためということである）。そして、おともの人々も大ぜいきまりましたが、人魚姫は、頭をふってほほえむばかりでした。なぜなら、王子の心の中は、ほかの誰よりもよく知っているつもりでしたから。――つまり、人魚姫は、「……王子は、命の恩人と思い込んでいるあの若い娘さんとしか結婚はしない」と、そう確信していたのである。ところが、まさかまさか、その「見合い相手」こそは、まさに「あの時の若い娘さん」であるとは、人魚姫にしてみれば、全く全然夢にすら想像すらでき得なかったことであり、だからこそ、人魚姫は、頭をふって（余裕を持って）ほほえむこともでき得たのである。

そして、王子は、「……旅に出なければならなくなったよ」と、人魚姫に言いました。「……僕は美しい王女に会ってこなければならない。父上と母上のおいいつけだもの。でも、ぜひ、そのひとを僕のお嫁さんにして家につれてくるようにとは、おっしゃらない。僕がそのひとを愛するなんてことは、ありえないよ。なぜって、そのひとは、あのお寺で見た美しい娘さんに似ているはずがないもの。あの娘さんに似ているのは、おまえだけだよ。もし僕がいつか、お嫁さんを選ばなければならないとしたら、ねえ、もの言う目をした、かわいいおしの拾いっ子さん、僕はいっそ、おまえを選ぶよ！」と、こう言って王子は、姫の赤いくちびるにキスをしました。姫の心は、人間としての幸福と不死の魂とを夢みごこちに思いつめていました。――さて、人魚姫にとって、この時ほど、この上もない「無上の喜び」というものをわが身を以って実感として感じていた時はなく、人魚姫の心は、まさに「……

人間としての幸福と不死の魂とを夢みごこちに思いつめていた」のである。

三四、りっぱな船の上で……

さて、王子は、「……ねえ、おしの拾いっ子さん、おまえはまさか、海をこわがりはしないだろうね！」と、いま、お隣りの国へ船出しようとする、りっぱな船の上に立って、人魚姫に言いました。そして、あらしのことや、なぎのことや、海の深いところにいる不思議な魚のことや、潜水夫が海の底で見る、珍しいもののことなどを、話して聞かせるのでした。姫は、王子の話を聞きながら、にっこりほほえみました。だって、海の底のことなら、姫は、だれよりもよく知っていたのですもの。

月の明るい夜、かじのところに立っている、かじ取りのほかは、みんな寝しずまっていたとき、姫は船ばたにすわって、すみきった水の中をじっと見つめていました。すると、お父様のお城が見えてくるような気がしました。お城のてっぺんに、銀の冠をかぶったおばあ様が立って、はげしい潮の流れごしに、船の竜骨（キール）をじっと見あげていました。そのとき、おねえさんたちが水の上へ浮かび上がってきました。そして、姫のほうを見ながら、白い手を悲しそうにもむのでした。姫はその方へ手をふって、ほほえみかけ、自分の日ごろの、仕合わせな暮らしのことを話そうとしました。ちょうどその時、船のボートが近づいてきましたので、おねえさんたちは水の中に姿を消してしまいました。ボーイの目には、何か白いものが映りましたが、たぶん水の上のあわだろうと思って、たいして怪しみもしませんでした。（本文）

＊　＊

さて、王子は、船の上で、「……ねえ、おしの拾いっ子さん、おまえはまさか、海をこわがりはしないだろうね！」と、いま、お隣りの国へ船出しようとする、りっぱな船の上に立って、人魚姫に言いました。そして、あらしのことや、なぎのことや、海の深いところにいる不思議な魚のことや、潜水夫が海の底で見る、珍しいもののことなどを、話して聞かせるのでした。姫は、王子の話を聞きながら、にっこりほほえみました。だって、海の底のことなら、姫は、誰よりもよく知っていたのですもの。――これは、非常に興味深い「内容」であり、王子は、まさか姫が「人魚」などとは露ほども知らなかったのであり、だからこそ、「……あらしのこと、なぎのこと、海の深いところにいる不思議な魚のこと、潜水夫が海の底で見る、珍しいもののことなどを、（いかにも得意げに）話して聞かせるのでした。人魚姫は、王子の話を聞きながら、（ただただもう）にっこりとほほえむしかないのであり、それは、海の底のことなら人魚姫は、誰よりもよく知っていたのですもの」となるのである。――これは、まさに「釈迦に説法」であり、現実の世の中でも実に頻繁にあることであり、例えば、その道を知り尽くしている人を相手に、浅薄な「知識や経験」などを基にして、いかにも（得意げに）最もらしく「説明や説教」などをしている姿であり、そのようなことは、特に若い時などには非常によくあることである。

さて、月の明るい夜、かじ取りのほかは、みんな寝しずまっていたとき、人魚姫は、船ばたにすわって、すみきった水の中をじっと見つめていると、お父様のお城が見えてくるような気がしたり、また、お城のてっぺんに、銀の冠をかぶったおばあ様が立って、はげしい潮の流れ越しに、船の竜骨（キール）（底）をじっと見あげていたが、そのとき、おねえさんた

ちが水の上へ浮かび上がってきて、人魚姫のほうを見ながら、白い手を悲しそうにもむのでした。これは、何か悪い知らせを持って来たのであるが、一方、人魚姫はその方へ手をふって、ほほえみかけ、自分の日ごろの、仕合わせな暮らしのことを話そうとしたが、ちょうどその時、船のボートが近づいて来たので、お姉さんたちは水の中に姿を消してそこでたちぎれになってしまったのである。

三五、ある国のお姫様

あくる朝、船はお隣りの国の美しい都の港（みなと）にはいりました。町じゅうの教会の鐘が鳴りわたり、高い塔からはラッパが吹きならされました。兵隊がひらひらする旗と、キラキラする銃剣を持ってならびました。そして、来る日も来る日も、お祝いがつづき、舞踏会と宴会が、入れかわり立ちかわりもよおされました。ところが、この国の姫君はまだ、姿をみせませんでした。人々の話によりますと、姫君はここからずっと遠くの、あるお寺で教育され、王女としてのいろいろな徳をおさめているとのことでした。その姫君が、とうとう帰ってきたのです。

人魚姫も、その美しい姫君を見たいものと、一心に立って見ていました。そして、なるほど、このような愛らしいかたはいままで見たことがないと、思わないわけにはいきませんでした。膚はきめがこまかく、すきとおるようで、長い黒いまつ毛の奥には、まごころのこもった、こい青い目がほほえんでいました。

「……おお、あなたです！」と、王子は叫びました。「……あなたです。僕が海岸で死んだように倒れていた時、助けてくださったのは！」、こう言って、王子は、顔をあからめている姫君を腕に抱きしめました。そしてこんどは人魚姫にむかって、「……ああ、僕はなんと幸福なんだろう！」と、言いました。「……僕が、とても実現すまいと、あきられていた願いが、かなったのだもの。おまえも、僕の幸福を喜んでくれるね。だれよりも一番、僕のことを思っていてくれるおまえだもの」。人魚姫は王子の手にキスしました。けれども、胸はいまにも張り裂けるようでした。そうです、王子のご婚礼のあくる朝は、死んで海の上のあわとならなければならない運命ですもの。（本文）

＊　＊

さて、あくる朝、船はお隣りの国の美しい都の港（みなと）にはいりました。町じゅうの教会の鐘が鳴りわたり、高い塔からはラッパが吹きならされました。そして、来る日も来る日も、お祝いがつづき、舞踏会と宴会が、入れかわり立ちかわり催されました。――これは、隣国同士の「王子と王女」との、いわば「世紀のお見合い」であり、それゆえ、来る日も来る日も、お祝いがつづき、舞踏会と宴会が、入れかわり立ちかわり催されるような、まさに国を挙げての一大祝賀ムードになっていたのである。ところが、この国の姫君はまだ、姿をみせず、人々の話によると、姫君はここからずっと遠くの、あるお寺（それは王子が浜辺で助けられた場所近くにあった修道院）で教育を受けて、王女としてのいろいろな徳をおさめているとのことであり、その姫君が、とうとう帰ってきたのでした。

一方、人魚姫も、その美しい姫君を見たいものと、一心に立って見ていました。これは、当然のことながら、一体、どのくらい美しいどのような姫君なのか？　ぜひとも見てみたいという心理であるが、それがまさかまさか「あの時の若い娘さん」だとは、恐らく、王

女にふさわしい盛装をしていたので、ちょっと見だけでは、また、あの時は、遠目から見ただけだったのですぐには分からず、だからこそ、「……なるほど、このような愛らしいかたは、いままで見たことがないと思わないわけにはいきませんでした。膚はきめがこまかく、すきとおるようで、長い黒いまつ毛の奥には、まごころのこもった、こい青い目がほほえんでいました」という感想になるのである。

一方、王子は、「……おお、あなたです！」と、叫びました。「……あなたです。僕が海岸で死んだように倒れていた時、助けてくださったのは！」、こう言って、王子は、顔をあからめている姫君（それは王子に恋心を抱いている証拠であるが、その姫君）を腕に抱きしめたのでした。――さて、ここで「熟慮」すべきことは、次のようなことである。まず、そもそもこの「お見合い」は、一体、どちら側から持ち込まれた話かと問えば、それは、王子側ではなく、むしろ隣国の「姫君」側からであり、それは、「……浜辺で死んだように倒れている王子を見て、最初は驚いたが、すぐに人を呼ぶとともに、その美しい王子に心奪われてしまったのである」。つまり、まさに「一目惚れ」に深く陥ってしまったのである。それは、一方の「王子」も全く同じであり、それゆえ、二人は、まさに同時に「一目惚れ」に深く陥ってしまい、二人は、その時以来、まさに「相思相愛」（想い想われる関係）になってしまったのである。そして、その話を姫君から聞いた隣国の国王は、王子側の国王にこの話を持ちかけて、今回の「お見合い」（つまりは結婚話）になったということである。

さて、王子は、（嬉しさのあまり）、人魚姫に向かって、「……ああ、僕はなんと幸福なんだろう！」といい、また、「……僕が、とても実現すまいと、あきられていた願いが、かなったのだもの。おまえも、僕の幸福を喜んでくれるね。だれよりも一番、僕のことを思っていてくれるおまえだもの」と言われて、人魚姫は、（仕方なく）王子の手にキスをしましたが、しかし、その胸はいまにも張り裂けるようでした。そうです、王子のご婚礼のあくる朝は、死んで海の上のあわとならなければならない運命だったからです。

三六、王子の結婚式

さて、教会という教会の鐘が鳴りわたり、おふれ役が町に馬をはしらせて、ご婚礼をふれまわりました。祭壇という祭壇には、とうとい銀のランプに、かおりのよい油が燃やされました。坊さんたちが香炉をふり、花嫁と花婿とは、お互いに手を握りあって、僧正（そうじょう）の祝福をうけました。絹と金とで着飾った人魚姫は、花嫁の長いすそをささげていましたが、お祝いの音楽も耳にはいらず、おごそかな式も目に映りません。ただ、まっ暗な死のやみのことを思い、この世で失ってしまったすべてのことを思いつづけていました。

その日の夕方のうちに、花嫁と花婿は船に乗りこみました。大砲がとどろき、数しれぬ旗が風にひるがえりました。船のまん中に、金と紫の王様の天幕がはなれ、この上もなく美しい、しとねがもうけられました。ここで、お二人は、静かな、涼しい夜をおすごしになるのでした。――帆は風をはらんでいっぱいにふくらみ、船は澄みきった海の上を、軽やかに、あまりゆれもせずに、すべって行きました。（本文）

＊　＊

さて、隣国同士の王子と王女の結婚式は、「……教会という教会の鐘が鳴りわたり、お

ふれ役が町に馬をはしらせて、ご婚礼をふれまわりました。祭壇という祭壇には、とうとい銀のランプに、かおりのよい油が燃やされて、坊さんたちが香炉をふり、花嫁と花婿とは、お互いに手を握りあって、僧正の祝福をうけました。――一方、絹と金とで着飾った人魚姫は、花嫁の長いすそをささげていましたが、お祝いの音楽も耳にはいらず、おごそかな式も目に映らず、ただ、まっ暗な死のやみのことを思い、この世で失ってしまったすべてのことを思いつづけていました。――つまり、隣国へ来る前までは、人魚姫の心は、まさに「……人間としての幸福と不死の魂とを夢みごこちに思いつめていた」状態であった「精神状態」から、一気に、「……まっ暗な死のやみのことを思い、この世で失ってしまったすべてのことを思い続ける」ような「精神状態」に深く陥ってしまったのである。

その日の夕方のうちに、花嫁と花婿は、大きな船に乗りこみました。大砲がとどろき、数しれぬ旗が風にひるがえりました。船のまん中に、金と紫の王様の天幕がはなれ、この上もなく美しい「しとね」（座ったり寝たりする敷物）がもうけられました。ここで、お二人は、静かな、涼しい夜をお過ごしになるのでした。――帆は風をはらんでいっぱいにふくらみ、船は澄みきった海の上を、軽やかに、あまりゆれもせずに、すべって行くのでした。

三七、船の上でのパーティー

やがて、あたりが暗くなりますと、色とりどりのランプがともされ、水夫たちが甲板でにぎやかにダンスをはじめました。人魚姫は、はじめて海の上に浮かび出てきたときのことを、思い出さずにはいられませんでした。あの晩も、いま目の前に見えているような、はなやかなお祝いの喜びに、人々はわき立っていたのです。やがて、姫もダンスの仲間にはいって、ぐるぐる踊りはじめました。まるで何かに追われているツバメのように、身をひるがえしながら、踊りました。人人はみな、手をたたいて、ほめそやしました。ほんとうに、こんなにすばらしく踊ったことは、姫にもいままでになかったことでした。姫のかよわい足は、鋭いナイフで突き刺されるようでした。けれども、その痛みはすこしも気になりませんでした。それよりも、心を突き刺すような痛みのほうが、ずっとずっとこたえました。王子を見るのも、こよい一夜かぎりです。王子のために、姫は家族を捨て、故郷を捨て、美しい声までも捨てて、毎日、かぎりない苦しみを忍んできたのです。でも、王子は、このことを夢にも知りません。王子と同じ空気を吸うのも、深い海や星あかりの夜空をながめるのも、今夜かぎりとなりました。魂をもっていない、そして、いまではもう、その望みもなくなった人魚姫を待ちうけているのは、考えるということもない、夢をみるということもない、永久のやみ夜ばかりです。船の上は、夜なかすぎまで、にぎやかな、たのしみがつづいていました。姫は、心には死を思いながら、顔にほほえみを浮かべて、踊りに踊りました。王子は美しい花嫁にキスをし、花嫁は王子の黒い髪をなでました。そして、お二人は手に手をとって、りっぱな天幕の中へはいって、おやすみになりました。

（本文）

＊　　＊

さて、やがて、あたりが暗くなると、色とりどりのランプがともされ、水夫たちが甲板でにぎやかにダンスをはじめました。人魚姫は、はじめて海の上に浮かび出てきたときの

ことを、思い出さずにはいられませんでした。あの晩も、いま目の前に見えているような、はなやかなお祝いの喜びに、人々はわき立っていたのです。――それは、十五歳（の誕生日）になった人魚姫は、海の上に浮かび上がることが許されて、はじめて海の上に浮かび出てきた時に、最初に目にしたのが、まさに（十五か十六歳になった）王子の誕生日を祝う人々のにぎやかな音楽やダンスの祝宴だったのである。

やがて、人魚姫もダンスの仲間にはいって、ぐるぐる踊りはじめました。まるで何かに追われているツバメのように、身をひるがえしながら、踊りました。人人はみな、手をたたいて、ほめそやしました。ほんとうに、こんなにすばらしく踊ったことは、人魚姫にも今までになかったことでした。人魚姫のかよわい足は、鋭いナイフで突き刺されるようでした。けれども、その痛みはすこしも気になりませんでした。それよりも、心を突き刺すような痛みのほうが、ずっとずっとこたえました。王子を見るのも、こよい一夜かぎりです。王子のために、人魚姫は家族を捨て、故郷（ふるさと）を捨て、美しい声までも捨てて、毎日、かぎりない苦しみを忍んできたのです。（それもこれも、王子と不死の魂を得るためであったが、その夢は完全に消え失せてしまったのです）。もちろん、王子は、このことを夢にも知りませんでした。王子と同じ空気を吸うのも、深い海や星あかりの夜空をながめるのも、今夜かぎりとなりました。魂をもっていない、そして、いまではもう、その望みもなくなった人魚姫を待ちうけているのは、考えるということもない、夢をみるということもない、永久のやみ夜ばかりです。船の上は、夜なかすぎまで、にぎやかな、たのしみがつづいていました。人魚姫は、心には死を思いながら、顔にはほほえみを浮かべて、踊りに踊りました。（そうする以外しようがなかったのです）。一方、王子は美しい花嫁にキスをし、花嫁は王子の黒い髪をなでました。そして、お二人は手に手をとって、りっぱな天幕の中へ入って、おやすみになるのでした。

三八、ふと波間（ま）におねえさんたちが……

やがて、船の中は、ひっそりとなりました。かじ取りだけが、かじのところに立っているだけです。人魚姫は、白い腕を船の手すりにかけて、東の空が赤らんでくるのを見つめていました。お日様のさいしょの光が、姫にとっては、とりもなおさず、死の使いであることを、姫はよく知っていたのです。その時、ふと、おねえさんたちが波間（ま）に浮かび上がって来るのが見えました。みんなも姫と同じように、青ざめていました。しかも、長い美しい髪の毛は、いつものように風になびいていないで、ぷっつりと根元から切り落とされているではありませんか。（本文）

＊　＊

さて、やがて、船の中はひっそりとなって、かじ取りだけがかじのところに立っているだけでした。――人魚姫は、白い腕をその船の手すりにかけて、東の空が赤らんで来るのを見つめていました。お日様の「最初の光」が、人魚姫にとっては、取りも直さず、まさに「死の使い」であることを、人魚姫はよく知っていたのです。その時、ふと、おねえさんたちが波間（ま）に浮かび上がって来るのが見えました。みんなも人魚姫と同じように、青ざめていました。しかも、長い美しい髪の毛は、いつものように風になびいていないで、ぷっつりと根元から切り落とされているではありませんか。――これは、人魚姫を救いたい

がためのの行為だったのである。

三九、お姉さんたちの想い

「……わたしたちは、髪の毛を魔女にやってしまったのよ。あなたを今夜死なせないように、魔女に助けをかりにいったの。そうしたら、わたしたちに短刀をわたしてくれたの。ほら、これがそうよ。ずいぶん鋭いでしょう。お日様がのぼらないうちに、あなたは王子の心臓を、これで刺さなければいけないのよ。王子の暖かい血が、あなたの足にかかると、あなたの足はまた、いっしょにくっついて魚の尻尾になって、あなたはまた、もとの人魚にもどれるのよ。そうしたら、またわたしたちのところへおりてこられるのよ。そして、死んで海のあわになるまで、あなたは三百年も生きながらえていられるんだわ。さあ、早く！　早く！　王子か、でなければあなたが、お日様ののぼらないうちに死ななければいけないのよ！　おばあ様も、それは心配なさって、しらががすっかりぬけてしまったわ。ちょうど、わたしたちの髪の毛が魔女のはさみで切られてしまったように。思いきって王子を殺して、帰っていらっしゃい！　さあ、早く！　ほら、空がほんのりと、明るんできたじゃないの。もうじき、お日様がのぼるのよ。そうしたら、あなたは死ななければならないのよ！」、こう言うと、おねえさんたちは、深い深いため息をついて、波間に沈んでしまいました。（本文）

＊　　＊

さて、最後の最後になって、人魚姫が生き残れる「最後のチャンス」が到来したということであり、そのためには、「……お日様がのぼらないうちに、あなたは王子の心臓を、これで刺さなければいけないのよ。王子の暖かい血が、あなたの足にかかると、あなたの足はまた、いっしょにくっついて魚の尻尾になって、あなたはまた、もとの人魚にもどれるのよ。そうしたら、またわたしたちのところへおりてこられるのよ。そして、死んで海のあわになるまで、あなたは三百年も生きながらえていられるんだわ。さあ、早く！　早く！　王子か、でなければあなたが、お日様ののぼらないうちに死ななければいけないのよ！」という、まさに「究極の選択」を迫られているのである。

それでは、なぜ、人魚姫はこのような「最後のチャンス」が与えられたのだろうか？

それは、人魚姫が「王子」を助けなければ、王子は確実に死んでいたのである。つまり、もともと「死ぬ運命」であった「王子の生命」を人魚姫が無理やり助け出したのである。それは、まさに「自然の摂理」に反する行為であり、それゆえ、王子は死ぬことによって、本来の「死ぬ運命」であった「自然の摂理」に戻ることになり、それによって、魔法も解けて、人魚姫も、元の「人魚の姿」へと戻ることになるのである。それは、「……王子の暖かい血が、あなたの足にかかると、あなたの足はまた、いっしょにくっついて魚の尻尾になって、あなたはまた、もとの人魚にもどれるのよ」となるのである。

四十、王子の寝ている所へ……

人魚姫は、天幕の紫いろのカーテンを引きあけました。なかには、美しい花嫁が王子の胸に頭をもたせて眠っていました。人魚姫は身をかがめて、王子の美しい額にキスをし

ました。空を仰ぐと、あけぼのの色がだんだん明るくなってきます。姫は鋭い短刀をじっと見つめては、また王子の上に目をこらしました。その時王子は夢の中で花嫁の名をよびました。王子の心の中にあるのは、花嫁一人だけだったのです。人魚姫の手の中で、短刀が、ぶるっ、ぶるっと震えました。――と、その瞬間、姫は短刀を遠く海の中へ投げ捨てました。すると、短刀の落ちたあたりが赤く光って、まるで、血のしずくが水の中から、あわ立って出てくるように見えました。早くも、半ばかすんできた目を、もう一度王子の上にむけたかと思うと、姫は身をおどらせて海の中へ飛びこみました。と、自分のからだがとけて、あわになって行くのが感じられました。（本文）

＊　　＊

さて、人魚姫は、生き残れる最後のチャンスとして、王子の寝ている所へと行き、そして、「……天幕の紫いろのカーテンを引きあけると、なかには、美しい花嫁が王子の胸に頭をもたせて眠（ねむ）っていたので、人魚姫は身をかがめて、王子の美しい額（ひたい）にキスをしました」とある。――だとすれば、それは、今なお「王子」への想いは強くあるとともに、最後の「別れのキス」でもあったのかも知れない。そして、空を仰ぐと、あけぼのの色がだんだん明るくなってきていて、姫は鋭い短刀をじっと見つめては、また王子の上に目をこらしました。すると、「……その時、王子は夢の中で花嫁の名をよびました。王子の心の中にあるのは、花嫁一人だけだったのです」とある。――これは、決定的な場面であり、もし、「……王子の心の中にあるのは、花嫁一人だけである」ならば、人魚姫は、恋しい王子も不死の魂も永遠に得ることはでき得ないのであり、それゆえ、「……人魚姫の手の中で、短刀が、ぶるっ、ぶるっと震えました」が、それに加えて、これは、王子を殺さなければ、自分は生きられないが、しかし、愛する王子を殺すことにもためらいが生じているのであり、すると、「……その瞬間、姫は短刀を遠く海の中へ投げ捨てました」とあるが、これは、結局、王子の「愛」が得られないならば、人魚姫は、この世に生きている意味を失ってしまうのであり、なぜなら、人魚姫の心の底からの「願い」は、恋しい王子と不死の魂を得ることであり、その両方が永遠に得られないならば、この世に生きている意味もなくなり、だからこそ、「王子」の死よりも、自分の「死」を選んだのである。すると、「……短刀の落ちたあたりが赤く光って、まるで、血のしずくが水の中から、あわ立って出てくるように見えました。早くも、半ばかすんできた目を、もう一度王子の上にむけたかと思うと、姫は身をおどらせて海の中へ飛びこみました。と、自分のからだがとけて、あわになって行くのが感じられました」となるのである。

＊　　＊

四一、空気の娘たちのところへ

四一、空気の娘たちのところへ

その時、お日様が海からのぼりました。その光は、死のように冷たい海のあわを、おだやかに暖かく照らしました。人魚姫はすこしも死んだような気がしませんでした。キラキラ光るお日様の方を仰ぎますと、なか空に、幾百となく、すきとおった美しいものが漂っていました。それをすかして、むこうに船の白い帆や空の赤い雲が見えました。そのすきとおった美しいものたちの声は、そのまま美しい音楽でした。けれども、そのきよらかな音楽は、魂の世界のもので、人間の耳には聞こえません。ちょうど人間の目が、その姿を見ることができないように、翼がなくても、空気のように軽いからだは、ひとりでに空中に浮かんでいるのでした。人魚姫は、自分のからだも同じように軽くなって、あわの中からぬけ出て、だんだん上の方へのぼって行くのに気がつきました。（本文）

＊　＊

さて、海に身を投げた人魚姫であったが、「……人魚姫はすこしも死んだような気がしませんでした」とある。それは、「……なか空に、幾百となく、すきとおった美しいものが漂っていて、そのすきとおった美しいものたちの声は、そのまま美しい音楽でしたが、そのきよらかな音楽は、魂の世界のもので、人間の耳には聞こえませんでした。それは、ちょうど人間の目には、その姿を見ることができないように、翼がなくても、空気のように軽いからだは、ひとりでに空中に浮かんでいるのでした。人魚姫は、自分のからだも同じように軽くなって、あわの中からぬけ出て、だんだん上の方へのぼって行くのに気がつきました」とある。――つまり、人魚姫は、完全には消滅していなかったのである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、結局、「……よいことをしてきた」からであり、それを後述の本文で見てみると、「……あなたも、わたしたちと同じように、まごころをつくして、おつとめになりましたのね！　そして、ずいぶん苦しんだり、しんぼうなさったりして、いま、空気の精の世界へのぼっていらっしゃったのですよ」となるのである。

四二、空気の娘たちとは何か？

「……わたしはどこへ行くのでしょう？」と、姫は言いました．その声は、もう、あたりに漂っているものの声と同じで、この世のどのような音楽も、およばない、不思議な響きを持っていました。「……空気の娘たちのところへですよ！」と、みんなが答えました。「……人魚の娘には不死の魂というものはありません。人間の愛を得なければ、決してそれを持つことはできないのです。ですから、永遠の命をさずかろうと思うならば、ほかのものの力に、たよらなければならないのです。わたしたち空気の娘も、やはり不死の魂を持っていません。けれども、よい行いをすると、それがさずかるのです。わたしたちは、むし暑い、毒気で人が死ぬような暑い国へとんでいって、涼しい風を吹かせてあげるのです。また、花のかおりを空中にふりまいて、すがすがしいさわやかな気分を送ってあげるのです。こういうふうにして、三百年のあいだ、わたしたちにできるだけの、よいことをするようにつとめますと、ついに不死の魂をさずかって、人間の永遠の幸福にあずかることができるのです。可愛そうな人魚姫さん、あなたも、わたしたちと同じように、まごころをつくして、おつとめになりましたのね！　そして、ずいぶん苦しんだり、しんぼうな

さったりして、いま、空気の精の世界へのぼっていらっしゃったのですよ。これからよい行いをなされば、三百年ののちには、不死の魂があなたにもさずかりますよ」と言うのでした。（本文）

＊　＊

さて、人魚姫は、「……わたしはどこへ行くのでしょう?」と聞くと、「……空気の娘たちのところへですよ！」と、みんなが答えました。そして、「……人魚の娘には不死の魂というものはありません。人間の愛を得なければ、決してそれを持つことはできないのです。ですから、永遠の命をさずかろうと思うならば、ほかのものの力にたよらなければならないのです。わたしたち空気の娘も、やはり不死の魂を持っていません。けれども、よい行いをすると、それがさずかるのです。――例えば、わたしたちは、むし暑い、毒気で人が死ぬような暑い国へとんでいって、涼しい風を吹かせてあげるのです。また、花のかおりを空中にふりまいて、すがすがしいさわやかな気分を送ってあげるのです。こういうふうにして、三百年のあいだ、わたしたちにできるだけの、よいことをするようにつとめますと、ついに不死の魂をさずかって、人間の永遠の幸福にあずかることができるのです。可愛そうな人魚姫さん、あなたも、わたしたちと同じように、まごころをつくして、おつとめになりましたのね！　そして、ずいぶん苦しんだり、しんぼうなさったりして、いま、空気の精の世界へのぼっていらっしゃったのですよ。これからもよい行いをなされば、三百年ののちには、不死の魂があなたにもさずかりますよ」と言うのでした。

四三、人間の不死の魂を得るには……

人魚姫は、すきとおった両腕をお日様の方へ高くあげました。その時はじめて、姫は涙というものを感じました。――船の中が、また騒がしくなりました。王子が美しい花嫁といっしょに、人魚姫を捜しているのが見えました。お二人は、姫が波の中に身を投げたことを知ってでもいるように、波の上に漂っているあわを悲しそうに見つめています。人魚姫は、人の目に見えないように、花嫁の額（ひたい）にキスをし、王子にもにっこりとほほえみかけると、空気の娘たちといっしょに、いましも空高く流れてきた、バラ色の雲の方へと、のぼってゆきました。

そして、人魚姫は、「……では、三百年たったら、わたしたちも神様のお国へのぼって行けますのね」と言いました。「……もっと早く、行けるかもしれませんよ」と、空気の精のひとりがささやきました。「……わたしたちはよく、人に見られないで、子供のいる、人間の家の中へはいって行くんですよ。その時、両親を喜ばせ、両親に可愛がられているよい子を見つけますと、その一日だけ、神様はわたしたちの、こころみの時を短くしてくださるのです。その子にはわたしたちが、いつ部屋の中を飛んでいるか、わからないのです。けれども、わたしたちは、うれしさのあまり、そういう子に、ついにっこりとほほえみかけてしまいます。すると、三百年のうちから一年へらされるのです。もし、お行儀のわるい、いけない子供を見ると、つい悲しくて泣き出してしまいます。そうすると、涙のこぼれるたびに、こころみの時が一日ずつ、ふえてゆくのです」と言うのでした。（完）

＊　＊

さて、人魚姫は、すきとおった両腕をお日様の方へ高くあげました。その時はじめて、「……姫は涙というものを感じました」とある。――これは、人間には「涙」があり、一方、「半人半魚」には（人間のような）「涙」はないということからすれば、人魚姫は、「人間の魂」を少しばかり持ち始めているのかも知れない。そして、「これからもよい行いをすれば、三百年ののちには、不死の魂があなたにもさずかりますよ」ということである。

そして、船の中が、また騒がしくなりました。王子が美しい花嫁といっしょに、人魚姫を捜しているのが見えました。お二人は、姫が波の中に身を投げたことを知ってでもいるように、波の上に漂っているあわを悲しそうに見つめています。人魚姫は、人の目に見えないように、花嫁の額（ひたい）にキスをし、王子にもにっこりとほほえみかけると、空気の娘たちといっしょに、いましも空高く流れてきた、バラ色の雲の方へと、のぼってゆきました」とある。――これは、王子と王女の「結婚」（つまりは「二人の結びつき」）を心から祝福しているのであり、人魚姫は、「王子」への想い（恋心）から解放されて、今度は、「……空気の娘たちといっしょに、いましも空高く流れてきた、バラ色の雲の方へと、のぼってゆきました」となるのである。

そして、人魚姫は、「……では、三百年たったら、わたしたちも神様のお国へのぼって行けますのね」と言いました。「……もっと早く、行けるかもしれませんよ」と、空気の精のひとりがささやきました。「……わたしたちは、よく人に見られないで、子供のいる人間の家の中へはいって行くんですよ。その時、両親を喜ばせ、両親に可愛がられているよい子を見つけますと、その一日だけ、神様はわたしたちの、こころみの時を短くしてくださるのです。その子にはわたしたちが、いつ部屋の中を飛んでいるか、わからないのです。けれども、わたしたちは、うれしさのあまり、そういう子に、ついにっこりとほほえみかけてしまいます。すると、三百年のうちから一年へらされるのです。もし、お行儀のわるい、いけない子供を見ると、つい悲しくて泣き出してしまいます。そうすると、涙のこぼれるたびに、こころみの時が一日ずつ、ふえてゆくのです」と言うのでした。

＊　＊

これらは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、「空気の娘たち」という存在は、何よりも「よい行いをする」ことが最も大事なことであり、それゆえ、「……両親を喜ばせ、両親に可愛がられているよい子を見つける」というのは、すなわち、「……よいことが行なわれている状態である」ということになり、それゆえ、「……神様は、わたしたちのこころみの時を一日短くしてくださる」のであり、一方、「……お行儀のわるい、いけない子供を見ると、つい悲しくて泣き出して、涙がこぼれてしまう」ということは、逆に、「……よいことが行なわれていない状態である」ということになり、それゆえ、「……涙をこぼすたびに、こころみの時が一日ずつふえてしまう」のである。

つまり、「空気の娘たち」というのは、何よりも「よい行いをする」ことが最も大事なことであって、それゆえ、「……わたしたちは、うれしさのあまり、そういう子に、ついにっこりとほほえみかけてしまいます。すると、三百年のうちから一年減らされること」になるが、その「……（思わず）にっこりとほほえみかけること」が、すなわち、何よりも「よい行い」であり、逆に、「……いけない子供を見ると、つい悲しくて泣き出してしまうこと」が、すなわち、「よい行い」ではなく、そのような時には、「……泣くのではなくて、にっこりとほほえみかけて、その子を笑顔にすることがよい行いになる」のであ

り、そのように「……三百年のあいだ、わたしたちにできるだけの、よいことをするようにつとめますと、ついに不死の魂をさずかって、人間の永遠の幸福にあずかることができるのです。あなたも、わたしたちと同じように、まごころをつくして、おつとめになりましたのね、そして、ずいぶん苦しんだり、しんぼうなさったりして、いま、空気の精の世界へのぼっていらっしゃったのですよ。これからもよい行いをなされば、三百年ののちには、不死の魂があなたにもさずかりますよ」ということであり、その「三百年」という年数も、絶対年数ではなく、「……よいことを行なうというまごころからの努力とその成果」に応じて、長くなったり短くなったりするという「流動性がある」ということである。

＊　　＊

それでは、最後の問題として、なぜ、王子と人魚姫は、いわゆる「結婚」（結ばれなかった）のかと敢えて問えば、それは、次のようなことであり、つまり、人魚姫は、海の魔女の「魔法」の力を借りて、無理やり「人間の姿」となり、そして、王子の心と不死の魂を得ようとしたのであるが、それは、やはり「自然の摂理」（或いは「神の摂理」）に反する行為であり、それゆえ、結局、二人は「結婚」（結ばれること）はでき得なかったが、しかし、人魚姫は、海で溺れ死ぬところの王子を必死に助け出し、また、王子を殺すか、自分を殺すかの時に、二度までも「王子の生命（いのち）」を助けたという「よい行い」によってこそ、海のあわとなって永遠に消滅するのではなく、空気の精の世界へとのぼっていき、そして、これからもよい行いを積み重ねれば、三百年ののちには、（人魚姫の心からの願いであった）「不死の魂」があなたにもさずかりますよ」という展開になっているのである。

＊　　＊

裸(はだか)の王様

（皇帝の新しい着物）

裸（はだか）の王様

一、昔、着物の大好きな王様がおりました

むかし、むかし、たいへん着物のお好きな王様がおりました。この方は、美しい新しい着物が、それはそれは大好きで、持っているお金はみんな着物にかけて、いつもきれいに着飾っていました。そして、ご自分の新しい着物を見せびらかす時以外には、兵隊のことも、芝居のことも、また、森へ馬車で遠乗りすることも、いっさい気にかけたことはありませんでした。そして、一日中、一時間毎（ごと）に、お召しかえをなさるのです。よく、よその国で、王様は会議にお出ましです、と言うところを、この国では、いつも「王様は衣裳部屋（いしょうべや）にいらっしゃいます」と言うのでした。――（本文）

＊　＊

さて、冒頭の文章は、「……むかし、むかし、たいへん着物のお好きな王様がおりました。この方は、美しい新しい着物が、それはそれは大好きで、持っているお金はみんな着物にかけて、いつもきれいに着飾っていました」とある。――まず、昔々（むかしむかし）、着物の大好きな王様がいて、その王様は、古い着物ではなくて、それは、美しい「新しい着物」が何よりも大好きであり、それゆえ、「……持っているお金は、みんな（新しい）着物を手に入れるためにかけて、その手に入れた新しい着物を着て、いつも綺麗（きれい）に着飾っていた」ということである。それは、一体、何のためかと問えば、それは、自分の「新しい着物」をみんなに見せびらかして、その「新しい着物」をみんなにほめてもらうことが何よりも大好きだったということである。そして、それ以外の、例えば、「……兵隊のことも、芝居のことも、また、森へ馬車で遠乗りすることも、いっさい気にかけたことはありませんでした」とある。つまり、「新しい着物」の事以外のことには何らの「興味も関心」も全く示さなかったということである。そして、「……一日中、一時間毎（ごと）に、お召しかえをなさるのです」とある。――だとすれば、毎日、何十着という「新しい着物」が必要になるとともに、よく、よその国で、王様は会議にお出ましです、と言うところを、この国では、いつも「王様は衣裳部屋（いしょうべや）にいらっしゃいます」ということになるのです。……そして、そのような王様の異常なほどの「着物好き」につけ込んで、二人の「詐欺師」が、この町へとはるばるやって来るという展開になるのである。

二、二人のさぎ師が町にやって来る

さて、王様のお住まいになっている大きな町は、たいそう賑（にぎ）やかなところで、毎日、よその国の人がたくさんやってきました。ある日のこと、二人のいかさま師がこの町へやってきました。二人は、機織（はたお）り職人だと名乗って、自分たちは、想像も及ばないほど美しい織物（布地（ぬのじ））をおることができる。しかも、その織物（布地（ぬのじ））は、ただ色や柄（がら）が、なんとも言えず美しいばかりでなく、それでつくった着物は世にも不思議な性質を持っていて、誰でも自分の地位にふさわしくない者や、手におえないばか者には、それが見えない、と言いふらしました。――それを聞いて、「……なるほど、それは面白い着物だわい」と、王様はお考えになりました。そして、「……そういう着物をこのわしが着たら、この国の、

どの役人がその地位にふさわしくないか、探ることができようというものじゃ。また、だれが利口かばかか、区別することもできるわけだ。そうだ、さっそく、その織物（布地）を織らせにゃならん」と考えるのであった。そこで、二人のいかさま師にお金をたっぷりわたして、さっそく、仕事に取りかかるようにお言いつけになりました。（本文）

＊　＊

さて、本文であるが、「……王様のお住まいになっている大きな町は、たいそう賑やかなところで、毎日、よその国の人がたくさんやって来ました。ある日のこと、二人のいかさま師がこの町へやって来ました」とある。――まず、この二人の「いかさま師」（詐欺師）たちは、当然のことながら、この町の王様は「着物が何より大好き」という噂を聞いていて、「……それじゃ、それで一儲けしようか」と、はるばるやって来たのである。

そして、「……二人は、機織り職人だと名乗って、自分たちは、想像も及ばないほど美しい織物（布地）をおることができ、しかも、その織物（布地）は、ただ色や柄が、なんとも言えず美しいばかりでなく、それでつくった着物は、世にも不思議な性質を持っていて、誰でも自分の地位にふさわしくない者や、手におえないばか者には、それが見えない、と言いふらしました」と続くのである。

＊　＊

まず、「いかさま師」（詐欺師）というのは、相手の「弱み」につけ入るのが、まさに「常道」であり、例えば、「オレオレ詐欺」というのは、自分の「息子や孫」などが、何らかの理由で「金に困っている」、それゆえ、何とかしてやらなければいけないという、そういう「親心や人情」などの「弱み」につけ込んで、多額の金をだまし取るという手口であり、また、「結婚詐欺」というのは、一般に、結婚したいと（切に）望んでいる「女性」（或いは「男性」）の、その「弱み」につけ入って、それに近づき、そして、見た目も多彩に飾り立てるのをはじめ、いかにも魅力的な「……職業、社会的地位、高収入、高学歴、高キャリア、その他」、また、写真などを見せて、いろいろな有名人や著名人とも面識があるなどと大うそをついて、相手を信用させた上で、多額の金やその他などをだまし取るという手口になるかと思う。――つまり、「……お金が欲しい、女性（男性）が欲しい、また、何かで金儲けしたい、健康になりたい、もっとやせたい、きれいになりたい、有名になりたい、その他」、何であれ、そのような実に様々な相手の「弱み」などにつけ入るのが、まさに「詐欺」という行為の「本質」そのものになるのである。

＊　＊

それはともかく、この「裸の王様」では、「……二人は、機織り職人だと名乗って（大うそをついて）、自分たちは、想像も及ばないほど美しい織物（布地）をおることができ、しかも、その織物（布地）は、ただ色や柄が、なんとも言えず美しいばかりでなく、それでつくった着物は、世にも不思議な性質を持っていて、誰でも自分の地位にふさわしくない者や、手におえないばか者には、それが見えない、と言いふらしました」とある。

さて、ここで最も大事なことは、ただ単に「……想像も及ばないほど美しい織物（布地）をおることが出来る」だけではなく、それに加えて、「……それでつくった着物は、世にも不思議な性質を持っていて」、一つは、誰でも「……自分の地位にふさわしくない者」には見えないとともに、もう一つは、「……手におえないばか者にも、それは見えない」ということであり、しかも、それを町じゅうに「言いふらした」ことによって、誰もがそ

れらのことを知ることになるのである。
そして、それを聞いて、王様は、「……なるほど、それは面白い着物だわい」と、お考えになるが、その「理由」としては、「……そういう着物をこのわしが着て、相手にわしの着物が見えるか見えないかで、この国の、どの役人がその地位にふさわしいか、ふさわしくないかを、探ることができるとともに、また、だれが利口かばかか、区別することもでき得る」と考えて、そこで、「……その織物（布地）をぜひとも織らせにゃならんと考えて、二人のいかさま師にお金をたっぷり渡して、さっそく、仕事に取りかかるようにお言いつけになった」ということである。

三、二人は、機織りのふりをする

さて、二人は、二台の機を据えつけると、いかにも働いているようなふりをしました。けれども、機の上には、なんにもないのです。あわただしく、二人は、一番上等の絹糸と、一番りっぱな黄金をくださいと願い出ました。そして、それを自分たちの財布の中へ入れてしまうと、あいかわらずからの機に向かって、夜おそくまで働いていました。――一方、「……もうどのくらい織れたろうか、知りたいものじゃ」と、王様はお考えになりました。けれども、ばかや、自分の地位にふさわしくない者には、それが見えないという話を思い出しますと、どうもすこし、へんな気持ちになりました。もちろん、自分は何もびくびくすることはないと、信じていましたが、それでも、ひとまず、人をやって、どんな様子か見させようとお思いになりました。その頃、町中の人たちは、その織り物がどのような不思議な性質を持っているかということを、もう知っていました。そして、自分のお隣りさんが、もしや悪い人か、ばか者ではないだろうかと、とても知りたがっていました。（本文）

＊　＊

さて、「いかさま師」（詐欺師）の二人は、「……二台の機を据えつけると、いかにも働いているようなふりをしました。けれども、機の上には、なんにもないのです。あわただしく、二人は、一番上等の絹糸と、一番りっぱな黄金をくださいと願い出ました。そして、それを自分たちの財布の中へ入れてしまうと、あいかわらずからの機に向かって、夜おそくまで働いていました」とある。――例えば、ギターを巧みに演奏しているようなふりをする「エアギター」というのがあるが、それと全く同じように、いかにも織物（布地）を巧みに織っているようなふりをしながらも、実際は、「……機の上には、なんにもないのであり」、しかも、「……一番上等の絹糸と、一番りっぱな黄金をくださいと願い出て、それを自分たちの財布の中へと入れていた」のである。そして、「……相変わらず、からの機に向かって、夜遅くまで働いているふりをしていた」ということである。
一方、王様は、「……もうどのくらい織れたろうか、知りたいものじゃ」と、お考えになったが、「……ばかな人間や、自分の地位にふさわしくない者には、それが見えないという話を思い出して」、どうしたものかという気持ちになり、「……もちろん、自分は何もびくびくすることはないと、信じてはいたが、それでも、ひとまず、人をやって、どんな様子か見させようとお思いになった」ということである。――つまり、若しも織物（布地）が見えなければ、自分は王様にふさわしくない者か、それともばかな人間ということにな

ってしまうので、取り敢えず、慎重を期したということである。――そして、その頃になると、町中の人たちは、その織物（布地）がどのような不思議な性質を持っているかということを、もう知っていましたので、それゆえ、「……自分のお隣りさんが、もしや悪い人か、ばか者ではないだろうかと、とても知りたがっていました」とあるが、これは、若しも織物（布地）が見えなければ、その地位にふさわしくない者か、それともばかな人間ということになり、「……自分のお隣りさんも、もしかしたらそうではないかと、とても知りたがっていた」ということである。

四、年とった正直者の大臣が見ると……

そこで、「……そうじゃ、機織りのところへは、あの年とった正直者の大臣をつかわそう」と、王様はお考えになりました。「……あれなら、織り物がどんなふうか、一番よく見て来るだろう。あれは、知恵もあるし、また、あれくらい自分の地位にふさわしい者は、ほかにないからのう」と思うのであった。――そこで、年をとったこの正直者の大臣は、二人のいかさま師が、からの機に向かって働いている広場へと入って行きました。「……どうぞ、神様！　おたすけを！」と、年寄りの大臣は、こう心にお祈りして、それから思いきって目を開きました。「……おや、なにも見えないぞ！」、けれども、そうと口に出しては言いませんでした。……

二人のいかさま師は、もっと近寄って、よく見ていただきたいと言ったり、柄もよく、色も美しくはございませんかと、たずねたりしました。そして、こんなことを言いながら、からの機を指さすものですから、気の毒に、老大臣は、なおも目を大きく見開いて見ますが、やっぱり、なんにも見ることはできませんでした。見えないはずです。なんにもないのですから。「……こりゃ、たいへんだ！」と、大臣は考えました。「……わしは、馬鹿なのかしらん。そんなことは今まで考えたこともない。また、誰にも知られてはならんことだ。わしが大臣の地位にふさわしくないというのか？　いかん、織り物が見えないなぞと、うっかり口に出したら、たいへんだわい！」と思うのであった。

さて、「……いかがでございましょう、なんともお言葉がございませんが」と、織っていた一人が言いました。「……おお、みごと！　みごと！　まったく、えもいわれぬものじゃ！」と、年寄りの大臣は、こう言って、眼鏡越しによく見ました。「……この柄といい、この色合いといい！　――そうじゃ、わしには、ことのほか気にいったおもむきを、王様に申し上げるとしょう」。――「……それは、それは、かたじけないことでございます」と、二人の機織りは言って、色の名前を言ったり、珍しい柄の説明をしたりしました。年寄りの大臣は、王様のところへ戻った時、同じことが言えるように、よく気をつけて聞いていました。そして、そのとおり申しあげました。（本文）

＊　＊

さて、まず最初は、「……そうじゃ、機織りのところへは、あの年とった正直者の大臣をつかわそう」と、王様はお考えになりました。「……あれなら、織り物がどんなふうか、一番よく見て来るだろう。あれは、知恵もあるし、また、あれくらい自分の地位にふさわしい者は、ほかにないからのう」と思うのであった。――つまり、まず最初は、「……あの年とった正直者の大臣をつかわそう」と考えるが、それは、「……あれは、知恵もある

し、また、あれくらい自分の地位にふさわしい者は、ほかにないから」と、考えての上であったが、その「年をとった正直者の大臣」が実際に機織りのところへと行って、その織り物を見てみると、「……おや、なにも見えないぞ！」となるが、それを「口に出しては言いませんでした」とある。それでは、なぜ「口に出して言えないのか？」と問えば、――ここにこそ、まさにこの「作品」の「急所」（本質部分）があるのである。

一方、「……二人のいかさま師は、もっと近寄って、よく見ていただきたいと言ったり、柄もよく、色も美しくはございませんかと、たずねたりしました。そして、こんなことを言いながら、からの機を指さすものですから、気の毒に、老大臣は、なおも目を大きく見開いて見ますが、やっぱり、なんにも見ることはできませんでした。見えないはずです。なんにもないのですから」とある。――さて、「いかさま師」（詐欺師）たちにとって、何が最も大事なことかと敢えて問えば、それは、まさに「いかに本物本当らしく見せるかのパフォーマンスとその巧みな話術」にこそ、すべてはかかっているのであり、そこにほんの僅かでも「ためらいやつまずき」などがあってはいけないのであり、たとえうそがばればれだとしても、終始一貫して、堂々とした「立ち振る舞い」を行なうことが何よりも大事なことになるのである。

さて、「年をとった正直者の大臣」――これこそ最も大事な「キャラ」（人物像や性格）であり、この「キャラ」（人物像や性格）だからこそ、まさに「……こりゃ、たいへんだ！」と、大臣は考えるのである。「……わしは、馬鹿なのかしらん。そんなことは今まで考えたこともない。また、誰にも知られてはならんことだ。（それとも）、わしが大臣の地位にふさわしくないというのか？　いかん、織り物が見えないなぞと、うっかり口に出したら、たいへんだわい！」と思うことになるのです。そして、「……いかがでございましょう、何ともお言葉がございませんが」と聞かれて、「……おお、みごと！　みごと！　まったく、えもいわれぬものじゃ！」と、年寄りの大臣は、こう言って、眼鏡越しによく見ました。「……この柄といい、この色合いといい！　――そうじゃ、わしには、ことのほか気にいったおもむきを、王様に申し上げるとしょう」と言うのであった。――「……それは、それは、かたじけないことでございます」と、二人の機織りは言って、色の名前を言ったり、珍しい柄の説明などをしました。（むろん、すべてうそであるが）、年寄りの大臣は、王様のところへ戻った時、同じことが言えるように、（そう考えて）、よく気をつけて聞いていました。そして、そのとおり申しあげました。となっていくのである。

五、人のよいお役人が見ると……

さて、いかさま師どもは、織るのに必要だからといって、前よりもたくさんのお金と絹糸と黄金とを願い出ました。そして、それをみんな自分たちのポケットに入れてしまいました。機の上には、一すじの糸も張ってありませんでした。それでも二人は、いままでどおり、からの機にむかって、せっせと働きつづけました。

王様はまもなく、今度はべつの人のよいお役人をおつかわしになって、仕事がどのくらいはかどったか、織り物はもうじきでき上がるのではないか、見させることにしました。このお役人も、大臣と同じことでした。何度も何度も見ましたけれども、もともと、からの機なのですから、何一つ見えるはずはありません。「……いかがでございます。けっこ

うな布地ではございませんか」と、二人のいかさま師は言って、ありもしない美しい模様を指さして説明するのでした。「……まさか、わしが、ばかだなんてはずはないが！」と、お役人は考えました。「……してみると、わしは、このよい地位にふさわしくないというわけか？　こいつは、どうもへんだぞ。だが、ひとに気づかれないようにせりゃならん」と。そこで、お役人は、見えもしない織物（布地）をほめて、きれいな色といい、美しい柄といい、すっかり気に入ったと、うけあいました。そして、王様には、「……はい、まことに、このうえない、みごとなものでございます」と申しあげました。（本文）

＊　＊

さて、再び、「……いかさま師どもは、織るのに必要だからといって、前よりもたくさんのお金と絹糸と黄金とを願い出ました。そして、それをみんな自分たちのポケットに入れてしまいました。機の上には、一すじの糸も張ってありませんでした。それでも二人は、今まで通り、からの機にむかって、せっせと働きつづけました」とある。――これは、非常に興味深い「内容」であり、それでは、一体、どこがどのように興味深いのかと問えば、それは、次のようなことである。――例えば、「オレオレ詐欺」の場合、一度、うまくお金をだまし取ると、二度も、三度も、しかも、その「金額」を上げて要求して来るのであり、それは、「結婚詐欺」、その他、すべて同じような傾向があり、だまし取れるところからは、徹底的に「だまし取る」という傾向がはっきりとあるということである。ただ、この「裸の王様」の場合、その詐欺師の「うそ」が露呈（ばれれ）ば、即、その首が飛ぶという危険性は、常にあるということである。

ところで、王様は、まもなく、「……今度はべつの人のよいお役人をおつかわしになって、仕事がどのくらいはかどったか、織り物はもうじきでき上がるのではないか、見させることにしました。このお役人も、大臣と同じことでした。何度も何度も見ましたけれども、もともと、からの機なのですから、何一つ見えるはずはありません」とある。――さて、二番目の人も、疑い深い人ではなく、「人のよいお役人」という「キャラ」（人物像や性格）設定であり、それゆえ、「……いかがでございます。けっこうな布地ではございませんか」と言われて、「……まさか、わしが、ばかだなんてはずはないが！」と、お役人は考えました。「……してみると、わしは、このよい地位にふさわしくないというわけか？　こいつは、どうもへんだぞ。だが、ひとに気づかれないようにせりゃならん」と。そこで、お役人は、見えもしない織物（布地）をほめて、きれいな色といい、美しい柄といい、すっかり気に入ったと、うけあいました。そして、王様には、「……はい、まことに、このうえない、みごとなものでございます」と申し上げるのでした。

＊　＊

さて、ここで、最も大事なことは、次のようなことである。つまり、二人とも、実際は「見えていない」のに、いかにも「見えているように報告」をしている。それは、一体、なぜなのか？　それは、若しも「何も見えませんでした」と正直に報告をすれば、それこそ、まさに「……もし織物（布地）が見えなければ、自分はその役職にふさわしくない者か、それともばかな人間ということになってしまい」、それを知った王様は、即、自分を「首にする」かも知れない。また、それを知った人たちは、自分をあざけるかも知れない。だからこそ、慎重を期して、取り敢えず、「……すばらしい織り物でした」と、うその報告をするのである。――これは、何一つ特別のことではなく、例えば、ある有名な画家の

抽象画などを観た時に、その人自身は、どこがどのように素晴らしいのかよくわからなくても、取り敢えず、「……いい絵ですね」と言うしかないのである。それは、その他の様々な美術品や骨董品などについても、その人自身は、どこがどのようにいいのかさっぱりわからなくても、慎重を期して、「……これはいいですね」と言うしかないのである。もし、「……うっかりこれのどこがいいのなどと言ったりすれば」、「……この人は、何もわかっていないと、あざけりを受けることにもなりかねない」からである。こういうことは、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、もうありとあらゆる分野で起こり得ることであり、「……うっかりとんちんかんのことを言ったりすれば、あの人は何もわかっていないと、その場にいる人たちから失笑を受けることにもなりかねない」のである。だからこそ、慎重を期して、取り敢えず、「……その場に合わせたようなことを言うしかない」ということである。

六、王様自身がそれを見ると……

この頃、町では、このすばらしい織り物のうわさでもちきりでした。いよいよ王様も、それがまだ機にあるうちに、ご自分で見ておきたいとお思いになりました。そこで、えりぬきのお供を大ぜい連れて、二人のいるいかさま師のところへおいでになりました。お供のうちには、前にお使いに行った、あの人のよい二人の年寄りのお役人もおりました。いかさま師どもは、この時とばかり、一生懸命に、でも一すじのたて糸も、よこ糸もなしに、織っていました。「……陛下、まことにすばらしいものではございませんか！」と、人のよい二人のお役人は言いました。「……なんというよい柄でございましょう。なんというみごとな色合いでございましょう。なにとぞ、とくと、ごらんくださいますよう」と。こう言って、からの機を指さしました。なぜなら、ほかの人たちには、きっとこの織り物が見えているに違いないと思っていたからです。

「……やや！　これはどうしたことじゃ！」、王様は心にこう思いになりました。「……わしにはなにも見えんぞ！　恐ろしいことになったものじゃ。このわしが、ばかだというのか？　それとも、王様たるにふさわしくないというのか？　これ以上わしの身にふりかかる、恐ろしいことはないぞ」と思い、そこで、「……なるほど、なかなか見事なものじゃのう？」と、王様は声を大きくして言いました。――「……大いに気にいったぞよ！」と、こう言って、満足げにうなずきながら、からの機をじろじろごらんになりました。何も見えないぞと、おっしゃりたくなかったからです。お供の後家来たちも、みんな王様のまねをして、「……いや、まことに、おみごとなものでございます」と、言いました。そして、このすばらしい新しい織り物をおつくりになって、近く行なわれる大きな行幸に、お着ぞめなさるように、とすすめました。「……豪奢なものです！　じつにきれいだ！　すばらしいものでございます！」、こんな言葉が口から口へ伝わりました。そして、残らずの者が心から満足しました。王様は二人のいかさま師に、ボタン穴にさげる騎士十字勲章と、「御用織物匠」という称号を賜わりました。（本文）

＊　＊

さて、この頃、町では、このすばらしい織り物のうわさでもちきりでした。そこで、王様は、いよいよ、「……それがまだ機にあるうちに、ご自分で見ておきたいとお思いにな

り、そこで、えりぬきのお供を大ぜい連れて、二人のいるいかさま師のところへおいでになりました。お供のうちには、前にお使いに行った、あの人のよい二人の年寄りのお役人もおりました」とある。そして、その人のよい二人は、「……陛下、まことにすばらしいものではございませんか！」と言ったり、また、「……なんというよい柄でございましょう。なんというみごとな色合いでございましょう。なにとぞ、とくと、ごらんくださいますよう」と言うのでした。――なぜなら、それは、（たとえ自分たちには見えていなくても）、恐らく、「……ほかの人たちには、きっとこの織り物が見えているに違いないと思っていたからです」となるのである。

ところが、王様は、「……やや！　これはどうしたことじゃ！」と、心にこう思いになりました。「……わしにはなにも見えんぞ！　恐ろしいことになったものじゃ。このわしが、ばかだというのか？　それとも、王様たるにふさわしくないというのか？　これ以上わしの身にふりかかる、恐ろしいことはないぞ」と思い、そこで、「……なるほど、なかなか見事なものじゃのう！」と、王様は声を大きくして言いました。――「……大いに気にいったぞよ！」と、こう言って、満足げにうなずきながら、からの機をじろじろごらんになりました。何も見えないぞと、おっしゃりたくなかったからである。そして、お供の後家来たちも、みんな王様のまねをして、「……いや、まことに、おみごとなものでございます」と言うのでした。……

さて、これらは、すべて「同じ理由」からであり、もし「何も見えません」と、うっかり口にすれば、それこそ、まさに「……もし織物（布地）が見えなければ、自分はその役職にふさわしくない者か、それともばかな人間ということになってしまい」、自分の立場というものが、文字通り、「危うくなる」からである。それゆえ、「ほんとうのことが言えない」のであり、このようなことは、われわれ人間社会では、実に頻繁に起こり得ることであり、この「裸の王様」が特別というようなことではないのである。――そして、お供の後家来たちは、「……このすばらしい新しい織り物をおつくりになって、近く行なわれる大きな行幸（王様の外出の時）に、お着ぞめなさるように、とすすめるとともに、王様は、二人のいかさま師（何と詐欺師）に、ボタン穴にさげる騎士十字勲章と、「御用織物匠」という称号を賜わり（お与えに）なりました、となるのである。

七、あたらしい着物のでき上がり

行幸の行なわれる日の前の晩は、いかさま師どもは、蝋燭を十六本以上もつけて、一晩中寝ないで起きていました。二人が、王様の新しい着物を仕上げようと、忙しく働いているのが、誰の目にもわかりました。二人は、織り物を機から取り上げるようなふりをしたり、大きなはさみで空を裁ったり、糸を通してない縫い針でぬったりしました。そうして、とうとうしまいに、「さあ、お召し物ができ上がりました」と言いました。（本文）

＊

まず、行幸（王様の外出）の行なわれる日の前の晩は、いかさま師どもは、蝋燭を十六本以上もつけて、一晩中寝ないで起きていて、二人は、織り物を機から取り上げるようなふりをしたり、大きなはさみで空を裁ったり、糸を通してない縫い針でぬったり」して、とうとうしまいに、「さあ、お召し物ができ上がりました」と言いましたとある。―

―これは、前にも述べたように、「いかさま師」（詐欺師）にとって、一体、何が最も大事なことかと敢えて問えば、それは、まさに「いかに本物本当らしく見せるかのパフォーマンスとその巧みな話術」にこそ、すべてはかかっているのであり、そこにほんの僅かでも「ためらいやつまずき」などがあってはいけないのであり、それゆえ、終始一貫して、堂々とした「立ち振る舞い」を行なうことが何よりも大事なことになるのである。

八、当日、王様はみずからそこへおいでになる

さて、当日、王様ご自身は、身分の高い宮内官を連れて、そこへおいでになりました。二人のいかさま師は、何かを高くあげるかのように、一方の腕を高くさしあげました。そして、言いました。「……ごらんくださいませ！　これがおズボンでございます。こちらがお上着でございます。これがお外套でございます」等々を言いたてました。「……このお召し物は、ちょうど、クモの巣のように軽うございます。お召しあそばしても、何もおからだにおつけにならないようにお思いでございましょう。しかし、それこそ、この織り物の値打ちなのでございます」と説明をすると、「……なるほど！」と、宮内官たちは口々に言いました。けれども、何も見ることはできませんでした。もともと、何もないのですから。（本文）

＊　　＊

さて、いよいよ行幸（王様の外出）の行なわれる日、王様ご自身は、身分の高い宮内官を連れて、そこへおいでになりました。二人のいかさま師は、何かを高く上げるかのように、一方の腕を高くさし上げて、「……ごらんくださいませ！　これがおズボンでございます。こちらがお上着でございます。これがお外套でございます」等々を言いたてて、さらに、「……このお召し物は、ちょうど、クモの巣のように軽うございます。お召しあそばしても、何もおからだにおつけにならないようにお思いでございましょう。しかし、それこそ、この織り物の値打ちなのでございます」と説明すると、「……なるほど！」と、宮内官たちは口々に言いました。けれども、何も見ることはできませんでした。もともと、何もないのですからとある。――これも、まさに「いかに本物本当らしく見せるかのパフォーマンスとその巧みな話術」であり、終始一貫して、堂々とした「立ち振る舞い」を行なうことが何よりも大事なことになるのである。

九、王様の着付けも自ら行なう

さて、「……陛下、おそれながらお召し物をおぬぎあそばされますよう！」と、いかさま師どもは言いました。「……手まえどもが、この大鏡の前で、新しいお召し物を、お着せ申しあげましょう」と。王様はすっかり着物をおぬぎになりました。すると、いかさま師どもは、できあがったつもりの新しい着物を、一つ一つお着せするようなふりをしました。それから、腰のまわりに手をまわして、何かを結ぶような手つきをしました。それは、裳裾（長い裾）のつもりだったのです。王様は鏡の前で、しきりとからだをねじってごらんになりました。「……ほんとうに、なんてごりっぱなことでございましょう！　ほんとうによくお似合いでございます！」と、皆の者は言いました。「……この柄と申し、この

色合いと申し、まことに、けっこうなお召し物でございます」と。（本文）、

＊　＊

まず、いかさま師（詐欺師）たちは、決して他人まかせではなく、自分たち自らが王様の「着付け」をしなければならないことが、まさに「絶対条件」（核心部分）であり、それゆえ、本文でも、「……陛下、おそれながらお召し物をおぬぎあそばされますよう！」にと言い、そして、「……手まえどもが、この大鏡の前で、新しいお召し物を、お着せ申しあげましょう」と言い、王様はすっかり着物をおぬぎになりました。すると、いかさま師どもは、できあがったつもりの新しい着物を、一つ一つお着せするようなふりをしました。それから、腰のまわりに手をまわして、何かを結ぶような手つきをしました、となるのである。――次に、王様としては、いかにもその「着物」が見えているように振る舞う必要があり、そのために、本文では、「……王様は鏡の前で、しきりとからだをねじってごらんになりました」となり、そして、皆の者は、実際は「何も見えてはいない」のに、取り敢えず、「……ほんとうに、なんてごりっぱなことでございましょう！　ほんとうによくお似合いでございます！」と言い、また、「……この柄と申し、この色合いと申し、まことに、けっこうなお召し物でございます」と、言うしかないところが最も「大事な急所」になるのである。

十、あたらしい着物を着る

さて、「……陛下にさしかけ申し上げる天蓋（装飾された四角い傘）を高く上げて、みなのものが、外にひかえております」と、式部長官が申しあげました。「……そうか、わしもしたくができたぞ」と、王様は言いました。「……どうじゃ、似合うかの？」、こうおっしゃって、王様はもう一度鏡の方をふり向かれました。なぜなら、ご自分の盛装をよくながめるようなふりをしなければなりませんでしたから。裳裾（長い裾）を持ち上げる役の侍従たちは、両手をゆかの上へのばして、それを取り上げるようなふりをしました。そして、何かを持ち上げるようなかっこうで、しずしずと歩き出しました。自分にはなんにも見えないということが、人に気づかれてはたいへんですから。（本文）

＊　＊

さて、「……陛下にさしかける天蓋（装飾された四角い傘）を高く上げて、みなのものが、外に控えております」と、式部長官が申し上げると、王様は、「……そうか、わしもしたくができたぞ」と言い、「……どうじゃ、似合うかの？」、こうおっしゃって、王様はもう一度鏡の方をふり向かれましたが、それは、ご自分の盛装をよくながめるようなふりをしなければなりませんでしたから。裳裾（長い裾）を持ち上げる役の侍従たちは、両手をそこの上へのばして、それを取り上げるようなふりをしました。そこの上へのばして、何かを持ち上げるような格好で、しずしずと歩き出しました。自分にはなんにも見えないということが、人に気づかれては大変ですからとなるのである。――つまり、すべては、「……もし織物（布地）が見えなければ、自分はその役職にふさわしくない者か、それともばかな人間ということになってしまい」、自分の立場というものが、文字通り、「危うくなる」からこそ、まさにそうしているのである。

十一、行列を従えて町をお歩きになると……

こうして、王様は、きらびやかな天蓋（装飾された四角い傘）の下を、行列を従えて、お歩きになりました。往来の人々も、窓にいる人たちも、みな口をそろえて言いました。「……これは、これは、王様のこんどのお召し物は、なんて珍しいのでしょう！　お服についている裳裾（長い裾）の、きれいなことといったら！　ほんとによくお似合いですこと！」と、だれも自分には何も見えないなどと、ひとに気づかれまいとするのでした。さもないと、その人は、自分の地位にふさわしくないか、そうでなければ、たいへんなばかだということになるからです。王様の数多い着物のうちで、これほど評判のよかったものはありませんでした。（本文）

＊　　＊

さて、いよいよ、「……王様は、きらびやかな天蓋（装飾された四角い傘）の下を、行列を従えて、お歩きになりました」とある。――つまり、何らかの「乗り物」に乗ってではなく、王様自らの「足」でお歩きになったということである。すると、往来の人々も、窓にいる人たちも、みな口をそろえて言うことには、「……これは、これは、王様のこんどのお召し物は、なんて珍しいのでしょう！　お服についている裳裾（長い裾）の、きれいなことといったら！　ほんとによくお似合いですこと！」と、口々に言うのでした。――それは、誰もが、「……自分には何も見えていないなどと、人に気づかれてはならないのであり、もし着物（布地）が見えていないなどとなれば、それこそ、自分はその役職にふさわしくない者か、それともばかな人間ということになってしまい」、自分の立場が、文字通り、「危うくなる」可能性が極めて高いとともに、それを知った人たちからは、まさに「物笑い」にされる可能性もあり、それらを何よりも「恐れている」のであり、それゆえ、誰もが「ほめるばかり」であり、その「当然の結果」として、まさに「……王様の数多い着物のうちで、これほど評判のよかったものはありませんでした」となるのである。

十二、その時、一人の小さな子供が……

その時、一人の小さな子供が、突然、「……だけど、なんにも着てやしないじゃないか」と、言いました。「……こりゃ驚いた、おまえさん、無邪気な子供の言葉を聞いてやってくれ」と、その子の父親が言いました。そして、子供の言った言葉が、それからそれへとひそひそ伝わってゆきました。「……なんにも着てはいらっしゃらない！」と、とうとうしまいに、ひとり残らずこう叫びました。これには王様もお困りになりました。なぜなら、みんなの言うことがほんとうのように思われたからです。けれども、「……今さら行列をやめるわけにもいかない」と、お考えになりました。そこで、なおさらもったいぶってお歩きになりました。そして、侍従たちは、ありもしない裳裾（長い裾）を持ち上げて進みましたとさ。……（完）

＊　　＊

さて、誰もがほめるその中に、一人の小さな子供が、突然、「……だけど、なんにも着てやしないじゃないか」と、言いました、とある。――これは、まさに「衝撃的な言葉」であり、誰もがそう思いながらも、慎重を期して、敢えて「言わずにいた言葉」であり、

その「言葉」が、突然、一人の小さな子供の「口」から発せられることによって、その場の空気が一変すると共に、その子の父親の、「……こりゃ驚いた、おまえさん、無邪気な子供の言葉を聞いてやってくれ」という「言葉」を受けて、子供の言った言葉が、それからそれへとひそひそ伝わってゆきました。そして、「……なんにも着てはいらっしゃらない！」と、とうとうしまいに、ひとり残らずこう叫びました。これには王様もお困りになりました。なぜなら、みんなの言うことがほんとうのように思われたからです。けれども、「……今さら行列をやめるわけにもいかない」と、お考えになりました。そこで、なおさらもったいぶってお歩きになりました。そして、侍従たちは、ありもしない裳裾（長い裾）を持ち上げて進みました、となるのである。（完）

＊　　＊

それでは、このあと、一体、どうなったかを少し考えてみたいと思うが、二人のいかさま師（詐欺師）たちは、捕まれば、当然のことながら、ただでは済まないのであり、それゆえ、王様の行列が始まる頃には、すでに町を抜け出していたに違いなく、捕まれば、即、死が待っているだけである。――一方、王様は、どうだろうか？　例えば、うその報告をした「人のよい二人の大臣や役人」は、一体、どうなるのか？　何らかの「罰則」（刑罰）を受けることになるのか？　それは、王様の「考え方一つ」でどちらにも転ぶことになる。

最後に、王様自身は、一体、どうなるのだろうか？　まず、大勢の大衆の面前で、まさに「大恥を掻かされた」のであり、これは、かなりの「精神的ダメージ」を受けたことになるが、その「怒り」が「家来たち」に向けられることになるのかどうか？　それは、何とも判別しがたい。また、人に「だまされた」（裏切られた）ということで、例えば、「人間不信」や「人間嫌い」などになることがあるのかどうか？　それもよく判らない。ただ、王様のいわば「人のよいのんきな気分」というものは、恐らく、どこかに一掃されて、すべてのことに対して、疑いも持ち、現実に即した「考え方」をするようになるのかも知れない。少なくても、このまま「裸の王様」であり続けることは、恐らく、あり得ないことになるのだろう。……

＊　　＊

※「後半部」（雪の女王・その他）へと続く。

「裸(はだか)の王様」という作品を読んで……

「裸（はだか）の王様」という作品を読んで……

さて、この「裸（はだか）の王様」という作品を読んだ後の感想としては、ほとんどの人たちが、いくらなんでも、「……このようなことは現実にはあり得ない」と思いがちであるが、しかし、「……現実にもいくらでもあり得る話」だからこそ、まさに「興味深い話」になるのである。それは、前にも記述したように、――例えば、ある有名な画家の抽象画などを観た時に、その人自身は、どこがどのように素晴らしいのかよくわからなくても、取り敢えず、「……いい絵ですね」と言うしかないのである。それは、その他の様々な美術品や骨董品などについても、その人自身は、どこがどのようにいいのかさっぱりわからなくても、慎重を期して、「……これはいいですね」と言うしかないのである。もし、「……うっかりこれのどこがいいのなどと言ったりすれば」、「……この人は、何もわかっていないと、あざけりを受けることにもなりかねない」からである。こういうことは、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、もうありとあらゆる分野で起こり得ることであり、「……うっかりとんちんかんのことを言ったりすれば、あの人は何もわかっていないと、その場にいる人たちから失笑を受けることにもなりかねない」のである。だからこそ、慎重を期して、取り敢えず、「……その場に合わせたようなことを言うしかない」ということである。

一、芸術のためなら何でも許される

さて、話は変わるが、仮に「芸術のためなら何でも許される」というような「考え方」があるとすれば、それは、極めて危険な「考え方」であり、――例えば、芥川龍之介の有名な『地獄変』という作品の中（なか）でも、もちろん、画家の意志ではなく、無理やりではあったが、画家は、自分の「実の娘」を犠牲（火だるま）にして、その迫真の「地獄絵」を描き上げる結果になるが、むろん、そのようなことは、まさに「狂気の沙汰」であり、決して許されるものではないのである。なぜなら、もし自分がその「犠牲者」の立場に立った時に、自分は喜んでその「犠牲者」になれるのか？　なれるはずがない。――つまり、「芸術」は、「芸術」であって、それ「以上」でも、それ「以下」でもなく、「芸術」を何か「絶対視」（何ものにも勝る絶対価値）のように盲目的に考えることは、極めて危険な「考え方」になるのである。

二、自分は特別の人間、或いは、自分は選ばれた人間

例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、何かに「特化した人」の中（なか）には、「……自分は特別の人間、或いは、自分は選ばれた人間だ」と思い込んでしまい、それゆえ、「……自分は何をやっても許される人間なのだ」という、実に愚かしい「考え方」に取り憑かれてしまう傾向は強く、例えば、「革命」のためには「……人殺し、破壊活動、強奪、強姦、その他」、何でも許されるのだと思い込んでみたり、また、芸術や芸のためなら、その他、何のためであれ、人を踏みつけ犠牲にしてもよいのだという実に愚かしい「考え方」に取り憑かれやすいものだが、それ

らはすべて間違った「考え方」であり、その人の芸術や芸その他などがどれほど優れていようとも、人間としてはただの「クズ」になってしまうのである。――つまり、芸術家として優れていることと、人間として優れていることとは、全く全然違うことであり、それぞれの分野での「特化」というのは、いわば「その道の器用」に過ぎず、例えば、政治や経済が得意、学問が得意、文学が得意、絵が得意、音楽が得意、芸能が得意、スポーツが得意、医療が得意、その他、その人がたとえ何が得意であったとしても、それだけを以て、人を平気で踏みつけ犠牲にしてもよいのだという「論理」というのは、実に愚かしい「考え方」であり、なぜなら、例えば、何々のためと言いながらも、実はその人の「欲望や感情」などを満たしているだけの、自分が可愛いだけの、その人の勝手な「エゴ」に過ぎないことが極めて多いからである。もちろん、その人の「才能」を高く評価するのはよいが、だからと言って、何をやっても許されるなどという「特権」などは何一つ許されてはいないのであり、何らかの「犯罪」を犯せば、当然のことながら、その「罪」は償わなければならないということである。

例えば、なぜ、「人殺し」が悪いのかと問えば、それは、すべての「犯罪」がそうであるように、「……する側は、よくても、される側は、たまったものではない」からであり、これほど簡単な「論理」はなく、例えば、自分が（自分の家族が）無残に殺されていいはずはなく、それは、殺人、強盗、窃盗、詐欺、恐喝、暴行、傷害、放火、万引、強姦、その他、すべて同じことであり、「……する側は、よくても、される側は、たまったものではない」からであり、これほど簡単な「論理」はなく、すべては「される側」に立てば、すぐにもわかることである。ところが、犯罪（間違い）を犯すような人たちというのは、とかく「する側の論理」だけに固執して、いわゆる「される側」の立場に立ってものを考えるということが欠落しているのである。ここにこそ、犯罪（間違い）を犯す人たちの「身勝手さ」があるのである。つまり、「する側」、「される側」、その他、できるだけあらゆる視点からものを考えるということこそは、まさに「現実に即したものの考え方」になるということである。

三、一つのことに「特化する」とは……

例えば、仕事を初めとして、芸術、芸能、スポーツ、趣味、その他、何であれ、何か一つのことに「特化している」ような場合、その分野に関しては専門的な「知識や技術」などをしっかりと身に付けていながらも、その分野（専門）から離れてしまうと、ふつうの人（或いは「ふつうの人以下」）になってしまうというのは、一体、どういうことなのだろうか？　それは、次のようなことである。――例えば、仕事でも、音楽でも、スポーツでも、その他、何であれ、（子供の頃から）、そのことを何年も徹底的に学習し続ければ、やがては、専門的な「知識や技術」などをしっかりと身に付けることになるだろうが、しかし、それは、人間として真に「内的成長（成熟）」することとは、全く全然違うことなのである。それでは、一体、何がどのように違うのかと言えば、それは、何か一つのことに「特化する」というのは、ある一つのことの専門的な「知識や技術」などの習得であり、それは、いわば「道の器用」であり、その「道の器用」というのは、その人の人間としての成熟度とは全く関係なく、本人の努力次第でいくらでも上達でき得るものなのである。

一方、人間として真に「内的成長（成熟）」するというのは、一つのことに「特化する」ことではなく、人間としての総合的な「内的成長（成熟）度」であり、それは、若い時からの極めて旺盛な「知的遍歴」などを経て、つまり、もの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）などであるが、それこそは、まさに「神的な恋（エロス）」であり、それをプラトン風に言えば、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「イデア界」）の方へと想いを寄せて、最究極的には「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとする、そのようなもの凄い「知識欲」であり、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を経ることによってこそ、初めて、物事を極めて厳密に「認識（識別）」でき得るような真の「思考（思索）能力」というものが、しっかりと身につくことになるのである。

それは、つまり、その人の「生まれ育った環境（つまり家庭・学校教育・社会・民族・国家・その他）」などの影響を非常に強く受けて自ずと形成される、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などを、あらためて徹底的に「考え直して」みると、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それでは、こうなのかと、次から次へと「考え方」を新たにしていくうちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまい、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥ってしまうわけであるが、それは、言葉を換えれば、まさに根底からの「自己改革」が起こっている状態であり、そのような「心の状態」から、やがて、真に「内的成長(成熟)」を遂げることによってこそ、初めて、「自らものを考え、自ら判断する自由を得る」ことにもなるわけである。

そして、人間として真に「内的成長（成熟）」することによって、初めて、人間として真に成熟した「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などができ得るようになるということである。それは、すなわち、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になる、ということであるとともに、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。それに加えて、今までの本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行するということである。それゆえ、人間として真に「内的成長（成熟）」することによってこそ、初めて、人間として真に成熟した、より客観的で、より普遍的な「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などができ得るようになるということである。

四、一般の人たちと知識人たちとの違い

例えば、ソクラテスは、その『ソクラテスの弁明』のなかで、次のように語っている。つまり、「……名前のいちばんよく聞こえている人たちのほうが、思慮の点では、かえって、一般の人たちよりも欠けている」というようなことを言っている。それは、一体、どういうことなのかと問えば、それは、次のようなことである。――つまり、一般の人たちというのは、現実という大地にしっかりと根を下ろして生活をしている。そして、その現実の実に様々な「生活知」や「経験知」などを基にして、物事を考え、判断し、行動しようとしている。それゆえ、彼らは、現実に即した「考え方」をしているのである。――一

方、各分野の様々な「知識人」たちというのは、その各分野の実に様々な「専門知」や「学問知」などを基にして、物事を考え、判断し、行動しようとしている。それゆえ、彼らは、実に様々な「知識」（つまり「専門知」や「学問知」など）に即した「考え方」をしているのである。それは、それぞれの「分野」のなかでは「極めて有効」であるとしても、それぞれの「分野」を離れて、現実の実に複雑で生々しい「様々な問題」などに直面した時に、彼らの「思慮」（その時々の即座の「判断力」）の点では、つまり、いざという時には、かえって、現実に即した「考え方」をしている一般の人たちの方が、遙かに優れた「思慮」（その時々の現実に即した即座の「判断力」）を持っているということである。

例えば、ある「一つの専門」に特化しているような人たちというのは、それぞれの「分野」のなかでは「極めて有効」であるとしても、ひとたび、それぞれの「分野」を離れると、それぞれの「分野」以外では、かえって世間知らずの、ふつうの人（或いは「ふつうの人以下」）になってしまうということである。――一方、ソクラテスという人は、ある「一つの専門」に特化したような人（専門家）ではなかった。そうではなく、ソクラテスという人は、人間としての総合的な「内的成長（成熟）」を遂げていた人なのである。

五、様々な「社会的な衣装」とは……

話を「裸の王様」に戻したいが、例えば、実に豪華で眼も眩むばかりの「豪邸や衣装或いは多彩なブランド品」などを数多く手に入れて、その豪邸に住み、それらで身を華やかに飾り立てても、それらは、すべて「自分の外」に存在するものであり、それゆえ、それらによって、その人自身（つまり自分自身）が真に「優れた存在」になるわけではなく、また、「社会的地位や名誉或いはまた名声」なども、結局は、みな同じことであり、例えば、何か「大きな問題」などを起こせば、あっという間に地に墜ちてしまうようなものに過ぎないとともに、それらは、すべて「社会的な衣装」に過ぎず、それらの「社会的な衣装」がどれほど豪華な「社会的な衣装」であろうとも、それらを身に纏っているその人「自身」と、その豪華な「社会的な衣装」とは、もともと「別々のもの」であり、それゆえ、それらの様々な「社会的な衣装」などをすべて脱ぎ捨てても、なお、その人「自身」が、どれだけ人間として真に魅力的に「内的成長（成熟）」しているのかが、まさにその人の人間としての真の「評価」になるのである。

六、まとめ

では、もう一度、再確認しておきたいと思うが、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、何かに「特化した人」の中には、「……自分は特別の人間、或いは、自分は選ばれた人間だ」と思い込んでしまい、それゆえ、「……自分は何をやっても許される人間なのだ」という、実に愚かしい「考え方」に取り憑かれてしまう傾向は強く、例えば、「革命」のためには「……人殺し、破壊活動、強奪、強姦、その他」、何でも許されるのだと思い込んでみたり、また、芸術や芸のためなら、その他、何のためであれ、人を踏みつけ犠牲にしてもよいのだという実に愚かしい「考え方」に取り憑かれやすいものだが、それらはすべて間違った「考え方」であり、そ

の人の芸術や芸その他などがどれほど優れていようとも、人間としてはただの「クズ」になってしまうのである。――つまり、それぞれの分野での「特化」というのは、いわば「その道の器用」に過ぎず、例えば、政治や経済が得意、学問が得意、文学が得意、絵が得意、音楽が得意、芸能が得意、スポーツが得意、医療が得意、その他、何であれ、もちろん、その人の「才能」を高く評価するのはよいが、だからと言って、何をやっても許されるなどという「特権」などは何一つ許されてはいないのであり、何らかの「犯罪」を犯せば、当然のことながら、その「罪」は償(つぐな)わなければならないということである。

例えば、その人がどのような「社会的地位や名誉或いは名声」などを得ていたとしても、その人が何か「大きな問題」などを起こせば、あっという間に地に墜ちてしまうようなものに過ぎないとともに、それらは、すべてその時々の「社会的な衣装」に過ぎず、それらの「社会的な衣装」がどれほど豪華な「社会的な衣装」であろうとも、それらを身に纏(まと)っているその人「自身」と、その豪華な「社会的な衣装」とは、もともと「別々のもの」であり、それゆえ、その豪華な「社会的な衣装」などをかさにして、何か「……自分は特別の人間、或いは、自分は選ばれた人間なのだ」と思い込んでしまい、それゆえ、「……自分は何をやっても許される人間なのだ」という、実に愚かしい「考え方」に取り憑かれてしまい、それを以って、人を平気で踏みつけ犠牲にしているとすれば、たとえその人がどれほど優れた「才能」その他などを持ち合わせていても、人間としてはただの「クズ」になってしまうとともに、そのような人間こそは、世間（一般）の目から見れば、まさに哀(あわ)れな「裸(はだか)の王様」に過ぎないということにもなるのである。

平成三十年九月吉日（完全版）

如月翔悟

アンデルセンの世界

雪の女王・その他

雪の女王

（七つのお話からできている物語）

目　次

雪の女王
（七つのお話からできている物語）
一、第一の話
鏡とそのかけらのこと
二、第二の話
男の子と女の子
三、第三の話
魔法を使うおばあさんの花園
四、第四の話
王子と王女
五、第五の話
山賊の小娘
六、第六の話
ラップ人の女とフィン人の女
七、第七の話
雪の女王のお城であったことと、
その後のお話
＊　「参考文献」

一、第一の話

鏡とそのかけらのこと

一、第一の話

鏡とそのかけらのこと

さて、本文の冒頭は、「……さあ、いいですか！　お話をはじめますよ。このお話をおしまいまで聞きますと、わたしたちは今よりも、もっとたくさんのことを知るようになりますよ。それはこういうわけなのです。あるところに、一人の悪い小びとの魔ものがいたのです。それは、仲間のうちでも一番わるい魔ものの一人でした。つまり、「悪魔」だったのです。ある日のこと、悪魔はたいへんに、ごきげんでした。なぜかというと、鏡を一つ、つくったからなのです。その鏡というのが、ただの鏡ではなくて、なんでもいいものや、美しいものが、この鏡にうつりますと、たちまち、ちぢこまって、ほとんどなんにも見えなくなってしまうのです。そのかわり、役に立たないものや、みにくいものなどは、よけい、はっきりとうつって、いっそうひどくなるのでした。たとえどんなに美しい景色でも、この鏡にうつすと、まるで煮つめたホウレンソウみたいに見え、どんなにいい人間でも、みにくくうつったり、または、胴がなくなって、さかだちにうつったりするのでした。顔なんかは、ゆがんでしまって、なにがなんだか見わけがつかなくなります。そのかわり、そばかすが一つあっても、それが鼻や口の上までひろがることは、覚悟しなければなりませんでした」とある。（本文）

一、悪魔とは……

最初、「悪魔」という言葉が出て来るが、「悪魔」というのは、まさに「悪」を本体としている存在であり、それゆえ、いわゆる「善」を本体としているような存在がいちばん嫌いであり、それは、例えば、「一なる神」を初めとして、様々な「神々」、そして、われわれ人間のなかでは、いわゆる「善」的な人間がもっとも気に入らないということになるかと思う。それゆえ、それらの対象に対して、実に様々な「悪さ」を仕掛けることになるわけである。そのひとつが、いわゆる『誘惑』というものであり、例えば、『旧約聖書』のなかのアダムとイブは、神から絶対に食べてはいけないと言われていた《禁断の「木の実」》を、いわゆる《ヘビの「巧みな誘惑」》に負けて、二人して食べてしまい、その結果として、神の怒りにふれて、いわゆる「エデンの園」から追放されてしまうわけである。それが、まさにわれわれ人間の「原罪」（つまりは「弱さ」）ということになるのである。

例えば、釈迦は、二十九歳の時に出家をし、そして、三十五歳の時に「悟り」を開くことになるが、その最後の段階では、ほとんど骨と皮になってしまい、そこで、釈迦は、そのような「苦行」をやめて、近くの河で沐浴（もくよく）をし、そして、村の娘スジャータからミルクがゆをもらって体力を回復したあと、近くの大樹（菩提樹）の下で、四十九日間、深い「瞑想」に耽入ることになるのである。――その時に、「魔王」は、釈迦が「悟り」を開くのを何とか妨（さまた）げようと、自分の軍勢に様々な攻撃をさせるが、それらはことごとく失敗に終わり、また、自分の「三人の娘」（それは「愛執（あいしゅう）と嫌悪と貪欲（どんよく）」などであるが）、彼女たちを送って、釈迦を誘惑させたりするが、釈迦は、その誘惑に対しても、全く見向きもしなかったということである。そして、釈迦は、ついに四十九日目に「悟り」を開き、いわゆる「大悟」を成し遂げることにもなるのである。

そのように、「悪魔」の最大の特徴というのは、直接、相手に「危害」をくわえるというよりは、(もちろん、そういう場合もあるだろうが)、むしろ「相手の弱み」に巧みにつけ入るということであり、例えば、「権力」に弱い人には、「権力」で「誘惑」をし、「金」に弱い人には、「金」で「誘惑」をし、そして、「異性」に弱い人には、「異性」で「誘惑」をするというのが、まさに「悪魔」の最大の特徴になるかと思う。それは、なぜかと言えば、それは、「悪」を本体としている「悪魔」にとって、いわゆる「善」的な存在がもっとも気に入らない存在であり、それゆえ、その「善」的な存在が、何らかの「甘い誘惑」に負けて、いわゆる「善」的な存在からまさに「悪」的な存在へと堕ちていく、その姿を見ることが、この上もない言葉では言い表せないほどの「無上の喜び」になるということである。それゆえ、「悪魔」というのは、いわゆる「善」的な存在を何らかの「甘い誘惑」で仕掛けては、まさに「悪」的な存在へと貶(おとし)めることに、この上もない生き甲斐を感じているような存在ということになるのだろう。

それはともかく、本文では、「……ある日のこと、悪魔はたいへんごきげんでした。なぜかというと、鏡を一つ、つくったからなのです。その鏡というのが、ただの鏡ではなくて、なんでもいいものや、美しいものが、この鏡にうつりますと、たちまち、ちぢこまって、ほとんどなんにも見えなくなってしまうのです。そのかわり、役に立たないものや、みにくいものなどは、よけい、はっきりとうつって、いっそうひどくなるのでした」とある。――つまり、悪魔がつくった、その「鏡」というのは、なんであれ、「……よいものや美しいものは、たちまち縮(ちぢ)こまって、ほとんど何も見えなくなってしまう一方、役に立たないものや、みにくいものなどは、よけいにはっきりとうつって、いっそうひどくなる」というものであり、それは、すなわち、役に立たないものやみにくいものあるいは悪いものなどを「よりひどくはっきりと見せてくれるような鏡」だったということである。

二、悪魔の鏡の最大の特徴は……

さて、悪魔は、「……こいつは、めっぽう面白いやと、いいました。人間の心の中に、なにかいい考えや、信心ぶかい考えが浮かんできますと、鏡の中には、しかめっつらが、あらわれるものですから、この小びとの悪魔は、自分のすばらしい発明に思わず笑わずにはいられませんでした。悪魔は、「魔もの学校」を開いていましたが、この学校に通っている生徒たちがみんなで、奇跡がおこった！　と、方々へ言いふらしました。そして、今こそはじめて、世の中と人間どもの、ほんとうの姿が見られるのだ、と口々に言いました。こうしてみんなは、この鏡をさかんに持ちまわったものですから、とうとうしまいには、この鏡にゆがんでうつったことのない国や人間がなくなってしまいました。そこで、こんどは、天へのぼっていって、天使や「われらの主」を、からかってみようと、とんでもない考えをおこしました。みんなが鏡をもって高くのぼって行けば行くほど、鏡の中のしかめっつらはますますひどくなりました。みんなは鏡をしっかり持っているのがやっとでした。それでもかまわず、高く高くのぼっていって、だんだん神様と天使たちのところに、近くなりました。するとその時、鏡はしかめっつらをしながら、おそろしくふるえだしました。そして、とうとう、みんなの手からはなれて、地上に落ちて、何千万、何億万、いや、もっとたくさんの、こまかいこまかいかけらに砕けてしまいました。こうして、今ま

でよりも、もっと大きな不幸を、世の中にまきちらすことになりました。（本文）

＊　　＊

さて、本文の中で特に興味深いのは、この悪魔は、「魔もの学校」（つまり「悪魔の学校」）を開いていて、しかも、その学校に通っている生徒たちは、悪魔がつくったその「鏡」をみては、「……みんなで、奇跡がおこった！」と方々へ言いふらしました。それでは、一体、何が「奇跡」だというのかと問えば、それは、まさに「……今こそ、はじめて、世の中と人間どものほんとうの姿が見られるのだ」ということである。――つまり、世の中や人間どもというのは、見た目や表面的にはいかにも「きれいごとで装ってはいる」が、その実、その奥には実に醜い様々な「欲望や感情その他」などが生々しく蠢いているのであり、それらがこの「鏡」にははっきりとうつし出されるのだと、悪魔たちは口々にそう言うのであった。そして、「……とうとうしまいには、この鏡にゆがんでうつったことのない国や人間がなくなってしまいました」とある。それは、この地上のありとあらゆる国々や人間たちの、見た目や表面的にはいかにも「きれいごとで装ってはいて」も、その実、その奥には実に醜い様々な「欲望や感情その他」などが生々しく蠢いている様子が、この「鏡」にははっきりとうつし出されたということである。

そこで、今度は、「……天へのぼっていって、天使や『われらの主』を、からかってみよう」と、（それは、「善」を本体とする天使や「われらの主」は、この悪魔の「鏡」には一体どのようにうつるのかを見てみようという）、とんでもない「考え」をおこしました。そして、「……みんなで鏡をもって高くのぼって行けば行くほど、鏡の中のしかめっつらはますますひどくなり、みんなは鏡をしっかり持っているのがやっとでした。それでもかまわず、高く高くのぼっていって、だんだんと神様と天使たちのところへと近くなると、その時、鏡はしかめっつらをしながらおそろしくふるえだしました。そして、とうとう、みんなの手から離れて、地上に落ちて、何千万、何億万、いや、もっとたくさんの、こまかいこまかいかけらに砕けてしまいました」とある。――それは、一体、なぜかと問えば、それは、「悪魔」という存在は、天上の「神の領域」（つまりは「神聖な領域」）へと入って行くということは、決して許されないまさに「僭越な行為」であり、それゆえ、鏡は、悪魔たちの手から離れて、地上に落ちて、何千万、何億万、いや、もっとたくさんの、こまかいこまかいかけらに砕けてしまったのであり、しかも、それがまた、「……今までよりも、もっと大きな不幸を、世の中にまきちらすことになってしまった」ということである。

三、悪魔の鏡のかけらが目や心臓に入ると……

さて、「……このかけらの中には、やっと砂粒ぐらいの大きさしかないのもあって、それが広い世の中に飛び散ってしまったのです。そういうのが、人間の目の中にはいりますと、そのまま、そこにいすわって（入ったままに）なってしまいます。そうすると、その人は、なんでも物を、あべこべに見たり、でなければ、物ごとの悪いところばかりに目をつけたりするのでした。それというのも、その鏡の小さなかけらの一つ一つには、もとの鏡の持っていたのと同じ力があったからです。小さな鏡のかけらが、心臓にはいった人も、何人かありました。そうなると、ほんとうに恐ろしいことでした。その人の心臓は、一か

たまりの氷のようになってしまうのです。また、かけらの中に、窓ガラスに使われるくらい大きいのもありました。けれども、そんな窓ガラスをとおして、友だちをみようとしても、むだでした。また、べつのかけらは、めがねになりました。こんなめがねをかけて、物を正しく見ようとしたり、公平にやろうとしたりすると、ひどくまずいことになるのでした。これを見て悪魔は、おかなの皮が破れそうになるほど笑いころげました。もう、愉快で愉快でたまりませんでした。しかし、それはともかく、家の外には、まだ、この小さいガラスのかけらが、空中を飛んでいました。……では、次のお話を聞くことにしましょう。（本文）

＊　　＊

さて、悪魔が作った「鏡」は、悪魔たちの手から離れて、地上に落ちて、何千万、何億万、いや、もっとたくさんの、こまかいこまかいかけらに砕けてしまい、「……そのかけらの中には、やっと砂粒ぐらいの大きさしかないのもあって、それが広い世の中に飛び散ってしまったのであり、そういうのが、人間の目の中にはいると、そのまま、そこにいすわって（入ったままに）なってしまい、そうすると、その人は、なんでも物を、あべこべに見たり、でなければ、物ごとの悪いところばかりに目をつけたりするのでした。それというのも、その鏡の小さなかけらの一つ一つには、もとの鏡の持っていたのと同じ力があったからであり、小さな鏡のかけらが、心臓にはいった人も、何人かありましたが、そうなると、ほんとうに恐ろしいことであり、その人の心臓は、一かたまりの氷のようになってしまうのです」とある。――つまり、もし空中に漂っているその小さな「鏡のかけら」が目の中に入ると、その人は、何でも物をあべこべに見たり、また、物ごとの悪いところばかりが目をつくようになるとともに、その人の「性格」もゆがんだものになってしまうのである。しかも、その小さな「鏡のかけら」がもしも心臓に入ったりしたら、それこれ、ほんとうに恐ろしいことであり、「……その人の心臓は、一かたまりの氷のようになってしまう」ということである。……そして、やがて、空中に漂っていたその小さな「鏡のかけら」が、何とこの物語の主人公「カイ」という男の子の「目や心臓」の中に入ってしまうという、そのような「展開」（物語（ストーリー））になっていくのである。

＊　　＊

二、第二のお話

男の子と女の子

二、第二のお話

男の子と女の子

さて、冒頭は、「……大きな町には、たくさんの家がたてこんでいて、大ぜいの人が住んでいますから、みながみな自分の庭を持つだけの場所がありません。そこで、たいていの人は植木鉢に花を植えて、それで満足しなければなりませんでした。ちょうどそのような町に、二人の貧しい子供がおりましたが、二人は植木鉢よりは、いくらか大きい庭を持っていました。この二人は、兄妹ではありませんが、まるでほんとうの兄妹のように、仲良しでした。二人の両親は、すぐ隣り合った屋根裏部屋に住んでいました。そこは、両方から屋根がくっついていて、雨どいが両方の家の軒をつたっていました。そして、小さな窓が両方の屋根裏部屋に、向かい合っていて、雨どいをひとまたぎすれば、こちらの窓から向こうの窓へ行くことができました。

そして、どちらの両親も、窓の外に大きな木の箱をおいて、その中に、うちで食べる野菜を植えていました。また、小さなバラの木も一本ずつ植わっていて、どちらもよく育っていました。ところが、両方の親たちの思いつきで、この箱は、雨どいをまたいで、おいてありましたので、箱の両はしが窓とすれすれになっていました。そのため、両側に花の壁ができているように見えました。エンドウのつるは、箱の外へたれさがり、バラの木は長い枝をのばして、窓のまわりにからみついて、両方から向き合って頭をさげていました。そのありさまは、ちょうど緑の葉と花とでできた凱旋門を見るようでした。箱は、せいが高いし、また、子供たちは、その上にはいあがってはいけないということもよく知っていましたから、時々お母さんのお許しをもらって、窓から屋根へ出ました。そして、バラの木の下にある小さな腰掛けにかけて、楽しく遊ぶのでした」。（本文）

＊　＊

まず、ここで大事なことは、ある大きな町に、二人の貧しい子供が住んでいて、その二人は、兄妹ではないが、まるで「ほんとうの兄妹のように仲良し」であったということであり、しかも、二人の両親は、すぐ隣り合った（向かい合った）屋根裏部屋に住んでいたので、両方から屋根がくっついていて、雨どいが両方の家の軒をつたっていました。そして、両方の屋根裏部屋には「小さな窓」があり、その両方の「小さな窓」は向かい合っていたので、雨どいをひとまたぎすれば、こちらの窓から向こうの窓へ行くことができたということである。そして、「……どちらの両親も、窓の外に大きな木の箱をおいて、その中に、うちで食べる野菜を植えたり、また、小さなバラの木も一本ずつ植えていて、どちらもよく育っていました」とある。これは、具体的には一体どういうものになるのかと問えば、まず、窓の外は、両方とも（傾斜のある）屋根になっているので、（その屋根に直接降りたり大きな箱を置いたりするのは危険であり）、それゆえ、屋根の上に両方からいわば「ベランダ」のようなものをつくり、そして、その自分のベランダの上にそれぞれ大きな（土の入った）「木の箱」を置いて、その中に家で食べる野菜を植えたり、また、小さなバラの木も一本ずつ植えていたのか、それとも、この「ベランダ」のようなものが、そのまま「大きな箱」であり、それに野菜やバラの木を植えていたのか、そのどちらかと思うが、そのどちらであれ、二人は、バラの木の下にある小さな腰掛けにかけて、楽しく遊ぶのでした」となるのである。

一、冬になると……

一方、「……冬になりますと、こういう楽しみはできませんでした。窓ガラスがすっかり、氷でおおわれてしまうこともよくありました。すると、子供たちは銅貨をストーブの上であたためて、凍った窓ガラスに押しつけました。そうするとそこに、きれいなのぞき窓が、まるく、ほんとにまんまるくできました。そして、両方の窓からは一つずつ、幸福そうなやさしい目がのぞいていました。それは、この小さな男の子と女の子の目でした。男の子の名はカイ、女の子の名はゲルダといいました。夏のあいだは、ひとまたぎで、いったりきたりすることができましたが、冬になりますと、まず、たくさんの階段をおりて、それから、また、たくさんの階段をのぼらなければなりません。外では、雪がふぶいています。さて、雪のふぶきを見て、年とったおばあさんは、「……あれはね、白いミツバチがむらがっているんだよ」と、言いました。「……じゃ、あの中には、ミツバチの女王もいるの？」と、男の子はききました。この子は、ほんとうのミツバチの中には、女王バチのいることをちゃんと知っていたのです。「……ああ、いるともね」と、おばあさんは言いました。「……女王バチは、あそこの一番たくさんむらがっているところを飛んでいるんだよ。みんなのうちで一番大きくてね、けっして地面の上に、じっとしてはいないの。すぐまた、黒い雲の方へ飛んで行くんだよ。冬の夜には、町の通りを飛びまわって、方々の家の窓をのぞいてあるくのさ。そうするとね、不思議なことに、そのまま窓ガラスに、凍りついてしまって、まるで花でも咲いたようになるんだよ」と言うのでした。

すると、「……ああ、それなら見たことがあってよ」と、二人の子供は口々に言いました。そして、二人にも、それがほんとうのことだということが、わかりました。「……雪の女王は、ここへ、はいってこられて？」と、女の子がききました。「……はいってくるなら、きてもいい！」と、男の子は言いました。「……そうしたら、僕、熱いストーブの上にのせてやるんだ。そうすれば、とけてしまうよ」と言いました。（本文）

＊　＊

さて、夏のあいだは、ひとまたぎで、いったりきたりすることができても、冬になると、そのような楽しみはできなくなり、しかも、窓ガラスは、すっかり氷でおおわれてしまうこともよくあり、そのような時には、「……子供たちは銅貨をストーブの上であたためて、凍った窓ガラスに押しつけると、そこにきれいなのぞき窓が、まるく、ほんとにまんまるくできました」とある。これは、恐らく、作者（アンデルセン）の子供の頃の経験でもあるのだろうが、そして、両方の窓から一つずつ幸福そうなやさしい目がのぞいていましたが、それは、この小さな男の子と女の子の目であり、「……男の子の名は、カイ、女の子の名は、ゲルダといいました」となるのである。

そして、雪のふぶきを見て、年とったおばあさんは、「……あれはね、白いミツバチがむらがっているんだよ」と言うので、「……じゃ、あの中には、ミツバチの女王もいるの？」と男の子が聞くと、「……ああ、いるともね」と、おばあさんは言いました。――これは、もちろん、「女王バチ」という「言葉」を引き出すための「たとえ話」であり、そして、「……女王バチは、あそこの一番たくさんむらがっているところを飛んでいるんだよ。みんなのうちで一番大きくてね、けっして地面の上に、じっとしてはいないの。すぐまた、

黒い雲の方へ飛んで行くんだよ。冬の夜には、町の通りを飛びまわって、方々の家の窓をのぞいてあるくのさ。そうするとね、不思議なことに、そのまま窓ガラスに、凍りついてしまって、まるで花でも咲いたようになるんだよ」と言うのでした。

すると、「……ああ、それなら見たことがある」と、二人の子供は口々に言い、そして、二人にもそれがほんとうのことだとわかりました。（これは、窓ガラスに実際に雪の結晶などが付いているのを見たことがあるからであり）、すると、「……雪の女王は、ここへ、はいってこられて？」と、女の子が聞きました。（これは、白いミツバチ＝ふぶき、白いミツバチの中で一番大いのがミツバチの女王＝ふぶきの中で一番大きいのが雪の女王）となり、「……はいってくるなら、きてもいい！」と、男の子は言いました。「……そうしたら、僕、熱いストーブの上にのせてやるんだ。そうすれば、とけてしまうよ」となるのである。――つまり、「雪の女王」というのは、ここでは「ふぶきの中で一番大きいのが雪の女王」であり、それ（雪）が、やがて「人間の姿（女性の姿＝雪の女王）へと変身するという「設定」になっているのである。それゆえ、「雪の女王」というのは、もともとは「雪」（或いは氷）であり、いわゆる「人間ではない」のである。（そういう意味では「雪女」に近い）。――一方、有名な映画の『アナと雪の女王』の場合には、アナのお姉さん（王女＝人間）が何でも凍らせる「不思議な力」を持った「雪の女王」になっていくのである。

二、雪の女王との初めての出遇い

さて、おばあさんは男の子の髪をなでながら、（雪の女王の話は避けて）、ほかのお話をはじめました。夕方、カイは部屋の中で、着物を半分ぬぎかけたまま、窓ぎわの椅子の上にあがって、例の小さなのぞき穴から、外をのぞいてみました。外には、雪のひらが二つ三つ舞っていましたが、その中で一番大きいのが、花の箱のふちにのっかりました。すると、その雪のひらは、みるみるうちに大きくなって、とうとう、一人の女の人になりました。着物は、とてもうすい白い紗でできているようですが、実は何百万という、星のようにきらきらする雪のひらでできているのでした。その人は、見れば見るほど美しくほっそりとしていました。でも、からだは氷でできているのでした。まぶしい、きらきらする氷ですが、それでも、その人は、生きているのでした。目は、明るい二つの星のように輝いていますが、落ちついた、やすらかな様子はありませんでした。女の人は、窓の方にむいてうなずきながら、手まねきしました。男の子はびっくりして、椅子からとびおりました。その時、なんだか窓の外を一羽の大きな鳥が飛び去ったような気がしました。（本文）

＊　＊

さて、これが主人公（カイ）という「男の子」が最初に出遇った時の、まさに「雪の女王」の様子やその姿であり、それは、「……夕方、カイは部屋の中の、例の小さなのぞき穴から、外をのぞいてみると、外には、雪のひらが二つ三つ舞っていましたが、その中で一番大きいのが、花の箱のふちにのっかりました。すると、その雪のひらは、みるみるうちに大きくなって、とうとう、一人の女の人になりました。着物は、とてもうすい白い紗でできているようですが、実は何百万という、星のようにきらきらする雪のひらでできているのでした。その人は、見れば見るほど美しくほっそりとしていました。でも、からだ

は氷でできているのでした。まぶしい、きらきらする氷ですが、それでも、その人は、生きているのでした。目は、明るい二つの星のように輝いていますが、落ちついた、やすらかな様子はありませんでした。女の人は、窓の方にむいてうなずきながら、手まねきしました」とある。――これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、雪の女王は、この主人公の「男の子」（カイ）にはっきりと「興味や関心」を持ったということである。――ちなみに、なんだか窓の外を「一羽の大きな鳥」とあるが、それは、恐らく、「橇（そり）に乗った雪の女王」が空を飛び去ったということになるのだろう。それゆえ、もうこの冬はやって来ず、次の冬に目を付けた主人公の「男の子」（カイ）のところへと再びやって来るのである。

三、季節は、冬から春そして夏へと

あくる日は、霜のおりた晴れた日になりました。――それから、雪どけになり――やがて、春がやってきました。お日様は輝き、緑の草が顔をのぞかせ、ツバメが巣をつくりました。そして、窓が開かれて、小さな子供たちは、また、高い屋根の上の自分たちの小さいお庭にすわって遊びました。――バラの花は、この夏は、たとえようもないほど美しく咲きそろいました。女の子は、バラの花のことを歌った賛美歌を一つおぼえました。そして、歌の中にバラの花のことが出るたびに、自分のバラの花のことを思い浮かべました。そして、男の子にそれをうたって聞かせました。男の子もいっしょにうたいました。

バラの花　かおる谷間に
おわします　おさなごイエスさま！

そして、二人は手を取りあって、バラの花にキスをしました。そして、神様の明るいお日様を仰いで、そこに、おさなごイエスさまがいらっしゃるように話しかけました。なんという楽しい夏の日々でしょう！　家の外で、いきいきとしたバラの花にかこまれているのは、ほんとうに、いい気持ちでした。バラの花はいつまでも、いつまでも、咲きつづけようとしているように見えました。――カイとゲルダは、そこにすわって、動物や鳥の絵本を見ていました。その時――教会の大きな塔で、時計がちょうど五時を打ちました。――ふと、カイが言いました。「……あっ、痛い！　胸のところでチクリとしたよ。こんどは目の中へ何かはいった」と言うのでした。

女の子は、男の子の頸（くび）を抱きました。男の子は、目をぱちぱちさせましたけれども、なんにも見つかりませんでした。「……もう出てしまったんだろう」と、男の子は言いました。ところが、出てしまったのではありません。それこそ、あの鏡、ほら、あの悪魔の鏡から飛びちった、ガラスのかけらの一つだったのです。わたしたちは、まだ忘れはしませんね。このよくない鏡は、すべての大きなもの、いいものが、小さく、みにくくうつり、悪いものや、いやなものが、はっきりと見え、どんなものでも、あらばかりがすぐ目につくようになるのでしたね。可愛そうに、カイの心臓に、そのかけらが一つはいったのです。まもなく、カイの心臓は、氷のかたまりのようになってしまうでしょう。もう、今では、痛くはありません、けれども、それはたしかに、はいっているのでした。（本文）

＊　　＊

さて、ここで最も大事なことの一つは、まず、「……女の子は、バラの花のことを歌った賛美歌を一つおぼえて、歌の中にバラの花のことが出るたびに、自分のバラの花のことを思い浮かべました。そして、男の子にそれを歌って聞かせました。男の子も一緒に歌いました。（中略）、そして、二人は手を取り合って、バラの花にキスをしました。そして、神様の明るいお日様を仰いで、そこにおさなごイエスさまがいらっしゃるように話しかけました。なんという楽しい夏の日々でしょう！　家の外でいきいきとしたバラの花にかこまれているのは、ほんとうにいい気持ちでした」とある。

まず、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」は、何よりも「バラの花」が大好きであったが、それ以上に、主人公の「カイ」という「男の子」がなおなお大好きであり、毎年、一緒にその「バラの花」を見ながら遊んでいたが、今年の夏は、さらに、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」は、「……バラの花のことを歌った賛美歌」を一つ覚えて、男の子にそれを歌って聞かせたり、また、男の子と一緒に歌ったりしたという、それら二人に共有の「記憶」こそが、まさに「最も大事なもの」であり、なぜなら、それらの「記憶」（バラの花その他）によってこそ、次の「魔法を使うおばあさん」の「魔法」（ゲルダのことを忘れてしまうという魔法）から解き放されるとともに、また、主人公の「カイ」という「男の子」も、悪魔の「鏡のかけら」から解き放されることになるが、その時の「キーワード」こそは、まさに二人で一緒に歌った賛美歌の「……バラの花　かおる谷間におわします　おさなごイエスさま！」という言葉であり、その言葉（賛美歌）によってこそ、主人公の「カイ」という「男の子」も、現実の世界へと戻ることができ得るのである。

＊　　＊

さて、次に大事なのは、「……教会の大きな塔で、時計がちょうど五時を打ちましたが、その時に、ふとカイは、「……あっ、痛い！　胸のところでチクリとしたよ。こんどは目の中へ何かはいったよ」と言うのでした。それこそは、あの悪魔の「鏡のかけら」であって、それによって、主人公の「カイ」という「男の子」の性格は、今までとは全く違って、「……どんなものでも、あらばかりがすぐ目につき、それを露骨に口にするような男の子に変心してしまうのである」。――さて、ここで「熟慮」すべきことは、この悪魔の「鏡のかけら」が主人公（カイ）の「目や心臓」に入ったのは、全くの「偶然」だったのか、それとも、雪の女王が意図的に「そうしたのか」という問題であり、もし、全くの「偶然」であれば、それによって、主人公（カイ）の悪化した「性格」を見て、主人公（カイ）をまさに「誘惑」（誘拐）し易くなったということであり、一方、雪の女王は、最初から主人公（カイ）という「男の子」に目を付けていたが、今のままの「無垢（善良）の心」では、自分（雪の女王）に強く抵抗をして、自分（雪の女王）に素直について来てくれないかも知れないと考えて、空中に漂っていた悪魔の「鏡のかけら」を主人公（カイ）の「目や心臓」に意図的に「入れる」ことによって、主人公（カイ）の「性格」を悪化させて、自分（雪の女王）の「誘惑」（誘拐）に素直について来るようにしたという「考え方」である。むろん、どちらでも可能であり、また、どちらであれ、雪の女王は、一度、主人公（カイ）の部屋（へや）の「……窓の方にむいてうなずきながら、手まねきをした」ことがあり、それは、間違いなく、主人公の「男の子」（カイ）にはっきりと「興味や関心」を示したという「確たる証拠」となるものである。それゆえ、雪の女王は、どのような手段を使っ

ても、また、使わなくても、結局は、主人公の「男の子」（カイ）を「雪の女王の城」へと連れ去ることになるのである。

四、主人公（カイ）のその「変心」ぶり

さて、カイは、「……なぜ、泣いているの！」と、たずねました。「……そんないやなかおをしてさ、僕はもう、なんともないんだよ。チェ！」、それからまた、急に叫びました。「……そこのバラの花は、虫にくわれていらあ！　それから、ほら、あっちのは、ねじれているよ。きたならしいバラばかりだなあ。植えてある箱みたいに、うすぎたないや」。こう言って、足ではげしく箱をけりました。そして、二つのバラの花をむしり取ってしまいました。「……カイちゃん、なにをするの！」と、女の子は叫びました。カイは、ゲルダの驚くのを見ますと、もう一つバラの花をむしってしまいました。そして、可愛らしいゲルダのそばをはなれて、自分のうちの窓の中に飛びこんでしましました。

あとで、ゲルダが絵本を持って行きますと、カイは、そんなものは、赤ん坊の見るものだと言いました。また、おばあさんがお話をはじめますと、ひっきりなしに、「……だって、だって！」と言って、じゃまをしました。――そればかりではありません。すきをみては、おばあさんのうしろへまわって、めがねをかけて、おばあさんの口まねをするのでした。それが、そっくりだったものですから、みんなはカイのするのを見て、大わらいしました。まもなく、カイは近所じゅうの人たちの話しぶりや、歩きぶりをまねするようになりました。その人たちの癖や、よくないところならば、なんでもまねすることができました。すると人々は、「……たしかに、あの子は、すばらしい頭をもっている」と、言いました。けれども、それはじつは、目の中にはいったガラスのせいであり、また、心臓の中に刺さっているガラスのせいだったのです。カイを心から愛しているゲルダを、からかうようになったのも、そのためだったのです。（本文）、――さて、主人公（カイ）という「男の子」の性格が、今までとは全く変わってしまったという、実に様々な「実例」であるが、それは、次へとなおも続くのである。

＊　＊

遊びかたも、今までとは、すっかりちがって、たいそう、分別くさくなりました。――ある、雪の降りしきる冬の日でした。カイは大きなレンズを外に持ちだして、青い上着のすそをひろげて、その上に雪のひらを降らせました。「……ゲルダちゃん、このレンズをのぞいてごらん」と、カイは言いました。見ると、雪のひとひら、ひとひらが、ずっと大きくなって、きれいな花のように、そうでなければ、六角形の星のように見えました。それはほんとうに美しいものでした。「……ねえ、ずいぶんじょうずにできているだろう！」と、カイは言いました。「……ほんとうの花なんかより、ずっと面白いよ。どれ一つだって、まちがったところはないんだからね。みな、きちんとしているんだ。ただ、溶けさえしなければいいんだがなあ！」と言いました。（本文）、――さて、主人公（カイ）という「男の子」は、大の「仲良し」の女主人公の「ゲルダ」という「女の子」とあれこれ一緒に無邪気に楽しく遊ぶことよりも、むしろ「分別くさく」（それは「あれこれ理屈をこねくりまわすような男の子）になってしまい、「……カイを心から愛しているゲルダを、（あれこれ）からかうようにもなってしまった」ということである。

五、カイの橇と雪の女王の大きな橇

それからすこしたって、カイは大きな手袋をはめ、橇を肩にかついで外に出ました。そして、ゲルダの耳もとに顔を寄せて言いました。「……僕ね、みんなの遊んでいる広場で、橇に乗ってもいいと言われたんだよ」。そして、そのまま、さっさと行ってしまいました。

広場では、乱暴な子供たちが、時々、自分の橇をお百姓の車にむすびつけて、かなり遠くまでいっしょにすべっていました。そうすると、面白いようによく走りました。こうしてみんなが、楽しく遊んでいますと、そこへ、一台の大きな橇がやってきました。それは全体がまっ白に塗ってあって、その中に、粗い白い毛皮にくるまって、白い粗い帽子をかぶった人が、すわっていました。その橇は、広場を二度まわりました。カイはすばやく、自分の小さな橇を、それにむすびつけました。するとすぐ、いっしょにすべりだしました。橇は、だんだん早くなって、またたくうちに、隣りの通りへ、はいって行きました。その時、橇を走らせていた人が、ふりかえって、カイにやさしくうなずきました。なんだか二人は、もう前から知っているような気がしました。カイが自分の小さな橇を、ほどこうとしますと、そのたびに、その人が、ふりむいてうなずくので、カイはついそのまま、またすわってしまうのでした。そのうちに、二人は町の門を走りぬけてしまいました。雪は、ますますはげしく、うずをまいて降ってきました。もう手をのばしたくらいのところも見えなくなりました。それでも、橇は、ぐんぐん走りつづけました。カイは、大きな橇から、はなれようと思って、いそいで綱をゆるめました。けれども、それは、なんにもなりませんでした。自分の小さな橇は、大きい橇にぴったりくっついていて、いっしょに、風のように早く走って行きます。カイは大きな声をあげましたが、だれも聞いてくれるものはありませんでした。雪はますます降りしきって、橇はどんどん、飛ぶように走って行きます。ときには、堀や、生垣の上をとび越して行くらしく、はねあがることもありました。カイはもう、すっかりこわくなって、「主の祈り」を唱えようとしました。ところが、頭に浮かんでくるのは、九々の大きな表ばかりでした。（本文）

＊　＊

さて、ここで「大事な言葉」は、「……雪の女王の橇は、広場を二度まわりました。カイは、素早く、自分の小さな橇をそれにむすびつけました。するとすぐ一緒にすべり出しました。橇はだんだん早くなって、またたくうちに隣りの通りへ入って行きました。その時、橇を走らせていた人が、ふりかえって、カイにやさしくうなずきました。なんだか二人は、もう前から知っているような気がしました。カイが自分の小さな橇をほどこうとしますと、そのたびに、その人がふりむいてうなずくので、カイはついそのまま、またすわってしまうのでした。（中略）、雪はますます降りしきって、橇はどんどん飛ぶように走って行きます。カイはもうすっかりこわくなって、『主の祈り』を唱えようとしましたが、頭に浮かんで来るのは、九々の大きな表ばかりでした」とある。

まず、雪の女王の橇は、（ただ単に通り過ぎるのではなく）、広場を（わざわざ）二度まわりましたとある。これは、明らかに、主人公（カイ）の「……誰か自分の橇を引っ張ってくれないかなあ」という、そのような「心」を巧みに「誘惑」（誘って）いるのであり、二度でだめなら、三度でもまわって、主人公（カイ）が自分の小さな橇をそれにむす

びつけるのを待ち、むすびつけたら、（それで決定であり）、雪の女王は、すぐさま一緒にすべり出し、そして、橇はどんどん早くなって、またたくうちに隣りの通りへ入って行くと、「……その時、橇を走らせていた人が、ふりかえって、カイにやさしくうなずきました。なんだか二人は、もう前から知っているような気がしました」とある。この「……ふりかえって、カイにやさしくうなずきました」という「行為」は、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、主人公（カイ）に向かって、まさに「……大丈夫、何も心配しなくてもいいのよ」と言っているのであり、それは、つまり、主人公（カイ）のいわば「心配や恐怖心」などを取り除いているのであり、そして、「……カイが自分の小さな橇をほどこうとしますと、そのたびに、その人がふりむいてうなずくので、カイはついそのまま、またすわってしまうのでした」とあるが、これも全く同じことであり、「……大丈夫、心配しなくてもいいのよ」と言われているとともに、（もう一つ、敢えて言えば）、いわば「そのような一種の魔法のようなものをかけられている」ことにもなるのだろう。それゆえ、主人公（カイ）は、「……自分の小さな橇をほどこうとしても、そのたびに、雪の女王にやさしくうなずかれると、カイはついそのまま、またすわってしまうのでした」となるのである。さらに、「……カイはもうすっかりこわくなって、『主の祈り』を唱えようとしましたが、頭に浮かんで来るのは、九々の大きな表ばかりでした」とあるが、これも、主人公（カイ）の「心」は、すでに悪い方へと「変心」（悪化）しているのであり、それゆえ、（キリスト教の）「主の祈り」を唱えようとしても、それを「想い出す」ことも出来ず、「……頭に浮かんで来るのは、ただ（分別くさい）九々の大きな表ばかりでした」となるのである。

六、雪の女王の大きな橇に乗せられて

さて、雪のひらは、だんだんに大きくなって、とうとうしまいに、たくさんの大きな白いニワトリのようになりました。そして、それが、急に両側にとびのいたかと思うと、大きな橇がとまりました。そして、橇を走らせてきた人が立ちあがりました。見れば、毛皮も帽子も雪でできていました。その人は、せいのすらりと高い、輝くばかりに白い女の人でした。この人こそ、雪の女王だったのです。「……ずいぶん遠くまできたのよ」と、雪の女王は言いました。「……おや、ふるえているのね。わたしの白クマの毛皮の中におはいり」。こう言って、カイを自分の橇に乗せて、毛皮をかけてやりました。カイはまるで、雪の吹きだまりの中へ、はいったような気がしました。「……まだ、ふるえているの？」と、雪の女王はたずねました。そして、カイの額にキスをしました。ああ、その冷たいこと！　氷よりも、もっと冷たくて、氷のかたまりになりかかっていたカイの心臓に、じかに、しみとおりました。そして、いまにも、死にそうな気がしました。――しかし、それはほんのつかのまで、すぐ気持ちがよくなりました。もう、まわりの寒さも気にならなくなりました。「……僕の橇！　僕の橇を忘れないでね！」、カイが一番はじめに思いだしたのは、橇のことでした。橇は一羽の白いニワトリにむすびつけられました。ニワトリは、橇を背中に乗せて、あとから飛んで来ました。雪の女王はカイに、もう一度キスをしました。すると、カイはゲルダのことも、おばあさんのことも、うちにいるみんなのことも、忘れてしまいました。「……もう、キスをしてあげないよ」と、雪の女王は言いました。「…

…今度キスをすると、お前は死んでしまうからね」と言うのでした。（本文）

＊　＊

さて、「……雪のひらは、だんだんに大きくなって、とうとうしまいに、たくさんの大きな白いニワトリのようになりました。そして、それが急に両側に飛び退いたかと思うと、大きな橇が止まりました」とある。――まず、雪の女王の橇は、一体、何が引っ張っているのかと問えば、それは、ふつうに考えれば、動物の「トナカイ」になるかと思うが、ここで特に「熟慮」すべきことは、次のようなことである。――例えば、雪の女王というのは、次のようなものであり、それは、「……外には雪のひらが二つ三つ舞っていましたが、その中で一番大きいのが、花の箱のふちにのっかりました。すると、その雪のひらは、みるみるうちに大きくなって、とうとう、一人の女の人になりました。着物は、とてもうすい白い紗でできているようですが、実は何百万という、星のようにきらきらする雪のひらでできているのでした。その人は、見れば見るほど美しくほっそりとしていました。でも、からだは氷でできているのでした。まぶしい、きらきらする氷ですが、それでも、その人は、生きているのでした」とある。また、「……雪のひらは、だんだんに大きくなって、とうとうしまいに、たくさんの大きな白いニワトリのようになりました」とあり、さらに、「……見れば、毛皮も帽子も雪でできていました」とある。

そうだとすれば、雪の女王の「大きな橇」も、また、それを引っ張る「トナカイ」（或いは「白いニワトリ」）も、むろん、雪の女王も、また、彼女が身に付けている様々な「毛皮や帽子」なども、その他、それらすべては「雪のひら」から変化したものであり、それゆえ、それらすべては「雪と氷」からできていることになるのです。――だとすれば、雪と氷を「支配」（コントロール）しているのは、まさに「雪の女王」ということになり、そして、その「雪の女王」という存在は、まさに「雪のひら」を何にでも変化させ得る「魔力」（魔法）を持っていることにもなるのだろう。つまり、「雪の女王」というのは、すなわち、雪の中の雪、まさに「雪の女王」（或いは「雪の精霊」）そのものになるということである。

＊　＊

次に、自分の「小さな橇」に乗っていた主人公の「カイ」は、雪の女王の「大きな橇」に引っ張られて、「……ずいぶん遠くまできたのよ」となるが、また、「……おや、ふるえているのね。わたしの白クマの毛皮の中におはいり」。こう言って、カイを自分の大きな橇に乗せて、自分のそばに座らせると、毛皮をかけてやりました。カイはまるで雪の吹きだまりの中へ入ったような気がしました。（それは、その毛皮も雪と氷でできているからであり）、「……まだ、ふるえているの？」と、雪の女王はたずねました。そして、カイの額にキスをしました。ああ、その冷たいこと！　氷よりも、もっと冷たくて、氷のかたまりになりかかっていたカイの心臓に、じかに、しみとおりました。そして、いまにも、死にそうな気がしました。――しかし、それはほんのつかのまで、すぐ気持ちがよくなりました。もう、まわりの寒さも気にならなくなりましたとある。――これは、雪の女王の「キス」によって、まさに「魔法がかかった」ということである。

また、「……カイが一番はじめに思いだしたのは、橇のことでした。橇は一羽の白いニワトリに結びつけられました。ニワトリは、橇を背中に乗せて、あとから飛んで来ました」とある。――むろん、この「一羽のニワトリ」も、まさに「雪のひら」からできているも

のであるが、それでは、なぜ「ニワトリ」なのか？　もちろん、空を飛ぶ「鳥」は、実に多種多彩と存在するが、その中で、雪のように「色の白い鳥」はと問えば、例えば、白鳥やシラサギ或いは白いハトやその他などがすぐに思い浮かぶが、ただ白鳥やシロサギでは「ひとひらの雪」としては少し大き過ぎるのか、また、白いハトでは少し小さ過ぎるのか、その結果として、「……雪のひらは、だんだんに大きくなって、とうとうしまいに、たくさんの大きな白いニワトリのようになりました」となるのか？　ただ「ニワトリ」は、ふつう空を飛ぶことのできない鳥である。それゆえ、ここで大事なのは、実際の「ニワトリ」は、ふつう空を飛ぶことはできないが、しかし、「雪のひら」から出来ている「ニワトリ」であれば、いくらでも「空を飛ぶこと」はでき得るのである。

さて、最後は、雪の女王の「額へのキス」であるが、一回目の「キス」では、主人公の「カイ」は、寒さを感じなくなり、そして、二回目の「キス」では、ゲルダのことも、おばあさんのことも、うちにいるみんなのことも、忘れてしまいました。そして、「……もう、キスをしてあげないよ」と、雪の女王は言いました。「……今度キスをすると、お前は死んでしまうからね」と言うのでした。――これは、一体、どういうことなのか？　まず、考えられることは、主人公の「カイ」が雪の女王に最初に「額にキスされた」時、主人公の「カイ」は、「……ああ、その冷たいこと！　氷よりも、もっと冷たくて、氷のかたまりになりかかっていたカイの心臓に、じかに、しみとおりました。そして、いまにも、死にそうな気がしました」とある。

つまり、ふつうであれば、雪の女王に「額にキスされる」と、多くの場合、恐らく、凍って死んでしまうのかも知れない。――それは、例えば、有名な「雪女」であれば、相手に息を吹きかけると、相手は「凍って死んでしまう」のと全く同じことであり、ただ、雪の女王は、主人公の「カイ」を殺す気はないのであり、むしろ、一緒に住むことを考えているのであり、それゆえ、寒さに震えている主人公の「カイ」の「額にキス」をして、いわゆる「寒さを感じない」ようにしたのである。また、二回目の「キス」では、ゲルダのことも、おばあさんのことも、うちにいるみんなのことも忘れてしまいましたとあるが、それは、当然のことながら、主人公（カイ）の「家に帰りたいという気持ち」を取り除くためである。そして、「……もう、キスをしてあげないよ」と、雪の女王は言いました。「……今度キスをすると、お前は死んでしまうからね」と言うのでした。これは、つまり、今度、主人公の「カイ」の「額にキス」をする時は、それは、まさに「カイを殺す時になる」ということである。

七、雪の女王と主人公（カイ）はどこへ……

さて、カイは、雪の女王をじっとながめました。雪の女王は、それは美しい人でした。これ以上、賢い、やさしい顔は、考えられませんでした。いつか窓の外から、手まねきをした時のように、氷でできているとは、とても思われません。カイの目には、雪の女王はまったく申しぶんのない美しい人に見えました。もう、すこしも、こわくありません。そこで女王に、算数の暗算が、それも、分数の暗算ができることや、国の平方マイルのことや、「人口はいくら？」のことなどを話しました。女王はしじゅう、にこにこしていました。けれども、カイは、自分の知っていることは、まだまだ、十分ではないような気がし

ました。そして、広い、広い大空を見あげました。雪の女王はカイをつれて、黒い雲の上を高く高く、どこまでも飛んで行きました。あらしが、ざあざあ、ごうごう！　と鳴っています。それはまるで、昔の歌をうたっているようでした。二人は、森や、湖や、海や、陸を越えて飛んで行きました。はるか下の方では、冷たい風がピューピュー吹いて、オオカミがほえていました。雪がきらきら光っています。その上を黒いカラスが、鳴きながら飛んで行きました。一方、はるか上の方には、月が大きく明るく輝いていました。その月をカイは、長い長い冬の夜（よる）じゅうながめていました。そして、昼の間は、雪の女王の足もとで眠っていたのです。（本文）

＊　　＊

まず、雪の女王の「容姿・容貌」は、「……それは美しい人でした。これ以上賢いやさしい顔は考えられませんでした。いつか窓の外から手まねきをした時のように、氷でできているとはとても思われません。カイの目には、雪の女王は全く申し分のない美しい人に見えました」とある。――さて、ここで大事なことは、雪の女王は、ただ単に「美しい」だけの人ではなく、実は、「……これ以上賢いやさしい顔」は考えられませんとある。つまり、雪の女王というのは、非常に「賢い」人（女性）でもあったのである。

一方、主人公の「カイ」は、「……もう少しも怖くなくなり、そこで女王に算数の暗算が、それも分数の暗算ができることや、国の平方マイルのことや、その他（人口はいくら？）のことなどを話しました」とある。――そうだとすれば、主人公の「カイ」という「男の子」は、実は「算数」が（かなり）得意ということになり、そのカイの「算数の暗算」（特に「分数の暗算」）その他などの話を聞いている時は、雪の女王は、終始、にこにこしていたということである。――これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、そもそも、雪の女王という人は、一体、何のために「カイ」という「男の子」を連れてきたのかと問えば、その一つは、雪の女王という人は、雪の女王の「お城」のその中でたった一人でずっと住んでいるのであり、それゆえ、どうしても「孤独」という問題がついてまわることになるが、そのために、誰か「話し相手」を求めたということもあるだろうが、それ以上に、雪の女王が求めたものは、それは、まさに「賢くて頭のいい子供」ということであり、それにぴったりと合っていたのが、まさに主人公の「カイ」という男の子であり、特に「算数」が得意だというのも気に入った理由になるのだろう。というのも、雪の女王は、主人公（カイ）の「算数の暗算」（特に「分数の暗算」）その他などの話を聞いている時こそ、雪の女王は、終始、にこにこしていたという「事実」があるからである。

それはともかく、「……雪の女王は、カイを連れて、黒い雲の上を高く高くどこまでも飛んで行きました。あらしが、ざあざあ、ごうごう！　と鳴っています。それはまるで昔の歌をうたっているようでした。二人は、森や、湖や、海や、陸を越えて飛んで行きました。はるか下の方では、冷たい風がピューピュー吹いて、オオカミがほえていました。雪がきらきら光っています。その上を黒いカラスが鳴きながら飛んで行きました。一方、はるか上の方には、月が大きく明るく輝いていました。その月をカイは、長い長い冬の夜（よる）じゅうながめていました。そして、昼の間は、雪の女王の足もとで眠っていた」とある。

＊　　＊

それでは、二人が最終的に辿り着いた場所は、一体、どこになのかと問えば、まず、雪の女王は、「夏のテント」をラップランドに張るということであるが、雪の女王のちゃん

とした「お城」は、もっと「北極」近くにある、スピッツベルゲンという島にあるということである。しかし、二人が最終的に辿り着いた地点は、そこではなく、実は、次のようなところである。――まず、トナカイは、「……雪の女王は、ラップランドに夏のテントを張るが、雪の女王のほんとの城は、もっとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」と言い、そして、ラップ人の女は、「……ここ（ラップランド）から百マイル以上も北のフィンマルケンというところまで行かなけりゃだめだよ。なぜなら、雪の女王は、今、そこにおいでだよ」となり、そこに「雪の女王のお城」があるのである。つまり、雪の女王は、一カ所にずっと留まっているのではなく、あちこちに移動しているのであり、今は、フィンマルケンというところにある「雪の女王のお城」にいるのである。

ただ、気になるのは、「……（夜空には）月が大きく明るく輝いていましたが、その月をカイは、長い長い冬の夜（よる）じゅうながめていました。そして、昼の間は、雪の女王の足もとで眠っていたのです」とあるが、これは、一体、どういうことを意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、雪の女王は、今は、フィンマルケンというところにある「雪の女王のお城」にいるという。……もちろん、夏の季節であれば、ある程度は「雪や氷」なども溶けて、それなりの「動物や植物」などが見られるかも知れないが、しかし、冬の季節ともなれば、それこそ、見渡す限り、その大自然の風景は、もうほとんどすべて「雪と氷の世界」になってしまうだろうし、また、零下何十度というまさに「猛吹雪（もうふぶき）」という日々を多くなるかと思う。そうだとすれば、主人公の「カイ」という「男の子」は、冬の間は、外に出るということもなく、ほとんど「お城の中」で過ごしていたことになるかと思う。

それに加えて、大事なことは、なぜ、主人公の「カイ」は、「……昼間寝て、夜起きているのか？」という問題であるが、雪の女王というのは、もともと「雪と氷」とで出来ている存在であり、それゆえ、雪や曇りの「昼間」であればよいが、太陽がギラギラと光り輝く「昼間」は、なるべく避けているとともに、主人公の「カイ」にも、太陽が光り輝く「昼間」は、なるべく見せないようにしているのである。それは、その太陽のギラギラと光り輝く「光と熱（エネルギー）」とによって、主人公（カイ）にかけられた雪の女王の「魔法」（魔力）が解けてしまう可能性もあるからである。それゆえ、昼間は、なるべく寝かせるようにして、そして、夜は、晴れれば、オーロラをはじめ、月や星などの様子をながめながら、雪の女王から課せられている何らかの「課題」（難題）などをあれこれ深く「思考」（思索している）ことにもなるのだろう。

＊　　＊

三、第三のお話

魔法を使うおばあさんの花園

三、第三のお話

魔法を使うおばあさんの花園

一、冒頭の文章

まず、冒頭の文章は、「……さて、カイがいなくなってから、小さいゲルダはどうしたでしょうか。それにしても、カイはどこへ行ってしまったのでしょう？　――知っている人はだれもありませんでした。教えてくれる人もありませんでした。男の子たちの話では、カイが自分の小さな橇を、大きなりっぱな橇にむすびつけて、通りを走りぬけて、そのまま町の門から出て行くのを見たというだけです。だれ一人、カイのいるところを知るものはありませんでした。みんなは、涙を流しました。ゲルダは、深い悲しみに沈んで、いつまでも泣いていました。――それで人々は、カイは死んでしまったのだ、町のすぐそばを流れている川に落ちて、おぼれてしまったんだと言いました。ああ、くる日も、くる日も、ほんとうに長い、暗い冬の日がつづきました。――それでも、とうとう、暖かいお日様の輝く春になりました。「……カイちゃんは、死んで、どこかへ行ってしまったのよ」と、小さいゲルダは言いました。「……わたしは、そうは思わないよ」と、お日様は言いました。「……カイちゃんは、死んで、どこかへ行ってしまったのよ」と、ゲルダはツバメに言いました。「……僕はそうは思いませんよ」と、ツバメは答えました。こうして、しまいには、小さいゲルダも、そうは思わなくなりました」とある。（本文）

＊　＊

さて、ある日、突然、一人の「男の子」が行方不明になってしまった。これは、今日でも「大変な事件」であり、それゆえ、警察をはじめ、いろいろな人たちがその「男の子」を探し始めることになるが、それとともに、その時の状況を一緒に遊んでいた子供たちから聞いてみると、その男の子たちの話では、「……カイが自分の小さな橇を、大きなりっぱな橇にむすびつけて、通りを走りぬけて、そのまま町の門から出て行くのを見たというだけ」であり、だれ一人、カイのいるところを知るものはありませんでした。みんなは、涙を流しました。もちろん、「カイ」大好きの大の遊び友だちの「女の子」（ゲルダ）も、深い悲しみに沈んで、いつまでも泣いていました。そして、とうとう人々は、「……カイは死んでしまったのだ、町のすぐそばを流れている川に落ちて、溺れてしまったんだ」と言うようになってしまったのです。そして、くる日も、くる日も、ほんとうに長い、暗い冬の日がつづきました。――それでも、とうとう、暖かいお日様の輝く春になりました。しかし、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」は、「……カイちゃんは、死んで、どこかへ行ってしまったのよ」と、思い詰めていて、それを口にすると、「……わたしは、そうは思わないよ」と、（意外にも）お日様はそう言うのでした。しかし、女主人公の「ゲルダ」は、相変わらず、「……カイちゃんは、死んで、どこかへ行ってしまったのよ」と、そう思い込んでいるので、それをツバメに言うと、今度も、「……僕はそうは思いませんよ」と、ツバメも答えるのでした。そのようなことを繰り返していくうちに、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」も、やがて、「……カイちゃんは、死んだのではなく、きっと生きていて、どこかにいるんだわ」と、そう想うようになっていくのである。

二、川の岸辺へと行ってみる

ある朝、ゲルダは、「……わたし、あの新しい赤い靴をはいて行きましょう」と、言いました。「……あれは、カイちゃんにも、まだ見せなかったわ。あれをはいて、川へ行って、カイちゃんのことをたずねてみよう」と。そして、まだ夜が明けたばかりでしたが、ゲルダは、眠っているおばあさんに、そっとキスをすると、赤い靴をはいて、たった一人で、町の門を出て、川へ行きました。「……あなたが、わたしのお友だちを取ってしまったというの、ほんとうなの？　もしカイちゃんを、かえしてくれたら、この赤い靴を、あなたにあげることよ！」というと、不思議なことに、なんだか川の波が、うなずいたような気がしました。そこで、一番大切にしていた赤い靴をぬいで、両方とも川の中へ投げました。ところが、靴は岸の近くに落ちたものですから、小さい波が、すぐまたそれを岸のゲルダのところへ、押しかえしてきました。それはまるでゲルダの一番たいせつにしているものを取るのは、可哀そうだ、と言っているようでした。なぜって、川はカイを取ってしまったのではないのですものね。けれども、ゲルダのほうでは、靴の投げかたが近すぎたのだと思いました。そこで、芦の中に浮かんでいるボートに乗って、その一番はずれまで行って、そこから靴を投げました。ところが、そのボートは、しっかりつないでなかったものですから、からだを動かしたとたんに、するすると岸をはなれました。それに気がついて、いそいで岸にあがろうとしましたが、こちらのはしにもどらないうちに、もうボートは一メートル以上も岸からはなれていました。そして、そのまま、だんだん早くすべりだしました。（本文）

＊　　＊

さて、ある朝、ゲルダは、「……わたし、あの新しい赤い靴をはいて行きましょう」と、言いました。「……あれは、カイちゃんにも、まだ見せなかったわ。あれをはいて、川へ行って、カイちゃんのことをたずねてみよう」と。そして、まだ夜が明けたばかりでしたが、ゲルダは、眠っているおばあさんに、そっとキスをすると、赤い靴をはいて、たった一人で、町の門を出て、川へ行きました」とある。――まず、アンデルセンの作品の中には、非常に頻繁に「靴」という「アイテム」（小道具）が登場してくるが、例えば、有名な『赤い靴』をはじめ、『マッチ売りの少女』の中にも、最近まで母親がはいていた大きな「木の靴」という形で出てくるものであり、それは、やはり、アンデルセンの「父親」が、実は貧しい「靴職人」であったこととも関係はあるのだろう。

それはともかく、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」は、新しい「赤い靴」をはいて、たった一人で、町の門を出て、川へと行きました。そして、「……あなたが、わたしのお友だちを取ってしまったというの、ほんとうなの？　もしカイちゃんを、かえしてくれたら、この赤い靴を、あなたにあげることよ！」というと、不思議なことに、なんだか川の波が、うなずいたような気がしました、とある。――例えば、川という存在が「赤い靴」をもらってそれを喜ぶかと問えば、もちろん、喜ぶはずがない。それでは、これは、一体、何なのかと問えば、それは、女主人公の「ゲルダ」にとって「一番大切にしていた赤い靴」（それは「彼女にとっての一番の宝物」）をあげるから、「……私の（何よりも大切な）カイちゃんを、かえして！」という「意味合い」になるのである。そして、最初は、その靴を岸の近くに投げたので、すぐまた岸に戻ってきてしまった。そこで今度は、「……芦の

中に浮かんでいたボートに乗って、その一番はずれまで行って、そこから靴を投げました。ところが、そのボートは、しっかりとつないでなかったので、からだを動かしたとたんに、するすると岸をはなれました」となるのである。

つまり、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」が、川に「赤い靴」を投げるという（少し不自然な）行為は、結局、女主人公の「ゲルダ」を「ボート」へと乗せるためのものであり、それによって、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」は、その「ボート」に乗ったまま、どこへとも知れず、川をどんどん下流へと流されていくという、そういうハラハラドキドキするような展開がはじめて可能になるのであり、一方、若しも小さな女の子が自ら「歩きまわってカイを捜すというような展開」であれば、その「行動範囲」は余りにも限られた狭いものになってしまい、物語（ストーリー）としても広がりのないつまらないものになってしまうのである。

三、ゲルダを乗せたボートはそのまま川を下って……

さて、小さいゲルダは、びっくりして、泣きだしました。けれども、スズメたちのほかは、だれも聞いているものはありませんでした。といってスズメたちでは、ゲルダを岸につれて行くことはできません。そこで、岸にそって飛びながら、なぐさめるように、「……わたしたちはここよ！　わたしたちはここよ！」と、さえずりました。ボートは、流れのまにまに、川をくだって行きました。ゲルダは、靴下のまま、じっとボートの中にすわっていました。小さい赤い靴はあとから流れてきました、けれども、ボートのほうが、早いので、追いつくことはできません。

川の両岸はきれいな景色でした。美しい花や、古い木々や、羊や牛のいる丘が見えました。けれども、人影はさっぱりありませんでした。「……もしかしたら、この川が、カイちゃんのところへ、わたしをつれて行ってくれるかもしれないわ」と、ゲルダは思いました。そう思うと、気もはればれとなって、ボートの中に立ちあがって、美しい緑の岸を、長いあいだながめていました。やがて、大きなサクラの園にさしかかりました。園の中には、赤と青に塗った奇妙な窓のある小さな家が一軒立っていました。屋根はわらぶきで、入り口には木の兵隊さんが二人立っていて、船で通る人たちに、担え銃の姿勢をしていました。ゲルダは、生きている兵隊さんだと思って、声をかけました。けれども、もちろん、返事をするはずはありません。そのうちに、川の流れがボートを岸に近づけてくれて、すぐそのそばまできました。（本文）

＊　＊

さて、最初は、大変なことになってしまったと、泣いていた女主人公の「ゲルダ」も、川を下りながら、スズメたちになぐさめられたり、また、川の両岸は、きれいな景色が広がり、例えば、美しい花や古い木々或いはまた羊や牛のいる丘などが見えましたが、一方、人影はさっぱりありませんでした。それでも、「……もしかしたら、この川が、カイちゃんのところへ、わたしをつれて行ってくれるかもしれないわ」と、そう思うと、ゲルダは、気もはればれとなって、心にも余裕ができてきて、ボートの中に立ちあがって、美しい緑の岸を長いあいだながめていたのでした。やがて、大きなサクラの園にさしかかり、そのサクラの園の中には、赤と青に塗った奇妙な窓のある小さな家が一軒立っていました。そ

れは、魔法を使う年老いたおばあさんの家でしたが、そのうちに、川の流れがボートを岸へと近づけてくれて、すぐそのそばまで来たということである。

四、魔法を使うおばあさんとの出遭い

さて、ゲルダは、もう一度、前よりも大きな声で叫んでみました。そうすると、家の中から、それはそれは年をとったおばあさんが、撞木杖にすがって出てきました。おばあさんは、きれいな花の絵をかいた大きな日よけ帽子をかぶっていました。「……おやまあ、可哀そうに！」と、おばあさんは言いました。「……こんな大きな、きつい流れの川を、よくまあこんな遠いところまできたものじゃな！」と、こう言っておばあさんは、水の中まではいってきて、撞木杖をボートにひっかけて、岸に引きよせました。そして、ゲルダを岸にあげてくれました。

ゲルダは、陸にあがれたので、うれしくはありましたが、この見たこともないおばあさんを、すこし気味わるく思いました。「……さあ、おいで。おまえはどこの子だね。そして、どうしてここへ来たのだね、わたしに話してごらん」と、おばあさんは言いました。そこで、ゲルダは、なにもかも話しました。おばあさんは、頸をふりながら、「……ふん、ふん！」と言って、聞いていました。ゲルダは、すっかり話してしまってから、もしやカイちゃんを見かけませんでしたか、とたずねました。すると、おばあさんは、そんな子はまだここを通らないよ、けれど、いまにきっとくるだろうから、そんなに心配しないがいい。サクランボでもたべたり、花でもながめたりしておいで、ここに咲いている花は、どんな絵本よりもきれいで、おまけに、その一つ一つがお話をすることもできるんだよ、と言いました、それから、ゲルダの手をひいて、小さい家の中にはいりました。そして、入り口の戸をしめました。（本文）

＊　＊

さて、ここで大事なことは、まず、「撞木杖」というのは、いわば「T型の杖」のことであり、また、きれいな「……花の絵をかいた大きな日よけ帽子」をかぶっていましたとあるが、その「花の絵」の中には「バラの花」もあったということであり、そして、その年老いたおばあさんは、「……おやまあ、可哀そうに！　こんな大きな、きつい流れの川を、よくまあこんな遠いところまできたものじゃな！」と、こう言って、おばあさんは、水の中まで入ってきて、撞木杖をボートにひっかけて、岸に引きよせては、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」を岸へと上げてくれました。

ゲルダは、陸に上がれたので、うれしくはありましたが、この見たこともないおばあさんを少し気味悪く思いました。が、おばあさんは、「……さあ、おいで。おまえはどこの子で、どうしてここへ来たのだね、わたしに話してごらん」と聞くので、ゲルダは、何もかも話したあとで、もしやカイちゃんを見かけませんでしたか、とたずねると、おばあさんは、そんな子はまだここを通らないが、いまにきっとくるだろうから、そんなに心配しないがいいよ。「……サクランボでもたべたり、また、花でもながめたりしておいで、ここに咲いている花は、どんな絵本よりもきれいで、おまけに、その一つ一つがお話をすることもできるんだよ」と言うのでした。それは、一体、なぜかと問えば、それは、この年老いたおばあさんは、実は「それらの花に魔法（の液）をかけていた」からであり、そし

て、ゲルダの手を引いて、小さい家の中に入り、入り口の戸を閉めたのでした。

五、魔法を使うおばあさんは……

窓はたいそう高いところにありました。そして、窓ガラスは赤やら青やら黄いろでしたので、お日様の光がいろいろの色になって、部屋の中に不思議な光がさしこんできました。テーブルの上には、それはみごとなサクランボがのっていました。ゲルダは、いくらでもお食べと、言われたものですから、好きなだけ食べました。こうして食べているあいだ、おばあさんは金のくしで、髪の毛をすいてくれました。すると、髪の毛は、波のようにちぢれて、美しく金色に輝きました。そして、バラの花のような、まるい可愛らしい顔のまわりにたれさがりました。――「……わたしは、とうから、おまえのような、可愛い女の子が、ほしかったんだよ」と、おばあさんは言いました。「……二人で、仲良くしていこうね！」、こうして、おばあさんがゲルダの髪をとかしているうちに、ゲルダはだんだん、仲よしのカイのことを忘れてゆきました。それは、このおばあさんが魔法を使うことができたからです。といっても、悪い魔法使ではなくて、ただ、自分の楽しみに、ちょっとばかり魔法を使うだけでした。この時も、可愛いゲルダを、手もとにおきたかっただけなのです。おばあさんは庭へ出て、撞木杖をバラの木の茂みの方に、のばしました。すると、いままであんなに美しく咲いていたバラの花が、たちまち黒い土の中に沈んでしまって、どこにそんなものがあったか、見てもわからなくなりました。おばあさんは、もしゲルダがバラの花を見たら、自分のうちのバラの花を思いだし、それから、カイのことを思いだして、ここから逃げだしはしないかと、それが心配だったのです。（本文）

＊　＊

さて、そのおばあさんの家の中は、高いところに窓があって、その窓ガラスは赤や青や黄色でしたので、お日様の光がいろいろの色になって、部屋の中に不思議な光として射し込んで来ました、とある。（これはいかにも魔法使いのおばあさんの部屋という感じになっていたのだろう）。そして、テーブルの上には、それは見事なサクランボがのっていて、いくらでもお食べと言われたので、好きなだけ食べたとある。（これはむろん、腹がすいていたからであるが、それとともに、このおばあさんへの疑いや恐怖心などもあまりなかったということである）。こうして食べているあいだ、おばあさんは金のくしで、髪の毛をすいてくれたが、髪の毛は、波のようにちぢれて、美しく金色に（魔法で変化して）輝きました。そして、バラの花のような、まるい可愛らしい顔のまわりに（髪は）垂れ下がりましたとある。（だとすれば、この女の子は丸い顔だったということである）。そして、「……わたしは、とうから、おまえのような可愛い女の子がほしかったんだよ」と、おばあさんは言いました。（この、可愛い女の子がほしかったというのは、このおばあさんの昔からの願望であるが、それとともに、ずっと一人暮らしなので、やはり誰か「話し相手」が欲しかったということにもなるのだろう）。そして、「……二人で、仲良くしていこうね！」といい、（これは女の子を監禁拘束するのではなく、むしろ自分の子供のように仲のよい関係を持ちたいということである）。こうして、おばあさんがゲルダの髪をとかしているうちに、ゲルダはだんだん、仲よしのカイのことを忘れてゆきました。それは、（一体、なせかと問えば）、このおばあさんは（実は）魔法を使うことができたからです。と

いっても、悪い魔法使いではなく、ただ、自分の楽しみにちょっとばかり魔法を使うだけでした。この時も、可愛いゲルダを手もとにおきたかっただけなのです。そこで、おばあさんは庭へ出て、撞木杖(しゅもくづえ)をバラの木の茂みの方にのばしました。すると、いままであんなに美しく咲いていたバラの花が、たちまち黒い土の中に沈んでしまって、どこにそんなものがあったか、見てもわからなくなりました。(それでは、なぜそのようなことをしたのかと問えば)、それは、おばあさんは、もしゲルダがバラの花を見たら、自分のうちのバラの花を思いだし、それから、カイのことを思いだして、ここから逃げだしはしないかと、それが心配だったということである。つまり、いつまでも可愛いゲルダを手もとにおいておきたかったからだということである。

六、おばあさんの庭にある花園

さて、ゲルダは、おばあさんにつれられて花園に出ました。――まあ、なんというよいかおりでしょう！　なんという美しさでしょう！　花という花が、それも四季とりどりの花が、みないっしょに、いまをさかりと、咲き乱れていました。どんな絵本だって、色どりがこんなに、はなやかで美しくはありません。ゲルダは、飛びあがって喜びました。そして、お日様が、せいの高いサクラの木のうしろに沈むまで、遊んでいました。それから、青いスミレの花をつめた赤い絹のふとんの、きれいなベッドの中で眠りました。そして、ご婚礼の日の女王様のように、美しい夢を見ました。

あくる日も、暖かいお日様の光を浴びて花といっしょに遊びました。――こうして、いく日もいく日もすぎました。ゲルダは、今ではどの花も、みんなおぼえてしまいました。けれども、どんなにたくさん花があっても、どうしても、まだなにか一つ足りないような気がしてなりませんでした。でも、それがなんの花だか、わかりませんでした。ある日のこと、ゲルダは、花の絵をかいたおばあさんの日よけ帽子をながめていました。その絵の中で一番美しいのは、バラの花でした。おばあさんは、庭のバラの花は残らず地面の下にかくしてしまいましたが、帽子にかいてあるバラの花を消すのを忘れていたのです。うっかりしていると、こうしたことがよくあるものですね。「……あら、そうだわ！」と、ゲルダは言いました。「……ここにはバラの花がないわ！」、こう言うと、花園の中へとびだしていって、なんどもなんども、捜してまわりました。けれども、一つも見つかりません。ゲルダは、とうとうそこにすわって、泣きだしてしまいました。すると、ゲルダの熱い涙が、ちょうどバラの木の沈んだ地面の上に落ちました。そして、温かい涙で土がうるおされますと、たちまち、バラの木が土を破って出てきて沈む前とおなじように、きれいな花を咲かせました。ゲルダはそれに抱きついて、花にキスをしました。そのとたんに、うちにあった美しいバラの花のことを思いだし、それといっしょに、小さいカイのことも思いだしました。(本文)

＊　＊

さて、主人公の「ゲルダ」は、おばあさんにつれられて花園に出ると、「……まあ、なんというよいかおりでしょう！　なんという美しさでしょう！　花という花が、それも四季とりどりの花が、みないっしょに、いまをさかりと、咲き乱れていました。どんな絵本だって、色どりがこんなに、はなやかで美しくはありません。ゲルダは、飛びあがって喜

びました。お日様が、せいの高いサクラの木のうしろに沈むまで、遊んでいました」とある。――むろん、この「花園」は、自然のままの草花ではなく、当然のことながら、おばあさんの「魔法がかかった花園」であり、だからこそ、「……なんというよい香りでしょう！　なんという美しさでしょう！　花という花がそれも四季色とりどりの花がみんな一緒に今が盛りと咲き乱れていて、どんな絵本でも色どりがこんなに華やかで美しくはありません」となるのである。――これは、むろん、主人公の「ゲルダ」をここにできるだけ引き留めておくためのものであるが、しかも、夜は、青いスミレの花をつめた赤い絹のふとんの、きれいなベッドの中で眠ったので、ご婚礼の日の女王様のように、美しい夢を見ました、と連なるのである。……それもこれも、みんないつまでも可愛いゲルダを手もとにおいておきたかったからに他ならないのである。

こうして、来る日も来る日もいく日も過ごしたので、女主人公のゲルダは、今ではもうどの花もみんな覚えてしまったが、どんなにたくさんの花があっても、どうしてもまだ何か一つ足りないような気がしてならず、でも、それが何の花だかわからないままでしたとある。――これは、非常に「大事な感覚」（自覚）であり、例えば、若い時の釈迦なども、他人から見れば、すべてのことに恵まれていた人であったが、しかし、それらのものでは、結局、釈迦の「心」（魂）を真に「心の底から満たすものではなかった」のであり、それゆえ、「心」（魂）を真に満たしてくれるものを求めて「出家」をしているのである。

また、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、何をどうしてよいかよく分からず、あれこれ無為に過ごしてしまうことも多いかと思うが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真に「深く満たしてくれるもの」であるが、ある日、ある時、それは何かを「切っ掛け」として、突然、「……あっ、これだ！」、「……自分が知らず識らずのうちに探し求めていたのは、ああ、これだったのだ！」というように、突然、あることに「思い至ること」はよくあることなのである。

それと同じように、ある日のこと、女主人公のゲルダは、花の絵をかいたおばあさんの日よけ帽子をながめているうちに、その絵の中で一番美しいのは、バラの花と気づくのである。つまり、おばあさんは、庭のバラの花は残らず地面の下に隠したが、帽子にかいてあるバラの花を消すのをうっかり忘れてしまったのである。「……あら、そうだわ！」と、ゲルダは言いました。「……ここにはバラの花がないわ！」と、こう言うと、花園の中へ飛び出していって、何度も何度も捜してまわりました。けれども、一つも見つかりませんでした。ゲルダは、とうとうそこにすわって泣き出してしまいました。すると、ゲルダの熱い涙が、ちょうどバラの木の沈んだ地面の上に落ちました。そして、温かい涙で土がうるおされると、（これは「心の底からの涙」によっておばあさんがかけた魔法が解けてしまい）、たちまち、バラの木が土を破って出てきて沈む前と同じよう、きれいな花を咲かせました。ゲルダはそれに抱きついて、花にキスをしました。（バラは真実の花でもあり、それへのキスによって記憶の魔法も解けて）、そのとたんに、うちにあった美しい「バラの花」のことを思い出し、それと一緒に「小さいカイ」のことも思い出しました、となるのである。

七、バラの花

さて、「……まあ、わたしったら、どうして、こんなところにぐずぐすしていたんでしょう！」と、ゲルダは言いました。「……カイちゃんを、捜しに出かけたのに。――ねえ、カイちゃんが、どこにいるか知らないこと？」と、バラの花にたずねました。「……カイちゃんは死んで、いなくなったと思う？」と聞くと、「……死んだのではありませんわ」と、バラの花は言いました。「……わたしたち、今まで地面の下にいましたの。そこには死んだ人が、みな、いましたけれど、カイちゃんは見えませんでしたもの」と答えると、「ありがとう！」と、ゲルダは言いました。そして、こんどは、ほかの花のところへいって、花びらの中をのぞきながら、「……カイちゃんがどこにいるか知らないこと？」と、たずねてまわりました。――ところが、どの花も日なたぼっこをしながら、うつらうつらと、自分たちのお話や物語ばかりを夢に見ていました。ゲルダは、そういうお話や物語を、たくさん聞かされましたが、カイのことを知っている花は一つもありませんでした。（本文）

＊　＊

さて、女主人公の「ゲルダ」は、おばあさんの魔法が解けると、「……まあ、わたしったら、どうして、こんなところにぐずぐすしていたんでしょう！」、「……カイちゃんを、捜しに出かけたというのに」と思い出して、そこでバラの花に、「……ねえ、カイちゃんが、どこにいるか知らないこと？」、「……カイちゃんは死んで、いなくなったと思う？」とたずねると、バラの花は、「……死んだのではありませんわ」、「……わたしたち、今まで地面の下にいましたの。そこには死んだ人がみないましたけれど、カイちゃんは見えませんでしたもの」と答えるのでした。――つまり、バラの花だけが「事実（真実）を語る」のであり、ほかの花々は、「……どの花も日なたぼっこをしながら、うつらうつらと自分たちのお話や物語ばかりを夢に見ているだけで、カイのことを知っている花は一つもありませんでした」となるのである。――つまり、バラの花だけが「事実（真実）を語る」のであり、ほかの花々は、自分たちの「お話や物語」ばかりを夢に見ていて、それを語るだけという「展開」になり、それには、例えば、オニユリ、ヒルガオ、マツユキソウ、ヒヤシンス、タンポポ、スイセンなどの、それぞれの花の自分たちの「お話や物語」などが次々と語られていくが、この場面は、映画やドラマ或いは漫画やアニメその他などでは、多くの場合、省略されることも多いかと思うので、それゆえ、ごく簡単に説明をして終わりにしたいと思う。

八、オニユリ

では、火のようなオニユリは、なんと言ったのでしょうか。「……ドン！　ドン！　という、太鼓の音がきこえるでしょう。あれは、たった二つの音しかないの。いつまでも、ドン！　ドン！　と。女たちの嘆（なげ）きの歌をお聞きなさい。坊（ぼう）さんたちの叫び声をお聞きなさい。――長い真っ赤（か）な衣装（いしょう）をまとったヒンズー人（インド人）の女が火葬のたきぎの上に立っています。炎が、女と死んだ夫のまわりに、燃えあがりました。けれど、ヒンズー人の女は、ぐるりととりまいている人々の中の一人の男の子のことを、心に思っていたのです。その男の目は、炎よりも熱く燃えています。その男の目の火は、やがて女のからだ

を灰に焼きつくす炎よりも、もっと強く女の心を燃やします。（女の）心の炎は、火葬の炎の中で、滅びてしまうでしょうか？」、「……そんなこと、わたしには、わからないわ」と、ゲルダは言いました。「……これがわたしのお話なの」と、火のようなオニユリは言いました。（本文）

＊　　＊

まず、このヒンズー人の女は、生きているのか、それとも、死んでいるのか、よく分からない。また、一人の男の子は、この女の子供（息子）なのか、それとも、何か恋人（愛人？）なのか、それもよく分からない。――例えば、女の人も夫も死んでいて、その二人の親の「火葬」される様子を、一人の男の子（息子）が熱い思いで見守っているという状況なのか？　それとも、この女の人は、まだ生きていて、生きながら火葬されようとしているのか？　それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、この女の人は、何か「浮気や不倫」のような「罪」を犯していて、そのために、まさに「火あぶりの刑」になろうとしているが、その「不倫相手」こそは、まさに「一人の男の子」であり、ヒンズー人の女は、ぐるりと取り巻いている人々の中のたった「一人の男の子」のことだけを心に思っているのであり、一方の、その男の子の目は、炎よりも熱く燃えていて、その男の目の火は、やがて女のからだを灰に焼きつくす炎よりも、もっと強く「女の心」を燃やします。その燃え上がる（女の）「心の炎」は、火葬の炎の中で滅びてしまうのでしょうか、それとも、滅びずに男の心の中に残るのでしょうか？」ということであり、それに対して、「……そんなこと、わたしにはわからないわ」と、ゲルダは言うのでした。――これは、ちろろん、火のような「オニユリ」という花から「連想」（イメージ）される「話」ということになるのだろう。

九、ヒルガオ

次に、ヒルガオは、「……狭い山道の上に突き出るように、昔の騎士の城がそびえています。茂ったツルニチニチソウが古びた赤い石壁の上を、葉を一枚一枚かさねながら、高いバルコニーのところまで、はいあがっています。そのバルコニーに美しい姫君が立っています。そして、手すりによりかかって、下の道を見おろしています。どのようなバラの花も、この姫君ほど清らかで美しくはありません。風に運ばれてくるリンゴの花も、この姫君ほどかろやかではありません。おお、美しい絹の着物がさらさらと鳴っています！」、そして、姫君は、「……あの方は、こないのでしょうか？」と言うので、「……あなたのおっしゃるの、カイちゃんのこと？」と、ゲルダはたずねました。「……わたしは、ただわたしのお話を、わたしの夢をお話ししただけよ」と、ヒルガオは答えました。（本文）

＊　　＊

さて、今度は、狭い山道の上に突き出るように、昔の騎士の城が聳（そび）えていて、茂ったツルニチニチソウが古びた赤い石壁の上を、高いバルコニーのところまで這い上がっています。その城の高い「バルコニー」には、どのようなバラの花よりも美しい姫君が一人立っていて、手すりによりかかって、下の道を見おろしながら、「……あの方は、こないのでしょうか？」と、昼の間、ずっと「美しく咲いた」まま、ひたすら「恋しい人」を待っているという情景であるが、これも、やはり「ヒルガオ」という花から「連想」（イメージ）

される話になるのだろう。――つまり、茂る「ツルニチニチソウ」が、いわば「ヒルガオのつるや茎や葉っぱ」などであり、そして、そこに一輪美しく咲いている「ヒルガオの花」こそは、どのようなバラの花よりも清らかで美しい、まさに一人の「姫君」になるということである。

十、マツユキソウ（別名スズラン）

さて、次は小さなマツユキソウであり、「……木と木のあいだに、長い板が綱でつるしてあるのよ。それは、ブランコよ。二人の可愛らしい女の子が、――雪のように白い着物を着て、帽子には、長い緑色の絹のリボンをひらひらさせながら……。――その二人の女の子は、ブランコしているのよ。その二人の兄さんは、ブランコに立って乗り、綱に腕をまきつけて、からだをささえているのよ。なぜって、片方の手には小さいお皿を、もう片方の手には陶製パイプを持っているからなの。こうして、シャボン玉を吹いているの。ブランコがゆれて、シャボン玉が、いろいろ美しい色にかわりながら飛んで行くことよ。一番おしまいのシャボン玉は、まだパイプのさきにぶらさがって、風にゆられているわ。ブランコがゆれる。小さな黒い犬が、シャボン玉のようにかるく、後足で立って、いっしょにブランコに乗ろうとしているわ。ブランコがゆれるので、犬がしりもちをついて、ほえて、おこっていることよ。からかわれているのだわ。シャボン玉がパチンとはじけたわ。――ゆらゆらゆれるブランコと、パチンとはじける水のあわ、これがわたしの歌なのよ」。「……あなたのお話は、とてもおもしろそうね。けれども、あなたは悲しそうに話すのね。それに、カイちゃんのことは、なんにも言ってくれないわ。じゃ、ヒヤシンスさんはなんのお話？」と聞くのであった。（本文）

＊　＊

まず、「……二人の可愛らしい女の子が、――雪のように白い着物を着て、帽子には、長い緑色の絹のリボンをひらひらさせて」とあるが、まず、「雪のように白い着物を着て」とは、白い「スズランの花」のことであり、そして、「二人の可愛らしい女の子」とは、「花の中」にいるいわば「雌蕊」のことであり、そして、白い「スズランの花」が風にゆらゆら揺れている様子を「ブランコ」にたとえているとともに、一方、スズランの「花の中」にいるのが一人の兄さん（いわば雄蕊）であり、それは、ブランコに立っている状態で、片方の手には小さいお皿を、もう片方の手には陶製パイプを持っていて、こうして、シャボン玉を吹いているの。この「シャボン玉」というのは、スズランの花に付いている「水滴」（露）のことであり、そして、白い「スズランの花」が風に吹かれて「ブランコ」のように揺れると、その「スズランの花」に付いている「水滴」（露）がゆれて、いわば「シャボン玉」のように飛び散るのよ、となるのである。――つまり、「ブランコ」とは、風にゆらゆら揺れている白い「スズランの花」のことであり、そして、「二人の女の子とその兄さん」とは、「花の中」にいるいわば「雌蕊と雄蕊」のことであり、そして、「シャボン玉」とは、その「スズランの花」に付いている「水滴」（露）が風にゆれて飛び散る様子になるのだろう。……ちなみに、「……帽子には、長い緑色の絹のリボンをひらひらさせながら……」とは、白い「スズランの花」をささえている緑色の「長い枝」のことである。（ただ、今日の科学では、「花の中」の「中央に一本あるのが雌蕊」、そして、ま

わりに「数本あるのが雄蕊」となるが、これは作者の勘違いなのか、それとも意図的なものなのかは、ファンタジーな話なのでどちらでもよいのだろう。）

十一、ヒヤシンス

ヒヤシンスは、「……あるところに、三人の美しい姉妹がありました。三人とも、すきとおるようにきれいでした。一人は赤、一人は青、もう一人は、まっ白の着物をきていました。三人はお月様の明るい夜、静かな湖のほとりで、手をとりあっておどっていました。三人とも、妖精の娘などではなくて、人間の子でした。あたりには、甘いかおりがただよっていました。やがて、娘たちの姿は、森の中へ消えました。かおりは、ますます強くなりました。――三人の美しい娘を入れた三つの棺が、森の茂みから出て、湖の上をすべって行きました。ホタルがそのまわりを、小さなあかりのように光りながら飛んでいます。踊りをおどった娘たちは、眠っているのでしょうか、それとも、死んだのでしょうか？

――花のかおりは、こう言っています。あれは娘さんたちの、なきがらです。夕べの鐘が、死んだ人たちのために、鳴っています」。「……あなたのお話で、わたし、すっかり悲しくなってしまったわ」と、ゲルダは言いました。「……あなたのかおりは、強いのね、わたし、その死んだ娘さんたちのことを思いださずにはいられないわ。ああ、だけどカイちゃんは、ほんとうに死んでしまったのかしらん？　地面の下に沈んだバラの花は、そんなことはないと言っているけれど」。……「カラン、カラン！」と、ヒヤシンスの鐘が鳴りました。「……わたしたちは、カイちゃんのために鳴っているのではありません。そんな人、知りませんわ。わたしたちは、ただわたしたちの歌をうたっているだけよ。わたしたちの知っているたった一つの歌よ」。（本文）

＊　＊

まず、ヒヤシンスには、「赤、青、黄色、そして、白の花」などが咲きますが、ここでは、「……あるところに、三人の美しい姉妹がありました。三人ともすきとおるようにきれいでした。一人は赤、一人は青、もう一人は、まっ白の着物をきていました。三人はお月様の明るい夜、静かな湖のほとりで、手をとりあっておどっていました。三人とも、妖精の娘などではなくて、人間の子でした。あたりには、甘いかおりがただよっていました。やがて、娘たちの姿は、森の中へ消えました。かおりは、ますます強くなりました。――三人の美しい娘を入れた三つの棺が、森の茂みから出て、湖の上をすべって行きました。ホタルがそのまわりを、小さなあかりのように光りながら飛んでいます。踊りをおどった娘たちは、眠っているのでしょうか、それとも、死んだのでしょうか？　――花のかおりは、こう言っています。あれは娘さんたちの、なきがらです。夕べの鐘が、死んだ人たちのために、鳴っています」とある。――これは、非常に美しい「情景」（描写）になっているが、ここで大事なことは、ヒヤシンスには、赤、青、黄色、そして、白の花が咲くことから、（黄色を除いた）、三人の美しい姉妹という想像（イメージ）になり、また、ヒヤシンスは、かなり「甘いかおり」をまわりに漂わすこと、また、ホタルは、いわば彼女たちの「霊魂」であり、そして、なぜ「なきがら」（死んだ人）になるのかと問えば、それは、次のような古代「ギリシア神話」の中の物語によることになるのだろう。

さて、「ヒアシンス」という名は、古代「ギリシャ神話」の「美少年」（ヒュアキント

ス）に由来するとある。そして、愛する「医学の神」（アポロン）と一緒に「円盤投げ」に興じていたが、その楽しそうな様子を見ていた「西風の神」（ゼピュロス）も「美少年」（ヒュアキントス）を愛していたので、やきもちを焼いて、意地悪な風を起こして、その風によってアポロンが投げた円盤の軌道が変わって、「美少年」（ヒュアキントス）の額を直撃してしまった。アポロンは「医学の神」の力をもって懸命に治療するが、その甲斐なく「美少年」（ヒュアキントス）は、大量の血を流して死んでしまう。「ヒアシンス」という花は、この時に流れた「大量の血」から生まれたとなっている。恐らく、そのような神話からの「連想」（イメージ）になるのだろう。

十二、タンポポの花

そこで、ゲルダは、タンポポのところへ行きました。タンポポの花は、つやつやした緑の葉のあいだから、輝いていました。「……小さい明るいお日様みたいなタンポポさん！」と、ゲルダは言いました。「……わたしのお友だちはどこにいるか、知っていたら教えてちょうだいな」と。すると、タンポポは、それは美しく輝いて、再びゲルダをながめました。タンポポは、どんな歌をうたったでしょうか。でも、それはカイのことではありませんでした。「……とある小さな中庭に、春のはじめのころ、神様のお日様が暖かく輝いていました。その光は、お隣りの家の白い壁を下の方まで、すべり落ちていました。その壁のそばに、春のさきがけの黄色い花がさいていました。暖かいお日様の光を浴びて、輝いている黄金でした。年とったおばあさんが、椅子（いす）に腰かけて、日なたぼっこをしていました。そこへおばあさんの孫の、女中に行っている、貧しい美しい娘が、ちょっと、ひまをもらって帰ってきました。そして、おばあさんにキスをしました。このめぐまれたキスには、黄金、地に黄金、朝の空にも黄金！　ねえ、これがわたしの小さなお話よ」と、タンポポは言いました。（本文）

＊　＊

さて、タンポポの花は、「……とある小さな中庭に、春のはじめのころ、神様のお日様が暖かく輝いていました。その光は、お隣りの家の白い壁を下の方まで、すべり落ちていました。その壁のそばに、春のさきがけの黄色い花（タンポポの花）が咲いていました。暖かいお日様の光を浴びて、黄金に輝いていました。年とったおばあさんが、椅子（いす）に腰かけて、日なたぼっこをしていました。そこへおばあさんの孫の、女中に行っている、貧しい美しい娘が、ちょっと、ひまをもらって帰ってきました。そして、おばあさんにキスをしました。このめぐまれたキスには、黄金が、まごころの黄金がありました。口に黄金、地に黄金、朝の空にも黄金！　ねえ、これがわたしの小さなお話よ」とある。

まず、ここで「大事な文章」は、「……おばあさんの孫の、女中に行っている、貧しい美しい娘が、ちょっと、ひまをもらって帰ってきました。そして、おばあさんにキスをしました。このめぐまれたキスには、黄金が、まごころの黄金がありました。口に黄金、地に黄金、朝の空にも黄金！」というところであり、それは、次のようなことである。つまり、（恐らく一人で暮らす）おばあさんにとって、孫の、女中に行っていて、ちょっと、ひまをもらって帰ってきた、貧しい美しい娘こそは、まさに黄金に輝くかわいい「タンポポの花」でもあり、その孫に会えることは非常にうれしいことであり、しかも、その孫娘（まごむすめ）

は、「……おばあさんにキスをしました。このめぐまれたキスには、黄金が、まごころの黄金がありました」とあるが、これは、「……おばあさんのことを心から愛し、心から心配し、心から気づかっている真ごころの輝きがあった」ということであり、口に黄金とは、愛情のこもったキスややさしい言葉、地に黄金とは、春のさきがけの黄色い花（タンポポの花）や心やさしい孫娘の存在、そして、朝の空にも黄金とは、暖かいお日様の黄金の光、そのお日様の黄金の光を浴びて日なたぼっこをしている、（恐らく一人で暮らす）おばあさんにとって、今はまさにこの上もない「幸せな状態」にあるということである。

十三、ゲルダは……

さて、ゲルダは、「……ああ、お気のどくなおばあさん！」と、ため息をつきました。「……そうよ、きっと、わたしのことをおもって、悲しんでいらっしゃるわ。ちょうど、カイちゃんがいなくなった時のように。でも、わたし、じきに、うちへ帰るわ。カイちゃんをつれて。――花たちにたずねても、なんにもならないわ。みんな、自分の歌ばかりうたっていて、わたしには、なんにも教えてくれないんですもの」。こう言いながら、ゲルダは、はやく走れるように、可愛い着物のすそをからげました。ところが、スイセンの上をとび越した時、それがゲルダの足を打ちました。ゲルダは立ちどまって、細長い黄色い花を見て「……なにか知ってるとでもいうの？」と、言いました。そして、スイセンのほうへからだをかがめました。では、スイセンはなんと言ったでしょう。（本文）

＊　＊

さて、女主人公のゲルダは、タンポポの花の話から、家に残したきたおばあさんのことを想い出して、「……ああ、お気のどくなおばあさん！」、「……そうよ、きっとわたしのことを思って悲しんでいらっしゃるわ。ちょうどカイちゃんがいなくなった時のように。でも、わたしじきにうちへ帰るわ。カイちゃんを連れて。――花たちにたずねても何にもならないわ。みんな自分の歌ばかりうたっていて、わたしには何にも教えてくれないんですもの」。こう言って、ゲルダは、はやく走れるように可愛い着物のすそをからげました。が、スイセンの上をとび越した時、それがゲルダの足を打ち、ゲルダは立ちどまって、細長い黄色い花を見て「……なにか知ってるとでもいうの？」と聞くのでした。では、スイセンは何と言ったでしょうと続くのである。

十四、スイセン

スイセンは、「……わたしは、自分が見えるのよ。自分を見ることができるのよ！」と、言いました。「……まあ、まあ！　なんて、わたしは、いいにおいなんでしょう――上の屋根裏の小さな部屋に、可愛い踊り子が、衣装をなかばつけて立っていますよ．踊り子は片足で立ったり、両足で立ったりしています。こうして、世界じゅうを、トントンと踏んでいるのです。でも、幻みたいなものですよ。踊り子は、手に持っている布にティーポットから水をそそいでいます。それはコルセットです。――きれい好きは、よいことですもの！　白い上着が、くぎにかかっています。これもティーポットの中で洗って、屋根の上でかわかしたのです。それを踊り子はきて、サフラン色のスカーフを首にまきます。そ

うすると、上着は、いちだんと白く輝きます。足をあげて！　ほら、一本の茎の上に、すらりと立ったところをごらんなさい！　わたしは、自分が見えるのよ。自分を見ることができるのよ！」。「……そんなこと、どうだってかまわないわ」と、ゲルダは言いました。「……わたしに、わざわざ話すほどのことじゃないわよ」。こう言って、庭のはずれまで、走って行きました。（本文）

＊　　＊

さて、スイセンは、「……わたしは、自分が見えるのよ。自分を見ることができるのよ！」と言っているが、これは、恐らく、「……遠い古の神話のナルキソスは、水面に美しく映える麗しき己がその姿に恋こがれては、その場から一時も離れずに、水面に映る己が姿を見入るという、その恋ゆえに、やがて若きその身はその場で朽ち果て、その朽ち果てしナルキソスの場所からは、一輪の水仙の花の姿となりて蘇る」という神話にあるように、スイセンの花というのは、水面に映る麗しき「己が姿」を見ているのである。

次に、「……上の屋根裏の小さな部屋に、可愛い踊り子が、衣装をなかばつけて立っていますよ．踊り子は片足で立ったり、両足で立ったりしています。こうして、世界じゅうを、トントンと踏んでいるのです。でも、幻みたいなものですよ。踊り子は、手に持っている布にティーポット（いわば雨）から水をそそいでいます。それはコルセット（いわば花びらをまとめている部分）です。――きれい好きは（汚れを水で落とすことは）、よいことですもの！　白い上着が、くぎにかかっています。これもティーポット（いわば雨）の中で洗って、屋根の上でかわかしたのです。それを踊り子はきて、サフラン色のスカーフを首にまきます。そうすると、上着は、いちだんと白く輝きます。足をあげて！　ほら、一本の茎の上に、すらりと立ったところをごらんなさい！」とある。――これは、「スイセンの花」をいわば「踊り子」に見立てているのであり、片足（一本の茎）で立ったり、両足（二本の茎）で立ったりして、風に吹かれて動いている「スイセンの花」の姿は、どこか「踊り子」に似ているということであり、また、「……白い上着で、サフラン色のスカーフを首にまく」とあるが、これは、いわば「花びら」が「白色」であり、そして、「中央」が「サフラン色（黄色）」ということになるのだろう。――一方、女主人公のゲルダという「女の子」は、スイセンの花の、「……わたしは、自分が見えるのよ。自分を見ることができるのよ！」と言うことに対して、「……そんなこと、どうだってかまわないわ」と言い、また、「……わたしに、わざわざ話すほどのことじゃないわよ」と、こう言って、庭のはずれまで走って行くのでした。

十五、おばあさんの庭の戸から外へと……

庭の戸は閉まっていました。けれども、さびついたかすがいをゆさぶると、それが、はずれて、戸があきました。そこで、ゲルダは、はだしのまま、広い世の中へ駆けだしました。そして、三度も、あとをふりかえってみましたが、だれも追いかけてくる様子はありません。とうとう、もうこれ以上走ることができなくなって、かたわらの大きな石の上に腰をおろしました。そして、ふとあたりを見まわしますと、いつのまにか夏はとうに過ぎて、秋もだいぶ深まっていました。あの美しい花園にいたのでは、それに気づくはずはありませんでした。あそこでは、いつもお日様が輝いていて、四季の花がとりどりに咲いて

いるものですから。「……まあ、たいへん。ずいぶん、道草をくってしまったわ」と、ゲルダは言いました。「……もう秋になってしまったのね。休んでなんかいられないわ！」と、そこで、立ちあがって、また歩きだしました。ああ、ゲルダの小さな足は、どんなにか傷つき、そして、疲れはてたことでしょう！　あたりを見まわしても、目にうつるのは、わびしく、さむざむとしているものばかりでした。細長いヤナギの葉は、すっかり黄色になって、霧がその葉から水玉になって、したたっていました。葉が一枚、また一枚と散っていました。ただ、リンボクだけが、口がまがりそうな、すっぱい実をつけていました。ああ、見渡すかぎり、なんと灰色の陰鬱な世界でしょう！　（本文）

＊　＊

さて、女主人公のゲルダは、魔法を使うおばあさんの庭園から、やっと逃げ出すことになるが、それは、「……庭の戸は閉まっていましたが、さびついたかすがいをゆさぶると、それが外れて戸が開きました。そこで、ゲルダは、裸足のまま広い世の中へと駆け出して、三度もあとを振り返って見ましたが、誰も追いかけてくる様子はありませんでした」とある。――これは、魔法を使うおばあさんは、可愛いゲルダを強制的に監禁拘束するつもりは全くなく、女主人公のゲルダが出て行きたいと心からそう願うならば、その「ゲルダの心」（意志）にまかせていたということである。そして、やがて、とうとうもうこれ以上走ることができなくなり、かたわらの大きな石の上に腰を下ろしてふとあたりを見まわしますと、いつのまにか夏はとうに過ぎて、秋もだいぶ深まっていたのでした。

それは、あの（魔法のかかった）美しい花園にいたのでは、それに気づくはずはありませんでした。あそこでは、いつもお日様が輝いていて、四季の花がとりどりに咲いているものですから。女主人公のゲルダは、「……まあ、たいへん。ずいぶん道草をくってしまったわ」、「……もう秋になってしまったのね。休んでなんかいられないわ！」と、再び、立ち上がって、また歩き出しました。ああ、ゲルダの小さな足は、どんなにか傷つき、そして、疲れ果てたことでしょう！　あたりを見まわしても、目にうつるのは、わびしく、さむざむとしているものばかりでした。細長いヤナギの葉は、すっかり黄色になって、霧がその葉から水玉になって、したたっていました。葉が一枚、また一枚と散っていました。ただ、リンボクだけが、口が曲がりそうな、すっぱい実を付けていました。ああ、見渡す限り、なんと灰色の陰鬱な世界でしょう、となるのである。――これは、女主人公のゲルダが自分の家を出たのは、春であり、それから川を下って魔法を使うおばあさんの家で一緒に時を過ごすことになるが、それは、春から夏、そして、夏から秋、しかも今はすでに「晩秋」になってしまったという「時の経過」を、女人公のゲルダの「心の声」（せりふ）とともに、まわりの風景の様子で具体的に表現（描写）していることになるのである。

＊　＊

四、第四のお話

王子と王女

四、第四のお話
王子と王女

一、冒頭の文章

さて、ゲルダは（疲れて）また休まなければなりませんでした。すると。ゲルダが腰を下ろしたちょうど向こうの雪の上を、一羽の大きなカラスがぴょんぴょんと飛んでいました。その時、カラスは立ちどまって、長いことゲルダの顔を見ていましたが、やがて頭をゆらゆらさせながら、「……カア！　カア！　こんにちは、こんにちは！」と、言いました。これより上手には言えなかったのです。けれども、この小さな女の子が好きになったので、こんな広い世の中をたった一人ぼっちでどこへ行くの、とたずねました。この、一人ぼっち、という言葉は、ゲルダにもよくわかって、その中に含まれているいろいろの意味をしみじみと感じました。そこで、これまでの身の上をすっかり話して聞かせました。そして、もしやカイちゃんを見かけませんでしたか、とたずねました。（本文）

＊　　＊

さて、これが「第四話」（王子と王女）の冒頭部分であり、女主人公のゲルダが疲れて石の上に腰掛けていると、ちょうど向こうの雪の上を、一羽の大きなカラスがぴょんぴょんと飛びはねていたが、その時、カラスは立ちどまって、長いことゲルダの顔を見ていました。やがて、「……カア！　カア！　こんにちは、こんにちは！」と言い、この小さな女の子が好きになったので、こんな広い世の中をたった一人ぼっちでどこへ行くの、とたずねてみると、女主人公のゲルダは、これまでの身の上をすっかりカラスに話して聞かせ、そして、もしやカイちゃんを見かけませんでしたか、とたずねるのでした。――これが一羽の大きな「カラス」と女主人公「ゲルダ」との最初の「出遭い」であり、ここから、まさに「一羽のカラスと一人の女の子」の旅と会話が続くことになるのである。……ちなみに、「一人ぼっち」という言葉は、やさしいおばあさんも大好きなカイちゃんも、その他、親しい人たちも誰もいないという状況であり、その「心細さや寂しさその他」などを身を以ってしみじみと感じていたということである。それゆえ、この一羽の大きな「カラスとの出遭い」は、女主人公（ゲルダ）にとっては、非常に「嬉しいことだった」に違いない。

二、一羽のカラスからの新たな情報

さて、カラスは、もっともらしくうなずいて、「……あれかもしれん！　あれかもしれん！」と言うので、「……まあ、ほんと！」と、ゲルダは思わず大きな声で言いました。そして、カラスを息が詰まるほど強く抱きしめてキスをしました。「……落ちついて！」と、カラスは言いました。「……僕は、あれがカイちゃんじゃないかと思いますよ。でも、今では王女様のことで頭がいっぱいで、あなたのことは忘れてしまっとるらしい」。「……カイちゃんが王女様のところにいるんですって？」と、ゲルダはたずねました。「……さよう！　まあ、お聞きなさい」と、カラスは言いました。「……だが、あなたたちの言葉で話をするのは、どうも骨が折れるよ。あんたにカラスの言葉がわかるのだったら、もっとうまく話せるんですがね！」と言うと、「……そうね、でも、それは、

ならわなかったのよ」と、ゲルダは言いました。「……おばあさんだったら、わかるんですけど、それにおばあさんは赤ちゃんの言うこともわかるのよ。あたしもならっておけばよかったわね」。（本文）

＊　　＊

さて、カラスは、「……あれかもしれん！　あれかもしれん！」と言うと、「……まあ、ほんと！」と、ゲルダは思わず大きな声で言って、カラスを息が詰まるほど強く抱きしめてキスをしました。すると、「……落ちついて、落ちついて！」と、カラスは言い、「……僕は、あれがカイちゃんじゃないかと思いますよ。でも、今では王女様のことで頭がいっぱいで、あなたのことは忘れてしまっとるらしい」と言うのでした。女主人公のゲルダは、「……カイちゃんが王女様のところにいるんですって？」とたずねるので、「……さよう！　まあ、お聞きなさい」と、カラスは言いました。そして、興味深いのは、ここからであり、それは、「……だが、あなたたちの言葉で話をするのは、どうも骨が折れるよ。あんたにカラスの言葉がわかるのだったら、もっとうまく話せるんですがね！」と言うのであった。――まず、カラスは、まさに「鳥類」であり、それゆえ、本来、人間の「言葉」を話すことはでき得ない。（でき得るのは、オウムのように言葉を真似るだけである）。ところが、童話や絵本或いは漫画やアニメ、その他などでは、例えば、イヌやネコ或いはその他の動物や植物、時には、人工物までが、まるで人間のように平気で言葉をしゃべったり、また、われわれ人間と対等に会話をしたりするものである。それは、もちろん、いわゆる「ファンタジー」ということになるが、それでは、その「ファンタジー」は、一体、どこから生じて来るのかと問えば　それはもちろん、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）からであり、それは、われわれ人間の「思考（思索）能力」（つまり「人間の脳」）が持ち合わせている「空想（想像）能力」の素晴らしさであり、われわれ「人間の脳」というのは、現実を遙かに超越した「超次元的思考」が何の苦もなく平気ででき得るということであり、例えば、過去、現在、未来という、まさに「時空」を、あっという間に自由自在に「行き来」でき得る「タイムマシン」を持ち合わせていて、どのような時代、どのような場所、あるいは、どのような人間、動植物、恐竜、自然、宇宙、その他、何にでも、あっという間に会ったりでき得るのである。例えば、宇宙空間を自由自在に行き来できるのをはじめ、恐竜がいた時代、古代エジプトのピラミット時代、その他の、ありとあらゆる時代とあらゆる場所、また、未来社会のありとあらゆる場所とあらゆる空間、その他、その人が「空想や想像」の翼を拡げさえすれば、あっという間に自由自在に行き来ができるということである。そして、そういう、われわれ人間の「思考（思索）能力」（つまり「人間の脳」）が持ち合わせている、現実を遙かに超越した「超次元的思考」が何の苦もなく平気ででき得るということが、結果として、今日のようなかなり高度な「文化・文明」などを築き上げることを可能にして来た「最大の理由」の一つにもなるのだろう。――それはともかく、一羽のカラスは、あんたにカラスの言葉がわかるのだったら、もっとうまく話せるんですがね！」と言うと、「……そうね、でも、それは、ならわなかったのよ」と、ゲルダは言いました。

三、この国の王女様の結婚相手（花婿）選び

さて、カラスは、「……なに、かまいませんよ」、「……できるだけやってみましょう。けれども、うまく話せるかどうか？」、こう言って、カラスは知っていることを話しはじめました。それは、「……今、僕たちのいるこの国に一人の王女様がおいでです。たいへんおりこうのかたでね、世界中の新聞をみな読んでしまって、それをまた、忘れてしまうという、まあそれほどおりこうなかたなんです。ついこのあいだ、王女様は、王座におつきになったんだけれど、ただそれだけじゃ、ちっとも面白くないんだってね。みんなが言ってるんですよ。そこで王女様は、ふと、こんな歌を口ずさみました。その歌というのは、『どうして、わたしは結婚してはいけないの』といったようなものでした。『……そうよ、この歌のとおりだわ』と、王女様は言って、結婚なさろうと思ったんです。しかし、お婿さんになる人は、話しかけられたら、すぐ答えられる人でなくてはいけないんです。ただ上品ぶって突っ立っているばかりではだめなんです。だって、そうでしょう。そんな人は、退屈ですからね。そこで、女官たちを太鼓をたたいて集めさせました。みんなは、王女様の心持ちを聞いて、とても喜んで、『……それはけっこうなことですわ！』と言いました。『……わたくしも、このごろ、そのようなことを考えておりましたの』って。――僕の言うことは、いちいちほんとうのことなんですよ」と、カラスは言いました。「……実を言うと、僕には人間に飼われている許嫁がいましてね。それがお城の中を自由に歩きまわることができるもんだから何もかも話してくれたんです」。（本文）

＊　＊

さて、カラスの話だと、「……今、僕たちのいるこの国に一人の王女様がいて、それは、大変お利口の方であって、世界中の新聞をみな読んでしまうほどであるが、それに加えて、ついこの間、王女様は、王座にお就きになりましたが、それだけでは少しも面白くないということで、王女様は、結婚したいと思うようになるのでした。しかし、結婚相手（お婿さん）になる人は、話しかけられたら、すぐ答えられるような人でなくてはならず、ただ上品ぶって突っ立っているばかりではだめであり、そんな人は、退屈なだけであるからです。そこで、女官たちを集めて、そのことを告げると、とても喜んで、「……それはけっこうなことですわ！」と言うのでした。――この僕の話すことは、いちいちほんとうのことであり」、それは、「……実を言うと、僕には人間に飼われている許嫁がいて、それがお城の中を自由に歩きまわることができるものだから、何もかも話してくれたんです」となるのである。――まず、一人の王女様がいて、それは、大変お利口の方であり、世界中の新聞をみな読んでしまうほどであるが、ごく最近、王座にもお就きになり、また、結婚したいと思うようになるが、ここで大事なのは、その「結婚相手」（お婿さん）になる人の「条件」としては、王女様自身、大変お利口な方なので、それゆえ、「……話しかけられたら、すぐ答えられるような人でなくてはならず、ただ上品ぶって突っ立っているばかりではだめであり、そんな人は、退屈なだけだから」と言うのでした。しかも、この話をしているカラスには、人間に飼われている許嫁がいて、それがお城の中を自由に歩きまわることができるので、何もかも話してくれたということである。

四、王女様の結婚相手を新聞で募集する

さて、その許嫁というのは、言うまでもなく、やはりカラスでした。なぜなら、類は

友を呼ぶといいますからね。「……そこでさっそく、ハート型と、王女様の頭文字とで、縁どった新聞が出たんです。それには、姿のりっぱな青年なら誰でもお城へ来て、王女様とお話しすることができる、そして、その話ぶりが退屈でなく、しかも一番上手にできた人を、王女様は、お婿さんに選ぶと、こう書いてあるんです。――そうなんです！」と、カラスは言いました。「……僕のいうことを信じてください。これは、僕がここにいるのと同じように、たしかなことなんです。さて、人々はぞろぞろやってきました。それはたいへんな混雑でしたよ。ところが、最初の日も、その次の日も、うまくいったものは一人もありませんでした。往来にいるうちこそ、みんなは、よくおしゃべりができましたが、いったんお城の門にはいって、銀ずくめの番兵を見たり、階段をのぼって金ぴかのお役人に出あったり、明るいきらきらした大広間に通されたりしますと、もう、ぼうっとなってしまうのでした。いよいよ王女様のいらっしゃる王座の前に立ちますと、王女様の言った一番おしまいのことばを繰り返すのが関の山です。でも王女様は、ご自分のいった言葉を、もう一度聞く必要はありませんからね。その場へ出ますと、まるでかぎタバコをおかなに呑みこんで、気が遠くなってしまうようでした。往来へまた出るまでは、そうなんです。そして、外へ出ると、またもや、ぺらぺらおしゃべりができるのでした。人々の列は、町の門からお城までつづきました。僕もそこへ行って、自分が見てきたんですよ」と、カラスは言いました。「……みんなは、おなかはへる、のどはかわく、けれども、お城ではなまぬるい水一杯もらえません。なかに頭のいい連中がいて、バタパンを持ってきたものもありますが、隣りの人にわけてやろうなどとはしませんでした。それは、ああして、ひもじそうな顔をしているがいい、そうすれば、王女さまもこの男をお選びにはなるまい、と、こんふうに考えていたからなんです」。（本文）

＊　＊

さて、カラスの許嫁とは、むろん、まさに同類の「雌ガラス」になるが、それはともかくも、さっそく、「……ハート型と王女様の頭文字とで縁どった新聞が出るが、それには、姿のりっぱな青年なら誰でもお城へ来て、王女様とお話しすることができ、その話ぶりが退屈でなく、しかも一番上手にできた人を、王女様は、お婿さんに選ぶ」と、こう書いてあったのです。――すると、人々はぞろぞろやってきて、それはたいへんな混雑でしたが、最初の日も、その次の日も、うまくいったものは一人もいませんでした。……というのも、往来にいるうちこそ、みんなはよくおしゃべりができましたが、いったんお城の門に入って、銀ずくめの番兵を見たり、階段をのぼって金ぴかのお役人に出あったり、明るいきらきらした大広間に通されたりすると、もうぼうっとなってしまうのでした。いよいよ王女様のいらっしゃる王座の前に立つと、王女様の言った一番おしまいの言葉を繰り返すのが関の山であり、でも王女様は、ご自分のいった言葉をもう一度聞く必要はないですからね。その場へ出ると、まるでかぎタバコをお腹に呑みこんで、気が遠くなってしまうようでした。往来へまた出るまでは、そうなんです。そして、外へ出ると、またもや、ぺらぺらおしゃべりができるのでした。――これは、当然、余りに過度の「緊張感と圧迫感」その他などで押しつぶされてしまい、本来の自然な「対応や思考」などが想うように出来ない、そのような「心理状態」に深く陥ってしまったということである。

そして、人々の列は、町の門からずうっとお城まで続いていました、僕もそこへ行って、自分で実際見てきたんですよ、とカラスは言いました。「……みんなは、おなかは減るわ、

のどは渇くわ、けれども、お城ではなまぬるい水一杯もらえません。なかには頭のいい連中がいて、バタパンを持ってきたものもあるが、隣りの人にわけてやろうなどとはしませんでした。それは、「……ああして、ひもじそうな顔をしているがいい、そうすれば、王女様もこの男をお選びにはなるまい」と、そう考えていたからです。――これは、むろん、いわばお互いがお互い「恋敵」（或いは「ライバル同士」）であって、少しでも「自分」が王女様に選ばれるようにと、まさに「自分の状態」（条件）などを少しでもよくし、一方、他の「人たちの状態」（条件）などを少しでも悪くして、それらの「競争相手」に何が何でも勝ちたいというような「心理状態」でもあるのだろう。

五、一人の少年が三日目にお城にやってきた

さて、女主人公のゲルダは、「……で、カイちゃん、カイちゃんのことは？」、「……いつきたの、その人ごみの中にいたの？」と聞くので、「……まあ、しばらく、しばらく、もうすぐその話になるのですよ。さて、三日目のことでした。一人の少年が馬にも馬車にも乗らないで元気いっぱいにお城をめざして歩いてきました。その目はあんたの目のように輝いていました。それから長い美しい髪の毛をしていました。けれども、着物はみすぼらしかったのです」。すると、「……カイちゃんだわ！」と、ゲルダはうれしそうに叫びました。「……ああ、とうとう見つかったわ！」と、こう言って、手を打って喜びました。「……背中に小さなランドセルをしょっていましたっけ」とカラスが言うと、「…いいえ、それはきっと橇よ！」と、ゲルダは言いました。「……橇を持ったまま、どこかへ行ってしまったんですもの」。「……そうかもしれませんね！」と、カラスは言いました。「……僕は、そうよく見たわけじゃないんですから。けれども、ぼくの許嫁の話によると、その少年はお城の門をくぐって、銀ずくめの番兵を見ても、階段をのぼって金ぴかのお役人に出あっても、少しもびくびくしなかったそうですよ。それどころか、その人たちにうなずいてみせて、『……そうして階段に立っているのは退屈でしょう。では、僕は奥へ行きますよ』と言ったんですって。広間にはあかりがきらきら輝いていて、顧問官や大臣たちがはだしで金のうつわを運んでいました。これを見ては、誰だっておごそかな気持ちにならないではいられないでしょう。それなのに、この少年の靴ときたら、おそろしく大きな音をたてて鳴るんですって。それでも、いっこう怖がらなかったそうですよ」。（本文）

＊　＊

さて、女主人公のゲルダは、何よりも「大好きなカイちゃんの話」が聞きたいのであり、それゆえ、「……で、カイちゃん、カイちゃんのことは？」、「……いつきたの、その人ごみの中にいたの？」と、せわしく聞くと、「……まあ、しばらく、しばらく、もうすぐその話になるのですよ」と言って、次のように話を続けるのでした。

それは、「……さて、三日目のことでした。一人の少年が馬にも馬車にも乗らないで元気いっぱいにお城をめざして歩いてきました。その目はあんたの目のように輝いていました。それから長い美しい髪の毛をしていました。けれども、着物はみすぼらしかったのです」と言うと、「……カイちゃんだわ！」と、うれしそうに叫び、「……ああ、とうとう見つかったわ！」と、こう言って、手を打って喜びました。――さて、少年は、馬にも馬車にも乗らず歩いてきた。だとすれば、あまり「裕福」ではないという「一つの目安」に

はなるが、断定はできない。また、その目は「輝いていた」とすれば、何らかの強い「意志や志（こころざし）」などを持っていたのかも知れない。また、長い美しい髪の毛は、その人の一つの特徴であり、そして、着物はみすぼらしかったとすれば、それは、やはりあまり「裕福」ではないという「一つの証拠」になるが、それは、もし裕福であれば、当然、これから「王女様」にお会いするのにふさわしい「真新しい正装」に着替えるに違いないからである。そして、この話を聞いて、女主人公のゲルダは、「……カイちゃんだわ！」と、叫ぶことになるが、それには「確証」（つまり「揺るぎない確たる証拠」）はないが、そう思いたい気持ちでいっぱいだったということになるのだろう。

ところが、すぐその後（あと）に、「……背中に小さなランドセルをしょっていましたっけ」と、カラスにそう言わせることで、作者（アンデルセン）は、その少年がゲルダが捜し求めている「カイ」ではないことを（読者には）暗に示しているとともに、当のゲルダも、「……いいえ、それはきっと橇（そり）よ！」、「……橇（そり）を持ったまま、どこかへ行ってしまったんですもの」と言いながらも、その少年が「カイ」だと思い込みたいのである。そこで、「……そうかもしれませんね！」と、カラスは言い、「……僕は、そうよく見たわけじゃないんですから。けれども、ぼくの許嫁（いいなずけ）の話によると、その少年はお城の門をくぐって、銀ずくめの番兵を見ても、階段をのぼって金ぴかのお役人に出あっても、少しもびくびくしなかったそうですよ。それどころか、その人たちにうなずいてみせて、『……そうして階段に立っているのは退屈でしょう。では、僕は奥へ行きますよ』と言ったんですって。広間にはあかりがきらきら輝いていて、顧問（こもん）官や大臣たちがはだし（音を立てない）で金のうつわを運んでいました。これを見ては、誰だっておごそかな気持ちにならないではいられないでしょう。それなのに、この少年の靴（くつ）ときたら、おそろしく大きな音をたてて鳴るんですって。それでも、いっこう怖（こわ）がらなかったそうですよ」とある。――つまり、この少年は、何を見聞きしても何（なん）ら「物怖（ものお）じ」（動じる）こともなく、非常に強い「意志や志（こころざし）」などを持っていたということである。それに比べて、今までの人たちというのは、余りに過度の「緊張感と圧迫感」その他などで押しつぶされてしまい、本来の自然な「対応や思考」などが想うように出来ない、そのような「心理状態」に深く陥ってしまったということである。

六、少年と王女様との出会い

さて、ゲルダは、「……確かにカイちゃんだわ！」、「……カイちゃんが新しい靴を持っていたの、わたし知っているわ。おばあさんの部屋で、キュッ、キュッと鳴ったのを聞いたことがあるわ」と言うと、「……そうです。キュッ、キュッって鳴ったんです」と、カラスは言いました。「……それから、元気よく王女様の前へ進みました。王女様は紡（つむ）ぎ車（ぐるま）ほどもある大きな真珠に腰かけていました。まわりには、女官たちが自分たちの小間使いと、そのまた小間使いの小間使いとを連れて、また、貴族たちが自分たちの召使いと、そのまた召使いとを連れてずらりと並んでいました。その召使いがまたボーイを連れているんです。そして、入り口に近く立っている者ほど、偉そうにしていました。召使の召使に仕えているボーイなぞは、いつもスリッパで歩きまわっているくせに、この時はとても顔さえじかに見られないくらい、偉そうに入り口に立っているんです」。「……まあ、どん

なに怖かったでしょうね」と、ゲルダは言いました。「……で、カイちゃんは王女様と結婚したの？」と聞くのでした。（本文）

＊　＊

さて、この場面は、王女様は紡ぎ車ほどもある大きな真珠に腰かけているのを初めとして、女官たちは、自分たちの小間使いと、そのまた小間使いの小間使いとを連れて、また、貴族たちは、自分たちの召使いと、そのまた召使いとを連れて、ずらりと並んでいました。その召使いがまたボーイを連れていて、入り口に近く立っている者ほど、偉そうにしていました。そのような実に数多くの貴族や女官或いは役人や召使いなどがいる前で、この少年は王女様に謁見（お会いした）ということである。――すると、女主人公のゲルダは、「……まあ、どんなに怖かったでしょうね」、「……で、カイちゃんは王女様と結婚したの？」と聞くのでした。

七、二人の出会いの結果は？

さて、カラスは、「……僕だってカラスでなかったら、王女様と結婚しますよ。たとえ僕が婚約していてもですよ。その人は、僕がカラスのことばで話す時のように、すらすらと上手に話をしたそうですよ。これは、許嫁から聞いたんです。少年は元気な、可愛らしい人でした。お城へきたのも、決して王女様に結婚を申し込むためではなく、ただ、王女様が賢いというものだから、それを知りたいと思ってきたんです。ところが、少年は王女様が気に入り、王女様のほうでも少年が気に入ったというわけなんです」。

すると、女主人公のゲルダは、「……そうだわ、きっとそうよ！　その人、カイちゃんだわ！」、「……カイちゃんは、とても利口で、分数の暗算だってできるんですもの！」と言い、「……ねえ、どうか、わたしをお城へ連れてってちょうだいな」と頼むと、「……さあ、口で言うのは、たやすいことですがね」と、カラスは言い、「……さてと、どうしたらいいかしらん。ひとつ、ぼくの許嫁と相談してみましょう。何かいい知恵を貸してくれるかもしれません。というのはね、あんたのような小さい娘さんは、お城へ入ることはとても許されないんですよ」と言うと、「……いえ、そのことなら大丈夫よ」と、ゲルダは言いました。「……カイちゃんは、わたしが来たことを聞けば、すぐ出てきて、あたしを入れてくれるわよ」と言うので、「……じゃあ、あそこの木戸のところで待っていてください」と、カラスはこう言うと、頭をふりふり飛んで行きました。（本文）

＊　＊

さて、いよいよ「二人」（少年と王女様）の対面になるが、その少年は、「……僕がカラスのことばで話す時のように、すらすらと上手に話をしたそうですよ。これは、許嫁から聞いたんです。少年は元気な、可愛らしい人でした。お城へきたのも、決して王女様に結婚を申し込むためではなく、ただ、王女様が賢いというものだから、それを知りたいと思ってきたんです。ところが、少年は王女様が気に入り、王女様のほうでも少年が気に入ったというわけなんです」とある。――まず、この少年の（外から見た）「印象」は、元気な、可愛らしい人でした。一方、この少年の「内面」は、「……決して王女様に結婚を申し込むためではなく、ただ、王女様が賢いというものだから、それを知りたいと思っ

てきたんです」とある。――つまり、王女様は「賢い」（大変お利口の方であり、世界中の新聞をみな読んでしまうほど）と言われているが、その「噂」は本当なのかどうか確かめに来たということである。だとすれば、この少年自身、かなり「賢い頭のいい人間」ということになり、それゆえ、「……すらすらと上手に話をした」としても、何も不思議なことにはならないのである。

＊　＊

ところで、国王が「賢い」という「噂」を聞いて、それが本当かどうか確かめに来たということでは、有名な「シバの女王」の話があり、それは、次のようなものである。つまり、「……シバの女王は、ソロモン王の知恵の噂を伝え聞くと、極めて大勢の随員を伴い、香料や非常に多くの金や宝石などの贈り物をラクダに積んで、難問を以って彼（の知恵）を試そうとエルサレムを訪れた。シバの女王は、ソロモン王に数々の質問（あらかじめ考えておいたすべての質問）を浴びせるが、ソロモン王に答えられないことは何も無かった。また、王の宮殿、食卓の料理、居並ぶ臣下、神殿の祭礼などの様子を目の当たりにした女王は、「……わたしが国であなたの御事績とあなたのお知恵について聞いていたことは、本当のことでした。わたしは、ここに来て、自分の目で見るまでは、そのことを信じてはいませんでした。しかし、わたしに知らされていたことはその半分にも及ばず、お知恵と富はうわさに聞いていたことを遙かに超えています」と感嘆し、ソロモン王が仕える神を称え、金二〇〇キカル（約六・八四トン）と非常に多くの香料や宝石などを贈った。ソロモン王もシバの女王に対して贈り物をしたほか、彼女の望むものを与えた。こうして女王一行は故国に帰還した」（「旧約聖書」）という内容である。これを映画化したのが有名な『ソロモンとシバの女王』であり、また、歌にしたのが有名な『シバの女王』になるのである。

＊　＊

さて、女主人公のゲルダは、カラスから少年の話を聞いて、「……そうだわ、きっとそうよ！　その人、カイちゃんだわ！」、「……カイちゃんは、とても利口で、分数の暗算だってできるんですもの！」と言い、「……ねえ、どうか、わたしをお城へ連れてってちょうだいな」と頼むのであった。――まず、その少年は、かなり「賢い人間」ということから、女主人公のゲルダは、「……その人、カイちゃんだわ！」、「……カイちゃんも、とても利口で、分数の暗算だってできるんですもの！」ということで、ぜひその「少年」に会いたいということになり、「……ねえ、どうか、わたしをお城へ連れてってちょうだいな」と頼むことになるのである。――一方、カラスは、城の中に入ることは、そう簡単なことではなく、「……あなたのような小さい娘さんは、お城へ入ることはとても許されてはいない」ということで、どうしたものか？　とにかく、ぼくの許嫁と相談してみるから、「……じゃあ、あそこの木戸のところで待っていてください」となって、カラスは、頭をふりふり飛んで行ったということである。

八、ゲルダを裏門のところへ……

さて、夕方、あたりが暗くなってから、カラスはやっともどってきました。そして、「……けっこう！　けっこう！」と、言いました。「……僕の許嫁が、くれぐれもよろしくと

言っていましたよ。それから、ここに少しばかりパンを持ってきました。あれがお城の台所で見つけたんです。そこには、まだたくさんありますよ。さぞ、おなかがすいたでしょう。――お城の中へ入ることは、とてもできませんよ。あなたは、そのとおりはだしでしょう。銀ずくめの番兵や、金ぴかのお役人たちが、とても許してはくれないでしょう。でも、泣かなくてもいいですよ。どうにかして連れてってあげますからね。じつは、僕の許嫁は、寝室に通じる狭い裏階段を知っていますし、鍵のありかだって知っているんですよ！」。そこで、カラスとゲルダは、庭の中へはいって大きな並木道を通っていくと、木の葉が一枚、また一枚と散っています。そして、やがて、お城の明かりが一つ、また一つと消えていった時、カラスは、ゲルダを裏口のところへ連れていき、そこは少し開いていました。

ああ、ゲルダの胸は、どんなに心配とあこがれとで高なったことでしょう！　まるで何か悪いことでもしようとしているような心持ちでした。でも、ゲルダは、ただその人がほんとうにカイかどうか知りたかっただけなのです。そうです、それはカイにちがいありません。ゲルダは、カイの賢そうな目と、長い髪の毛とを、ありありと思い浮かべました。また、自分たちがうちのバラの花の下にすわっていた時のように、にこにこしているカイの姿がはっきり目に見えるようでした。カイがゲルダを見て、どんなに遠い道を、自分のために、はるばる歩いてきたかを聞いたら、また、自分がうちへ帰らないので、どんなにみんなが悲しんでいるかを知ったら、きっと喜んでくれるでしょう。ああ、そう思うと、心配でもあり、うれしくもありました。（本文）

＊　＊

さて、夕方、カラスは、あたりが暗くなってから戻ってきて、「……結構、結構！」と言いながら、「……僕の許嫁がくれぐれもよろしくと言っていましたよ。それから、ここに少しばかりパンを持ってきました。あれ（許嫁）がお城の台所で見つけたんです。そこにはまだ沢山ありますよ。（これは少しぐらい持って来ても誰も気づきませんよという意味合いも含まれているのだろう）。そして、「……さぞ、お腹がすいたでしょう」というのは、これは、カラスの「許嫁」（雌のカラス）だからこそ気が付くことであり、雄のカラスでは恐らく気が付かないものである。――そして、（正面から）お城の中へ入ることは、とても出来ませんよ。あなたは、その通り裸足でしょう。銀ずくめの番兵や金ぴかのお役人たちがとても許してはくれないでしょう。でも、泣かなくてもいいですよ。どうにかして連れてってあげますからね。実は、「……僕の許嫁は、寝室に通ずる狭い裏階段を知っていますし、鍵のありかだって知っているんですよ」とある。――これが、すなわち、「……結構、結構！」ということであり、その狭い「秘密の裏階段」を上がっていけば、やがては「二人」（王子と王女）の「寝室」へと通じているということである。そこで、カラスとゲルダは、まず、庭の中へはいって大きな並木道を通っていくと、木の葉が一枚また一枚と散っているとともに、やがて、お城の明かりも一つまた一つと消えていったとき、カラスは、ゲルダを裏口のところへと連れていくと、そこは少し開いていました。これは、当然、カラスの「許嫁」が二人のために少し開けておいたということである。

さて、その女主人公のゲルダの「胸」（心）は、「……どんなに心配とあこがれ（期待）とで高なったことでしょう！　まるで何か悪いことでもしようとしているような心持ちでしたが、（これは当然密かにお城の中に忍び込んでいるからであり）、しかし、ゲルダは、ただその人がほんとうにカイかどうか知りたかっただけなのです。そうです、それはカイ

に違いありません。ゲルダは、カイの賢そうな目と、長い髪の毛とを、ありありと思い浮かべ、また、自分たちがうちのバラの花の下にすわっていた時のように、にこにこしているカイの姿がはっきり目に見えるようでした。（これはもう期待で胸が一杯になっているということであり）、そして、カイがゲルダを見て、どんなに遠い道を、自分のために、はるばる歩いてきたかを聞いたら、また、自分がうちへ帰らないので、どんなにみんなが悲しんでいるかを知ったら、きっと喜んでくれるでしょう。ああ、そう思うと、心配でもあり、うれしくもありました。

これは、非常に興味深いところであり、それは、われわれ人間というのは、まだその「目的」に到達しないうちから、その「目的」に到達した時のことをあれこれ「想像」（イメージ）して、その時には、「……こう言おう、こうしよう」とか、また、例えば、文学賞でもアカデミー賞でも、その他、何の「賞」でもよいが、或いは、何らかの試合に勝ったり、優勝したりした時に、その時には、「……こういうコメントを言おうとか、こういうパフォーマンスをしよう」などと、あれこれ想像し考えたりするものである。それと全く同じように、女主人公のゲルダも、カイに会った時のことをあれこれ想像し考えたりしているのであり、そう思うと、心配でもあり、（それはそうなるかならないかどちらになるか心配でもあり）、また、うれしくもありました。（それはそうなった時のことをあれこれ考えるとうれしくもあった）ということである。

九、秘密の回廊から最初の広間へ

やがて、二人は、階段を（登って）上に来ました。そこには小さいランプが棚の上に灯っていました。床の真ん中にお城のカラスが立っていて、頭をあちこちに回しながらゲルダをながめました。ゲルダは、おばあさんから教わっていた通り、丁寧におじきをしました。「……可愛いお嬢さん、あなたのことは、わたしの許嫁がとてもほめておりましたわ」と、お城のカラスは言いました。「……あなたの、よく人の申します履歴とかいうものは、ずいぶん悲しいんですのね。――では、そのランプを持ってくださいませんか。ご案内しますわ。ここを真っ直ぐにはいりましょう。そうすれば、誰にも会いませんから」。「……あたしたちのすぐあとから、何かがついてくるような気がするわ」と、ゲルダは言いました。そう言えば、たしかに、すぐ横を、さっさっ！　と通り過ぎるものがありました。それは、壁にうつった影のようなもので、たてがみをなびかせ、細い脚をしている馬や、猟師たちや、馬に乗った紳士や貴婦人、そういった人たちでした。――「……あれはただの夢なんですの」と、カラスは言いました。「……ああして、ご主人たちの考えを狩りにお誘いするために来たのです。でも、かえって、都合がようございました。おやすみになっているところを、一層よくご覧になれますもの。ですけれど、あなたがいまに出世して、立派な身分になった時は、お礼の気持ちをお忘れなくね」。「……そんなことは、言うもんじゃないよ」と、森のカラスは言いました。（本文）

＊　　＊

さて、二人は、いよいよ「階段」を（登って）上に来ると、「……そこには小さいランプが棚の上に灯っているとともに、床の真ん中にはお城のカラスが立っていて、頭をあちこちに回しながらゲルダをながめました」とある。――まず、「……小さいランプが棚の

上に灯(とも)っていた」のは、当然、カラスの「許嫁(いいなずけ)」（お城のカラス）が火を灯(とも)したのであり、普段は、真っ暗の所なのである。そして、「……床の真ん中にお城のカラスが立っていて、頭をあちこちに回しながらゲルダをながめた」のは、この「お城のカラス」は、二人が来るのをここでずっと待っていたとともに、「……頭をあちこちに回していた」のは、ほかに誰かいないかと警戒しながら、女主人公のゲルダを見たということである。すると、女主人公のゲルダは、おばあさんから教わっていた通り、丁寧におじきをしました。「……可愛いお嬢さん、あなたのことは、わたしの許嫁(いいなずけ)がとてもほめておりましたわ」と、お城のカラスは言いました。「……あなたの、よく人の申します履歴(りれき)とかいうものは、ずいぶん悲しいんですのね」とある。――これは、雄(おす)のカラスから、主人公（ゲルダ）の今の「境遇」（大好きなカイが行方不明になり、それを必死になって捜し回っている事）などをあれこれ聞いていたからである。そして、その「お城のカラス」は、それでは、「……そのランプを持ってくださいませんか。ご案内しますわ。ここを真っ直ぐにはいりましょう。そうすれば、誰にも会いませんから」と言うと、女主人公のゲルダは、「……あたしたちのすぐあとから、何かがついてくるような気がするわ」と言うのでした。

そう言えば、確かに、すぐ横を、さっさっ！　と通り過ぎるものがありました。それは、壁にうつった影のようなもので、たてがみをなびかせ、細い脚(あし)をしている馬や、猟師たちや、馬に乗った紳士や貴婦人、そういった人たちでした。――「……あれはただの夢なんですの」と、（お城の）カラスは言いました。「……ああして、ご主人たちの心を狩りにお誘いするために来たのです」とある。――これは、一体、何なのか？　壁にうつった影のようなものとある。だとすれば、例えば、狩りを描いた「絵画や写真或いは映写」のようなものか？　アンデルセンの時代には、写真はあったが、まだ正式の映写機はなかった。何か影絵のようなものが動いているのか？　それとも、実際に馬車がやって来ていて、その影が壁に映っているのか、それとも、人間の「夢の中」に現われるものなのか？　何とも判別しがたいが、お城のカラスは、かえって、都合がようございました。おやすみになっているところを、一層よくご覧になれますもの。ですけれど、あなたがいまに出世して、立派な身分になった時は、お礼の気持ちをお忘れなくね」とある。――さて、この「……あなたがいまに出世して、立派な身分になった時は、お礼の気持ちをお忘れなくね」とあるのは、もし女主人公のゲルダが王子様の「親しいお友だち」であれば、当然のことながら、何らかの「優遇処置」がとられて、例えば、お城に仕えるようになり、やがて立派な身分になった時には、お礼の気持ちをお忘れなくね」ということであり、それに対して、「……そんなことは、言うもんじゃないよ」と、森のカラスは言うのでした。

十、最初の広間から二人の寝室へ

さて、みんなは、最初の広間に入りました。広間の壁には美しい花模様をつけたバラ色の繻子(しゅす)が張りつめてありました。さっきの夢は、もうこの広間をざわめきながら通り過ぎて行きました。けれども、その走り方があまり早くて、ゲルダにはご主人の姿が目に止まりませんでした。広間は、広間から広間へと通りぬけるごとにだんだん立派になっていきました。全くもう目を丸くするばかりでした。こうして、いよいよみんなは寝室へ来ました。寝室の天井は、葉を一杯にひろげた大きなシェロの木の形になっていました。その葉

はガラス、しかも上等のガラスでできていました。そして、床の真ん中に立っている一本の太い黄金(こがね)の幹に、ユリの花のようなベッドが二つつるしてありました。その一つは、まっ白で、それには王女が寝ていました。もう一つは、赤くて、その中にこそ、ゲルダの捜しているカイが寝ているはずです。ゲルダは、赤い花びらの一つを、そっとわきへ寄せてみました。日にやけた頸(くび)すじが見えました。――ああ、カイでした！――ゲルダは大声で名を呼びながら、ランプを差し出しました。――その時、さっきの夢が馬に乗って、ざわざわ部屋の中へ戻って来ました。――その人は、目を覚まして、顔をこちらへ向けました。すると、――それは、カイではありませんでした。（本文）

＊　＊

さて、みんなは、「……最初の広間に入ると、広間の壁には美しい花模様をつけたバラ色の繻子(しゅす)（織物）が張りつめてありました。さっきの夢は、もうこの広間をざわめきながら通り過ぎて行きました。けれども、その走り方があまり早くて、ゲルダにはご主人の姿が目に止まりませんでした」とある。――さて、ここにも「……さっきの夢は、もうこの広間をざわめきながら通り過ぎて行きました。けれども、その走り方があまり早くて、ゲルダにはご主人の姿が目に止まりませんでした」とある。これは、一体、何なのか？　さっきの「夢は」とある。この「馬に乗った夢」とは、王子が見ている「夢」なのか？　その「夢」が勝手に動き回っているのか？　それとも、その「夢」というのは、王子とは関係なく、いわば「……勝手に独自に動き回っている夢であり、実体のないもの、例えば、何らかの亡霊や幽霊その他のようなものなのか？　何とも判別しがたいものである。

それはともかく、広間は、広間から広間へと通りぬけるごとにだんだん立派になっていき、全くもう目を丸くするばかりでした。こうして、いよいよみんなは寝室へ来ました。寝室の天井は、葉を一杯にひろげた大きなシェロの木の形になっていて、その葉はガラス、しかも上等のガラスでできていました。そして、床の真ん中に立っている一本の太い黄金(こがね)の幹に、ユリの花のようなベッドが二つつるしてあり、その一つは、まっ白で、それには王女が寝ていて、もう一つは、赤くて、その中にこそ、ゲルダの捜しているカイが寝ているはずですが、その時、また、「……さっきの夢が馬に乗って、ざわざわ部屋の中へ戻って来ました」とある。これは、王子が見ている「夢」なのか？　それとも、王子とは関係なく、勝手に独自に動き回っている夢なのか？　その人（王子）は、目を覚まして、顔をこちらへ向けましたが、それは、カイではありませんでした、となるのである。

十一、二人は目を覚まし、ゲルダはその経緯(いきさつ)を話す

さて、王子は、頸(くび)すじのところだけカイに似ていたのでした。けれども、若くて美しい人でした。その時、白いユリの花のベッドから王女が顔をのぞかせて、そこにいるのはだれ、と、たずねました。ゲルダは泣きながら、いままでの身の上話やカラスが親切にしてくれたことなどをすっかり話しました。「……まあ、可哀そうに！」と、王子も王女は言いました。それからカラスをほめて、自分たちは少しも気を悪くしていないけれど、こんなことは、たびたびするものではないよ、と話して聞かせました。それはそれとして、カラスたちは、ごほうびをいただくことになりました。「……おまえたちは、自由に飛びまわりたいかい？」、それとも、「……お城づきのカラスになって、台所のおこぼれならな

んでもいただける、ちゃんとした職を持ちたいかい？」と、王女は聞きました。すると、二羽のカラスはおじきをして、ちゃんとした職のほうをお願いしました。それは、年を取ってからのことを考えたからでした。そして、「……年を取ってからのために、ちゃんとした職を持っていることは、よいことでございますから」と、（王女に）言いました。

さて、王女は、ベッドから出て、ゲルダをそれに寝かせました。ゲルダにとって、これ以上うれしいことはありませんでした。ゲルダは、小さな手を合わせて、「……人に対しても動物に対してもなんて親切なんでしょう！」と、心に思いました。そして、目をつぶって、やすらかに眠りました。すると、またもや、いろいろの夢が飛んで入ってきました。その夢たちは、神様の天使のように見え、みんなで一つの小さな橇をひいていました。その橇にはカイが乗ってうなずいていました。けれども、それはみな、ただの夢でしたから、目を覚ますと、たちまち消えてしまいました。（本文）

＊　＊

さて、女主人公のゲルダは、王子と王女の「寝室」へと忍び込み、その「王子」の顔を見てみると、「……王子は、頸すじのところだけカイに似ているだけでしたが、若くて美しい人でした。その時、一方の王女が顔をのぞかせて、そこにいるのは誰と聞くので、女主人公のゲルダは、今までの身の上話やカラスが親切にしてくれたことなどを泣きながらすっかり話すと、「……まあ、可哀そうに！」と、王子も王女も言い、それからカラスをほめて、このようなことは度々するものではないと諭されながらも、カラスたちは、ご褒美をいただくことになり、それは、「……おまえたちは、自由に飛びまわりたいかい？」、それとも、「……お城づきのカラスになって、台所のおこぼれならなんでもいただける、ちゃんとした職を持ちたいかい？」というものでした。――これは、少し前に、主人公（ゲルダ）に対して、もし、「……あなたがいまに出世して、立派な身分になった時は、お礼の気持ちをお忘れなくね」ということが、図らずも、ここで「実現したこと」になり、二羽のカラスは、丁寧におじきをして、ちゃんとした職のほうをお願いし、それは、年を取ってからのことを考えた上であり、「……年を取ってからのために、ちゃんとした職を持っていることは、よいことでございますから」と、（王女様に）丁寧に答えるのでした。

さて、王女は、ベッドから出て、ゲルダをそれに寝かせました。それは、見るからに疲れきっている様子だったからでしょう。ゲルダにとって、これ以上うれしいことはありませんでした。ゲルダは、小さな手を合わせて、「……人に対しても動物に対してもなんて親切なんでしょう！」と、心に思いました。そして、目をつぶって、やすらかに眠りました。すると、またもや、いろいろの夢が飛んで入ってきました。その夢たちは、神様の天使のように見え、みんなで一つの小さな橇をひいていました。その橇にはカイが乗ってうなずいていました。けれども、それはみな、ただの夢でしたから、目を覚ますと、たちまち消えてしまいました。――さて、ここにも「夢」の話が出て来るが、この「夢」は、自分の「脳」（頭）が「自発的に見ている夢」ではなくて、むしろ、人間の「脳」（頭）の中に外から「いろいろな夢が飛んで入ってくる」という「考え方」であり、それゆえ、馬に乗った人たちの「夢」も、勝手に独自に動き回っている夢であり、その「夢」がまさにあちこちを勝手に動き回っていたということになるのである。

十二、翌日、馬車に乗って新たな出発

あくる日、ゲルダは、頭の先から足のつま先まで絹とビロードの着物を着せられました。そして、いつまでもお城にいて、楽しく暮らすようにと、親切にすすめられました。けれども、ゲルダはそれをおことわりして、小さな馬車と、それをひく一頭の馬と、一足の小さな長靴と、これだけいただきたいとお願いしました。そうしたら、もう一度、広い世の中へ出ていって、カイを捜してみたい、と言いました。

すると、長靴ばかりでなく、手をあたためるマフまでもいただきました。そして、きれいに旅のしたくができあがりました。こうして、いよいよ出発の時がきますと、門の前に、何から何まで金でできている新しい馬車が止まりました。それには、王子と王女の紋章が、星のように輝いていました。御者と、従者と、先乗りと、そうです。先乗りまでもですよ、みんな金の冠をかぶってひかえていました。王子と王女はゲルダの手を取って馬車に乗せてくれました。そして、ゲルダの幸福を祈ってくださいました。もう今では結婚をすませていた森のカラスが、三マイルばかり送ってくれることになりました。カラスは、ゲルダとならんで馬車に乗っていました。というのは、カラスはうしろ向きに、馬車に乗って行くことはできないからです。もう一羽のカラスは門のところに立って、翼をばたばたさせました。いっしょに送ることができなかったわけは、お城でちゃんとした職を持つようになって、その上、たべるものがたくさんになってからというもの、よく頭痛がしたからです。馬車の内側は、甘いビスケットが詰めてあり、座席の下にも、くだものやコショウ入り菓子が入っていました。――「……さようなら！　さようなら！」と、王子と王女は叫びました。ゲルダは泣きました。カラスも泣きました。――こうして、早くも、三マイルばかり来ました。こんどはカラスが、さよならを言いました、ほんとうに、つらい悲しいお別れでした。カラスは、道ばたの木の上に飛び上がって、馬車が見えなくなるまで、黒い翼を羽ばたいていました。馬車は、明るいお日様のように、いつまでもいつまでも、きらきら輝いていました。（本文）

＊　＊

さて、あくる日、女主人公のゲルダは、頭の先から足のつま先まで絹とビロードの着物を着せられて、いつまでもお城にいて、楽しく暮らすようにと親切にすすめられましたが、ゲルダはそれをおことわりして、小さな馬車と、それをひく一頭の馬と、一足の小さな長靴と、これだけいただきたいとお願いし、そうしたら、もう一度、広い世の中へ出ていって、カイを捜してみたいと言うのでした。――これは、非常に興味深いところであり、一つは、このまま「……いつまでもお城にいて、楽しく暮らすという道」を選ぶべきなのか、それとも、もう一つは、「……もう一度、広い世の中へ出ていって、カイを捜してみたいという道」を選ぶべきなのか、この「二つの道」の、一体、どちらの道を選ぶべきなのかと問われた時に、女主人公のゲルダは、何の躊躇もためらいもなく、「……もう一度、広い世の中へ出ていって、カイを捜してみたいという道」を選んだということは、それだけ「カイへの想い」は、半端なものではなく、まさに「一途なもの」であったということである。――すると、長靴ばかりでなく、手をあたためるマフ（円筒形の毛皮）までもいただき、きれいに旅の支度が出来上がりました。こうして、いよいよ出発の時が来ると、門の前に、何から何まで金でできている新しい馬車が止まり、それには王子と王女の紋章が星のように輝いていました。御者と、従者と、先乗りと、そうです。先乗り（行列の先頭に立つ騎

馬の人）までもですよ、みんな金の冠をかぶって控(ひか)えていました。王子と王女は、ゲルダの手を取って馬車に乗せてくれて、そして、ゲルダの幸福を祈ってくれました。

むろん、これらはすべて王子と王女のまさに「心尽し」のものではあったが、しかし、結果としては、この金ぴかの「馬車」というものは、かえって、「山賊」たちに襲われることになってしまうのである。それはともかく、もう今では結婚をすませていた森のカラスが、三マイル（約四・八km）ばかり送ってくれることになり、カラスは、ゲルダとならんで馬車に乗っていました。というのは、カラスはうしろ向きに馬車に乗って行くことはできないからです。（これは進む方向と逆に向くことは、生理的に苦痛ということなのか？）、そして、もう一羽のカラス（お城のカラス）は、門のところに立って、翼をばたばたさせました。一緒に送ることが出来なかったのは、お城でちゃんとした職を持つようになり、（つまり勤務中）であり、その上、食べる物がたくさんになってからというものは、よく「頭痛」がしたからです。これは、恐らく、食べ過ぎやストレスなどから、まさに「体調不良」になっているのである。

一方、女主人公や森のカラスが乗っている馬車の内側には、甘いビスケットが詰めてあり、座席の下にも、くだものやコショウ入り菓子が入っていました。これは、食料が確保されていたということである。――そして、「……さようなら！　さようなら！」と、王子と王女は叫びました。ゲルダは泣きました、カラスも泣きました。――こうして、早くも三マイル（約四・八km）ばかり来ると、今度は、カラスが「さよなら」を言いました。ほんとうに「辛(つら)い悲しいお別れ」でした。森のカラスは、道ばたの木の上に飛び上がって、馬車が見えなくなるまで黒い翼(つばさ)を羽ばたいていました。――ちなみに、この森のカラスは、ゲルダがカイを無事に救出して一緒に帰って来ると、すでに亡くなっているのでした。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、結局、森のカラスは、森のカラスとして生きた方が幸せだったのかも知れない。……そして、走る馬車は、明るいお日様のように、いつまでもいつまでもきらきら輝いているのでした。

＊　＊

五、第五のお話

山賊の小娘

五、第五のお話
山賊の小娘

一、山賊に襲われる馬車

さて、「……ゲルダの乗っている馬車は、暗い森の中を通りました。馬車は、たいまつのように光り輝きました」。その光が山賊どもの目を射ったので、みんなは、もう我慢ができなくなりました。「……やあ、金だ！　金だぞ！」と、叫びながら飛び出して来ました。そして、馬を押さえ、先乗りや、御者や、従者を殺して、ゲルダを馬車から引きずり下ろしました。「……こりゃ、太って、可愛い子じゃ、クルミの実で太らしたんじゃな」と、年取った山賊のばあさんが言いました。このばあさんは、長い恐いひげを生やして、まゆ下は目の上までかぶさっていました。「……まるで、太らした子羊そっくりじゃ。さて、味はどんなもんじゃろう！」と、こう言って、ばあさんは短刀を引き抜きました。それは、ぴかぴか光っていて、身の毛もよだつばかりでした……。（本文）

＊　＊

まず、女主人公のゲルダの乗った馬車は、「……暗い森の中を通っていたが、その馬車は、たいまつのように光り輝いていた」とある。それは、まさに「……何から何まで金でできている新しい馬車であり、それには王子と王女の紋章が星のように輝いているとともに、御者と従者と先乗りまでがいて、みんな金の冠をかぶっていた」のでした。これは、獲物に飢えに飢えているハイエナのような「山賊たち」から見れば、まさに願ったり叶ったりの「最上の獲物」であり、いわば「鴨がネギを背負ってやって来た」状態であって、それゆえ、その金ピカに輝くその光が山賊どもの目を射った時には、みんなは、もう我慢ができなくなり、「……やあ、金だ！　金だぞ！」と、叫びながら飛び出して来て、そして、馬を押さえ、先乗りや御者や従者を殺して、ゲルダを馬車から引きずり下ろすという状態になってしまったのである。そして、怯えるゲルダを見ては、「……こりゃ、太って、可愛い子じゃ、クルミの実で太らしたんじゃな」と、年取った山賊のばあさんが言うのでした。このばあさんは、長い恐いひげを生やして、まゆ下は目の上までかぶさっていたとある。そして、「……まるで、太らした子羊そっくりじゃ。さて、味はどんなもんじゃろう！」と、こう言って、ばあさんは短刀を引き抜くと、それは、ぴかぴか光っていて、身の毛もよだつばかりでした、とある。――これは、一体、どういうことになるのか？　例えば、この山賊のばあさんは、実際に人肉を食べていたということなのか？　それとも、女主人公のゲルダを敢えて怖がらせるために、わざとそんなことを言っているのか？　何とも判別しがたいが、ただ、人を殺すということでは、先乗りや御者や従者などを何の容赦もなく殺しているので、ほとんど何の抵抗もなく人を殺すことはでき得るのである。

二、山賊の小娘の出現

その瞬間、「アッ！」と、ばあさんは声を上げました。それは、ばあさんの小さな娘が背中にしがみついて、いきなりばあさんの耳にかみついたのです。ほんとうにこの小娘は、乱暴で手のつけられない子でした。今も面白がってそんなことをしたのです。「……この

がきめが！」と、ばあさんは言いました。けれども、そのためにゲルダを殺す切っ掛けがなくなりました。「……この子は、あたしと遊ぶんだよ！」と、山賊の小娘は言いました。「……この子は、あたしにマフときれいな着物とをくれるの。そして、あたしの寝床でいっしょに寝るんだよ」と、こう言って、またもやかみつきましたので、ばあさんは、飛び上がって、きりきり舞いをしました。ほかの山賊たちは、みな笑いながら言いました。「……どうだ。見ろやい。ばあさんが、がきと一緒に踊ってござるわ！」と言うのでした。（本文）

＊　＊

さて、女主人公のゲルダが今にも殺されそうになった時、その瞬間、「アッ！」と、短刀を持ったばあさんは、声を上げました。それは、「……ばあさんの小さな娘が背中にしがみついて、いきなりばあさんの耳にかみついたのです。ほんとうにこの小娘は、乱暴で手のつけられない子であり、今も面白がってそんなことをしたのです」とある。――この山賊の小娘が、結果として、女主人公のゲルダを助けることになるが、それに対して、「……このがきめが！」と、ばあさんは言い捨てながらも、女主人公のゲルダを殺す切っ掛けを失ってしまうのである。――一方、山賊の小娘は、「……この子は、あたしと遊ぶんだよ！」と言い、「……この子は、あたしにマフときれいな着物とをくれるの。そして、あたしの寝床でいっしょに寝るんだよ」と言うのでした。

これは、非常に興味深いところであり、この山賊の小娘の「人間関係」は、恐らく、多くは「大人との関係」であり、それゆえ、自分と同じくらいの子供たちと遊ぶことも少なく、一人寂しい思いをしていたかと思うが、そのような「心理状態」の時に、たまたま自分と同じくらいの可愛いゲルダを見た時に、この山賊の小娘は、まさに「自分の遊び相手」（或いは自分のペット）にしようと決めたのであり、それが、まさに「……この子は、あたしと遊ぶんだよ！」であり、「……この子は、あたしにマフときれいな着物とをくれるの。そして、あたしの寝床でいっしょに寝るんだよ」となるのである。そして、年寄りのばあさん（実は母親）に何度かかみついているのは、女主人公のゲルダを殺そうとする意志をそいでいるのであり、一方、それを見ていたほかの山賊たちは、みな笑いながら、「……どうだ。見ろやい。ばあさんが、がきと一緒に踊ってござるわ！」となるのである。

三、二人を乗せた馬車は森の奥に

さて、「……あたい、あの馬車に乗るんだ！」と、山賊の小娘は言いました。この子は、甘やかされて育てられ、おまけに強情（ごうじょう）ときているものですから、一度言い出したら、もうあとへは引きません。小娘とゲルダは馬車に乗り込んで、切り株やイバラの茂みを飛び越えて、森の奥深く入って行きました。山賊の小娘は、ゲルダと同じくらいの背丈（たけ）でしたが、ずっと力強くて、肩幅（はば）も広く、こげ茶色の膚（はだ）をしていました。目はまっ黒で、どこか悲しみをたたえていました。小娘は、ゲルダのからだを抱いて言いました。「……あたし、おまえが嫌いにならないうちは、誰にもおまえを殺させはしないよ。おまえ、きっと王女様なんだろ？」と聞くので、「……いいえ！」と、ゲルダは言いました。そして、今までのことをすっかり話して聞かせました。それから、自分がどんなにカイのことを思っているかということも話しました。――山賊の小娘は、真剣な顔つきをして、ゲルダをじっと

見ていましたが、ちょっとうなずいて言いました。「……あたし、おまえが嫌いになっても、誰にも殺させはしないよ。そのくらいなら、あたしが自分でするよ」。そして、ゲルダの目をふいてやり、両手をきれいなマフ（円筒形の毛皮の防寒具）の中につっ込みました。マフは、とても柔らくて、あたたかでした。（本文）

＊　＊

さて、山賊の小娘は、「……あたい、あの馬車に乗るんだ！」と言い出すが、これは、当然、馬の扱いなどは心得ているのであり、しかも、「……この子は、甘やかされて育ち、おまけに強情ときているので、一度言い出すともう後へは引かない性格」なので、小娘とゲルダは、さっさと馬車に乗り込んで、切り株やイバラの茂みを飛び越えて、森の奥深くへと入って行くが、それはもちろん、その森の奥深くにこそ、山賊たちの「隠れ家」（つまり「山賊の城」）があるのである。――ところで、その山賊の小娘の「容姿・容貌」は、女主人公のゲルダと同じくらいの背丈でしたが、ずっと力強くて、肩幅も広く、こげ茶色の膚をしていました。目はまっ黒で、どこか悲しみをたたえていました。――この「悲しみ」をたたえているのは、やはり同じぐらいの子供の「遊び相手」もなく、一人寂しい思いをしていたからであり、だからこそ、この小娘は、ゲルダのからだを抱いて言うには、「……あたし、おまえが嫌いにならないうちは、誰にもおまえを殺させはしないよ」とあるが、これは、「……おまえが嫌いにならないうちは、（お前を殺そうとする）山賊たちからお前を守ってやるよ」ということであり、また、「……おまえ、きっと王女様なんだろ？」と聞くが、これは、言うまでもなく、「……王子と王女の紋章の付いた金ピカの馬車」に乗っていたからであり、しかも、女主人公のゲルダが、「……今までのことをすっかり話して聞かせ、しかも、自分がどんなにカイのことを思っているかということも話す」と、山賊の小娘は、真剣な顔つきをして、ゲルダをじっと見ていたが、「……あたし、おまえが嫌いになっても、誰にも殺させはしないよ。そのくらいなら、あたしが自分でするよ」と言うが、これは、「……もう何があってもお前を守ってやるよ！」という、極めて「強い意志」の表れであり、それは、結局、女主人公のゲルダの「話」を聞いて、まさに「心の底からそのゲルダに同情した」ということであり、だからこそ、山賊の小娘は、「……ゲルダの目をふいてやり、両手をきれいなマフ（円筒形の毛皮の防寒具）の中に入れてやる」のであるが、そのようにやさしくされた女主人公のゲルダの「マフ」の中は、「……とても柔らくて、温かであった」となるのである。

四、馬車はやがて山賊の城へ

やがて、馬車が止まりました。そこは、山賊の城の中庭でした。城は上から下まで裂け目が走っていて、大ガラスや小ガラスがその裂け目から飛び立っていました。人間の一人ぐらい、のみ込みそうな大きなブルドッグが、何匹も跳びはねていました。しかし、吠えはしませんでした。吠えてはいけないと、かたく止められていたからです。

すすだらけの古い大きな広間では、石だたみの床のまん中で火がさかんに燃えていました。その煙は、天井の下をはいまわって出口をさがしていました。大きな炊事釜の中には、汁が煮えています。野ウサギや家ウサギなどが串ざしにされて、くるりくるりと火の上でまわっていました。「……今夜は、あたしの小さな動物たちのところで、あたしと一緒に

寝るんだよ」と、山賊の小娘は言いました。二人は食べたり、飲んだりしてから、わらと毛布が敷いてある部屋のすみっこへ行きました。上を見ますと、横木やとまり木におよそ百羽ほどのハトが止まっていました。みんな眠っているようでしたが、小娘たちが近づきますと、ちょっとからだをこちらに向けました。（本文）

＊　　＊

さて、二人が乗った馬車は、やがて止まることになるが、そこは「山賊の城」の中庭であり、そして、その「山賊の城」は、上から下まで裂け目が走っていて、大ガラスや小ガラスがその裂け目から飛び立っていましたとある。――まず、森の奥深くに少し開けた所があり、そこに「山賊の城と中庭」があったが、その山賊の（木造の）城は、きっちりと造られたものではなく、いたる所に裂け目やすき間などがあり、それゆえ、そこから大ガラスや小ガラスなどが飛び立ったりもするのである。また、人間の一人ぐらいのみ込みそうな大きなブルドッグが何匹も跳びはねていたとあるが、われわれ人間が「犬」を飼うのは、一般に、番犬か猟犬或いは牧羊犬か愛玩犬のどれかと思うが、むろん、食料ということもあり得る。それでは、なぜブルドックであり、また、吠えないようにしていたのだろうか？　まず、ブルドッグは、もともと「雄牛（ブル）と戦わせる犬（ドッグ）」（それは「牛の鼻を噛む」牛いじめ）という見世物のために開発された犬であったが、一八三五年のイギリスの「動物虐待法」の成立によってそれが禁止されてからは、一般に、番犬や愛玩犬として飼われるようになるが、若しも番犬であれば、誰かが来たらすぐに吠える方がよいのではないかと考えがちであるが、これは、ワンワンと激しく吠えなくても、例えば、誰かが来た時に「ウ～と、うなり声」を出すだけでも十分であり、また、毎日日常的にワンワンと何匹もの犬が頻繁に吠えていたら、そこに「誰か」（例えば山賊の隠れ家）があることが他人にすぐに知られてしまうので、それゆえ、ふだんは吠えないようにして、必要な時だけ吠えてくれればそれでよいのである。

一方、すすだらけの古い大きな広間とあるので、かなり長くここで生活しているのであり、また、石だたみの床のまん中で火がさかんに燃えていて、その煙は、天井の下をはいまわって出口をさがしていました。大きな炊事釜の中には、汁が煮えていて、また、野ウサギや家ウサギなどが串ざしにされて、くるりくるりと火の上でまわっていたとある。――まず、古い大きな広間では、石だたみの床のまん中で火がさかんに燃えているが、恐らく、そこで酒を飲んだり食事をしたり、また、大きな炊事釜の中には、汁が煮えているとともに、野ウサギや家ウサギなどは串ざしにされて、くるりくるりと火の上でまわっていたのである。そして、山賊の小娘は、「……今夜は、あたしの小さな動物たちのところで、あたしと一緒に寝るんだよ」と言い、二人は食べたり、飲んだりしてから、わらと毛布が敷いてある部屋のすみっこへ行きました。これは、わらと毛布が敷いてある「寝床の部屋」が別に造られていたのであり、そこに行き、上を見ると、横木やとまり木におよそ百羽ほどのハトが止まっていて、みんな眠っているようでしたが、小娘たちが近づくと、ちょっとからだをこちらに向けるのでした。これは、小娘のいわばペットとしてハトが飼われていたのである。

五、小娘が飼っているハトとトナカイ

さて、山賊の小娘は、「……これはみんなあたしのなんだよ！」と、こう言って、素早く手近の一羽をつかまえて、足を持ってゆさぶりました。ハトは羽をばたばたさせました。小娘は、「……キスしてやんな！」と、こう叫ぶと、そのハトでゲルダの顔をたたきました。「……あっちのは、森のやくざ者だよ」と、小娘は、しゃべりつづけながら、上の方にある何本かの横木やとまり木の後ろを指さしました。その横木やとまり木は、高い壁にあけた穴に打ち込んでありました。「……あれは二羽とも森のやくざ者だよ。しっかり閉じ込めておかないと、すぐ飛び出して逃げてしまうんだよ。それから、ここにいるのは、あたしの古い友だちのべーだよ」。こう言いながら、一匹のトナカイを角を持ってひき出してきました。トナカイは、首にぴかぴかする胴の輪をはめられて、それでつながれていたのでした。「……こいつも、しっかりつないでおかないといけないんだよ。でないと、すぐあたしたちのところから、飛び出してしまうんだもの。毎晩、あたしは、尖ったナイフでこいつの首くすぐってやるんだよ。そうすると、とても怖がるんだから」。こう言うと、小娘は、壁の割れ目から、長いナイフを取り出して、それでトナカイの首すじをなでました。可哀そうに、トナカイは足をばたばたさせました。山賊の小娘は、さもおかしそうに笑いました。それからゲルダといっしょに寝床に入りました。（本文）

＊　＊

さて、山賊の小娘は、「……これはみんなあたしのなんだよ！」と言う。これは、ほかの山賊たちのものではなく、まさに「……自分が飼っているハトたち（ペット）」ということであり、素早く、手近の一羽をつかまえて、足を持ってゆさぶると、ハトは羽をばたばたさせるが、小娘は、「……キスしてやんな！」と、こう叫ぶと、そのハトでゲルダの顔を叩きました、これは、女主人公のゲルダの「両頬」（或いは「片頬」）にハトの口先を当てたのであり、そして、「……あっちのは、森のやくざ者だよ」と、小娘はしゃべり続けるが、それは、「……あれは二羽とも森のやくざ者だよ。しっかり閉じ込めておかないと、すぐ飛び出して逃げてしまうんだよ」とある。――ところが、この「二羽の森のやくざ者」（ハト）こそは、やがて、「……僕たち、カイちゃんを見たよ」と言う「二羽の森のハト」であり、それは、（前に）ここを飛び出して逃げて、森の「巣の中」にいた時に、まさに「……カイちゃんは雪の女王の車に乗って、森の上をすれすれに飛んで行くのを見た」ということであり、今は、ここに「伝書バト」のような習性で戻って来ていて、二羽の森のハトは、逃げられないように閉じ込められている状態にあるのである。

一方、山賊の小娘が飼っているもう一匹の動物は、「トナカイ」であり、この「トナカイ」は、極めて重要な「トナカイ」となるが、それは、「……ここにいるのは、あたしの古い友だちのべーだよ」と言いながら、一匹のトナカイを角を持ってひき出して来ると、その「トナカイ」は、首にぴかぴかする胴の輪をはめられて、それでつながれていたのでした。そして、「……こいつも、しっかりつないでおかないといけないんだよ。でないと、すぐあたしたちのところから、飛び出してしまうんだもの。毎晩、あたしは、尖ったナイフでこいつの首くすぐってやるんだよ。そうすると、とても怖がるんだから」。こう言うと、小娘は、壁の割れ目から長いナイフを取り出して、それでトナカイの首すじをなでるので、可哀そうに、トナカイは足をばたばたさせるが、山賊の小娘は、それがさもおかしそうに笑い、それからゲルダといっしょに寝床に入るのでした。――さて、山賊の小娘は、壁の割れ目から長いナイフを取り出して、それでトナカイの首すじをなでると、可哀そう

にトナカイは足をばたばたさせて怖がるが、山賊の小娘は、それがさもおかしそうに笑うとあるが、……これは、結局、彼女の「頭の中」（或いは「心の中」）にある実に様々な「鬱積した想い」などを、このような形によって、いわば「気晴らしやストレス解消」などを行なっているのであり、それからゲルダといっしょに寝床に入るのでした。

六、もう一度、カイの話をする

さて、ゲルダは、「……あなたは、寝ているあいだもナイフをはなさないの？」と、いくらか恐そうにそれを見ながら、たずねました。「……いつだって、ナイフを持って寝るんだよ」と、山賊の小娘は言いました。「……どんなことが起こるかしれないもの。それよか、もう一度、さっきのカイちゃんていう子の話をしておくれよ。それから、どうしておまえが、この広い世の中へ出てきたのか、そのわけも話しておくれ」。

そこで、ゲルダは、もう一度はじめから話をしました。頭の上のかごの中にいる森のハトがクークー泣きました。ほかのハトたちは、みな眠っていました。山賊の小娘は、ゲルダの頸に腕をまきつけ、片手にナイフを持ったまま、すうすうと寝息ををたてて眠ってしまいました。ゲルダは、目をつぶるどころではありませんでした。これからさきいったい生きていられるのか、殺されるのか、見当がつきませんでした。山賊どもは火のまわりにすわって、歌をうたったり、お酒を飲んだりしていました。山賊ばあさんまでが、とんぼがえりをしました。けれども、小さい女の子にとっては、それがどんなに恐ろしく見えたことでしょう。（本文）

＊　＊

さて、女主人公のゲルダは、山賊の小娘と一緒に寝ることになるが、その時に、ゲルダは、「……あなたは寝ている間もナイフを離さないの？」と、いくらか恐そうにそれを見ながらたずねると、「……いつだって、ナイフを持って寝るんだよ」、「……どんなことが起こるかしれないもの。それよか、もう一度、さっきのカイちゃんていう子の話をしておくれよ。それから、どうしておまえが、この広い世の中へ出てきたのか、そのわけも話しておくれ」と、山賊の小娘は言うのでした。――まず、この山賊の娘は、なぜ、いつも「ナイフを持って寝ているのか？」と問えば、それは、何よりも「自分の身を守るため」のものであり、山賊のようなことをやっていれば、寝ている間も、いつ誰に急に襲われるかも知れない。つまり、「……いつどんなことが起こるかも知れない」、それに備えてのまさに「護身用」ではあるが、それに加えて、もう一つは、やはり女主人公のゲルダに逃げられないようにするためという理由も少しはあるのだろう。

ところで、この山賊の小娘の「興味や関心」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、まさに「……もう一度、さっきのカイちゃんていう子の話をしておくれよ。それから、どうしておまえが、この広い世の中へ出てきたのか、そのわけも話しておくれ」とあるように、彼女の真の「興味や関心」は、まさに「ここにこそある」のである。それは、一体、どうしてかと問えば、それは、この山賊の小娘も、「……この山賊暮らしに満足しているわけではなく」、いつかは「……広い世の中へ出てみたい」という想いがあるからである。やがて、山賊の小娘は、「……ゲルダの頸に腕をまきつけ、片手にナイフを持ったまま、すうすうと寝息ををたてて眠ってしまうが、女主人公のゲルダは、とても目をつぶるどこ

ろではなく、これからさきいったい生きていられるのか、殺されるのか、見当もつかず、しかも、山賊どもは火のまわりにすわって、歌をうたったり、お酒を飲んだりして、山賊ばあさんまでが、とんぼがえりなどをしていて、小さい女の子にとっては、それがどんなに恐ろしく見えたことでしょう」となるのである。

七、僕たち、カイちゃんを見たよ

さて、その時、森のハトが言いました。「……クー　クー！　僕たち、カイちゃんを見たよ．白いニワトリがカイちゃんの橇を運んでいてね、森の上をすれすれに飛んで行ったっけ。その時、雪の女王が、僕たち子供に息を吹きかけたもんだから、ここにいる僕たち二羽のほかは、みな凍え死んじゃたよ。クー、クー！」と。「……まあ、あなたたち、そこでなんの話をしているの？」と、ゲルダは思わず大きな声を出しました。「……その雪の女王って、どこへ行ったの？　あなたたち、何か知らないこと？」、「……たぶん、ラップランドというところだろうよ。あそこは、年じゅう雪と氷で閉ざされているからね。そこにつながれているトナカイさんに、聞いてごらん」。「……そうですよ、あそこは氷と雪ばかりです。ほんとに恵まれたいいところです！」と、トナカイは言いました。「……きらきら光る大きな谷間を、自由にとびまわるんです！　そこに雪の女王は、夏のテントを張るんです。しかし、女王のほんとの城は、もっとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にあるんです」。「……ああ、カイちゃん！　なつかしいカイちゃん！」と、ゲルダは、思わずため息をつきました。「……さあ、もう静かに寝なってば！」と、山賊の小娘は言いました、「……でないと、このナイフをおなかに突き刺すよ」。（本文）

＊　＊

さて、この「場面」は、非常に「大事な場面」であり、それは、次のような理由からである。――まず、山賊の小娘とほかのハトたちはみな眠っている状態であり、この部屋で目を覚ましているのは、「女主人公のゲルダ」と、「かごの中にいる二羽の森のハト」だけであり、その「かごの中にいる二羽の森のハト」があれこれおしゃべりをしている状態であるが、それは、「……クー　クー！　僕たち、カイちゃんを見たよ．白いニワトリがカイちゃんの橇を運んでいてね、カイちゃんは雪の女王の車に乗っていたよ。僕たちが巣の中にいるとね、森の上をすれすれに飛んで行ったっけ。その時、雪の女王が、僕たち子供に息を吹きかけたもんだから、ここにいる僕たち二羽のほかは、みな凍え死んじゃたよ。クー、クー！」と言うと、女主人公のゲルダは、「……まあ、あなたたち、そこでなんの話をしているの？」と、女主人公のゲルダは思わず大きな声を出し、「……その雪の女王って、どこへ行ったの？　あなたたち、何か知らないこと？」と聞くので、「……たぶん、ラップランドというところだろうよ。あそこは、年じゅう雪と氷で閉ざされているからね。そこにつながれているトナカイさんに、聞いてごらん」と言うと、トナカイは、「……そうですよ、あそこは氷と雪ばかりです。ほんとに恵まれたいいところです！」と言い、「……きらきら光る大きな谷間を、自由にとびまわるんです！　そこに雪の女王は、夏のテントを張るんです。しかし、雪の女王のほんとの城は、もっとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にあるんです」と言うのでした。――さて、ここで何よりも「大事

な情報」は、まさに「二つ」であり、その一つは、「……カイちゃんは雪の女王の車に乗っていた」という情報（事実）であり、そして、もう一つは、雪の女王は、「……ラップランドに夏のテントを張るが、雪の女王のほんとの城は、もっとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」という情報（事実）である。――この「二つの事実」こそは、最も「大事な情報」になるのである。すると、女主人公のゲルダは、「……ああ、カイちゃん！　なつかしいカイちゃん！」と、思わずため息をつくが、一方、山賊の小娘は、（目を覚まして）、「……さあ、もう静かに寝なってば！」、「……でないと、このナイフをおなかに突き刺すよ」と言うのであった。

八、トナカイの生まれ故郷ラップランド

あくる朝、ゲルダは、森のハトの言ったことを残らず小娘に話しました。小娘は、たいそう真剣な顔つきをして聞いていましたが、やがて、うなずいてこう言いました。「……まあ、いいや！　どっちだって、いいや！　――で、ラップランドという国が、どこにあるか知ってるの？」と、トナカイにたずねました。「……わたしぐらいよく知っているものは、まずないでしょう」と、トナカイは言いました。そして、目をいきいきと輝かせました。「……そこで、わたしは生まれ育ったんですよ。そこの雪の原を跳びまわったもんです！」、「……ねえ、おまえ！」と、山賊の小娘はゲルダに向かって言いました。「……ほら、男たちはみんな出かけちまったよ。おっかさんだけはまだいる。おっかさんは、いつもうちに残っているんだよ。けれど、朝おそく、大きなびんから酒を飲んで、それからちょっと昼寝をするんだよ。――そうしたら、いいことを教えてやるよ」。こう言うと、寝床からはね起きて、母親の頸（くび）にかじりついて、そのひげをひっぱりながら言いました。「……あたしのやさしいヤギさん、おはよう！」、すると、母親は小娘の鼻を指で何度もはじきました。しまいには、鼻が赤く青くなりました。けれども、これはみな可愛（かあい）くってしただけのことでした。（本文）

＊　＊

さて、あくる朝、女主人公のゲルダは、森のハトの言ったことを残らず小娘に話しました。山賊の小娘は、たいそう真剣な顔つきをして聞いていたが、やがて、うなずいてこう言いました。「……まあ、いいや！　どっちだって、いいや！」とある。――これは、どうしようか迷っている状態であり、このまま女主人公のゲルダをここに留（とど）めておくべきなのか？　それとも、女主人公のゲルダの希望する通りにしてやるべきか？　もし、逃がしてやった場合、山賊ばあさんやほかの山賊たちに何を言われるか分からない。どうしたものか？　まあ、いいや！　どっちだって、いいや！」となるのである。そこでトナカイに、「……ラップランドという国がどこにあるか知ってるの？」と聞くと、「……わたしぐらいよく知っているものは、まずないでしょう」と、トナカイは言い、そして、目をいきいきと輝かせて、「……そこで、わたしは生まれ育ったんですよ。そこの雪の原を跳びまわったもんです！」と言うのでした。――これは非常に大事なところであり、それは、「……わたしぐらいよく知っているものは、まずないでしょう。なぜなら、そこはわたしの生まれ故郷だから」という話を聞いて、それならばと「次の展開」が生じるのであり、若しもよく知らない何も知らないということであれば、次の展開はないのである。

それは、「……ねえ、おまえ！」と、山賊の小娘はゲルダに向かって言い、「……ほら、男たちはみんな出かけちまって、おっかさんだけはまだいる。おっかさんは、いつもうちに残っているんだよ。けれど、朝おそく、大きなびんから酒を飲んで、それからちょっと昼寝をするんだよ。――そうしたら、いいことを教えてやるよ」と、こう言うと、寝床からはね起きて、母親の頸にかじりついて、そのひげをひっぱりながら言うには、「……あたしのやさしいヤギさん、おはよう！」、すると、母親は小娘の鼻を指で何度もはじき、しまいには、その鼻は赤く青くなったが、それはみな可愛くてしたことだったのです。――さて、この山賊のばあさんは、実は、山賊の小娘の「母親」であり、それゆえ、今、母親に甘えているような形で、母親の「ご機嫌」を取りながら、母親の「警戒心」などを取り除いているのである。

九、母親が酔って昼寝をしている間に

やがて、母親が、びんのお酒を飲んで昼寝をしてしまうと、山賊の小娘は、トナカイのところへ行って言いました。「……わたしはね。もっとなんべんも、このとんがったナイフで、おまえをくすぐってやりたいんだよ。だって、その時の、おまえのおかしなかっこうったらないんだもの。だけど、まあ、どっちだっていいや！　おまえの綱をほどいて、外へ出してやるから、ラップランドまで走って行きな。けど、一所懸命走って、この女の子を雪の女王のお城までつれて行くんだよ。そこに、この子の友だちがいるんだって。おまえも、この子の話は聞いていたろう。あんな大きな声でしゃべっていたんだし、おまえだって耳をすませて聞いてたんだから！」。

トナカイは、あまりのうれしさに跳び上がりました。山賊の小娘は、ゲルダをトナカイの背中に乗せてやり、用心深く、からだをしっかり縛って、その上、小さなふとんまであてがってくれました。「……どっちだっていいや！」と、小娘は言いました。「……さあ、おまえの毛皮の長靴だよ！　寒くなるからね。けれど、このマフはもらっておくよ。とてもきれいなんだもの。といったって寒い思いはさせないから。ほら、これはおっかさんの大きな指なし手袋だよ。おまえなら、ひじのところまで入るだろうよ。さあ、はめてごらん。――ほうら、手だけ見てると、あたしのきたないおっかさんみたいだよ」。（本文）

＊　　＊

さて、やがて、母親がびんのお酒を飲んで昼寝をしてしまうと、山賊の小娘は、トナカイのところへ行って言うには、「……わたしはね。もっとなんべんも、このとんがったナイフで、おまえをくすぐってやりたいんだよ。だって、その時の、おまえのおかしなかっこうったらないんだもの。だけど、まあ、どっちだっていいや！　おまえの綱をほどいて、外へ出してやるから、ラップランドまで走って行きな。けど、一所懸命走って、この女の子を雪の女王のお城までつれて行くんだよ。そこに、この子の友だちがいるんだって。おまえも、この子の話は聞いていたろう。あんな大きな声でしゃべっていたんだし、おまえだって耳をすませて聞いてたんだから！」とある。

まず、この「トナカイ」と「山賊の小娘」との関係であるが、それは、「……ここにいるのは、あたしの古い友だちのべーだよ」と言っている。つまり、この「山賊の小娘」のまわりにいるのはほとんど「大人の山賊たち」であって、これという「遊び相手」もいな

い状態であり、それゆえ、百羽ぐらいのハトとこの「トナカイ」こそは、何年も前からのまさに「遊び相手」（或いは「話し相手」）になっていたのである。その古い友だちの「遊び相手」（或いは「話し相手」）を手放すことにはためらいも生じるが、それが、まさに「……わたしはね。もっとなんべんも、このとんがったナイフで、おまえをくすぐってやりたいんだよ。だって、その時の、おまえのおかしなかっこうったらないんだもの」とためらいながらも、「……まあ、どっちだっていいや！」ということで、意を決して、「……おまえの綱をほどいて、外へ出してやるから、ラップランドまで走って行きな。けど、一所懸命走って、この女の子を雪の女王のお城までつれて行くんだよ。そこに、この子の友だちがいるんだって。おまえも、この子の話は聞いていたろう。あんな大きな声でしゃべっていたんだし、おまえだって耳をすませて聞いてたんだから！」とある。

それでは、なぜ「手放す方に意を決した」のかと問えば、それは、女主人公のゲルダの話を二度までも聞いているうちに、まさに「そのゲルダの境遇に心から同情した」ということであり、それゆえ、「……できることがあれば、何とかしてやりたい」という気持ちにもなったのである。――そのような時に、一つは、「二羽の森のハト」から、「……カイちゃんは雪の女王の車に乗っていたよ」という「情報」を得、また、もう一つは、ラップランドが生まれ故郷の「トナカイ」から、雪の女王は、「……ラップランドに夏のテントを張るが、雪の女王のほんとの城は、もっとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」という「情報」を得て、一気に、「……おまえの綱をほどいて、外へ出してやるから、ラップランドまで走って行きな。けど、一所懸命走って、この女の子を雪の女王のお城までつれて行くんだよ。そこに、この子の友だちがいるんだって。おまえも、この子の話は聞いていたろう」という、まさにそういう展開になっていくのである。

＊　＊

すると、トナカイは、あまりのうれしさに跳び上がりました。山賊の小娘は、ゲルダをトナカイの背中に乗せてやり、用心深く、からだをしっかり縛（しば）って、その上、小さなふとんまであてがってくれました。「……どっちだっていいや！」と、小娘は言いました、とある。――さて、再び、「……どっちだっていいや！」という言葉が出てくるが、これは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。――つまり、われわれ人間というのは、ふだんは「利害損得」などをいつも考慮に入れながら「行動」（言動）しているものであるが、この「山賊の小娘」の場合、女主人公の「ゲルダ」と古い友だちの「トナカイ」とを同時に手放すことが、一体、「……自分にとって得になるのか、それとも、損になるのか、もうどっちだっていいや！」という、そのような「心理状態」になっているのである。そして、「……さあ、おまえの毛皮の長靴（ながぐつ）だよ、寒くなるからね。けれど、このマフはもらっておくよ。とてもきれいなんだもの。といったって寒い思いはさせないから。ほら、これはおっかさんの大きな指なし手袋だよ。おまえなら、ひじのところまで入るだろうよ。さあ、はめてごらん。――ほうら、手だけ見てると、あたしのきたないおっかさんみたいだよ」と言うと、ゲルダは、うれし涙をこぼしました、と続くのである。

十、北方のラップランドをめざして……

ゲルダは、うれし涙をこぼしました。「……そんな、めそめそするのはごめんだよ！」と、山賊の小娘は言いました。「……それよりか、うれしそうな顔をするのがほんとじゃないか。それからここにパンが二つとハムが一つあるよ。これだけあれば、おなかのすくこともないだろう」。この二つの品は、トナカイの背中のうしろに結びつけられました。山賊の小娘は戸をあけて、大きな犬をみんな中へおびき入れてから、ナイフでトナカイの綱を切って言いました。「……さあ、走れ！　だけど、背中の女の子に気をつけるんだよ！」と言いました。――ゲルダは、大きな指なし手袋をはめた手を、山賊の小娘のほうへのばして、さようなら、と言いました。トナカイは、やぶや切り株をとび越え、大きな森をつきぬけ、沼地や草原を横切って、一所懸命、走りに走りました。オオカミがほえ、カラスが叫んでいます。「……シュー！　シュー！」と空で音がしました。それは、ちょうど何かが赤い炎を吐いているようでした。――「……あれは、わたしの昔なじみのオーロラです」と、トナカイは言いました。「……どうです、あの光ること！」、それからも、トナカイは夜となく昼となく走りつづけました。パンもみんな食べてしまい、ハムもなくなりました。その時、ラップランドに着きました。（本文）

＊　＊

さて、いよいよ「北方のラップランド」をめざすことになるが、その前に、女主人公のゲルダが「うれし涙」をこぼすと、山賊の小娘は、「……そんな、めそめそするのはごめんだよ！」と言い、「……それよりか、うれしそうな顔をするのがほんとじゃないか。それからここにパンが二つとハムが一つあるよ。これだけあれば、おなかのすくこともないだろう」と言って、その二つの品は、トナカイの背中のうしろに結びつけられました。そして、山賊の小娘は、戸を開けて、大きな犬をみんな中へおびき入れてから、ナイフでトナカイの綱（つな）をたち切ると、「……さあ、走れ！　だけど、背中の女の子に気をつけるんだよ！」と言うのであった。――一方、女主人公のゲルダは、大きな指なし手袋をはめた手を、山賊の小娘のほうへ伸ばして、さようなら、と言うのでした。……

さて、トナカイは、やぶや切り株を跳び越え、大きな森を突き抜け、沼地や草原を横切って、一所懸命、走りに走りました。オオカミが吠（ほ）え、カラスが叫んでいます。「……シュー！　シュー！」と空で音がしましたが、それは、ちょうど何かが赤い炎を吐いているようでした。――「……あれは、わたしの昔なじみのオーロラです」、「……どうです、あの光ること！」と、トナカイは言うのでした。それからも、トナカイは、夜となく昼となく走りつづけ、パンもみんな食べてしまい、ハムもなくなりましたが、その時、ついに目的地の「ラップランド」へと着きましたとなるのである。

＊　＊

六、第六のお話

ラップ人の女とフィン人の女

六、第六のお話

ラップ人の女とフィン人の女

一、ラップランドの小さな家

さて、ゲルダを乗せたトナカイは、とある小さな家の前でとまりました。その家は、たいそうみすぼらしい家でした。屋根は地面までとどいていて、入り口はたいへん低くて、うちの人が出たり入ったりするのに、腹ばいにならなければなりませんでした。

家の中には、年寄りのラップ人の女が一人いるきりで、ほかには誰もいませんでした。そのおばあさんは立って、魚油ランプのそばで魚を焼いていました。トナカイは、おばあさんにゲルダのことをすっかり話しました。もっとも、その前に自分のことを話しました。自分のことのほうがずっと大切に思えたからです。それに、ゲルダは、寒さのためにひどく疲れていて、口もろくにきくことができませんでした。（本文）

＊　＊

さて、女主人公の「ゲルダ」を乗せた「トナカイ」（そのラップランド生まれのトナカイ）は、まさにその「ラップランド」の、とある小さな家の前で止まりました。「……その家は、たいそうみすぼらしい家であり、屋根は、地面までとどいていて、入り口はたいへん低くて、うちの人が出たり入ったりするのに、腹ばいにならなければなりませんでした」とある。――まず、ラップランドは、「……フィンランドの最北端にあり、スウェーデン、ノルウェー、ロシア、バルト海と接する過疎地域であり、広大な亜寒帯の荒野、スキーリゾートに加えて、真夜中の太陽やオーロラなどの自然現象でも知られている。県庁所在地のロバニエミは、ラップランドを訪れる際の拠点であり、ラップランドの北には先住民族のサーミ人が住んでいるが、その居住地は近隣諸国にまで広がっている」とある。さらに、ここで大事なことは、その「サーミの神話」では、「……全てのものに魂があるとされていて、生き物でも、そうでないものでも、それぞれの物語があり、例えば、岩や木、キツネやトナカイ、空に輝くオーロラ、人々が使うナイフ、その他、全てのものが英知を持っているのであり、魂は、すべてのものの中にいつも存在しているとされている」とある。だとすれば、例えば、雪や氷が「魂」（英知）を持ち、また、雪の女王が「魂」（英知）を持っていたとしても、何も不思議なことにはならないのである。

さて、家の中には、年寄りのラップ人の女が一人いるきりで、ほかには誰もいませんでしたとある。――まず、「ラップ人」とは、「ラップランドの人」ということであり、そのおばあさんは立った状態で、魚油ランプ（魚油は安価だが、燃える時に煙と臭いを多量に出すという）のそばで魚を焼いていました。トナカイは、おばあさんにゲルダのことをすっかり話しました。もっとも、その前に自分のことを話しました。自分のことのほうがずっと大切に思えたからです」とある。――これは、非常に面白いところであり、なぜ、トナカイは、自分の話を先にしたのか？　それは、トナカイにとって、この「ラップランド」は、まさに「生まれ故郷」であり、それゆえ、何年も、山賊の小娘に「飼われていた」が、やはり「故郷のこと」はあれこれ気になっていたのであり、それゆえ、今、故郷に久しぶりに帰って、まさに自分の「故郷のこと」（例えば家族や友だちその他）についていろいろ聞きたいことは山ほどあったということである。（ちなみに、このトナカイは、ゲ

ルダがカイを助けて一緒に帰って来ると、すでに結婚をしていて、子供もいるという展開になっていくのである。）

二、ラップ人の女

さて、ラップ人の女は、「……おお、おお！　それは可哀そうに！」と言いました。「……それだと、おまえさんたちは、まだまだ走らなければならないよ。ここから百マイル以上も北のフィンマルケンというところまで行かなけりゃだめだよ。なぜなら、雪の女王は、今、そこにおいでで。長い長い夜ごと、青い火を燃やしていなさるんだから。ちょっくら、ひと筆、干ダラに手紙を書いてあげよう。わしんところには紙がないからね。これを持って、わしの知り合いのフィン人の女のところへ行きなよ。その女の人のほうが、わしよりは詳しいことを教えてくれるだろうよ」と言うのでした。

そして、ゲルダが火に暖まって食べたり飲んだりしている間に、ラップ人の女は、干ダラの上に二言三言手紙を書いて、大切に持って行くようにと言って、ゲルダに渡しました。それから、ゲルダは、再び、トナカイにしっかりゆわえ付けられて、そこを出発しました。「シュー！　シュー！」という音が空でしました。たとえようもなく美しい青いオーロラが、一晩じゅう燃えていました。――こうして、とうとうフィンマルケンにやって来ました。そして、フィン人の女の家の煙突をノックしました。なぜなら、この家には戸口というものがなかったからです。（本文）

＊　＊

さて、ラップ人の女は、女主人公（ゲルダ）の今の「境遇」を聞いて、「……おお、おお！　それは可哀そうに！」と言い、「……それだと、おまえさんたちは、まだまだ走らなければならないよ。ここから百マイル以上も北のフィンマルケンというところまで行かなけりゃだめだよ。なぜなら、雪の女王は、今、そこにおいでで。長い長い夜ごと、青い火を燃やしていなさるんだから。ちょっくら、ひと筆、干ダラに手紙を書いてあげよう。わしんところには紙がないからね。これを持って、わしの知り合いのフィン人の女のところへ行きなよ。その女の人のほうが、わしよりは詳しいことを教えてくれるだろうよ」と言うのでした。――さて、このラップ人の女は、「……今、雪の女王は、ここから百マイル以上も北のフィンマルケンというところにおいでだ」と言うのであった。その「フィンマルケン」（ノルウェーの最北部）で、「……長い長い夜ごと、青い火を燃やしていなさるん」ということは、雪の女王は、いわゆる「雪や氷の世界」を支配（統制）しているだけではなく、いわば「オーロラの世界」もそれなりに支配（統制）していることになるのかも知れない。それはともかく、この干ダラに書いた手紙を持って、「……わしの知り合いのフィン人の女のところへ行きなよ。その女の人のほうが、わしよりは詳しいことを教えてくれるだろうよ」となるのである。

そして、女主人公のゲルダが火に暖まって食べたり飲んだりしている間に、ラップ人の女は、干ダラの上に二言三言（重要な言葉だけ）を手紙に書いて、大切に持って行くようにと言って、ゲルダに渡しました。それから、女主人公のゲルダは、再び、トナカイにしっかりゆわえ付けられて、そこを出発しました。「シュー！　シュー！」という音が夜空でして、たとえようもなく美しい「青いオーロラ」が一晩中燃えていました。――こうし

て、とうとうフィンマルケンにやって来て、そして、フィン人の女の家の煙突をノックしました。それは、この家には戸口というものがなかったからです、と続くのである。

三、フィン人の女

さて、家の中は、たいそう暑くて、フィン人の女は、まるで裸も同然でした。この女は、背が低く、陰気な顔をしていました。けれども、ゲルダを見ると、さっそく着物をぬがせ、手袋や長靴も取ってくれました。そうでもしなければ、熱くてたまりませんから。そして、トナカイには、頭の上に氷のかたまりをのせてやりました。こうしてから、三度繰り返して手紙を読んで、そらで覚えてしまいますと、その干ダラ（鱈の皮）を鉄なべの中へほうり込みました。こうすれば、まだまだ結構おいしく食べられるからです。この女は、決して物を粗末にしませんでした。

トナカイは、まず自分のことを、それからゲルダのことを話しました。フィン人の女は、分別ありげに目をばちばちさせて聞いていましたが、何とも言いませんでした。トナカイは、「……あなたは、じつに賢いかたです」と、言いました。「……あなたは、世界中の風を一本の縫い糸につなぐこともできるんでしょう。わたしは、ちゃんと知っていますよ。船頭がその一つのむすび目をとくと、追い風が吹き、二番目のむすび目をとくと、強い風が吹き、三番目、四番目とといてゆくと、森の木も倒れるほどのあらしが吹くのだそうですね。ところで、どうかこの小さい娘さんに、十二人力がついて、雪の女王を負かすことができるような飲み薬を一つ、つくってやってくれませんか」。

すると、フィン人の女は、「……十二人力だって？」と、言いました。「……さぞ、役に立つことだろうよ！」と、こう言いながら、棚のところへ行って、大きな毛皮の巻き物を持ってきて、それをひろげました。そこには、不思議な文字が書いてありました。フィン人の女は、額から汗をぽたぽたたらしながら、それを読みはじめました。（本文）

＊　＊

さて、今度は、フィン人の女の「家の中」であるが、「……家の中は、たいそう暑くて、フィン人の女は、まるで裸も同然でした」とある。――これは、最初のところで、フィン人の家の煙突をノックしたとあるので、その「煙突」は、当然、「暖炉」用の煙突であり、その燃料は「薪」となり、その「薪」が赤々と燃えていたので、「家の中」は、たいそう暑かったのだろう。それはともかく、その女の人は、背が低く、陰気な顔をしていたが、女主人公のゲルダを見ると、さっそく着物を脱がせ、手袋や長靴も取ってくれました。そうしないと、暑すぎたからであり、トナカイには、頭の上に氷のかたまりをのせてやりました。こうしてから、三度繰り返して手紙を読んで、そらで覚えてしまうと、その干ダラ（鱈の皮）を鉄なべの中へほうり込み、こうすれば、まだまだ結構おいしく食べられるということで、この女の人は、決して物を粗末にしない人だったのでした。

さて、トナカイは、まず自分のことを、それからゲルダのことを話すと、フィン人の女は、分別ありげに目をばちばちさせて聞いていたが、何とも言いませんでした。トナカイは、「……あなたは、たいそう賢いかたです」と言い、「……あなたは、世界中の風を一本の縫い糸でつなぐこともできるんでしょう。わたしは、ちゃんと知っていますよ。船頭がその一つのむすび目をとくと、ほどよい風が吹き、二番目のむすび目をとくと、強い風

が吹き、三番目、四番目とといてゆくと、森の木も倒れるほどのあらしが吹くのだそうですね」とある。

これは、一体、どういう意味合いになるのだろうか？　まず、「……あなたは、たいそう賢いかたです」と言っている。だとすれば、これは、単に「魔法を使う」というようなことではなく、恐らく、今日で言えば、いわば「気象予報士」のように「気象の予報」（特に風の予報）が得意であり、例えば、船頭（船乗り）から、「……明日の海の様子はどうだろうかと聞かれた時に、明日の午前中はおだやかだが、午後からは風が強くなり、そして、夜には大時化（しけ）になるよ」と予報すると、それがぴたりとあたっていたので、世界の風を思うがままに操ることが出来るという噂が広まったのではないだろうか？

次に、トナカイは、「……どうかこの小さい娘さんに、十二人力がついて、雪の女王を負かすことができるような飲み薬を一つ、つくってやってくれませんか」と言うと、フィン人の女は、「……十二人力だって？」、「……さぞ、役に立つことだろうよ！」と言っている。――これは、そんな「……十二人力がついて、雪の女王を負かすことができるような飲み薬など、世界中どこを捜し回ったってありはしないよ」と言っているのである。つまり、いわゆる「魔法使い」ではないのであり、だからこそ、「……棚（たな）のところへ行って、大きな毛皮の巻き物を持ってきて、それをひろげると、そこには不思議な文字が書いてあったが、フィン人の女は、額から汗をぽたぽたたらしながら、それを読みはじめました」となるのである。――それでは、その「大きな毛皮の巻き物」には、一体、何が書いてあるのかと問えば、それは、恐らく、様々な分野の過去からの実に数多くの「知識」が（いわば「一冊の百科事典」のように）書き記されていたのだろう……。

四、トナカイのお願いとフィン人の女の返答　其の一

さて、トナカイは、もう一度、ゲルダのために熱心に頼みました。ゲルダも、目に涙をいっぱいためて、心からお願いするように、フィン人の女をじっと見つめました。すると、女はまたもや目をぱちぱちやりはじめました。そして、トナカイをすみっこに連れて行って、頭の上に新しい氷を乗せてやりながら、こうささやきました。

「……そのカイって子はね、たしかに雪の女王のところにいるよ。だけどね、今は何もかも自分の思い通りになっているものだから、すっかり気に入ってしまって、世界中にこんないいところはないと思っているのだよ。それというのも、みなガラスのかけらがその子の心臓に突き刺さっていて、小さいガラスの粒が目の中に入っているためなんだよ。まず、それを取り出さなければいけない。でないと、その子は、二度とほんとうの人間にはなれないし、いつまでも雪の女王の言うなりになっていなければならないんだよ」。

すると、トナカイは、「……では、そういうものにみな打ち勝つだけのものをゲルダさんにあげてくれませんか？」と言うと、「……わたしはね。ゲルダがいま持っている力よりも、大きな力をやることはできないよ。ゲルダの力がどんなに大きいか、おまえにはわからないのかい？　どんな人間でも動物でも、あの子のためには、どうしても助けになってやりたくなるじゃないか。だからこそ、はだしでこんな世界の果てまで来られたんじゃないか。それがおまえにわからないの？　あの子の力は、わたしたちなんかから教わるには及ばないんだよ。その力は、あの子自身の心の中にあるんだもの。つまり、あの子のや

さしい、罪のない心が、とりもなおさず、力なのだよ。もし、あの子が雪の女王のところへ行って、カイのからだの中から、ガラスのかけらを取り出すことができないようだったら、わたしたちでは、どうにもならないことさ……」。（本文）

＊　　＊

さて、この場面でのフィン人の女の「返答」（せりふ）こそは、作家（アンデルセン）の『雪の女王』という作品の、まさにその「核心部分」（つまり中心思想）が語られている部分でもあり、まず、トナカイは、「……もう一度、ゲルダのために熱心に頼みました。女主人公のゲルダも目に涙を一杯ためて、心からお願いするように、フィン人の女をじっと見つめました。すると、女はまたもや目をぱちぱちやりはじめ、そして、トナカイをすみっこに連れて行き、頭の上に新しい氷を乗せてやりながら、こうささやくのであった。

つまり、「……そのカイって子はね、たしかに雪の女王のところにいるよ。だけどね、今は何もかも自分の思い通りになっているものだから、すっかり気に入ってしまって、世界中にこんないいところはないと思っているのだよ。それというのも、みなガラスのかけらがその子の心臓に突き刺さっていて、小さいガラスの粒が目の中に入っているためなんだよ。まず、それを取り出さなければいけない。でないと、その子は、二度とほんとうの人間にはなれないし、いつまでも雪の女王の言うなりになっていなければならないんだよ」とある。――まず、主人公（カイ）を大きく変えてしまったものは、一体、何かと問えば、それは、一つは、まさに目の中に入った一粒の「小さい悪魔の鏡のガラスのかけら」であり、そして、もう一つは、主人公（カイ）の心臓に突き刺さっている「小さい悪魔の鏡のガラスのかけら」であって、この「二つの小さい悪魔の鏡のガラスのかけら」を取り除かない限り、主人公（カイ）は、二度とほんとうの人間にはなれないし、また、いつまでも雪の女王の言うなりになっていなければならないんだよ」と言うのであった。

これは、実に興味深い言葉であり、というのも、例えば、ごくふつうのまじめな青年がいたとして、その青年は、ある日、何らかの切っ掛けから、その人の「目の中」と「心の中」に「小さい悪魔の鏡のかけら」が入ってしまい、すると、その青年の、「……世の中を見る目は一変してしまい、世の中の人たちは、なんだかんだと最もらしいきれい事などを言っていても、結局は、この世は金なのであり、金さえあれば、何でも好きな物が手に入るし、また、何でもやりたいことも出来るのだ」と、そう考えるようになり、やがて、お金（大金）を手に入れるためなら、もういかなる手段（方法）も辞さないということから、例えば、オレオレ詐欺などをはじめ、実に様々な（犯罪的な）「……強盗、窃盗、詐欺、恐喝、密輸、闇取引き、運び人、万引き、ひったくり、置き引き、その他」、何であれ、何でもやるようになってしまうのである。それもこれも「お金がすべて」という「考え方」に取り憑かれているからであり、その「考え方」を取り除かない限り、その人は、二度とほんとうの人間にはなれないし、また、いつまでも「悪魔の囁き」の言うなりになっていなければならないということである。それは、何も「お金」だけの問題ではなくて、まさに「権力や社会的地位或いは名誉や名声その他」なども、それらを得るためには、もういかなる手段（方法）も辞さないということになれば、すべて同じようなことになるのである。

五、トナカイのお願いとフィン人の女の返答　其の二

さて、トナカイは、「……では、そういうものにみな打ち勝つだけのものをゲルダさんにあげてくれませんか？」と言うと、「……わたしはね。ゲルダがいま持っている力よりも、大きな力をやることはできないよ。ゲルダの力がどんなに大きいか、おまえにはわからないのかい？　どんな人間でも動物でも、あの子のためには、どうしても助けになってやりたくなるじゃないか。だからこそ、はだしでこんな世界の果てまで来られたんじゃないか。それがおまえにわからないのかい？　あの子の力は、わたしたちなんかから教わるには及ばないんだよ。その力は、あの子自身の心の中にあるんだもの。つまり、あの子のやさしい、罪のない心が、とりもなおさず、力なのだよ。もし、あの子が雪の女王のところへ行って、カイのからだの中から、ガラスのかけらを取り出すことができないようだったら、わたしたちでは、どうにもならないことさ。ここから二マイルばかり行くとね、雪の女王の庭のはずれに出るから、そこまであの子を運んで行くといいよ。そうすると、雪の中に赤い実のなっている大きな茂みがあるから、そのそばにゲルダをおろしなさい。そうしたら、よけいなおしゃべりはしないで、急いでもどってくるんだよ！」、こう言って、フィン人の女は、ゲルダをトナカイに乗せてやりました。（本文）

＊　　＊

さて、ここで「最も大事な言葉」は、「……わたしはね。ゲルダがいま持っている力よりも、大きな力をやることはできないよ。ゲルダの力がどんなに大きいか、おまえにはわからないのかい？　（中略）、あの子の力は、わたしたちなんかから教わるには及ばないんだよ。その力は、あの子自身の心の中にあるんだもの。つまり、あの子のやさしい、罪のない心が、とりもなおさず、力なのだよ。もし、あの子が雪の女王のところへ行って、カイのからだの中から、ガラスのかけらを取り出すことができないようだったら、わたしたちでは、どうにもならないことさ」と言うのであった。――つまり、主人公（カイ）の「目の中」と「心臓の中」に入り込んだ「小さい悪魔の鏡のかけら」を取り除ける、そのような「力」は、まさに女主人公のゲルダのような「心の中」にこそあるのであり、それは、つまり、「……あの子のやさしい、罪のない心が、とりもなおさず、その力なの」であり、それは、まさに「……一途な思い（一途な愛情・一途な愛）、そして、世俗な利害損得を離れた、罪のない心（無垢の心）こそは、まさにその力となる」のである。

＊　　＊

例えば、われわれ人間の「心」そのものというのは、本来は、「大空（おおぞら）のような無色透明な心」であるにもかかわらず、俗世間のなかで日々あわただしく生活をしているために、われわれ人間の「心」というのは、どうしても実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、本来は、「大空（おおぞら）のような無色透明な心」であるにもかかわらず、実に様々に「変形」（変色）してしまっているのである。しかも、その実に様々に「変形」（変色）してしまった「心」を以って、つまり、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている「心」を以って、あれこれ無分別に「行動」（言動）するからこそ、自分に対しても、また、他人に対しても、あるいは、社会や国家などに対しても、実に様々な「禍（わざわい）」（不幸）をもたらしている最大の要因になっているのである。

それでは、その本来の「大空（おおぞら）のような無色透明な心」を取り戻すためには、いったいどうしたらよいかと言えば、その「一つの方法」が、まさに宗教における「修行」になると

いうことである。例えば、なぜ、「俗世間」から離れるのかと言えば、「俗世間」のなかにいたのでは、どうしても実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、いつまで経っても、本来の「大空(おおぞら)のような無色透明な心」を取り戻すことは、なかなか出来にくいからである。そこで、その「俗世間」からしばらく離れて、いわゆる「山の中」に籠もって、俗世間のなかで日々あわただしく生活していたために、実に様々に「変形」（変色）してしまった「心」から、本来の「大空(おおぞら)のような無色透明な心」（無垢の心）を取り戻そうとするための「努力」こそは、まさに宗教における「修行」になるのである。

六、フィンマルケンの「雪の女王」の庭のはずれへ

さて、フィン人の女は、「……ここから二マイルばかり行くとね、雪の女王の庭のはずれに出るから、そこまであの子を運んで行くといいよ。そうすると、雪の中に赤い実のなっている大きな茂みがあるから、そのそばにゲルダをおろしなさい。そうしたら、よけいなおしゃべりはしないで、急いでもどってくるんだよ！」と、こう言って、フィン人の女は、ゲルダをトナカイに乗せてやりました。トナカイは力のかぎり走りました。――「……あっ、わたし、長靴(ながぐつ)をおいてきたわ！　手袋も忘れてきたわ！」と、ゲルダは、身を切るような寒さに気がついて叫びました。けれども、トナカイは、もう止まってはくれません。どんどん走りに走って、とうとう赤い実のなっている大きな茂みのとこまで来ました。そこでゲルダをおろして、その口にキスをしました。きらきら光る大粒の涙が、トナカイのほほを流れました。それから、トナカイは、いま来た道を大いそぎで走って行ってしまいました。可哀そうにゲルダは、靴(くつ)もはかず、手袋もはめずに、氷に閉ざされた寒い寒いフィンマルケンの真(ま)っ只中(ただなか)に、一人、とり残されてしまったのです。（本文）

＊　＊

さて、この場面は、再び、「……ここから二マイルばかり行くとね、雪の女王の庭のはずれに出るから、そこまであの子を運んで行くといいよ。そうすると、雪の中に赤い実のなっている大きな茂みがあるから、そのそばにゲルダをおろしなさい。そうしたら、よけいなおしゃべりはしないで、急いでもどってくるんだよ！」と、こう言って、フィン人の女は、ゲルダをトナカイに乗せてやりましたとある。――まず、前に、トナカイの話だと、「……雪の女王は、ラップランドに夏のテントを張るが、雪の女王のほんとの城は、もっとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」と言い、また、ラップ人の女は、「……ここから百マイル以上も北のフィンマルケンというところまで行かなけりゃだめだよ。なぜなら、雪の女王は、今、そこにおいでだよ」となり、そして、フィン人の女は、「……ここから二マイルばかり行くとね、雪の女王の庭のはずれに出るから、そこまであの子を運んで行くといいよ。そうすると、雪の中に赤い実のなっている大きな茂みがあるから、そのそばにゲルダをおろしなさい」となるのである。

そして、トナカイは、力の限り走りました。――「……あっ、わたし、長靴(ながぐつ)をおいてきたわ！　手袋も忘れてきたわ！」と、ゲルダは、身を切るような寒さに気がついて叫びました。けれども、トナカイは、もう止まってはくれません。どんどん走りに走って、とうとう赤い実のなっている大きな茂みのとこまで来ました。そこでゲルダをおろして、その口にキスをしました。きらきら光る大粒の涙が、トナカイのほほを流れました。それから、

トナカイは、いま来た道を大いそぎで走って行ってしまいました。可哀そうにゲルダは、靴もはかず、手袋もはめずに、氷に閉ざされた寒い寒いフィンマルケンの真っ只中に、一人、とり残されてしまったのです。――まず、ここから「二マイル」（約三・二㎞）ばかり行くと、雪の女王の庭のはずれに出るので、そこまであの子を運んで行き、そうすると、雪の中に赤い実のなっている大きな茂みがあるから、そのそばにゲルダをおろし、そうしたら、よけいなおしゃべりはしないで、急いでもどってくるんだよ！」とある。――これは、もうわれわれに出来ることは何もなく、唯一出来ることは、女主人公のゲルダを目的地まで連れて行くことだけであり、あとは、女主人公のゲルダにすべて任せるしかないということであり、トナカイは、フィン人の女に言われた通りに連れて行き、そこで別れのキスをしてから、いま来た道を大急ぎで走って帰るのでした。可哀そうにゲルダは、靴もはかず、手袋もはめずに、氷に閉ざされた寒い寒いフィンマルケンの真っ只中に、一人、とり残されてしまったのです。――それでは、なぜ、忘れた長靴や手袋などを取りに戻らないのかと問えば、そのような「防寒具」（小道具）などが役に立つような「寒さ」（猛吹雪）ではないからである。

七、雪の軍勢と天使の軍隊

さて、ゲルダは、できるだけ元気を出して、駆け出しました。すると、そこへ雪の軍勢がどっと押し寄せて来ました。ところが、その雪は、空から降ってくるのではありませんでした。空はすっかり晴れて、オーロラがきらきら光っていました。雪は、地面の上をまっしぐらに走って来るのでした。そして、近づいて来れば来るほど、ますます大きくなりました。ゲルダは、いつかレンズでひとひらの雪を見た時、それがどんなに大きく、美しい形をしていたかを今でもはっきり覚えていました。けれども、ここの雪は、それとは比べものにならないほど大きく、そして、恐ろしいものでした。ここの雪は生きているのでした。それは、雪の女王の前哨部隊でした。しかも、みな気味のわるい形をしていました。みにくい大きな山アラシのようなのもいれば、ヘビがとぐろを巻いてかま首を持ち上げているようなのもあり、毛を逆立てた太った小さいクマのようなのもいました。どれもこれもまっ白に光っていました。そして、どれもこれも生きている雪のひらだったのです。

その時、ゲルダは、「主の祈り」を唱えました。息は、煙のように口から出ました。すると、寒さがそれはきびしいものですから、自分の吐く息がよく見えました。そして、だんだんと濃くなっていって、しまいに小さな輝く男子の姿になりました。天使たちは、地面にふれると、そのたびに大きくなりました。見れば、みな頭にかぶとをかぶり、手に鎗と盾とを持っていました。天使の数は、ますます増えてゆきました。そして、ゲルダがお祈りを唱え終わった時には、天使の軍隊がゲルダのまわりをとりまいていました。そして、鎗をふるって、恐ろしい雪の軍勢を突き刺しました。雪の軍勢は、みなちりぢりに飛び散ってしまいました。そこで、ゲルダは安全に元気に歩き出しました。天使たちが、ゲルダの手や足をさすってくれましたので、前ほど寒さを感じなくなりました。こうしてゲルダは、いそいそと雪の女王のお城をめざして行きました。

さて、お話かわって、カイは、その後、どうしているでしょうか？　まず、そのことをお話ししておきましょう。たしかに今では、カイは、ゲルダのことなぞ、少しも考えては

いませんでした。ましてや、いまゲルダが、お城の外まで来ていようとは、夢にも思っていませんでした。（本文）

＊　　＊

まず、この場面は、まさに「ファンタジーの世界」であり、それでは、そのそもそもの「考え方」は、一体、どこから来ているのかと問えば、それは、やはりラップランドの「サーミの神話」であり、それは、「……全てのものに魂があるとされていて、生き物でも、そうでないものでも、それぞれの物語があり、例えば、岩や木、キツネやトナカイ、空に輝くオーロラ、人々が使うナイフ、その他、全てのものが英知（ものを考える力）を持っているのであり、魂は、すべてのものの中にいつも存在しているとされているのです」とある。だとすれば、例えば、雪や氷が「魂」（英知）を持ち、また、雪の女王が「魂」（英知）を持っていたとしても、何も不思議なことにはならないとともに、女主人公のゲルダの吐く「息」（熱い息）が、やがて冷たい「雪の軍勢」に立ち向かう「天使の軍隊」になったとしても、それほど驚くことにはならないのである。

さて、本文では、「……ゲルダは、できるだけ元気を出して、駆け出しましたが、そこへ雪の軍勢がどっと押し寄せて来ました。ところが、その雪は、空から降ってくるのではなく、空はすっかり晴れて、オーロラがきらきら光っていました。雪は、地面の上をまっしぐらに走って来るのであり、そして、近づいて来れば来るほど、ますます大きくなりました。ゲルダは、いつかレンズでひとひらの雪を見た時、それがどんなに大きく、美しい形をしていたかを今でもはっきり覚えていましたが、ここの雪は、それとは比べものにならないほど大きく、そして、恐ろしいものでした。ここの雪は生きているのでした。それは、雪の女王の前哨（ぜんしょう）部隊でした。しかも、みな気味のわるい形をしていて、みにくい大きな山アラシのようなのもいれば、ヘビがとぐろを巻いてかま首を持ち上げているようなのもあり、毛を逆立てた太った小さいクマのようなのもいました。どれもこれもまっ白に光っていました。そして、どれもこれも生きている雪のひらだったのです。

その時、ゲルダは、『主の祈り』を唱えました。すると、寒さがそれはきびしいものですから、自分の吐く息がよく見えました。息は、煙のように口から出ました。そして、だんだんと濃くなっていって、しまいに小さな輝く男子の姿になりました。天使たちは、地面にふれると、そのたびに大きくなりました。見れば、みな頭にかぶとをかぶり、手に鎗（やり）と盾（たて）とを持っていました。天使の数は、ますます増えてゆきました。そして、ゲルダがお祈りを唱え終わった時には、天使の軍隊がゲルダのまわりをとりまいていました。そして、鎗（やり）をふるって、恐ろしい雪の軍勢を突き刺しました。雪の軍勢は、みなちりぢりに飛び散ってしまいました。そこで、ゲルダは安全に元気に歩き出しました。天使たちが、ゲルダの手や足をさすってくれましたので、前ほど寒さを感じなくなりました。こうしてゲルダは、いそいそと雪の女王のお城をめざして行きました」とある。

＊　　＊

まず、雪や氷の世界を支配（統制（コントロール））しているのは、まさに「雪の女王」であり、一方、この世を支配（統制（コントロール））しているのは、いわゆる「主なる神」であるが、ここで女主人公のゲルダが『主の祈り』を衷心から唱えたということは、それは、すなわち、まさに「神の力」（神の御加護）を衷心からお願い（祈願）した状態であり、それに応えて、「主なる神」は、その「衷心からのお願い」（祈願）を快く受け入れたということである。それ

により、本文では、女主人公のゲルダの吐く「息」（熱い息）は、寒さがそれはきびしいものでしたので、白い煙のように口から出ましたが、やがて、「……その白い息は、だんだんと濃くなっていき、しまいには小さな輝く男子の姿になりました。天使たちは、地面にふれると、そのたびに大きくなり、見れば、みな頭に兜をかぶり、手に鎗と盾とを持っていて、天使の数は、ますます増えていき、そして、ゲルダがお祈りを唱え終わった時には、天使の軍隊がゲルダのまわりをとりまいていました。そして、鎗をふるって、恐ろしい雪の軍勢を突き刺すと、雪の軍勢は、みなちりぢりに飛び散ってしまい、そこで、ゲルダは安全に元気に歩き出しました。また、天使たちがゲルダの手や足をさすってくれたので、前ほど寒さを感じなくなりました。こうしてゲルダは、いそいそと雪の女王のお城をめざして行くことになった」ということである。

＊　　＊

さて、最後は、「……お話変わって、カイは、その後、どうしているでしょうか？　まず、そのことをお話ししておきましょう。確かに、今では、カイは、ゲルダのことなぞ、少しも考えてはいませんでした。ましてや、いまゲルダが、お城の外まで来ていようとは、夢にも思っていませんでした」とある。――まず、ここで大事なことは、一つは、「……カイは、今ではゲルダのことなぞ少しも考えてはいませんでした」ということと、そして、もう一つは、「……今、ゲルダがお城の外まで来ていようとは、夢にも思っていませんでした」ということであり、このような状況の下で、やがて、女主人公のゲルダは、大好きな「カイ」と、ついに「再会」することになるのである。

＊　　＊

七、第七のお話

雪の女王のお城であったことと、その後のお話

七、第七のお話

雪の女王のお城であったことと、その後のお話

一、雪の女王の大きなお城の様子

さて、いよいよ最終の「第七話」の冒頭の文章であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……お城の壁は、降りしきる雪でできていました。また、窓や戸は、身を切るような風でできていました。お城には百以上も大広間がありましたが、それもみな吹き寄せられた雪でできていました。一番大きな広間は、何マイルもひろがっていました。どの広間も、強いオーロラの光に照らされて、見渡す限り、果てしなく、むなしく、一面の氷がさむざむと光っていました。ここには、喜びというものがありません。あらしが笛を吹いて、それに合わせて、北極グマが後足で品よくおどる、ささやかなクマの舞踏会のようなものさえ、今まであったためしがありません。平手で口を打ったり、足を打ったりする小さな競技会もありませんし、白キツネのお嬢さんたちの内輪のコーヒーの会もありませんでした。ほんとうに雪の女王の広間は、がらんとして、大きく、そして、寒いばかりでした。オーロラは、規則正しく燃え上がりましたから、それがいつ高くなるか、いつ低くなるのか、よくわかりました。この限りなく広々とした雪の大広間の真ん中に、凍った湖が一つありました。その湖の氷は割れて、幾千万という小さいかけらになっていました。ところが、そのかけらは、お互いに全く同じ形をしていて、全体は、一つの立派な美術品を見るようでした、そして、雪の女王は、お城にいる時は、いつもこの湖の真ん中にすわっているのでした。そして、わたしは『理知の鏡』にすわっているのです。この鏡こそ、この世に一つしかない、何よりもすぐれた鏡です」と言っていました。（本文）

＊　＊

まず、ここで「確認」しておきたいことは、前にトナカイは、「……雪の女王は、ラップランドに夏のテントを張るが、雪の女王のほんとの城は、もっとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」と言っていた。しかし、その「スピッツベルゲンという島」は、海を遙か遠く渡らなければ辿り着けないところであり、それゆえ、当然のことながら、女主人公のゲルダが「陸続き」で辿り着けるようなところではない。そこで、作者（アンデルセン）は、ラップ人の女に、「……ここから百マイル以上も北のフィンマルケンというところまで行かなけりゃだめだよ。なぜなら、雪の女王は、今、そこにおいでだよ」とし、そして、フィン人の女に、「……ここから二マイルばかり行くとね、雪の女王の庭のはずれに出るから、そこまであの子を運んで行くといいよ」としたのである。

つまり、「……雪の女王のほんとの城は、もっとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」のであるが、女主人公のゲルダがその島まで辿り着くのはほとんど不可能なことであり、そこで、雪の女王も、季節によって、あちこちに移動しているということで、例えば、夏は、ラップランドに夏のテントを張り、そして、冬は、ノルウェーの最北部にある「フィンマルケンのお城」にいるという「設定」になっているのであり、そして、女主人公のゲルダは、今、その「フィンマルケンのお城」のところまで来ているということである。

さて、本文であるが、「……お城の壁は、降りしきる雪でできていて、また、窓や戸は、

身を切るような風でできていました。お城には百以上も大広間があるが、それもみな吹き寄せられた雪でできていました。一番大きな広間は、何マイルも広がっていて、どの広間も、強いオーロラの光に照らされて、見渡す限り、果てしなく、むなしく、一面の氷がさむざむと光っていました。ここには、喜びというものがなく、あらしが笛を吹いて、それに合わせて、北極グマが後足で品よく踊るという、ささやかなクマの舞踏会のようなものさえ、今まであった試しがありません。また、平手で口を打ったり、足を打ったりする小さな競技会もありませんし、白キツネのお嬢さんたちの内輪のコーヒーの会もありませんでした。ほんとうに雪の女王の広間は、がらんとして、大きく、そして、寒いばかりでした。オーロラは、規則正しく燃え上がりましたから、それがいつ高くなるか、いつ低くなるのか、よくわかりました」とある。――さて、ここまでは、雪の女王の「お城の様子」の描写であるが、それを要約すれば、お城の壁は「降りしきる雪」、窓や戸は「身を切るような風」、そして、百以上もある大広間は「すべて吹き寄せられた雪」でできていました。そして、「……ここには、喜びというものがなく、ほんとうに雪の女王の広間は、どの広間も強いオーロラの光に照らされて、見渡す限り、果てしなく、むなしく、一面の氷がさむざむと光っていて、がらんとし、大きく、そして、寒いばかりでした」が、一方、オーロラは、規則正しく燃え上がるので、それがいつ高くなるか、いつ低くなるのか、よくわかったが、それは、雪の女王が支配（統制（コントロール））していることにもなるのだろう。

＊　＊

そして、大事なのは、ここからであり、それは、「……この限りなく広々とした雪の大広間の真ん中に、凍った湖が一つあるが、その湖の氷は割れて、幾千万という小さいかけらになっていました。ところが、そのかけらは、お互いに全く同じ形をしていて、全体は、一つの立派な美術品を見るようでした」とある。――まず、大広間の真ん中に、凍った湖が一つあり、その湖の「氷」は割れて、幾千万という小さいかけらになっているが、そのかけらは、お互いに全く同じ形をしていて、全体は一つの立派な美術品になっている。――これは、まさに幾千万ピースの「ジグソーパズル」と全く同じであり、それが完成すると、全体は「一つの立派な美術品」になるのである。もちろん、この超難解な「ジグソーパズル」を完成させることができ得るのは、雪と氷を支配（統制（コントロール））している、まさに「雪の女王」だけであり、だからこそ、「……雪の女王は、お城にいる時は、いつもこの湖の真ん中にすわっていて、わたしは『理知の鏡』のなかにすわっているのです、この鏡こそ、この世に一つしかない、何よりもすぐれた鏡です」と言っているのである。――さて、ここでの「最大の難題」は、何と言っても、この『理知の鏡』（或いは『理性の鏡』）とは、一体、何かという問題であるが、それは、次のようになるかと思う。

まず、最初は、本文の「一字一句」をできるだけ丁寧かつ厳密に読み解くことが何よりも大事なことになるが、「……雪の女王は、いつもこの湖の真ん中にすわっている」とある。これは、当然、氷の上に直接（直（じか）に）すわっているのではなく、恐らく、氷でできた「椅子（いす）のようなもの」にすわっているのだろう。――つまり、ここで言う『理知の鏡』（或いは『理性の鏡』）というのは、まるで幾千万ピースの「ジグソーパズル」と全く同じように、その幾千万という数に割れた湖の「氷」のみな同じ形の小さいかけらを完成させると、全体は「一つの立派な美術品」（氷の鏡）になるが、それが、まさに『理知の鏡』（或いは『理性の鏡』）であり、それは、真に超越した優れた「理知」（「知性＋理性」）だけ

が完成させることができ得るものであり、それゆえ、それは、結局、雪と氷を支配（統制（コントロール））している、まさに「雪の女王」だけにしかでき得ないことになるのである。だからこそ、「……この鏡こそ、この世に一つしかない、何よりもすぐれた鏡です」となるのである。ところが、その「雪の女王」を以ってしても唯一どうしても「完成」（組み合わせる）ことができ得ないものは、まさに「永遠」という言葉になるのである。

＊　　＊

つまり、この「……凍った湖が一つあるこの大広間」こそは、まさに『理知の鏡』（或いは『理性の鏡』）が存在する「大広間」（真に超越した『理知の部屋』）であるが、この真に超越した『理知の部屋』（大広間）には何もない。例えば、「……どの広間も、強いオーロラの光に照らされて、見渡す限り、果てしなく、むなしく、一面の氷がさむざむと光っていました。ここには、喜びというものがなく、あらしが笛を吹いて、それに合わせて、北極グマが後足で品よく踊るという、ささやかなクマの舞踏会のようなものさえ、今まであった試しがありません。また、平手で口を打ったり、足を打ったりする小さな競技会もありませんし、白キツネのお嬢さんたちの内輪のコーヒーの会もありませんでした。ほんとうに雪の女王の広間は、がらんとして、大きく、そして、寒いばかりでした」となるのである。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、まさに《徹底した「知性＋理性」だけの世界》では、この世のありとあらゆる不必要なものはすべて排除されて、あるのはただただ凍った湖の『理知の鏡』（或いは『理性の鏡』）だけになってしまうのである。――それは、例えば、いわゆる「座禅や瞑想」などをする空間には、不必要なものはすべて排除されて、そこにはこれというものは何もないのと全く同じことであり、それが、まさに《徹底した「知性＋理性」だけの世界》になるのである。

例えば、われわれ人間の「脳」は、言うまでもなく、「右脳と左脳」の二つに分かれているが、その「左脳」（その中の「前頭前野」部分）などは、一般に、あれこれものを考える（思考・思索する）部分とされて、それは、まさにわれわれ人間の「理知的部分」（つまり「知性＋理性」部分）にあたるかと思うが、それは、例えば、言語力や論理的にものを考える力、計算力、物事の分析力、推理力、高度な幾何学力、また、正確性、計画性、規則的、科学的な考えをする傾向があり、さらに、厳しさや厳格さ或いは冷徹さなどの一面もあるのかも知れない。――一方、「右脳」というのは、一般に、音楽や歌や踊りや絵やその他、五感から受ける感じから直感的に物事を認識し、判断し、行動（言動）する傾向があるかと思うが、それゆえ、例えば、歌ったり踊ったり飲んだり食べたりどんちゃん騒ぎなどをしたがるのは、多くの場合、「右脳」の働きであることが多いのだろう。

例えば、かつての「マスメディア」時代には全盛を誇った（紙の）新聞や雑誌或いは書物その他などは、（いわば「左脳」の時代であったが）、その時代は、すでに衰退を始めていて、一方、それに取って代わって、今や「写真や動画」などをはじめ、実に多彩な「漫画やアニメ或いはゲームその他」などの、まさに「全盛期」になっているかと思うが、（それは、いわば「右脳の時代」であるが）、しかし、「左脳」（理知的部分）だけに極端に片寄るのも、また、「右脳」（感性や感情的部分）だけに極端に片寄るのも、人間としてはバランスを欠くことになるので、それゆえ、「左脳」と「右脳」とがより高いところで深く調和している状態こそは、いわば「人間としては最もバランスの取れた状態」になるということである。

二、カイはそこで何をしていたのか？

さて、小さなカイは、寒さのために、まっ青、というよりは、ほとんどどす黒くなっていました。でも、自分ではそれに気がつきませんでした。なぜなら、雪の女王がキスをして、カイから寒さの感じを奪ってしまったからです。おまけに、カイの心臓は、まるで氷のかたまりのようだったのです。カイは、あちこちからさきのとがった平たい氷のかけらをいくつか引きずってきて、それをいろいろに組み合わせて、何かをつくりだそうとしていました。ちょうど、わたしたちが小さな木の板切れをならべて、いろいろの形をつくって遊ぶ、あの「中国遊び」というのに似ていました。カイは、あちこち歩きまわって、いろいろな形を、それも一番手のこんだ形をならべていました。それは「理知の氷遊び」というものでした。カイの目には、これらの形こそ、もっともすぐれた、そして、このうえなく意味深いものに思われたのです。それもこれも、カイの目の中にはいっている、ガラスの小さなかけらのせいなのです。カイが、全体をちゃんとした形にならべますと、一つの言葉になりました。けれども、カイがつくりたいと思っている言葉にかぎって、どうしてもうまく並べることができませんでした。それは、「永遠」という言葉でした。雪の女王は、前からこう言っていたのです。「……もし、おまえがその形を見つけ出すことができたら、その時こそ、おまえを自由にしてあげるよ。そのうえ、わたしは、この世界と新しいスケート靴とをおまえにあげるよ」。そう言われても、カイにはそれがどうしてもできなかったのです。（本文）

＊　＊

さて、主人公のカイは、「……寒さのために、まっ青というよりは、ほとんどどす黒くなっていました。でも、自分ではそれに気がつきませんでした。なぜなら、雪の女王がキスをして、カイから寒さの感じを奪ってしまったからです。おまけに、カイの心臓は、まるで氷のかたまりのようだったのです」とある。――まず、ここまでは、主人公（カイ）のからだの様子であるが、大事なのは、ここからであり、「……カイは、あちこちからさきのとがった平たい氷のかけらをいくつか引きずってきて、それをいろいろに組み合わせて、何かをつくりだそうとしていました。ちょうど、わたしたちが小さな木の板切れをならべて、いろいろの形をつくって遊ぶ、あの「中国遊び」というのに似ていました。カイは、あちこち歩きまわって、いろいろな形を、それも一番手のこんだ形をならべていました。それは「理知の氷遊び」というものでした。カイの目には、これらの形こそ、もっともすぐれた、そして、このうえなく意味深いものに思われたのです」とある。

まず、主人公のカイが、「……あちこちからさきのとがった平たい氷のかけらをいくつか引きずってきた」のは、当然、いわゆる「凍った湖の氷のかけら」ではなく、「……それ以外のあちこちにあったさきのとがった平たい氷のかけらをいくつか引きずってきた」ということであり、しかも、その「さきのとがった平たい氷のかけらをいろいろに組み合わせて、何かをつくりだそうとしていた」のである。それでは、なぜ、「……さきのとがった平たい氷のかけら」なのだろうか？　それは、ちょうど、「……わたしたちが小さな木の板切れをならべて、いろいろの形をつくって遊ぶ、あの『中国遊び』というのに似ていました」とある。――つまり、「……小さな木の板切れをならべて、いろいろの形をつ

くって遊ぶ」ためには、まず、同じような「板の厚さ」（それが「平たい氷のかけら」）であるほうがよく、また、面と面とを「ぴたっと合わせる」ためには、先の丸まったものよりはとがったもののほうがよいのであり、それゆえ、まさに「さきのとがった平たい氷のかけら」となるのである。そして、「……カイは、あちこち歩きまわって、いろいろな形を、それも一番手のこんだ形を並べていました。それは『理知の氷遊び』というものであり、カイの目には、これらの形こそ、最もすぐれた、この上なく意味深いものに思われたのです」とある。――つまり、複雑であれば複雑であるほど、また、難しければ難しいほど、そして、緻密であれば緻密であるほど、より優れていると考える、それが、まさに『理知の氷遊び』（つまり「理知の最大の特徴」）であり、それは、例えば、ゲームなどでも、すぐに出来てしまうようなものではなく、やはり、「……複雑であれば複雑であるほど、また、難しければ難しいほど、そして、緻密であれば緻密であるほど、より優れていると考える」のと全く同じように、「……カイの目には、これらの（一番手のこんだ）形こそ、最もすぐれた、この上なく意味深いものに思われた」となるのである。

それでは、なぜ、そのようなことをしているのかと問えば、本文では、「……それもこれも、カイの目の中にはいっている、ガラスの小さなかけらのせいなのです。カイが、全体をちゃんとした形にならべますと、一つの言葉になりました。けれども、カイがつくりたいと思っている言葉にかぎって、どうしてもうまく並べることができませんでした。それは、『永遠』という言葉でした」とある。――まず、ここで熟慮すべきことは、「……カイが、全体をちゃんとした形にならべますと、一つの言葉になりました」とある。この場合、主人公のカイは、ただひたすら「……氷のかけらで言葉（文字）だけをつくっていた」のか、それとも、「……言葉（文字）以外のいろいろな物の形もつくっていた」とすべきなのか？　ここでの「一つの問題」になるが、恐らく、「……いろいろな物の形もつくっていたが、特に、言葉（文字）に執拗にこだわるのは、次のような極めてはっきりとした理由があるからであり」、それは、雪の女王は、前からこう言っていたのです。「……もし、おまえがその形を見つけ出すことができたら、その時こそ、おまえを自由にしてあげるよ。そのうえ、わたしは、この世界と新しいスケート靴（くつ）とをおまえにあげるよ。そう言われても、カイにはそれがどうしてもできなかったのです」とある。

例えば、今日では、「ハート」型と「ＬＯＶＥ」という「言葉」（文字）こそは、まさに「全世界共通語」（普遍的な言葉）になっているが、それは、一体、なぜかと問えば、それは、まさにわれわれ人間にとって最も「大事なもの」になるからであり、それと全く同じように、「永遠」という言葉は、英語では「ＦＯＲＥＶＥＲ」（永遠に）が有名かと思うが、それは、いわば「（永遠に）変わらないもの」という「意味合い」を持つことになるが、それでは、まさに「永遠に変わらないもの」とは、一体、何かと問えば、それは、一つは、最究極の「真実・真理」（プラトンはそれを「勇気そのもの」「正義そのもの」「美そのもの」「善そのもの」「イデア」と呼んだもの）であり、そして、もう一つは、われわれ人間にとって「永遠に変わらないもの」とは、まさに「善という意識」（われわれ人間は「善の遺伝子」を内に宿して生まれて来る）が、その「善という意識」から、実に様々な「善的なもの」（例えば「善的な愛情や愛」）などが生じて来るが、その「善的な愛情や愛」（つまり「無垢の心」）を持ち合わせているのが、まさに女主人公の「ゲルダ」という女の子であり、その女主人公の「ゲルダ」という女の子の、その「善的な愛情や愛」

（つまり「無垢の心」）によってこそ、カイの目の中に入っていたガラスの小さなかけらも涙とともに流れ出るとともに、また、女主人公（ゲルダ）の「熱い涙」によって、主人公のカイの胸につき刺さっていたガラスの小さなかけらも食い尽くしてしまうのである。——そして、主人公（カイ）一人ではどうしてもできなかった「永遠という文字」も、女主人公の「ゲルダ」という女の子の、その「善的な愛情や愛」（つまり「無垢の心」）が加わることによって、初めて「永遠という文字」も自然と完成するのである。——つまり、二人（カイとゲルダ）にとっての「永遠という文字」は、すなわち、お互いを心から思いやる「永遠（の愛）」（変わらぬ心）という言葉（文字）にほかならなかったのである。

ちなみに、雪の女王は、「……おまえがその形を見つけ出すことができたら、その時こそ、おまえを自由にしてあげるよ。そのうえ、わたしは、この世界と新しいスケート靴とをおまえにあげるよ」とある。——さて、「……おまえがその形を見つけ出したならば、お前を自由にしてあげるだけではなく、わたしは、この世界と新しいスケート靴とをお前にあげるよ」と言っている。……それでは、「この世界」とは、雪と氷の世界なのか？ それとも、この世のすべてのことなのか？ まず、雪と氷の世界を支配（統制）しているのは、まさに「雪の女王」であり、一方、この世を支配（統制）しているのは、いわゆる「主なる神」であるとすれば、恐らく、「この世界」とは、すなわち、雪と氷の世界になるが、ここでは特に「雪の女王のお城」のことかも知れない。それを主人公のカイがもらった場合、新しい「スケート靴」というのは、雪の女王の百以上もある氷の広々とした大広間を「自由自在」に動きまわるには、まさに「スケート靴」こそ最適になるからである。

三、雪の女王は暖かい国々へと旅立つ

さて、雪の女王は、「……わたしはこれから暖かい国々をひとまわりしてくるよ」と、言いました。「……そこへ行ったら、黒い鉄なべをのぞいてこよう」。——黒い鉄なべと言ったのは、イタリアの国にあるエトナとか、ヴェスヴィオとかいわれている、火を吐く山のことでした。——「……わたしは、それを適当に少し白く塗ってやるんだよ。そうすると、レモンやブドウの木にとってたいへんためになるのでね！」と、こう言って、雪の女王は、飛んで行きました。あとにはカイがたった一人ぼっちで何マイルもある、大きながらんとした氷の広間の真ん中にすわっていました。そして、氷のかけらを見つめて、いつまでもじっと考え込んでいました。しまいには、からだの中がみしみしいうほど固く凍りついてじっとすわっていました。もし人が見たら、カイは凍え死んでいるのだろうと思うことでしょう。（本文）

＊　＊

まず、雪の女王は、「……わたしはこれから暖かい国々をひとまわりしてくるよ」と言っている。——これは、非常に興味深い内容であり、雪の女王というのは、雪と氷の世界を支配（統制）していて、世界中のいたるところに雪と氷をもたらしているが、その場合、寒い国々だけではなく、暖かい国々にも、例えば、高い山の山頂などには雪や氷をもたらしているのであり、例えば、「……そこへ行ったら、黒い鉄なべをのぞいてこよう」、——黒い鉄なべと言ったのは、イタリアの国にあるエトナ山とか、ヴェスヴィオ山とかい

う、いわゆる「火を吐く山」（つまり活火山）のことであり、有名な「エトナ山」（標高三三二九㍍）は、日本の「富士山」の標高（三七七六㍍）に近く、冬には、山頂に実際雪が降るのであり、また、イタリア・ナポリにあるヴェスヴィオ山は、西暦七九年に、その火山の大噴火によって古代都市が丸ごと埋まってしまった「ポンペイ遺跡」で有名であるが、その山頂にも、冬には雪が降るのであり、つまり、「……わたしは、それを適当に少し白く塗ってやるんだよ。そうすると、レモンやブドウの木にとってたいへんためになるのでね！」と言っているが、実際、この地はレモンやブドウなどの産地でもあり、また、例えば、熱帯のアフリカ・タンザニア北東部にある有名な「キリマンジェロ」の山頂（標高五八九五㍍）などにも雪は降るのである。

一方、「……あとにはカイがたった一人ぽっちで何マイルもある、大きながらんとした氷の広間の真ん中にすわっていて、氷のかけらを見つめて、いつまでもじっと考え込んでいました。しまいには、からだの中がみしみしいうほど固く凍りついてじっとすわっていました。もし人が見たら、カイは凍え死んでいるのだろうと思うことでしょう」とある。――これは、主人公のカイのからだは、もう「ほとんど限界にまで来ている」ということであり、そのような時に、まさに女主人公の「ゲルダ」が城の中へと入って来るのである。

四、カイとの再会と魔法を解く言葉

さて、ゲルダが大きな門を通って、お城の中に入って来たのは、ちょうどその時でした。門の中は、身を切るような風が吹きまくっていました。けれども、ゲルダが「夕べの祈り」を唱えますと、さしもの風も、まるで眠ろうとするかのように静かになりました。そこで、大きながらんとして寒い寒い広間の中に入りました。――そして、そこにカイの姿を見つけました。それがカイであることはすぐわかりました。ゲルダは、カイの頸に飛びついて、しっかりと抱きしめて叫びました。「……カイちゃん！　なつかしいカイちゃん！　ああ、とうとうあなたを見つけたわ！」と。――けれども、カイはずっと身動きもしないでからだをこわばらせて、冷たくなってすわっていました。――ゲルダは、熱い涙を流して泣き出しました。その涙は、カイの胸の上に落ちて心臓の中にしみこんでゆきました。そして、氷のかたまりを溶かした上、その中にあった小さな鏡のかけらを食い尽くしてしまいました。カイはゲルダを見つめました。ゲルダはあの賛美歌をうたいました。

バラの花　かおる谷間に
おわします　おさなごイエス様！　（本文）

＊　＊

さて、女主人公のゲルダが、「……大きな門を通って、お城の中に入って来たのは、ちょうどその時でした。門の中は、身を切るような風が吹きまくっていたが、ゲルダが『夕べの祈り』を唱えると、さしもの風も、まるで眠ろうとするかのように静かになりました」とある。――これは、何か「困難や苦難」などに直面すると、女主人公のゲルダは、『主の祈り』とか『夕べの祈り』などをよく唱えるが、それは、いわば「神の力」（神の御加護）を衷心から「お願い」（祈願）することであり、そうすると、「……さしもの風も、まるで眠ろうとするかのように静かになり、そこで、大きながらんとして寒い寒い広間の

中に入りました」となるのである。――つまり、女主人公のゲルダ（その「無垢な心」）は、たった一人ではなく、実は、「主なる神」と常に一緒にいるということであり、だからこそ、次のようなことも起こり得るのである。

つまり、大きながらんとして寒い寒い広間の中に入ると、そこにカイの姿を見つけるが、それがカイであることはすぐにわかり、女主人公のゲルダは、カイの頸（くび）に飛びついて、しっかりと抱きしめて叫びました。「……カイちゃん！　なつかしいカイちゃん！　ああ、とうとうあなたを見つけたわ！」と。――けれども、カイはずっと身動きもしないでからだをこわばらせて、冷たくなってすわっていました」とある。――むろん、このままではどうにもならない状況であるが、ここに「神の力」（神の御加護）も加わって、――女主人公のゲルダが「熱い涙」を流して泣き出すと、その「涙」（熱い涙）は、カイの胸の上に落ちて心臓の中に染み込んでいき、そして、氷のかたまりを溶かした上、その中にあった小さな「鏡のかけら」を食い尽くしてしまうと、主人公のカイは、ゲルダを見つめ、一方、女主人公のゲルダは、あの「賛美歌」をうたいました。それは、「……バラの花　かおる谷間に　おわします　おさなごイエス様！」というものであり、これこそ、二人の「心」が共有して持っていた「歌と想い出」であり、これによって、主人公のカイにかけられていた「魔法が解かれる」ことになるのである。

五、カイの目から鏡のかけらが流れ出る

この歌を聞くと、カイは、わっと泣き出しました。そして、泣いた拍子に鏡の小さなかけらが目の中からころがり出ました。カイは、ゲルダに気がついて、喜びの声を上げました。「……ああ、ゲルダちゃん！　大好きなゲルダちゃん！　――こんなに長いあいだ、君はどこに行ってたの？　で、僕はどこにいるんだろう？」と、こう言いながら、あたりを見まわしました。「……ここはなんて寒いんだろう！　なんて、がらんとした、広いところなんだろう！」と、こう言って、ゲルダにしがみつきました。ゲルダは、もううれしくてうれしくて笑ったり泣いたりしました。その様子があまりにも幸福そうなので、氷のかけらまでがうれしくなって、ぐるぐるおどりまわりました。やがて、おどりつかれたあげく、横になりました。すると、どうでしょう！　あの言葉のつづりどおりに、並んでいるではありませんか。雪の女王が、それさえ考え出せたら自由にしてあげよう、そして、この世界と新しいスケート靴（ぐつ）とをあげる、といった、あの言葉があらわれているのです。

ゲルダは、カイのほほにキスをしました。すると、ほほは、花が咲いたように赤みがさしてきました。今度は、目にキスをしました。すると、目は、ゲルダの目のようにいきいきとしてきました。今度は、手と足とにキスをしました。すると、カイはすっかり健康になって、元気が出てきました。もう、こうなれば雪の女王が、いつ、もどってきてもだいじょうぶです。カイを自由にする免許状が、きらきら光るこおりのかけらで、そこにはっきりと書きあらわされているのです。（本文）

＊　　＊

さて、主人公のカイは、「……この歌を聞くと、カイは、わっと泣き出しました」とある。これは、二人の「心」が共有して持っていた「歌と過去の記憶」などを、まさに「想い出した」ということであり、そして、「……泣いた拍子に鏡の小さなかけらが目の中か

らころがり出ました」。カイは、ゲルダに気がついて、喜びの声を上げました。「……あ
あ、ゲルダちゃん！　大好きなゲルダちゃん！　――こんなに長いあいだ、君はどこに行
ってたの？　で、僕はどこにいるんだろう？」と、こう言いながら、あたりを見まわすと、
「……ここはなんて寒いんだろう！　なんてがらんとした広いところなんだろう！」と、
こう言って、ゲルダにしがみつきました。ゲルダは、もううれしくてうれしくて笑ったり
泣いたりしました」とある。――これは、まさに「三つのもの」、一つは、「……目の中
に入った小さな鏡のかけら」、一つは、「……心臓に突き刺さった小さな鏡のかけら」、そ
して、もう一つは、「……雪の女王のキスによってかけられた魔法」、この「三つのもの」
が「完全に取り除かれた」ということである。

それでは、それらを取り除いたものは、一体、何であったかと問えば、それは、まさに
女主人公のゲルダの、その「一途な愛情や愛」（つまり「無垢の心」）によってこそ、カ
イの目の中に入っていたガラスの小さなかけらも涙とともに流れ出るとともに、また、女
主人公（ゲルダ）の「熱い涙」によって、主人公のカイの心臓につき刺さっていたガラス
の小さなかけらも食い尽くされ、そして、雪の女王のキスによってかけられた魔法も解か
れるのである。――そして、主人公のカイ一人ではどうしてもでき得なかった「永遠とい
う文字」も、女主人公の「ゲルダ」という女の子の、その「一途な愛情や愛」（つまり「無
垢の心」）が加わることによって、初めて「永遠という文字」も自然と完成するのである。
――それは、二人（カイとゲルダ）にとっての「永遠という文字」は、すなわち、お互い
を心から思いやる「永遠（の愛）」という言葉（文字）にほかならなかったのである。

それは、本文では、「……（二人の）その様子があまりにも幸福そうなので、氷のかけ
らまでがうれしくなって、ぐるぐるおどりまわりました。（これは『氷』も魂《英知》を
持っているということであり）、やがて、おどりつかれたあげく、横になりました。する
と、どうでしょう！　あの言葉（永遠）のつづりどおりに、並んでいるではありませんか。
雪の女王が、それさえ考え出せたら自由にしてあげよう、そして、この世界と新しいスケ
ート靴（ぐつ）とをあげる、といった、あの言葉があらわれているのでした」となるのである。

＊　　＊

それでは、雪の女王が言う「この世界」とは、一体、どのような「世界」になるのだろ
うか？　例えば、雪と氷の世界なのか？　それとも、この世のすべてのことなのか？　ま
ず、雪と氷の世界を支配（コントロール）（統制）しているのは、まさに「雪の女王」であり、一方、こ
の世を支配（コントロール）（統制）しているのは、いわゆる「主なる神」であるとすれば、恐らく、「こ
の世界」とは、すなわち、雪と氷の世界になるが、ここでは特に「雪の女王のお城」のこ
となのかも知れない。それを主人公のカイがもらった場合、新しい「スケート靴（ぐつ）」という
のは、雪の女王の百以上もある氷の広々とした大広間を「自由自在」に動きまわるには、
まさに「スケート靴（ぐつ）」こそ最適になるからである。

そして、女主人公のゲルダが、「……カイのほほにキスをすると、ほほは花が咲いたよ
うに赤みがさし、また、今度は目にキスをすると、目はゲルダの目のようにいきいきとし、
そして、今度は手と足とにキスをすると、カイはすっかり健康になって、元気が出てきま
した。もう、こうなれば雪の女王が、いつもどってきてもだいじょうぶであり、カイを自
由にする免許状が、きらきら光るこおりのかけらで、そこにはっきりと書きあらわされて
いるのでした」と展開するのである。

六、雪の女王の大きな城を出る

さて、二人は手を取り合って、この大きな城を出ました。そして、おばあさんのことや屋根の上のバラの花のことなどを語り合いました。こうして二人が歩いて行きますと、風はすっかり静まり、お日様は明るく輝き出しました。やがて、赤い実をつけた茂みのところへ来ますと、もうそこにはトナカイが来て、待っていました。見ると、もう一匹、若いトナカイもいっしょでした。このトナカイは、いっぱいにふくらんだ乳房をしていて、二人の子供に暖かいお乳を飲ませて、その口にキスをしてやりました。二匹のトナカイは、カイとゲルダを乗せて、フィン人の女のところへ行きました。ここで、二人は熱い部屋の中でからだをあたためて、帰り道を教えてもらいました。それから、ラップ人の女のところへ来ました。この女は、二人に新しい着物を縫っておいてくれました。そして、自分の橇を用意してくれました。

二匹のトナカイは、こんどは橇と並んで走りながら、国境まで送ってくれました。ここまで来ますと、はじめての緑の草が土の中からのぞいていました。ここで二人は、トナカイと、ラップ人の女とに別れを告げました。「……さようなら！」と、みんなは、口々に言いました。やがて、最初の小鳥がさえずりはじめました。森には緑の芽がもえ出ていました。その時、森の中から、ゲルダの見覚えのあるりっぱな馬にまたがって、（それはあの金の馬車をひいた馬でした）、一人の若い娘が出てきました。その娘は、きらきら光る赤い帽子をかぶり、二丁のピストルを前にさしていました。それは、あの山賊の娘でした。娘は、家にいるのがいやになって、まず、北の方へ行ってみようと出てきたのでした。そして、もし、そこが気に入らなければ、今度は別の国の果てへ、行ってみるつもりだったのです。娘はすぐゲルダに気がつきました。ゲルダのほうでも娘に気がつきました。二人はどんなに喜んだかしれません。（本文）

＊　＊

さて、本文では、「……二人は手を取り合って、この大きな城を出ました。そして、おばあさんのことや屋根の上のバラの花のことなどを語り合いました」とある。――これは、非常に大事な意味合いを持つものであり、例えば、夫婦や親子或いは恋人や友だち、その他、もう誰との関係であってもよいが、いわゆる「二人のきずな」というのは、一体、どのようなものになるのかと問えば、それは、「自分の心」と「相手の心」とが深く重なり合う部分、その「深く重なり合う部分」こそは、二人が「同じような思い、考え、夢、過去の様々な想い出、その他」などを共有している部分であり、この「二人が共有して持っている部分」こそは、まさに「二人のきずな」の部分であり、そして、「自分の心」と「相手の心」とが深く重なり合う部分、その「深く重なり合う部分」こそは、お互いに深く「共感、共鳴、同感、感動でき得る部分」でもあるのである。

そして、「……こうして二人が歩いて行きますと、風はすっかり静まり、お日様は明るく輝き出しました。やがて、赤い実をつけた茂みのところへ来ますと、もうそこにはトナカイが来て、待っていました。見ると、もう一匹、若いトナカイも一緒でした。このトナカイは、いっぱいにふくらんだ乳房をしていて、二人の子供に暖かいお乳を飲ませて、その口にキスをしてやりました」とある。――これは、ラップ人の女のところで、トナカイ

は、自分の話を先にしたという場面があったが、それは、トナカイにとって、この「ラップランド」は、まさに「生まれ故郷」であり、それゆえ、今、故郷に久しぶりに帰ってきて、まさに自分の「故郷のこと」（例えば家族や友だち或いは恋人その他）についていろいろ聞きたいことは山ほどあったということであり、そして、「……二匹のトナカイは、カイとゲルダを乗せて、フィン人の女のところへ行き、ここで、二人は熱い部屋の中でからだをあたためてから、帰り道を教えてもらい、それから、ラップ人の女のところへ来ると、その女の人は、二人に新しい着物を縫っておいてくれ、しかも、自分の橇まで用意してくれました」と続くのである。

そして、「……二匹のトナカイは、こんどは橇と並んで走りながら、国境まで送ってくれたが、ここまで来ると、はじめて緑の草が土の中からのぞいていました。ここで二人は、トナカイとラップ人の女とに別れを告げた」とある。――だとすれば、ラップ人の女が橇を走らせていたことになるかと思う。そして、「……さようなら！」と、みんなは、口々に言いました。やがて、最初の小鳥がさえずりはじめ、森には緑の芽がもえ出ていました。その時、森の中から、ゲルダの見覚えのあるりっぱな馬にまたがって、（それはあの金の馬車をひいた馬でしたが）、一人の若い娘が出てきました。その娘は、きらきら光る赤い帽子をかぶり、二丁のピストルを前にさした、それは、あの山賊の娘でした。山賊の娘は、家にいるのがいやになって、まず、北の方へ行ってみようと出てきたのでした。そして、もし、そこが気に入らなければ、今度は別の国の果てへと行ってみるつもりだったのです。娘はすぐゲルダに気がつき、そして、ゲルダのほうでも娘に気がつきました。二人はどんなに喜んだかしれませんとある。

＊　＊

さて、途中で「山賊の娘」に出遭うことになるが、その「山賊の娘」は、「……家にいるのがいやになって、まず、北の方へ行ってみようと出てきて、そして、もしそこが気に入らなければ、今度は別の国の果てへと行ってみるつもりだった」とある。――これは、非常に面白いところであり、というのも、この山賊の娘は、なぜ、どうして「ゲルダの話」をあれほど二度まで聞き直すほど強い「興味や関心」を持ったかと問えば、それは、まさに「……家にいるのがだんだんといやになってきていて、いつかは自分も広い世の中に出てみたいと思っていたところ」に、たまたま女主人公のゲルダと出遭って、その「ゲルダの話」を聞くことで、「……自分も広い世の中に出てみよう」と決心して、今、ここにこうして居るのである。そして、その「いで立ち」は、「……りっぱな馬にまたがり、きらきら光る赤い帽子をかぶり、二丁のピストルを前にさしていた」とあるが、その山賊の娘は、すぐにゲルダに気がつき、一方、女主人公のゲルダのほうも山賊の娘に気がつき、そして、この二人は、お互いに「再会を喜び合った」ということである。

七、山賊の娘とゲルダとの会話

さて、山賊の娘は、「……あなたも変わり者だね。ずいぶんあっちこっちぶらついたっていうじゃないか」と、カイに向かって言いました。「……いったいあんたのために世界の果てまで行くほど値打ちがあるかどうか、あたしはそれが知りたいね」と言うと、ゲルダは、娘のほほをかるく打ちながら、王子と王女のことをたずねました。「……二人とも

外国へ旅に出たよ」と、山賊の娘は言いました。「……では、あのカラスは？」と、ゲルダはたずねました。「……ああ、あのカラスは死んだよ」と、娘は答えました。「……やさしいおかみさんのカラスは、やもめになって、黒い毛糸の切れぱしを足につけているよ。身も世もなく悲しんでいるわ。何もかもつまらないことばかしさ！」、「……それよりか、あんたのほうはあれからどうしたの？　どうやってこの人をつかまえたの？　それを話してよ！」と聞くのであった。――そこで、ゲルダとカイは、こもごも今までのことを話しました。「……なるほど、それで、ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃというわけなんだね！」と、山賊の娘は言いました。そして、二人の手を握(にぎ)って、もしいつか二人のいる町を通ることがあったら、きっと訪ねるからと約束しました。そして、広い世の中へ馬を飛ばして行ってしまいました。（本文）

＊　　＊

さて、この「場面」は、山賊の娘と女主人公のゲルダとの会話になるが、まず、山賊の娘は、「……あなたも変わり者だね。ずいぶんあっちこっちぶらついたっていうじゃないか」、「……いったいあんたのために世界の果てまで行くほど値打ちがあるかどうか、あたしはそれが知りたいね」と、カイに向かって言うと、女主人公のゲルダは、山賊の娘のほほをかるく打った」とある。――これは、女主人公のゲルダにしてみれば、「……かけがいのないカイに向かって、何ということを言うの！」ということであり、それが山賊の娘のほほをかるく打ったという行為になるのである。そして、お世話になった王子と王女のことをたずねると、「……二人とも外国へ旅に出たよ」と、山賊の娘は言い、また、「……では、あのカラスは？」と、女主人公のゲルダがたずねると、「……ああ、あのカラスは死んだよ」と、山賊の娘は答えるのでした。

それでは、なぜ、雄(おす)のカラスは死んでしまったのか？　それは、お城でちゃんとした職を持ち、また、その上、食べる物がたくさんになってからというものは、雌(めす)のカラスは、よく「頭痛」がしたとあったが、それは、雄(おす)のカラスの場合でも全く同じことであり、結局、食べ過ぎやストレスなどから、まさに「体調不良」になっていたのであり、それゆえ、森のカラスは、本来、森のカラスとして自由に生きた方が幸せだったのかも知れない。それはともかく、「……やさしいおかみさんのカラスは、やもめになって、黒い毛糸の切れぱしを足につけていて、身も世もなく悲しんでいるわ。何もかもつまらないことばかしさ！」とあるが、これは、愛する「夫」（雄(おす)のカラス）を失ったショックから、これからどうやって生きていけばよいのか途方に暮れているということである。

一方、山賊の娘は、「……それよりか、あんたのほうはあれからどうしたの？　どうやってこの人をつかまえたの？　それを話してよ！」と聞くので、ゲルダとカイは、いろいろこもごも今までのことを話すと、「……なるほど、それで、ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃというわけなんだね！」と、山賊の娘は言いました。そして、二人の手を握(にぎ)って、もしいつか二人のいる町を通ることがあったら、きっと訪ねるからと約束をして、広い世の中へ馬を飛ばして行ってしまったとある。――さて、この「……ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ」という表現は、どうやって主人公のカイを助け出したのかは、すでに詳しく書き記してきたので、ここではごく簡単にすませたということであり、そして、山賊の娘は、「……二人の手を握(にぎ)って、もしいつか二人のいる町を通ることがあったら、きっと訪ねるからと約束をして、広い世の中へ馬を飛ばして行ってしまった」とあるが、それは、

この「広い世の中」へと出て行き、自分の「心」がほんとうに求めているものにめぐり遭いたいという旅に出たということである。

八、二人は手を取り合ってわが家へと……

カイとゲルダは、再び、手を取り合って歩いて行きました。行くに連れて、あたりは花と緑に包まれた美しい春になりました。やがて、教会の鐘が響いてきました。そして、見覚えのある高い塔が見え大きな町が見えてきました。それこそ、二人の住んでいた町だったのです。二人は町の中へはいって、おばあさんの家の戸口まで行きました。そして、階段を上って、部屋の中に入りました。部屋の中は、何から何まで元のままでした。時計は「カチ！　カチ！」いっています。時計の針もまわっています。けれども、ドアを通る時、二人は、いつの間にか、自分たちが大人になっていることに気がつきました。屋根の雨どいのバラの花が、開け放した窓の外に美しく咲いていました。そして、そこに小さな子供の腰掛けが置いてありました。カイとゲルダは、めいめいの腰掛けにすわって、お互いに手を握りました。二人は、雪の女王の城の、あの冷たいうつろな美しさを重苦しい夢のように忘れてしまいました。おばあさんは、神様のうららかなお日様の光の中で高らかに聖書を読んでいました。「……なんじら、もし、おさなごの如くならずば、神の国にはいることを得じ」と。カイとゲルダは、互いに目を見合わせました。そして、その時、急にあの古い賛美歌の意味がはっきりしました。

バラの花　かおる谷間に
おわします　おさなごイエス様！

こうして、この二人は、子供のままの心を持った二人の大人は、そこに腰掛けていました。折しも、時は夏、暖かい恵みゆたかな夏でした。（完）

＊　＊

さて、最後の「本文」になるが、それは、「……カイとゲルダは、再び、手を取り合って歩いて行くが、歩いて行くに連れて、あたりは花と緑に包まれた美しい春になりました。やがて、教会の鐘が鳴り響いてきて、見覚えのある高い塔が見え大きな町が見えてきました。それこそ、二人の住んでいた町だったのです。二人は町の中へはいって、おばあさんの家の戸口まで行きました」とある。――まず、雪の女王のお城を出てから、やがて、赤い実をつけた茂みのところへ来ると、二匹のトナカイが待っている。そして、その二匹のトナカイは、カイとゲルダを乗せて、フィン人の女のところへ行く。そこで、二人は熱い部屋の中でからだをあたため、帰り道を教えてもらう。それから、ラップ人の女のところへ行くと、そのラップ人の女は、二人に新しい着物と自分の橇を用意してくれていて、そのラップ人の女の橇に二人は乗り、二匹のトナカイは橇と並んで走り、ラップランドの国境まで送ってくれた。ここで、カイとゲルダは、ラップランド生まれの二匹のトナカイとラップ人の女とに別れを告げる。やがて、森を歩いて行くと、山賊の娘と偶然に出遭い、二人は「再会」を喜び合う。そして、王子と王女のことを聞くと、「……二人とも外国へ旅に出たよ」と言い、また、例のカラスのことを聞くと、「……雄のカラスは死んで、未亡人

のカラスは、その悲しみに沈んでいた」と答える、そして、自分（山賊の娘）は、「……家にいるのがいやになって、まず、北の方へ行ってみようと出てきて、そして、もしそこが気に入らなければ、今度は別の国の果てへと行ってみるつもりだ」と言う、そして、この広い世の中へ出ていき、自分の「心」がほんとうに求めているものにめぐり遭いたいという旅に出ていくのであった。そして、カイとゲルダは、再び、手を取り合って歩いて行くと、あたりは花と緑に包まれた美しい春になり、やがて、教会の鐘が鳴り響いて、見覚えのある高い塔や大きな町が見えてきた。それこそ、二人の住んでいた町であり、二人は町の中へはいって、おばあさんの家の戸口まで来るのでした。

そして、「……階段を上って、部屋の中に入ると、部屋の中は、何から何まで元のままであり、時計は、「カチ！　カチ！」といって、時計の針もまわっていたが、ドアを通る時、二人は、いつの間にか、自分たちが大人になっていることに気がつきました」とある。

――これは、いかにも「超現実的な現象」のように思われがちであるが、恐らく、そうではなく、例えば、主人公のカイが雪の女王に連れ去られてから、女主人公のゲルダがそのカイを助け出して、この家に戻ってくるまでの間には、やはりそれなりの「歳月」は流れているのであり、その何年かの間に、知らず識らずのうちに、子供のからだから大人のからだへと変化していたのである。これは、何も特別のことではなく、誰だって、自分の「からだ」がいつから「大人のからだ」へとなったかは、あまりよく覚えていないものであり、いつの間にか、そうなっていたというのが実感であり、しかも、主人公のカイは、ずっと「自分を見失っていた状態」であったということ、そして、女主人公のゲルダは、大好きなそのカイを捜し求めてずっと旅を続けていたのであり、それゆえ、自分の姿（全身像）を鏡に映してじっくりと自分の姿を見るようなこともあまりなかったのではないかと思う。それゆえ、気がつけば、自分の「からだ」がいつの間にか「大人のからだ」になっていたのに気づいても、それは、それほど不思議なことにはならないのである。

そして、「……屋根の雨どいのバラの花は、開け放した窓の外に美しく咲いていて、そこに小さな子供の腰掛けが置いてあったが、カイとゲルダは、めいめいの腰掛けにすわって、お互いに手を握り合い、二人は、雪の女王のお城の、あの冷たいうつろな美しさを重苦しい夢のように忘れてしまいました。おばあさんは、神様のうららかなお日様の光の中で高らかに聖書を読んでいて、そこには、「……なんじら、もし、おさなごの如くならずば、神の国にはいることを得じ」とありました。カイとゲルダは、互いに目を見合わせ、そして、その時、急にあの古い賛美歌の意味がはっきりとしたのでした。それは、「……バラの花　かおる谷間に　おわします　おさなごイエス様！」というものでした。

さて、最後の「問題」として、「……なんじら、もし、おさなごの如くならずば、神の国にはいることを得じ」とある。ここで「大事な言葉」（キーワード）は、まさに「おさなご」という言葉であり、この「おさなご」とは、一体、どのような「意味合い」になるのかが「最大の問題」になるかと思う。――例えば、有名なニーチェには、「超人」になるための、精神の「三段階」というものがあり、それは、次のようなものである。

＊　　＊

まず、ニーチェの言う「超人」になるためには、次の「三つの段階」を経なければならない。まず最初は、「駱駝」の段階があり、それは、まさに「勤勉と忍耐」の段階である。次は、「獅子」の段階へと進むことになるが、それは、まさに「今までの価値観や道徳観

或いは様々な既成概念」などを、すべてばらばらに破壊していく「獅子」の段階である。そして、最後は、邪気のない「幼な子」へと変化しなければならないというものである。

さて、「駱駝」というのは、ひたすら自分の「内的成長」を心の底から願って、まさに一心不乱に「努力を積み重ねる時期」であるが、それは、例えば、書物であれ、芸術であれ、学問であれ、その他、何であれ、古今東西の真に優れた「魂」と深く交わることによって、ひたすら自分の「内的成長」を心の底からこいねがって、まさに一心不乱に「無限の努力を積み重ねる時期」にあたるわけである。

次は、「獅子」の段階であるが、この段階は、前述のような本格的な「思考（思索）活動」を何年も積み重ねることによってこそ、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それではこうなのかと何度も何度も考え方を新たにしていくうちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまって、もう何がなんだか自分でもよく分からない状態に深く陥ってしまう世界であり、それこそは、まさに「虚無の世界」であり、そして、その「虚無の世界」のどん底から、そこは、まさに「すべての意味や価値などが消えてしまうような世界」であるが、その「虚無の世界」のどん底から、やがて、真に「内的成長」することによってこそ、いわゆる「心の自由」を得るということである。それは、例えば、この世のいかなる「価値観や道徳観或いは様々な既成概念」などからも、まさに「……開放されて、心の自由を得る」ということである。それは、例えば、「大空のような無色透明な心」（つまり「無垢の心」）を獲得するということである。

最後に、「幼な子」という段階があるが、その「幼な子」というのは、一般に、「……無垢であり、邪気がない」と言われるが、それは、「悪意がない」ということであり、また、幼な子は、まさに「今を生きている」ということでもある。大人のように、「過去」にこだわり、「過去」に振りまわされることもなく、また、「明日」（将来）のことを思いわずらうこともなく、まさに「今がすべてと生きている存在である」ということである。さらに、身分や家柄をはじめ、学歴、職歴、職種、社会的地位、仕事や趣味或いは遊び、その他の諸能力の優劣、資産（経済力）、身体的能力、容姿・容貌、恋愛歴、様々な所有物、その他、そういう様々なことで思いわずらうこともなく、幼な子は、そのようなものからも「完全に開放されていて、まったくの自由である」ということである。

つまり、この世のありとあらゆるものから開放されているとともに、自分だけでも足りているという存在こそは、まさにニーチェの「幼な子」であり、しかも、その「幼な子」が、そのまま「超人」となるためには、身体は、大人の「逞しい肉体」を持ち、一方、精神は、いわゆる「大空のような無色透明な心」（つまり「無垢の心」）を獲得しているとともに、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間として「新たに誕生する」存在でなければならない。それが、すなわち、「人間」という段階から、まさに「超人」という段階へと「成長・進化」した存在ということである。――しかも、この「超人」は、「人生」を肯定し、この世を「肯定」し、そして、「人生」をたくましく生きていく存在であり、あの世での「幸せ」をひたすらこいねがうような存在ではなく、この世に生き、この世で満足し得る存在でもあるのである。

＊　＊

さて、本文の「……おさなごの如くならずば」とあるが、それは、まさに「幼な子のよ

うな無垢(むく)の心」を持った人間でなければ、「……神の国に入ることはできない」ということであり、また、「……バラの花　かおる谷間に　おわします　おさなごイエス様！」とあるが、例えば、「バラの花」をどのように解釈するかは各人それぞれ違って来るだろうが、仮に「バラの花」を「真実の愛」（或いは「神の愛」）と解釈すれば、その本文の意味は、まさに「……バラの花（真実の愛）（神の愛）の咲き薫(かお)る谷間（天国）におわします、幼(おさ)な子のような無垢の心を持ったイエス様！」という意味合いになるのである。

こうして、この二人は、子供のままの心（無垢の心）を持った二人の大人は、そこに腰掛けていました。折しも、時は夏、暖かい恵みゆたかな夏でした。（完結）

＊　　＊

みにくいアヒルの子

みにくいアヒルの子

例えば、アンデルセンの数多くの「作品」の中には、有名な『みにくいアヒルの子』という作品もあるかと思うが、その「作品」の冒頭は、次のようなものである。

一、冒頭の文章

さて、田舎はどこもすばらしい景色でした。だって、夏でしたもの！　小麦は黄色く、カラス麦は青々と育ち、向こうの緑の草地には、干し草がうず高く積み上げられていました。（中略）、そして、畑と草地のまわりには大きな森が広がっていて、その森の真ん中に深い湖が幾つかありました。そうです。まったく、田舎はすばらしい光景でした。

さて、そこのお日様の明るくさしている中に、深い堀割に囲まれた一軒の古いお屋敷がありました。土塀から水ぎわまで、大きなスカンポの葉が茂っていました。それは高くのびていて、一番大きな葉の下では、小さな子供なら、まっすぐに立つこともできました。その中は、ちょうど密林の中のように、足の踏みこむところもありませんでした。そして、そこに、一羽のアヒルのお母さんが、巣の中にすわっていました。いま、ちょうど小さいアヒルの子をかえそうとしているところでした。けれども、それが大へん手まどるのと、おまけに、誰も見舞いに来てくれないのとで、もうすっかり飽き飽きしていました。ほかのアヒルたちは、堀割の中で泳ぎまわっているほうが、ここまであがってきて、スカンポの葉の下でおしゃべりするより、ずっとよかったのです。（本文）

＊　＊

さて、冒頭の本文は、「……田舎はどこもすばらしい景色でした。だって、夏でしたもの！　小麦は黄色く、カラス麦は青々と育ち、向こうの緑の草地には、干し草がうず高く積み上げられていました。その中をコウノトリが長い赤い脚で歩きながら、エジプト語でぺちゃくちゃおしゃべりをしていました。このエジプト語は、お母さんから教わったのです。そして、畑と草地のまわりには大きな森が広がっていて、その森の真ん中に深い湖が幾つかありました。そうです。まったく、田舎はすばらしい光景でした」とある。

まず、全体の「田舎の風景」の描写からはじまり、「……季節は夏であり、小麦は黄色く、カラス麦は青々と育ち、向こうの緑の草地には、干し草がうず高く積み上げられていました。これらは植物たちであり、一方、動物たちは、例えば、コウノトリが長い赤い脚で歩きながら、エジプト語でぺちゃくちゃおしゃべりをしていましたとある。これは、欧州のコウノトリには「留鳥・渡り鳥」どちらもいるが、恐らく、渡り鳥になるのだろう。そして、畑と草地のまわりには大きな森が広がっていて、その森の真ん中に深い湖が幾つかありました」とある。――さて、この「……畑と草地のまわりには大きな森が広がっていて、その森の真ん中に深い湖（や沼など）が幾つかありました」とあるが、これは非常に大事な描写であり、なぜなら、みにくいアヒルの子は、アヒルの母親や兄弟（姉妹）たちと離れて、ひとりぼっちになり、やがて、ここで渡り鳥の「鴨や雁或いは白鳥など」と出遭うことになるからである。

＊　＊

ところで、水鳥の「鴨や雁或いは白鳥その他」などは、お互いどういう関係になってい

るのかと問えば、それは、次のようなものであり、まず、これらはすべて「ガンカモ類」に属して、しかも、「鴨」より大きくて、「白鳥」より小さいのを「雁」と呼び、また、「家鴨」というのは、野生の真鴨を飼いならして「家禽化」（人間の生活に役立つよう品種改良して飼育したもの）であり、その「肉や卵や羽毛」などを利用し、また、「鵞鳥」も全く同じであり、野生の雁を飼いならして「家禽化」（人間の生活に役立つよう品種改良して飼育したもの）であり、その「肉や卵や羽毛」などを利用しているものである。

ちなみに、「ガンカモ類」は、正式には「鳥綱カモ目カモ科」に属し、「鴨」は、「カモ科マガモ属」、また、「雁」は、「カモ科ガン亜科」、そして、「白鳥」は、「カモ科ハクチョウ属」、また、「家鴨」は、「カモ科マガモ属」、そして、「鵞鳥」は、「カモ科ガン亜科」ということである。――つまり、カモもガンも白鳥もアヒルもガチョウもみな同類の水鳥であり、そして、カモより大きく、白鳥より小さいのをガンと呼び、また、マガモの家禽化がアヒルであり、そして、ガンの家禽化がガチョウになるのである。

＊　＊

さて、「……そこのお日様の明るくさしている中に、深い堀割に囲まれた一軒の古いお屋敷がありましたが、その土塀から水ぎわまで、大きなスカンポの葉が茂っていました。それは高くのびていて、一番大きな葉の下では、小さな子供なら、まっすぐに立つこともできました。その中は、ちょうど密林の中のように、足の踏みこむところもありませんでした」とある。――これは、当然、人間や天敵などに見つからないような「草むらの茂み」に卵を産むのであり、そして、そこに、まさに「……一羽のアヒルのお母さんが、巣の中にすわっていて、いま、ちょうど小さいアヒルの子をかえそうとしているところでした。けれども、それが大へん手まどるのと、おまけに、誰も見舞いに来てくれないのとで、もうすっかり飽き飽きしていました。ほかのアヒルたちは、堀割の中で泳ぎまわっているほうが、ここまであがってきて、スカンポの葉の下でおしゃべりするより、ずっとよかったのです」とある。――まず、アヒルの卵は、何日ぐらいで孵化（ヒナになる）のかと問えば、それは、約一ヶ月弱であり、しかも、アヒルは、気まぐれで最後まで温める場合もあれば、温めない場合もきわめて多く、それが本文では、まさに「……大へん手まどる」ということであり、それゆえ、もうすっかり飽き飽きしていました。それにほかのアヒルたちは、堀割の中で泳ぎまわっているほうが、ここまであがってきて、スカンポの葉の下でおしゃべりするより、ずっとよかったのです」となるのである。――ちなみに、鳥の体温は、四十～四十二度ぐらいありますが、それは、一般に、体温を高く維持することが、運動量の多い「空を飛ぶこと」のウオーミングアップ（つまり体のアップ）になっているということである。

二、アヒルのお母さん

それでも、とうとう卵が一つまた一つと割れて、「ピョ！　ピョ！」と鳴き出しました。そして、あっちでもこっちでも卵のきみがむくむくと動き出して、可愛い頭を出しました。「ガー、ガー、早く、早く！」と、お母さんアヒルは言いました。すると、みんなは大いそぎで出てきて、緑の葉の下であたりを見まわしました。お母さんは、みんなに見たいだけいくらでも見せてやりました。なぜって、緑色は目のためにいいからです。「……世の

中ってずいぶん大きいんだなあ！」と、ひなたちは口々に言いました。確かに、今までの卵の中にいた時とは、全く別の世界に出てきたのですものね。「……おまえたち、これが世の中の全部だとでも思っているのかい？」と、お母さんは言いました。「……どうして、どうして！　世の中というのはね。このお庭のずっとむこうがわの、牧師さんの畑の中まで広がっているんだよ。お母さんでさえ、まだ行ったことがないんだよ！　――それはそうと、これでみんなかい？」、――こう言いながら、からだを起こしました。「……おや、まだ、みんなじゃないね？　一番大きい卵がまだ残っているよ。なんて長くかかるんだろう。ほんとに、あきあきしたわ」。こう言って、お母さんは、またすわり込みました。（本文）

＊　　＊

さて、いよいよ卵が孵化するが、その時の様子は、「……とうとう卵が一つまた一つと割れて、『ピヨ！　ピヨ！』と鳴き出し、そして、あっちでもこっちでも卵のきみがむくむくと動き出して、可愛い頭を出しました。『ガー、ガー、早く、早く！』と、お母さんアヒルが言うと、みんなは大いそぎで出てきて、緑の葉の下であたりを見まわすが、お母さんは、みんなに見たいだけいくらでも見せてやりました。なぜって、緑色は目のためにいいからです」とある。――まず、アヒルは、一回に何個ぐらいの卵を産むのか！　一般に、年間では、一五〇～二〇〇個ぐらいとされている。だとすれば、毎日、一個の時もあれば、二、三日で一個という場合もあるのだろう。一方、ニワトリの場合は、年間で三〇〇個ぐらいとされているので、ほぼ毎日一個ずつ産む（一日に二個は無理）ということになるのだろう。そして、アヒルの卵は、ニワトリの卵より大きく、ふつう安全面から生では食べず、必ず熱を加えた状態（様々に調理）して食べることになるかと思う。

さて、生まれたひなたちは、「……世の中ってずいぶん大きいんだなあ！」と、口々に言うので、確かに、今までの卵の中にいた時とは、全く別の世界に出てきたのですものね。お母さんは、「……おまえたち、これが世の中の全部だとでも思っているのかい？」、「……どうして、どうして！　世の中というのはね。このお庭のずっとむこうがわの、牧師さんの畑の中まで広がっているんだよ。お母さんでさえ、まだ行ったことがないんだよ！」とあるが、――これは、アヒルの「行動範囲」が、いかに「狭い」かということであり、それは、ニワトリの場合も全く同じことであり、それは、結局、長い距離飛べないからであり、それに比べて、渡り鳥の「鴨や雁或いは白鳥など」は、アヒルやニワトリには考えられないほどの「長い距離」を飛行でき得るということである。

さて、お母さんは、「……それはそうと、これでみんなかい？」と、こう言いながら、からだを起こすと、「……おや、まだ、みんなじゃないね？　一番大きい卵がまだ残っているよ。なんて長くかかるんだろう。ほんとにあきあきしたわ」と、こう言って、お母さんは、また、すわり込みました、とある。――まず、白鳥の卵の「孵化」は、アヒルの「三十日弱」に比べて、少し長い「三十日から四十日」ほどであり、それゆえ、「……なんて長くかかるんだろう」となるが、その「一番大きい卵」から生まれて来るのが、まさに主人公の「みにくいアヒルの子」であるとともに、ここからまさに『みにくいアヒルの子』の「物語」（ストーリー）は、いよいよ展開していくのである。

三、年寄りのアヒルのお見舞い

さて、そこに年寄りのアヒルがお見舞いにきて、「……おまえさん、どんな工合だね？」と、こう聞きました。すると、「……この卵が一つだけ、ずいぶん長くかかりますの」と、すわっているアヒルが言いました。「……まだ、穴のあく様子がありませんの。けれど、まあ、ほかのを見てやってください。こんな可愛らしいアヒルの子たち、わたし、まだ見たことがありませんわ。みんなお父さんそっくりですの。そう言えば、あのひどい人ったら、見舞いにも来てくれないんですよ」と言う。「……どれ、その割れない卵というのを、わたしに見せてごらん」と、年寄りは言いました。「……これはおまえさん、七面鳥の卵だよ！　あたしも、いつかだまされてね、生まれた子には、ほんとうに苦労させられたよ。なにしろ、おまえさん、水をこわがるんだからね。どうしても、水の中へ入れてやることができなかったの。いくらあたしがガーガー言って、つっついても、どうしてもだめだったのよ。――その卵をお見せ！　ああ、やっぱりそうだ、七面鳥の卵だよ！　こんなものはこのままにして、ほかの子供たちに、早く泳ぎを教えることだよ」と言う。（本文）

＊　＊

さて、年寄りのアヒルがお見舞いにきて、「……おまえさん、どんな工合だね？」と聞くので、すわっているアヒルは、「……この卵が一つだけ、ずいぶん長くかかりますの」と言い、「……まだ、穴のあく様子がありませんの。けれど、まあ、ほかのを見てやってください。こんな可愛らしいアヒルの子たち、わたし、まだ見たことがありませんわ。みんなお父さんそっくりですの。そう言えば、あのひどい人ったら、見舞いにも来てくれないんですよ」と言うのでした。――まず、アヒルというのは、本来、野生のマガモを飼いらして「家禽化」（人間の生活に役立つよう品種改良して飼育したもの）であり、それゆえ、一般に、繁殖能力は、極めて脆弱であり、お母さんのアヒルが最後まで卵を温めることも少なく、ほとんどの場合、人間の手で人工的に孵化させることになり、また、オスのアヒルが卵を温めるようなこともないのである。ただ、野生化したアヒルであれば、最後まで卵を温めて、ひながかえることは十分あり得ることである。そして、そのアヒルのひなたちは、確かに、「……こんな可愛らしいアヒルの子たち、わたし、まだ見たことがありませんわ」と言いたくなるような、そういう小さくて可愛らしい黄色い姿であり、鳴き声も、ピヨ、ピヨであり、それは、ニワトリのひよこにも似ているが、アヒルの子は、くちばしは、平たく、足には水かきが付いているのです。一方、白鳥のひなは、灰色かかった色のひなであり、それ自体、みにくいということはないが、まわりのアヒルの子たちとは色や形が変わっていたり、また、からだが大き過ぎるということでいじめられたりするわけである。――とはいえ、カモもガンも白鳥もアヒルもガチョウもみな同類（ガンカモ類）の水鳥であり、そして、カモより大きく、白鳥より小さいのをガンと呼び、また、マガモの家禽化がアヒルであり、そして、ガンの家禽化がガチョウになるのである。

それはともかく、「……どれ、その割れない卵というのを、わたしに見せてごらん」と、年寄りは言い、「……これはおまえさん、七面鳥の卵だよ！　あたしも、いつかだまされてね、生まれた子には、ほんとうに苦労させられたよ。なにしろ、おまえさん、水をこわがるんだからね。どうしても、水の中へ入れてやることができなかったの。いくらあたしがガーガー言って、つっついても、どうしてもだめだったのよ。――その卵をお見せ！　ああ、やっぱりそうだ、七面鳥の卵だよ！　こんなものはこのままにして、ほかの子供た

ちに、早く泳ぎを教えることだよ」とある。

ところで、「ほかの鳥の卵を温める」ということでは、有名な「托卵」というものがある。それは、例えば、ホトトギスは、ウグイスの親鳥のいない時を狙って、そのウグイスの「複数の卵のある巣」に「自分の卵」を一個だけ産むとともに、ウグイスの卵を一個だけ「巣の外」へと出して卵の数をそろえておくのである。そして、やがて、卵からひなに孵化することになるが、その場合、ホトトギスの卵は、ウグイスの卵よりも「二、三日前」にふかし、しかも、その生まれたばかりのホトトギスのひなは、ウグイスの親鳥のいない時に、まだ孵化していない「ウグイスの卵」を何と「自分の背中」に乗せて、一個一個すべて「巣の外」へと出すという驚くべき行動に出るのである。その結果として、巣の中には「ホトトギスのひな」だけとなり、仮の親鳥であるウグイスの「愛情」（つまり「育雛本能」）をすべてひとり独占して、スクスクと大きくなっていくが、その場合、仮の親鳥（ウグイス）の「小さなからだ」に比べて、ホトトギスのひな鳥の余りの「大きさ」は、実に驚くばかりであるが、それでは、なぜ、仮の親鳥（ウグイス）は、それに気づかないのかと敢えて問えば、それは、結局、ウグイスの「育雛本能」（いわば「ＤＮＡの働き」）によるとしか言いようがないものであり、――それは、例えば、ひな鳥が最初に見た「身近で動くものを親だと思い込んでしまう」という、余りにも有名なローレンツの「刷り込み」と全く同じ習性になるのである。

四、一つの大きな卵が割れる

さて、アヒルのお母さんは、「……でも、もうすこしすわっていてやりましょう」と、言いました。「……これまで、こうしてずいぶんしんぼうしたんですもの、もうしばらく様子を見ましょう」と。すると、「……どうぞ、お好きなように！」と、年寄りのアヒルは言って帰って行きました。やがて、とうとうしまいに、その大きな卵が割れました。そして、「ピヨ、ピヨ！」と鳴きながら、ひよこがころがり出てきました。見ると、たいそうからだの大きな、みにくい子でした。お母さんアヒルは、その子をつくづく見て言いました。「……まあ、とんでもなく大きなひよこだわ！　ほかの子にこんなのは一羽だってありゃしない。ひょっとしたら、七面鳥のひなかもしれないよ。いいわ。すぐわかることだから。水の中へ入れてやりましょう！　仕方がなかったら、つきとばしてでも」と言うのであった。（本文）

＊　＊

さて、いよいよ「大きな卵」が割れて、「ピヨ、ピヨ！」と鳴きながら、ひよこがころがり出てくるが、それは、「……たいそうからだの大きな、みにくい子でした」。お母さんアヒルは、その子をつくづく見て「……まあ、とんでもなく大きなひよこだわ！　ほかの子にこんなのは一羽だってありゃしない。ひょっとしたら、七面鳥のひなかもしれないよ」と言うのでした。――まず、卵の大きさで見てみると、ニワトリの卵（Ｌサイズ）は、約六㌢、アヒルの卵は、約十㌢、そして、白鳥（オオハクチョウ）の卵は、約十一・三㌢で、一回に四、五個産む、七面鳥の卵は、約十二㌢ぐらいで、一回に八～十五個であり、そして、ダチョウの卵は、鳥類最大の約二十一㌢（ニワトリの卵の約三十倍）で殻の厚さも、約二㍉あり厚くて丈夫である。ちなみに、マガモの卵は、ニワトリの卵よりは少し小

さく、春頃、一回に数個産み、また、マガモとアヒルを掛け合わせたものが、まさに「アイガモ」になるが、アイガモの卵は、マガモよりも少し大きく、ニワトリの卵とほぼ同じくらいであり、そして、ガチョウの卵は、かなり大きく、ニワトリの卵の三倍ぐらいになるかと思う。一方、体の大きさでは、マガモ＜アイガモ＜ニワトリ＜アヒル＜ガチョウ＜七面鳥＜オオハクチョウ＜ダチョウになるかと思う。……そして、作品の中では、「……たいそうからだの大きな、みにくい子となっている」のである。

五、あくる日の月夜、一家を連れて堀割へ……

あくる日は、すばらしくよい天気でした。お月様は、緑色のスカンポの上を、いちめんに明るく照らしていました。アヒルの子たちのお母さんは、一家をつれて堀割へおりてきました。ポチャン！　と、まず、お母さんが水の中へ飛び込みました。「……ガー、ガー、早く、早く！」と、お母さんは言いました。すると、アヒルの子たちは一羽ずつあとからあとから飛び込みました。水が頭の上までかぶさりましたが、すぐまた頭を出して、みごとに浮かび上がりました。そして、脚がひとりでに動きました。こうして、みんなは堀割の中に出ました。見ると、あのみにくい灰色のひよこも、一緒に泳いでいるではありませんか。「……そうだよ、七面鳥なんかじゃないわ！」と、お母さんアヒルは言いました。「……どうでしょう、あの脚の動かし方の上手なこと！　からだも、あのとおり、しゃんと起こしてさ！　やっぱり、わたしの子だわ。なあに、よくよく見れば、やっぱり、可愛いところもあるじゃないの！　ガー、ガー！　さあ、みんな、一緒についておいで！　世の中へつれてってあげようね！　そして、鳥飼い場のみなさんに引き合わせてあげるよ。だけど、踏まれたりしないように、いつもお母さんのそばについているんですよ。それから、ネコに気をおつけ！」と、言うのでした。（本文）

＊　＊

さて、「……あくる日は、よい天気であり、その夜のお月様は、緑色のスカンポの上を、いちめん明るく照らしていて、アヒルのお母さんは、一家を連れて堀割へおりてきました」とある――まず、太陽の明るく光り輝く昼間ではなく、その夜の月明かりにしたのは、やはり、まだ「生まれたばかりのひな鳥たちを外敵から守る」ためであり、そして、ポチャン！　と、まず、お母さんが水の中へ飛び込み、「……ガー、ガー、早く、早く！」と、お母さんが言うと、アヒルの子たちは一羽ずつあとからあとから飛び込み、水が頭の上までかぶりましたが、すぐまた頭を出して、みごとに浮かび上がりました。そして、脚がひとりでに動いて、こうして、みんなは堀割の中に出ましたとあるが、これは、親が先に見本を示して、その泳ぎ方やえさの採り方などを教えるためであり、見ると、「……あのみにくい灰色のひよこも、一緒に泳いでいるではありませんか」とある。――つまり、アヒルのお母さんは、あのみにくい灰色のひよこは、もしかしたら「七面鳥の子」かも知れないと疑っていたが、しかし、一緒に泳いでいる姿を見て、「……そうだよ、七面鳥なんかじゃないわ！」と言い、「……どうでしょう、あの脚の動かし方の上手なこと！　からだも、あのとおり、しゃんと起こしてさ！　やっぱり、わたしの子だわ。なあに、よくよく見れば、やっぱり、可愛いところもあるじゃないの！　ガー、ガー！　さあ、みんな、一緒についておいで！　世の中へ連れてってあげようね！　そして、鳥飼い場のみなさんに

引き合わせてあげるよ。だけど、踏まれたりしないように、いつもお母さんのそばについているんですよ。それから、ネコに気をおつけ！」となっていくのである。

六、鳥飼い場へ……

こうして、みんなは鳥飼い場にやって来ました。来てみると、大へんな騒ぎがもちあがっていました。というのは、二軒の家族のものが、ウナギの頭の奪い合いをしていたのです。ところがとうとう、ネコに横取りされてしまいました。――「……ごらん！　あれが世の中というものよ！」と、アヒルの子のお母さんは言いました。そして、自分でも、くちばしをぴちゃぴちゃさせました。ほんとうは、お母さんも、ウナギの頭がほしかったのです。「……さあ、こんどは、脚を使うんですよ」と、お母さんは言いました。「……さあ、いそいで歩いてごらん！　そして、あそこにいるお年寄りのアヒルさんの前へ行って、おじきをするんですよ。あの方は、ここにいるみんなの中で、一番身分の高いひとなんだよ。なにしろスペイン生まれなんだからね。だから、あんなに太っていらっしゃるんだよ、それから、ほらごらん！　脚に赤い布をむすんでいるでしょう。とても、きれいじゃないの！　わたしたちアヒルのもらうことのできる一番大きな名誉なんですよ。そして、あれをつけているわけは、あの方がいなくならないためと、動物や人間からすぐ見わけがつくためなんですよ。――さあ、みんな、いそいで！　足をぐっと外側にむけるんですよ。お父さんやお母さんのようにね。ごらん！　こんなふうに！　こんどは、首をさげて、ガーと言ってごらん！」と言いました。（本文）

＊　＊

まず、「……みんなは鳥飼い場にやって来ました」とある。この「鳥飼い場」というのは、恐らく、人間がえさなどを与えるような場所であり、そこへ来てみると、大へんな騒ぎがもちあがっていて、二軒の家族のものが、ウナギの頭の奪い合いをしていたが、それをネコに横取りされてしまい、「……ごらん！　あれが世の中というものよ！」と、アヒルの子のお母さんは言うのでした。――これは、まさに「生存競争」（つまり「えさの奪い合い」）であって、（何らかの意味で）強いものがえさを奪い、一方、（何らかの意味で）弱いものは、そのえさにありつけず、指をくわえて見ているしかなく、それは、「……自分でも、くちばしをぴちゃぴちゃさせては、ほんとうは、お母さんも、ウナギの頭が（好物で）ほしかったのです」となるのである。そして、「……さあ、こんどは、脚を使うんですよ」と、アヒルのお母さんは言うが、これは、水の中から「地上」へと上がって、「……さあ、いそいで歩いてごらん！　そして、あそこにいるお年寄りのアヒルさんの前へ行って、おじきをするんですよ。あの方は、ここにいるみんなの中で、一番身分の高いひと（いわばその群れの中の中心的存在）なんだよ。なにしろスペイン生まれなんだからね。だから、あんなに太っていらっしゃるんだよ。（あんなに太っているのは、そのアヒルの体質と優先的にえさを十分に食べているからであり）、それから、「……ほらごらん！　脚に赤い布をむすんでいるでしょう。とても、きれいじゃないの！　わたしたちアヒルのもらうことのできる一番大きな名誉なんですよ。そして、あれをつけているわけは、あの方がいなくならないためと、動物や人間からすぐ見わけがつくためなんですよ」とある。――さて、「……脚に赤い布をむすんでいる」のは、人間から見た時の一つの「目印」で

あり、その理由は、「……あの方がいなくならないためと、動物や人間からすぐ見わけがつくためなんですよ」とあるが、これは、アヒルの「姿・形（すがたかたち）」（顔など）は、人間から見ればみな同じように見えるので、誰でも一目で分かるように、まさに「脚（あし）に赤い布（きれ）をむすび付けている」のであり、それは、結局、この「鳥飼い場」（そこにいる鳥たち）の全体を「まとめている重要な存在」ということになるのだろう。そして、本文では、「……さあ、みんな、いそいで！　足をぐっと外側にむけるんですよ。お父さんやお母さんのようにね。ごらん、こんなふうに、こんどは、首をさげて、ガーと言ってごらん！」となっていくが、これは、まさにアヒルのお母さんは、まだ世間のこともほかのことも何も知らないアヒルのひなたちに、いろいろなことを教えているということである。

七、鳥飼い場で……

子供たちは、言われたとおりしました。ところが、ほかのアヒルたちがまわりを取りまいてじろじろ見ていたが、大きな声で言いました。「……ごらんよ！　また仲間がやってきたぞ。おれたちだけじゃ、まだ足りないっていうみたいだ！　チェッ、あのアヒルの子は、ありゃ、なんだい！　あんなのはごめんだよ！」――するとすぐ、一羽のアヒルが飛んできて、その子の首すじにかみつきました。「……ほっておいてちょうだい！」と、お母さんはいいました。「……この子は、何もしないじゃありませんか」、「……うん、だけど、あんなに大きくて、へんてこだからさ！」、「……だから、つっつきまわしてやるんだ！」と、かみついたアヒルは言うのでした。

すると、「……お母さんの連れておいでの、子供しゅうは、きりょうよしじゃな！」と、脚（あし）に布（きれ）をつけた年寄りのアヒルが言いました。「……みんなそろってきりょうよしじゃ、その子だけはべつだけど。その子は失敗だよ！　おまえさん、つくりかえることができるといいのにね」。「……奥様、そうはまいりません！」と、お母さんアヒルは言いました。「……この子はきりょうよしではございませんが、気だてのよい子でして、それに泳ぎもほかの子に負けずに、いえ、ことによると、いくらかじょうずなくらいですの！　大きくなったら、見よくもなりましょうし、さもなければ、時がたてば、いくらか小さくなるかもしれません。なにしろ、卵の中にあまり長くいすぎたものですから、形もほんとでないのでございます」。こう言って、その子の首のあたりをつまんだり、羽をつくろってやったりしました。「……それに、この子は男の子でございますもの。きりょうなんてことは、たいしたさわりにはなりませんわ。この子はきっと強くなって、りっぱにやりぬいてゆくと、わたしは信じておりますの！」、「……とにかく、ほかのアヒルの子たちは、可愛いよ！」と、年寄りは言いました。「……さあ、みんな、遠慮しないで、らくにおし！　そして、おまえさんたち、ウナギの頭を見つけたら、わたしのところに持ってきておくれよ！」――そう言われて、みんなはくつろいだ気持ちになりました。（本文）

＊　＊

さて、ここから、みにくいアヒルの子は、いろいろひどい目に遭うことになるが、それは、ほかのアヒルたちがまわりを取りまいてじろじろ見ていたが、大きな声で言うには、「……ごらんよ！　また仲間がやってきたぞ。おれたちだけじゃ、まだ足りないっていうみたいだ！　チェッ、あのアヒルの子は、ありゃ、なんだい！　あんなのはごめんだよ！」

と。――するとすぐ、一羽のアヒルが飛んできて、その子の首すじにかみつくので、「……ほっておいてちょうだい！」、「……この子は、何もしないじゃありませんか」と、アヒルのお母さんが言うと、「……うん、だけど、あんなに大きくて、へんてこだからさ！」、「……だから、つっつきまわしてやるんだ！」と。かみついたアヒルは言うのでした。

＊　　＊

さて、この「問題」は、実に古くて新しい問題であり、例えば、われわれ人間にとっても、最も厄介な問題の一つとして、いわゆる「人間関係」というものがあるのだろう。それは、家族との「人間関係」を初めとして、近隣社会、学校、会社、友だち、その他、そこに人間が二人以上集まれば、何らかの「揉め事や争い」などが生じる可能性は、常にあるわけで、われわれ人間の「ストレス」の最大の原因の一つが、様々な「人間関係」にあることは、まったく疑いようもないものである。そして、われわれ人間は、他人との様々な「あつれき」のなかで、イライラしたり、腹を立てたり、あるいは相手を憎んだりすることにもなるのだろう。そして、そのイライラしたり、腹を立てたり、あるいは相手を憎んだりした思いが、何らかの形で健全に処理されていけば、問題はないのだろうが、何か悪い形で処理されていくような場合には、実に様々な「禍（わざわい）」をもたらすことにもなるわけである。――例えば、若い人たちが、面白くないということで、実に様々な問題を起こす場合があるが、その原因を辿（たど）れば、家庭や学校、あるいは友だち関係、その他、何らかの「人間関係」から生じている場合が多いのだろう。また、会社で何か面白くないことがあったということで、ついつい妻に八つ当たりをしてしまい、その妻が、今度は、面白くないということで、同じように子供に八つ当たりをしてしまうというように、イライラした思いというのは、直接、相手に向かう場合と、もう一つは、次から次へと、より弱いところへと向かっていくという特徴を持っているわけである。その一つに、いわゆる「いじめ」という問題もあるのだろう。

それでは、なぜ、「いじめ」をするのだろうか？　もちろん、それにもいろいろな理由があるかと思うが、一つには、相手が、気に入らないという場合もあれば、面白いからという場合もあるのだろう。また、イライラした思いの「気晴らし」という場合もあれば、一種の優越感的なものもあるのかも知れない。その他、それが、たとえどのような理由からであれ、そこには、加害者と被害者との関係が生じ、そして、加害者は、相手より優位な立場から、権力や暴力などをふるって、ただ単にいじめるだけではなく、お金や物などを要求したり、様々なことを無理やりやらせるということも多く、また、いじめる側の言い分としては、自分は、何も故意にいじめているというような気持ちは、全然なくて、ただ軽い気持ちで、ちょっとからかってやろうとか、面白半分でそうしていただけなのだ、ということになるのだろう。しかし、いじめる側は、二重の「罪」を犯しているのである。というのも、故意に「いじめる」ということ自体が、一つの「罪」であるとともに、その「いじめ」を継続して行なうことによって、相手を「自殺やひきこもりその他」などのところまで追い込んでしまうということが、もう一つの「罪」になるのである。

ちなみに、自分自身、何か「不正な行為」（例えば「いじめ」）などを行なっていないかどうかを認識するためには、いわゆる「言い過ぎ、やり過ぎ」の部分はなかったか？自分自身に問うてみればよいわけである。そして、確かに「言い過ぎ、やり過ぎ」の部分があったとすれば、その部分だけは、まさに「不正な行為」（例えば「いじめ」）という

行為を行なっていたということになるのだろう。――すなわち、何らかの「揉め事や事件」などが生じるその「根底」（原因）には、必ずと言ってもよいほど、何らかの「欲望や感情」などに振りまわされている「心的状態」があるとともに、いわゆる「言い過ぎ、やり過ぎ」という行為が、つねにともなっているものなのである。

一方、いじめられる側の人にとっては、もちろん、個人差はあるだろうが、相手からいじめられるということを、極めて深刻に受けとめてしまい、もうこのままでは生きてはいけないというところまで追い込まれてしまう場合も多いのだろう。これは、非常に難しい問題であり、人間が二人以上集まれば、そこには何らかの「揉め事や争い」は、必ずついてまわるものであり、われわれ人間は、他人との様々な「あつれき」のなかで生きているというのが、まさに現実に置かれている状況なのかも知れない。そして、その他人との様々な「あつれき」のなかで、イライラしたり、腹を立てたり、あるいは相手を憎んだりすることにもなるのだろう。そして、そのイライラしたり、腹を立てたり、あるいは相手を憎んだりした思いが、何らかの形で健全に処理されていけば、問題はないのだろうが、何か悪い形で処理されていくような場合には、実に様々な「禍（わざわい）」をもたらすことにもなるわけである。一方、もちろん、人間関係がうまくいっていれば、それは、いわば「幸せな状態」であり、敢えて何か問題を起こす必要もないわけで、人間関係がうまくいっていないところから、実に様々な「問題や揉め事」などは、生じやすくなるということである。

＊　＊

さて、脚（あし）に布（きれ）をつけた年寄りのアヒルは、「……お母さんの連れておいでの、子供しゅうは、きりょうよしじゃな！」、「……みんなそろってきりょうよしじゃ、その子だけはべつだけど。その子は失敗だよ！　おまえさん、つくりかえることができるといいのにね」と言うので、お母さんアヒルは、「……この子はきりょうよしではございませんが、気だてのよい子でして、それに泳ぎもほかの子に負けずに、いえ、ことによると、いくらかじょうずなくらいですの！　大きくなったら、見よくもなりましょうし、さもなければ、時がたてば、いくらか小さくなるかもしれません。なにしろ、卵の中にあまり長くいすぎたものですから、形もほんとでないのでございます」。「……それに、この子は男の子でございますもの。きりょうなんてことは、たいしたさわりにはなりませんわ。この子はきっと強くなって、りっぱにやりぬいてゆくと、わたしは信じておりますの！」とある。

これは、非常に「大事な言葉」であり、子供の頃、どうであったかはそれほど重要な問題ではなく、人間は、その「成長過程」でどんどん「変化」（変貌）していくものであり、それゆえ、将来、その子がどのような人間になっていくかは誰にも予測でき得ないものであり、すべての人間に「可能性は常に残されている」のであり、従って、中学や高校生ぐらいで「自殺」（それは「自分の人生をここで終わらせる」）ようなことは、あってはならないことであり、それは、自分を余りにも「過小評価し過ぎ」であり、自分に適した場所を見つけ、そこで努力を積み重ねていけば、道はいくらでも拓（ひら）けていくものであり、大事なのは、他人の評価などではなく、自分自身を信じて、自分のやりたいこと、自分に出来ることは何かを見つけて、必要な努力を積み重ねていけば、道はいくらでも拓（ひら）けていくとともに、何らかの結果が出せるようになれば、自然と他人からの評価も得られるようになるものであり、実際、『みにくいアヒルの子』のような子供（青年）時代を過ごしたとされる作者（アンデルセン）自身、自分に適した「場所と目標」とを見つけて、そこで努

力を積み重ねた結果、世界的にも有名な「童話作家」として高く評価されるようになったのであり、それゆえ、夢や希望を捨てず、そのための努力を積み重ねていけば、すべての人間にその「可能性は常に残されている」ということである。

八、みにくいあひるの子は……

さて、一番おしまいに卵から出てきて、見栄えのよくないアヒルの子だけは、可哀そうに、アヒルの仲間ばかりでなく、ニワトリたちからも、かみつかれたり、つっつかれたり、ばかにされたりしました。「……こやつは、だいたい大きすぎるよ！」と、誰もが言いました。なかでも七面鳥ときたら、足に拍車をつけて生まれてきたものですから、自分は、皇帝だと思いこんで、帆に風をいっぱいはらんだ船のように、からだをふくらませて、つかつかと寄ってきました。そして、ころころとのどを鳴らしながら顔をまっかにしました。可哀そうに、アヒルの子は、いても立ってもいられない気持ちでした。自分の姿がみにくいばかりに、鳥飼い場のみんなに笑いものにされるのが、しみじみ情けなく思いました。

最初の日は、こんなふうに過ぎましたが、それからは、だんだん悪くなるばかりでした。可哀そうに、アヒルの子は、みんなに追いかけられました。にいさんやねえさんたちさえ、いじわるして、いつも「……おまえみたいにみっともないやつは、ネコにでもつかまってしまえばいいんだ！」と、言うのでした。そして、お母さんも、「……いっそどこか遠いところへ行ってくれたらねえ！」と、言うようになりました。こうして、ほかのアヒルたちにはかみつかれるし、ニワトリたちにはこづかれるし、餌(えさ)をやりにくる娘にはけとばされました。（本文）

＊　＊

さて、一番おしまいに卵から出てきて、見栄えのよくないアヒルの子だけは、可哀そうに、アヒルの仲間ばかりでなく、ニワトリたちからも、かみつかれたり、つっつかれたり、ばかにされたりしました。「……こやつは、だいたい大きすぎるよ！」と、誰もが言いました。――まず、みんなは「鳥飼い場」にやって来ているのであるが、その「鳥飼い場」というのは、恐らく、人間がえさなどを与えるような場所であり、それゆえ、アヒルやニワトリ或いは七面鳥やその他、人間が飼っているような鳥たちが数多くいるということであり、それゆえ、ここでの鳥たちの「価値観」は、特に人間の子供たちや大人たちから「可愛い」と思われることが何よりも大事なことであり、それによって、まさに「……可愛がられたり、大事にされたり、えさを余計にもらえたり」という、いわば「優遇される」ことにもなるが、一方、見栄えのよくないアヒルの子であると、逆に、アヒルの仲間ばかりでなく、ニワトリたちからも、かみつかれたり、つっつかれたり、ばかにされたり、また、七面鳥ときたら、からだをふくらませて、つかつかと寄ってきて、ころころとのどを鳴らしながら顔をまっかにしたという、そのような「冷遇を受ける」ことになり、アヒルの子は、いても立ってもいられない気持ちになり、自分の姿がみにくいばかりに、鳥飼い場のみんなに笑いものにされるのが、しみじみ情けなく思いましたとあるが、これは、『みにくいアヒルの子』のような子供（青年）時代を過ごしたとされる作者（アンデルセン）自身の、まさに「実感」そのものになるのかも知れない。しかし、やがて、自分に適した「場所と目標」とを見つけて、そこで努力を積み重ねた結果、世界的にも有名な

「童話作家」として高く評価されるような、そのような「姿」（いわば「白鳥の姿」）へと変身したということにもなるのだろう。

さて、最初の日は、こんなふうに過ぎたが、それからは、だんだん悪くなるばかりであり、可哀そうに、アヒルの子は、みんなに追いかけられました。――これは、いわば「他人」からの「いじめやいやがらせ」であり、もちろん、それも「耐えがたいもの」ではあるが、それ以上に「辛い」（或いは「骨身に堪える」）のは、にいさんやねえさんたちさえ、いじわるをして、いつも「……おまえみたいにみっともないやつは、ネコにでもつかまってしまえばいいんだ！」と言われ、さらに、そのアヒルのお母さんまでも、「……いっそどこか遠いところへ行ってくれたらねえ！」と、言うようになってしまったのです。――これは、まさに「決定的な言葉」であり、このみにくいアヒルの子にとっての「自分の居場所」というものが「完全になくなってしまった」ということであり、こうして、ほかのアヒルたちにはかみつかれるし、ニワトリたちにはこづかれるし、餌をやりにくる娘にはけとばされるような、そのような、まさに「孤立無援」（「四面楚歌」）の状況になってしまい、みにくいアヒルの子は、とうとう「その場」（つまり「鳥飼い場」）を逃げ出すことになるのである。

九、野ガモがいる大きな沼に……

さて、とうとう、アヒルの子は逃げ出して、生垣を飛び越えました。やぶの中にいた小鳥たちがびっくりしてぱっと舞いあがりました。「……これも、僕が、みにくいからなんだ」と、アヒルの子は考えて、目をつぶりました。それでも、ずんずん先へ走って行きました。やがて、野ガモのすんでいる大きな沼にやってきましたので、ここで一晩ねることにしました。なにしろ、すっかり疲れていましたし、それに悲しくてたまりません。

朝になると、まいあがった野ガモたちは、この新しい仲間を見つけました。「……君はいったい、何者だい？」とみんなはたずねました。アヒルの子はあっちへもこっちへも、できるだけていねいに挨拶をしました。「……君って、なんてみっともないんだ！」と、野ガモたちは言いました。「……けれど、そんなことはどうでもいいや、僕たちの家族のだれかと結婚さえしなければね」。――可哀そうに、アヒルの子は、結婚なんて夢にも思ってはいませんのに。ただ、芦の中に横にさせてもらって、沼の水を少し飲ませてもらえば、それだけでよかったのです。

アヒルの子は、そこに、まる二日おりました。すると、そこへ灰色ガンが、正しくは雄のガンが二羽飛んできました。卵から出て、まだいくらもたっていないものですから、せっかちでした。「……おい、君！」と、二羽のガンは言いました。「……君はなんてみにくいんだ。しかし、そこが気に入った！　どうだい、いっしょに旅をして、渡り鳥にならないか？　この近くのもう一つの沼に、可愛らしいきれいなガンが、二三羽いるんだよ。みんなお嬢さんでね、ガー、ガー！　っておしゃべりがじょうずなんだ。君は、かっこうはまずいが、でも、そこへいったら幸運をつかむことができるかもしれないぞ！」（本文）

＊　＊

さて、みにくいアヒルの子は、とうとう「その場」（つまり「鳥飼い場」）を逃げ出して、生垣を飛び越えました。すると、やぶの中にいた小鳥たちがびっくりしてぱっと舞い

上がりましたが、「……これも、僕が、みにくいからなんだ」と、アヒルの子は考えて、目をつぶりましたとある。――まず、このみにくいアヒルの子の「心理」状態は、まさに強い「劣等感」（コンプレックス）にとらわれている状態かと思うが、例えば、心理学者のアドラーという人は、人間は誰でも何らかの「劣等感」を持っているものであるが、その「劣等感」をうまく利用すれば、例えば、自分は、病弱である、或いは、太り過ぎている、そこで、自分の身体をもっと「健康体」にしたいと心からそう思い、そのための努力を積み重ねて行けば、やがては、何もしない人たちよりは、より健康で「たくましい」（或いは「美しい」）肉体へと変身させることは十分可能なことであり、それは、すべてのことに言えることであり、大事なのは、自分に適した「場所と目標」とを見つけて、そこで必要な努力を積み重ねて行けば、道はいくらでも拓けていくということである。

それはともかく、みにくいアヒルの子は、それでも、ずんずん先へ走って行くと、やがて、野ガモのすんでいる大きな沼にやってきて、ここで一晩ねることにしました。なにしろ、すっかり疲れていましたし、それに悲しくてたまりませんでしたとある。――まず、大きな沼とあるが、池と沼と湖の違いは、一体、何かと問えば、池は、人間が作った人工的な水たまりであり、一方、沼と湖は、自然の水たまりであるが、水草が生えて水深が五メートル以内であるのが沼であり、そして、それ以上の水深があるのが、一般に、湖ということになるが、みにくいアヒルの子は、その大きな沼のところまで、人間で言えば、まさに「家出」をしてきて、今は「不安と寂しさと悲しい」気持ちで一杯になっているのである。

そして、朝になると、舞い上がった野ガモたちは、この新しい仲間を見つけて、「……君は、一体、何者だい？」とみんなはたずねました。アヒルの子は、あっちへもこっちへも、できるだけ丁寧に挨拶をしましたが、「……君って、なんてみっともないんだ！」と、野ガモたちは言い、「……けれど、そんなことはどうでもいいや、僕たちの家族の誰かと結婚さえしなければね」とある。――これは、非常に面白い場面であり、つまり、例の「鳥飼い場」というのは、アヒルやニワトリ或いは七面鳥やその他、人間が飼っているような鳥たちが数多くいるような場所であり、それゆえ、そこでの鳥たちの「価値観」は、特に人間の子供たちや大人たちから「可愛い」と思われることが何よりも大事なことであり、それによって、まさに「……可愛がられたり、大事にされたり、えさを余計にもらえたり」という、いわば「優遇される」ことにもなるが、一方、見栄えのよくないアヒルの子であると、逆に、アヒルの仲間ばかりでなく、ニワトリたちからも、かみつかれたり、つっつかれたり、ばかにされたりと、そのような「冷遇を受ける」ことになってしまう。しかし、この野ガモたちの棲んでいる「大きな沼」では、確かに、「……君って、なんてみっともないんだ！」と、みんなから言われることにはなるが、しかし、それだけでひたすら「ひどい目に遭う」ということはなく、「……けれど、そんなことはどうでもいいや、僕たちの家族の誰かと結婚さえしなければね」と、その「価値観」は少し違って来るのである。

つまり、「鳥飼い場」では、「可愛い」ことが、いわば「絶対的な価値」にもなり得るが、一方、野ガモたちの棲んでいる大きな沼では、そのような「可愛さ」も大事ではあるとしても、それ以上に大事になるのは、厳しい自然の中でたくましく生き抜いていく「力強さ」であり、そのような「力強さ」がなければ、やがては「自然淘汰」されてしまうのである。それはともかく、可哀そうに、アヒルの子は、結婚なんて夢にも思ってはいませんのに。ただ、芦の中に横にさせてもらって、沼の水を少し飲ませてもらえば、それだけ

でよかったのですとある。――これは、みにくいアヒルの子にとっては、今はもう生きることだけで精一杯であり、それは、「……芦の中に横にさせてもらって、沼の水を少し飲ませてもらえば、それだけでよかったのであり、結婚なんて夢にも思ってはいませんでした」となるのである。そして、そのアヒルの子は、そこに、まる二日過ごすのでした。

すると、そこへ灰色ガンが、正しくは雄のガンが二羽飛んできました。卵から出て、まだいくらもたっていないものですから、せっかちであり、「……おい、君！」と、二羽のガンは言い、「……君はなんてみにくいんだ。しかし、そこが気に入った！　どうだい、一緒に旅をして、渡り鳥にならないか？　この近くのもう一つの沼に、可愛らしいきれいなガンが二三羽いるんだよ。みんなお嬢さんでね、ガー、ガー！　っておしゃべりが上手なんだ。君は、かっこうはまずいが、でも、そこへいったら幸運をつかむことができるかもしれないぞ！」とある。――これは、「鳥飼い場」での鳥たちの「価値観」と大きな沼に棲んでいる野ガモたちの「価値観」と二羽の雄のガンの「価値観」とは、それぞれみな違って来るということであり、これは、非常に「大事な認識」であり、一つの「価値観」が絶対ということはないのであり、その時、その場所、その時の状況、その他に応じて、むろん、人それぞれによっても、その人の「……ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などは、みな違って来るものであり、大事なのは、自分に適した「場所と目標」とを見つけて、そこで必要な努力を積み重ねていけば、道はいくらでも拓けていくということである。

十、その時、鉄砲の音が……

その時、「バーン！　バーン！」と、空で音がしました。そのとたんに、二羽のガンは芦の中へ落っこちて死んでしまいました。水が血で赤くなりました。「バーン！　バーン！」とまた音がしました。すると、ガンの群れが、ぱっと芦の中から飛びたちました。つづいて、またもや鉄砲の音がしました。大じかけな猟がはじまったのです。猟師たちは、沼を取りまいていました。なかには芦の上にのびている木の枝にのぼっている人も、二三人ありました。青い煙が雲のように、うす暗い木々のあいだをぬって、遠く水の上までたなびいていました。沼の中に猟犬がピシャ！　ピシャ！　と、はいって来ました。芦やスゲが四方へなびきました。可哀そうに、アヒルの子にとってこんな恐ろしいことはありませんでした。びっくりして、頭を羽の下にかくそうと、うしろへふりむいたとたんに、目の前におそろしく大きな犬が立っていました。舌はだらりと口のそとにたれ、目は気味のわるいほど光っていました。鼻づらをぐっとアヒルの子のほうへ寄せて、鋭い歯をむきました。が、ピシャ！　ピシャ！　と、再び、むこうへ行ってしまいました。アヒルの子は、そのままにして。――「……ああ、よかった！」、アヒルの子は、ほっとため息をつきました。「……僕があんまり、みっともないんで、犬までがかみつかないんだ」と。そのまま、アヒルの子はじっとしていました。そのあいだも、散弾が芦の中をざわめかし、ひっきりなしに鉄砲の音がしていました。

昼もだいぶ過ぎたころ、やっと、静かになりました。それでもまだ、この哀れなひよこは起きあがる勇気が出ませんでした。それからまた、かなり時間がたって、ようやくあたりを見まわしました。そして、できるだけいそいで、沼の外へ逃げだしました。それから、

畑や草原を越えて、どんどん走って行きました。そのうちに、ひどい風が吹いてきたものですから、思うように走ることができませんでした。（本文）

＊　＊

さて、その時、「バーン！　バーン！」と、空で音がしました。これは、一気に「場面」が激変して、その途端に、二羽のガンは芦の中へ落っこちて死んでしまい、水が血で赤くなりました。また、「バーン！　バーン！」と、音がすると、ガンの群れは、ぱっと芦の中から飛び立ち、つづいて、またもや鉄砲の音がして、大じかけな猟が始まったということである。――まず、この「場面」は、多くの場合、様々な「絵本やアニメ」その他などでは、省略されることも多いかと思うが、それは、やはり小さな子供たちに見せたり読み聞かせたりするのには余りに「残酷過ぎる」からではないかと思うが、しかし、現実には今も行なわれているものであり、銃を持った猟師たちは、その沼を取りまいていて、なかには芦の上に伸びている木の枝に登っている人も二三人ありました。そして、青い煙が雲のように、うす暗い木々のあいだをぬって、遠く水の上までたなびいていました。

これは、もちろん、狩猟が解禁されて、大じかけな「ガンカモ」猟が始まったということであり、空から落ちて来るガンをめざして、沼の中に猟犬がピシャ！　ピシャ！　と、入って来て、芦やスゲが四方へなびきました。可哀そうに、アヒルの子にとってこんな恐ろしいことはなく、びっくりして、頭を羽の下にかくそうと、うしろへふりむいたとたんに、目の前におそろしく大きな犬が立っていて、舌はだらりと口のそとにたれ、目は気味のわるいほど光っていました。鼻づらをぐっとアヒルの子のほうへ寄せて、鋭い歯をむきました。が、ピシャ！　ピシャ！　と、再び、むこうへ行ってしまいました。アヒルの子は、そのままにして。――「……ああ、よかった！」と、アヒルの子は、ほっとため息をつき、「……僕があんまりみっともないんで、犬までがかみつかないんだ」と。（もちろん、ひよ鳥には用がないからであり）、そのまま、アヒルの子はじっとしていました。その間も、散弾が芦の中をざわめかし、ひっきりなしに鉄砲の音がしていました。

そして、昼もだいぶ過ぎたころ、やっと静かになりました。それでもまだ、この哀れなひよこは起きあがる勇気が出ませんでした。それからまた、かなり時間がたって、ようやくあたりを見まわして、できるだけいそいで、沼の外へ逃げ出しました。それから、畑や草原を越えて、どんどん走って行くうちに、ひどい風が吹いてきたものですから、思うように走ることができませんでした。――さて、みにくいアヒルの子は、例の「鳥飼い場」から居ても立っても居られずに逃げ出して、ずんずん先へ走って行くと、やがて、野ガモの棲んでいる大きな沼にやって来て、そこで二日間過ごすことになるが、その翌朝、そこへ灰色ガンが、正しくは雄のガンが二羽飛んで来て、その二羽のガンとは友だちになれそうな雰囲気にもなったが、その時、「バーン！　バーン！」と、空で音がして、二羽のガンは芦の中へ落っこちて死んでしまう。そのような大じかけな「ガンカモ」猟は、昼もだいぶ過ぎたころ、やっと静かになるが、それからかなり時間が経ってから、ようやくふるえていたアヒルの子も、できるだけ急いで、沼の外へ逃げ出し、それから畑や草原を越えて、どんどん走って行くうちに、ひどい風が吹いてきて、思うように走ることができなくなるが、夕方になって、やっと一軒のみずぼらしい小さな百姓家に辿り着くのでした。

十一、一軒の百姓家

夕方になって、とある一軒のみずぼらしい小さな百姓家にたどりつきました。その家は見るも哀れなありさまで、自分でもどっちへ倒れようか、わからない。そこで、とにかくこうして立っているというふうでした。ひどい風がアヒルの子のまわりをピューピューと吹きまくるので、倒れないためには、風にむかってしっぽをつっかい棒にしなければなりませんでした。ところが、風はますますひどくなるばかりでした。その時、ふと、入り口の戸が蝶番が一つはずれて、ななめになっているのに気がつきました。どうやら、そのすきまから、部屋の中へはいって行けそうでした。そこで、さっそくそうしました。

この家には、一人のおばあさんが、ネコとニワトリといっしょに住んでいました。おばあさんはこのネコを「息子ちゃん」と呼んでいました。息子ちゃんは背中を丸くしたり、のどをごろごろ鳴らしたりすることができました。また、火花を散らすこともできました。もっとも、それには、ネコの毛を、さかさにこすってやらなければなりませんけれどね。ニワトリはとても小さな短い脚をしていましたので、「短か脚のクックちゃん」と呼ばれていました。このニワトリは、よい卵をうむものですから、おばあさんは自分の子のように可愛がっていました。

朝になりますと、見なれないアヒルの子は、すぐ見つかってしまいました。ネコはのどをごろごろ鳴らし、ニワトリはクックと言いはじめました。「……どうしたっていうんだね？」、おばあさんはこう言って、あたりを見まわしました。ところが、おばあさんは目がよく見えないものですから、アヒルの子を、どこからか迷ってきた、太ったアヒルだと思いました。「……こりゃ、とんだ拾い物じゃ！」と、おばあさんは言いました。「……これからは、アヒルの卵も食べられるというもんじゃ。どうぞ、雄のアヒルでなきゃよいがな。まあ、しばらく飼ってみるとしよう」。（本文）

＊　＊

さて、夕方になって、とある一軒のみずぼらしい小さな百姓家に辿り着くが、その家は見るも哀れな有り様で、自分でもどっちへ倒れようかわからないので、とにかくこうして立っているというふうでした。ひどい風がアヒルの子のまわりをピューピューと吹きまくるので、倒れないためには、風に向かってしっぽをつっかい棒にしなければなりませんが、風はますますひどくなるばかりでした。その時、ふと入り口の戸が蝶番が一つはずれて、ななめになっているのに気がつき、どうやらそのすき間から部屋の中へはいって行けそうでしたので、さっそくそうしましたとある。――まず、一軒の小さな百姓家に何とか辿り着けたこと、しかも、その入り口の戸の蝶番が一つ外れてななめになっていたので、そのすき間から部屋の中へも入ることが出来たことは、ひどい風に難儀していたアヒルの子にとっては何よりも幸いなことであり、それによって、まさに吹き荒ぶ「ひどい風」から自分の身体を守ることができ得たのである。――それは、例えば、荒れ狂った山などで遭難した時に、何とか「山小屋」へと辿り着ければ、それだけでも最低限、荒れ狂う「雨風を凌ぐこと」はでき得るのであり、あとは、その「山小屋」に何が備わっているのか、また、自分（たち）の「リックサック」の中に何が入っているのかによっても、大きく変わるが、しかし、「山小屋」まで辿り着ければ、多くの場合、何とかなるのではないかと思うが、しかも、朝になれば、ふつう「救助隊」も活動を始めるものである。

＊　＊

さて、この家には、一人のおばあさんが、ネコとニワトリと一緒に住んでいて、おばあさんは、ネコを「息子ちゃん」と呼んでいたとある。――だとすれば、そのネコは、雄のネコであり、しかも「息子ちゃん」と呼ぶくらいであれば、まさに「息子」のように可愛がっていたのであり、その息子ちゃんは、背中を丸くしたり、のどをごろごろ鳴らしたり、また、火花を散らすこともでき、それには、ネコの毛を逆さにこすってやらなければなりませんとある。――例えば、ネコが本気で怒った時、その全身の毛を「総立ち」させることがあるが、それは、自分の身体を少しでも大きく見せて、相手を威嚇するためのものであり、一方、ニワトリは、とても小さな短い脚をしていたので、「短か脚のクックちゃん」と呼ばれていて、そのニワトリは、よい卵を産むものですから、おばあさんは自分の子のように可愛がっていましたとある。――つまり、一人暮らしのおばあさんにとっては、このネコとニワトリの存在は、まさに「かけがいのない家族」（つまり「息子と娘」）であり、よき「話し相手」でもあったということである。

さて、朝になると、見なれないアヒルの子は、すぐ見つかってしまい、ネコはのどをごろごろ鳴らし、ニワトリは、クックと言い始めたので、「……どうしたっていうんだね？」と、おばあさんはこう言って、あたりを見まわしましたが、おばあさんは目がよく見えないものですから、アヒルの子をどこからか迷ってきた太ったアヒルだと思い込み、「……こりゃ、とんだ拾い物じゃ！」と、おばあさんは言い、「……これからは、アヒルの卵も食べられるというもんじゃ。どうぞ、雄のアヒルでなきゃよいがな。まあ、しばらく飼ってみるとしよう」ということになり、その結果、アヒルの子は、このおばあさんの家で「ネコとニワトリ」と一緒に住むことになるのである。

十二、ネコとニワトリとアヒルの子

こうして、アヒルの子は、三週間、ためしに飼われることになりました。けれども、もちろん、卵は産みませんでした。――さて、この家では、ネコが旦那さんで、ニワトリは奥さんでした。そして、いつも口癖のように、「……われわれと世界！」と言っていました。それというのも、自分たちはめいめい半分だ、それも、一番よい半分だと思っていたからです。アヒルの子は、それとはべつの考え方もあるように思いましたが、ニワトリには、それが我慢できませんでした。「……おまえさん、卵を産むことができて？」と、ニワトリがたずねました。すると、「いいえ！」と答えるので、「……そう。じゃ、黙っていたらどう！」と。今度は、ネコが言いました．「……君は背中を丸くしたり、のどをごろごろ言わせたり、それから、火花を散らしたりできるかね？」と聞くと、「いいえ！」と答える。「……そう。じゃ、りこうな人たちが話をしている時は、意見をさしひかえることだなあ！」、そこで、アヒルの子はすみっこに小さくなって、くよくよしていました。そうしていると、思いだされるのは、すがすがしい空気と、お日様の光のことでした。そして、むやみと水の上を泳ぎまわりたい、不思議な気持ちになるのでした。とうとう、がまんができなくなって、そのことをニワトリのおくさんにうちあけました。（本文）

＊　＊

これは、非常に面白い場面であり、それは、次のようなことである。――つまり、おばあさんは、人間であり、ネコは、哺乳類であり、ニワトリとアヒルの子は、もちろん、鳥

類であるが、ニワトリは、野生の「赤色野鶏」（ニワトリの先祖）を飼いならして「家禽化」（人間の生活に役立つよう品種改良して飼育したもの）であり、その「卵や肉その他」などを利用しているものであるが、それは、アヒルの場合も全く同じことではあるが、ところが、この主人公の「アヒルの子」というのは、実は「白鳥の子」であって、それゆえ、「家禽化」したニワトリとは違って、いわば「野生の血」が流れているのであり、だからこそ、人工的な「鳥飼い場」を逃げ出して、ここまで来ているのであり、それは、この「アヒルの子」の中に流れている「野生の血」がそうさせているのである。（もちろん、みんなからいじめられるということも直接的な大きな要因ではあるが……）

まず、おばあさんは、アヒルの子を三週間ためしに飼うことになるが、それは、「アヒルの卵」が食べられるかも知れないというおばあさんの「価値観」からであり、また、ネコは、「……君は背中を丸くしたり、のどをごろごろ言わせたり、それから、火花を散らしたりできるかね？」と聞いているが、これは、このネコの「自慢」であり「価値観」でもあり、また、ニワトリは、「……おまえさん、卵を産むことができて？」と聞くが、これは、ニワトリの何よりの「自慢」であり「価値観」にもなっているものである。ところが、アヒルの子は、それらとはまた違って、「……思い出されるのは、すがすがしい空気と、お日様の光のことでした。そして、むやみと水の上を泳ぎまわりたい、不思議な気持ちになるのでした」とあるが、これこそは、まさにこの「アヒルの子」の中に流れている「野生の血」が内からそうつき動かしているのであり、もしふつうの「家禽化」した「アヒルの子」であったら、そこまでの「強い衝動」はなかったに違いないのである。

ところで、この家では、ネコが旦那さんで、ニワトリは奥さんでした。そして、いつも口癖のように、「……われわれと世界！」と言っていました。それというのも、自分たちはめいめい半分だ、それも、一番よい半分だと思っていたからです、とある。――まず、ネコは、オスであり、ニワトリは、メスである。それゆえ、「……ネコが旦那さんで、ニワトリは奥さん」であるのは、ごく自然で最なことであり、しかも、非常に仲の良い「ネコとニワトリ」であったので、「……自分たちはめいめい半分だ、それも、一番よい半分」（つまり「ベストハーフ」）であると思っていたとしても、何も不思議なことはない。ただ、問題があるとすれば、それは、この「ネコとニワトリ」の「見ている世界」は余りにも「狭いもの」であるが、しかし、この「ネコとニワトリ」たちにとっては自分たちが「見ている世界」がすべてであり、また、そこでの「価値観」こそ絶対であると思い込んでいるために、いつも口癖のように、「……われわれと世界！」と言っているのであり、ところが、アヒルの子（野生の白鳥の子）にしてみれば、「……それとは別の考え方もあるように思いましたが、ニワトリには、それが我慢できませんでした」となるのである。

十三、ニワトリとアヒルの子の考え方の違い

「……まあ、おまえさん、何を言い出すの？」と、ニワトリは言いました。「……なんにもすることがないもんだから、そんなばかげた考えをおこすんだわ。卵をうむとか、のどでも鳴らしてごらん！　そんなばかげた気まぐれは、どこかへ消えてしまうから」。「……でも、水の上を泳ぐのは、とてもすてきなんです！」と、アヒルの子は言いました。「……頭から水をかぶったり、水の底へもぐったりするのは、そりゃ気持ちがいいんです！」

と。すると、「……へえ、さぞかし気持ちがいいことでしょうよ！」と、ニワトリは言いました。「……おまえさんは気が狂ったんだわ！　ネコの旦那さんにきいてごらん！　あの人は、わたしの知っている一番りこうな人だからね。あなたは、水の上を泳いだり、水の底へもぐるのがお好きですかって！　わたしは、自分のことは、言いたかないわ。――わたしたちのご主人の、あのおばあさんにもきいてごらん。世界じゅうで、あのおばあさんより賢い人はいないんだよ！　おまえさん、いったい、あのおばあさんが泳いだり、水を頭からかぶったりしたくなるとでも思うの？」。（本文）

＊　＊

さて、ニワトリは、「……まあ、おまえさん、何を言い出すの？」と言い、「……なんにもすることがないもんだから、そんなばかげた考えをおこすんだわ。卵を産むとか、のどでも鳴らしてごらん！　そんなばかげた気まぐれは、どこかへ消えてしまうから」と言うと、アヒルの子は、「……でも、水の上を泳ぐのは、とてもすてきなんです！」、「……頭から水をかぶったり、水の底へもぐったりするのは、そりゃ気持ちがいいんです！」と言うのであった。――これは、殆どいつも「地上生活」をしているニワトリと、主に「水上生活」をしている「アヒルの子」（実は野生の白鳥の子）との「決定的な違い」であり、この「意識の違い」は、まさに「生態」（生活環境の違い）から生じて来るものであり、どうにも埋めようのないものであるが、それゆえ、ニワトリとしては、「……へえ、さぞかし気持ちがいいことでしょうよ！」と言い、「……おまえさんは気が狂ったんだわ！　ネコの旦那さんに聞いてごらん！　あの人は、わたしの知っている一番りこうな人だからね。あなたは、水の上を泳いだり、水の底へもぐるのがお好きですかって！　わたしは、自分のことは、言いたかないわ。――わたしたちのご主人の、あのおばあさんにも聞いてごらん。世界中で、あのおばあさんより賢い人はいないんだよ！　おまえさん、いったい、あのおばあさんが泳いだり、水を頭からかぶったりしたくなるとでも思うの？」と言うのであるが、これは、この「ニワトリ」の見ている世界が、まさに「おばあさんとネコと自分」その他というような、極めて「狭い範囲」になっているからである。

十四、みにくいアヒルの子の言い分

「……あなたがたには、僕の言うことが、おわかりにならないんです」と、アヒルの子は言いました。「……ふん、わたしたちに、おまえさんの言うことがわからないって？　じゃ、いったい、だれにわかるっていうの？　おまえさん、よもや、ネコの旦那さんや、あのおばあさんより、自分のほうがりこうだ、なんていうんじゃないだろうね。わたしはともかくとしてさ。子供のくせに、しゃれたことをお言いでないよ！　それよりか、ひとのしてくれた親切を神様にお礼を言うがいいよ。こうしておまえさんは、暖かい部屋にいれてもらってさ、わたしたちとつきあって、いろんなことをおぼえられたじゃないの。それだのに、おまえさんは、まぬけだよ！　おまえさんなんかとのおつきあいは、まっぴらだわ！　ほんとだよ。わたしは、おまえさんのためを思えばこそ、こんな面白くもないことを言うのさ。これが、ほんとうのお友だちというものだよ。ね。だから、卵をうむとか、のどをごろごろ鳴らして、火花を散らす工夫をすることだわ！」、「……でも、僕は、やっぱり外の広い世の中に出てみたい気がするんです」と、アヒルの子はいいました。「…

…そう、じゃ、かってにするといいわ！」と、ニワトリは言いました。（本文）

＊　＊

さて、アヒルの子は、「……あなたがたには、僕の言うことが、おわかりにならないんです」と言うと、ニワトリは、「……ふん、わたしたちに、おまえさんの言うことがわからないって？　じゃ、いったい、だれにわかるっていうの？　おまえさん、よもや、ネコの旦那さんや、あのおばあさんより、自分のほうがりこうだ、なんていうんじゃないだろうね。わたしはともかくとしてさ。子供のくせに、しゃれたことをお言いでないよ！　それよりか、ひとのしてくれた親切を神様にお礼を言うがいいよ。こうしておまえさんは、暖かい部屋にいれてもらってさ、わたしたちとつきあって、いろんなことをおぼえられたじゃないの。それだのに、おまえさんは、まぬけだよ！　おまえさんなんかとのおつきあいは、まっぴらだわ！　ほんとだよ。わたしは、おまえさんのためを思えばこそ、こんな面白くもないことを言うのさ。これが、ほんとうのお友だちというものだよ。ね。だから、卵を産むとか、のどをごろごろ鳴らして、火花を散らす工夫をすることだわ！」と言う。

これは、おばあさんの家（おばあさんとネコとニワトリ）と一緒に仲良く暮らして行くには、まさにニワトリの「言う通り」であるが、しかし、アヒルの子は、実は「野生の白鳥の子」であるがために、彼らの世界の中で生きて行くには、そこは「余りにも狭過ぎる」のであり、それゆえ、アヒルの子は、「……でも、僕は、やっぱり外の広い世の中に出てみたい気がするんです」となるが、これは、まさにアヒルの子（実は野生の白鳥の子）の「野生の血」がそう言わせているのであり、一方、ニワトリは、「……そう、じゃ、かってにするといいわ！」と、言うのでした。――この「二羽の言い分」は、結局、どこまで行っても平行線であるしかなく、それゆえ、結果として、アヒルの子は、おばあさんの家を出ていくことになるのである。

十五、違う場所に……

こうして、アヒルの子は出て行きました。そして、水の上を泳いだり、水の底へもぐったりしました。けれども、姿がみにくいばかりに、どの動物からも、相手にされませんでした。――そのうちに秋になりました。森の木の葉は、黄色くなり、茶色になりました。そして、強い風に乗せられて、くるくると舞いあがりました。空はいかにもさむざむとしていました。雲は、あられや雪をふくんで、どんよりとたれさがっていました。生垣の上にはカラスがとまって、いかにも寒そうに「カーカー！」と鳴いていました。ほんとに、思ってみるだけでも、寒くてぶるぶる震えそうです。可哀そうに、アヒルの子も、いい目にはあいませんでした。（本文）

＊　＊

さて、おばあさんの家を出て、アヒルの子は、ひとり、水の上を泳いだり、水の底へもぐったりしましたが、姿がみにくいばかりに、どの動物からも相手にされませんでしたとある。（これは、いろいろ努力してみたが、結局、誰からも評価されなかったということかも知れない）。そして、季節は、秋となり、晩秋となり、そして、冬へとなっていくが、これは、本文では「時間の経過」をまさに「自然の風景の変化」で表現しているのであり、それは、――そのうちに秋になり、森の木の葉は、黄色くなり、茶色になり、そして、強

い風に乗せられて、くるくると舞い上がりました。空はいかにもさむざむとしていて、雲は、あられや雪をふくんで、どんよりとたれ下がっていました。生垣(いけがき)の上にはカラスが止まって、いかにも寒そうに「カーカー！」と鳴いていました。ほんとに、思ってみるだけでも、寒くてぶるぶる震えそうです。可哀そうに、アヒルの子は、この間(かん)、いい目に会うことは一度もなかったのです。ちなみに、作者（アンデルセン）が世に出るのは、三十歳の頃の、有名な『即興詩人』からであり、それまでは、いわば「みにくいアヒルの子」のような時期を過ごしていたのかも知れない。

十六、白鳥との出逢い……

ある夕方、お日様がそれははなやかに沈みますと、アヒルの子が今までに見たこともないような美しい大きな鳥の群れが、茂みの中から飛びたちました。それらの鳥は、輝くばかりにまっ白で、長いしなやかな首をしていました。それは白鳥の群れだったのです。白鳥たちは不思議な叫び声をあげ、美しい大きな翼をひろげて、寒い土地から暖かい国へと、大海原をさして飛んで行くところでした。白鳥たちは高く高く空に舞いあがりました。みにくいアヒルの子は、言うに言われぬ不思議な気持ちになりました。そして、水の中で、車の輪のようにぐるぐるまわりながら、はるかな空を飛んで行く白鳥のほうへ首をさしのべて、自分でもびっくりするような、高い、いつもとちがった、叫び声をあげました。ああ、あの美しい鳥、あの幸福な鳥を、どうして、忘れることができましょう！　白鳥の姿が見えなくなりますと、すぐ、水の底へもぐりました。そして、再び水の上に浮かび上がってきた時は、まるで気が狂いそうでした。アヒルの子は、あの鳥がなんという鳥なのか、また、どこへ飛んでいったのかも知りませんでした。けれども、いままでの何よりも、あの鳥が慕わしくなりました。うらやましいなどという気持ちはちっともありませんでした。あんな優美な姿になろうなんて、どうしてのぞむことができましょう。せめて、アヒルたちの仲間に入れてくれさえしたら、どんなにうれしいかしれないのに！――ほんとうに、可哀そうなみにくいアヒルの子でした。（本文）

＊　＊

さて、ある夕方、お日様がそれははなやかに沈むますと、アヒルの子が今までに見たこともないような美しい大きな鳥の群れが、茂みの中から飛び立ちました。それらの鳥は、輝くばかりにまっ白で、長いしなやかな首をしていました。それは白鳥の群れだったのです。白鳥たちは不思議な叫び声を上げ、美しい大きな翼をひろげて、寒い土地から暖かい国へと、大海原をさして飛んで行くところでした。白鳥たちは高く高く空に舞い上がりました。みにくいアヒルの子は、言うに言われぬ不思議な気持ちになりましたとある。

＊　＊

これは、非常に「大事な場面」であり、例えば、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、何をどうしてよいかよくわからない時期を過ごすものであり、それゆえ、この主人公のアヒルの子のように、あちらこちらとあてなくさまようことになるが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真(ほんとう)に「深く満たしてくれるもの」であり、たとえそれが「何か」はよくわからなくても、ある日、ある時、こ

の主人公のアヒルの子のように、思いもかけないような感じで、輝くばかりにまっ白で、長いしなやかな首をした白鳥の群れに出遭うことによって、言うに言われぬ不思議な気持ちに襲われるが、それは、まさにその「人の心」が、知らず識らずうちに、探し求めていたものについにばったりとめぐり遭った時の「強烈な衝撃」であり、「……ああ、自分がずっと探し求めていたものは、まさにこれだったのだ！」というような感じで、それこそ、文字通り、「運命的な出遭い」となっていくものであり、例えば、作者（アンデルセン）にしても、物語（文章）を書くという「作家」（童話作家）になることによって、彼の「道」（人生）は、まさに大きく拓けて行ったということである。

＊　＊

さて、アヒルの子は、水の中で「車の輪」のようにぐるぐるまわりながら、遙かな空を飛んで行く白鳥のほうへ首をさしのべて、自分でもびっくりするような、高い、いつもと違った、叫び声を上げました。ああ、あの美しい鳥、あの幸福な鳥を、どうして忘れることができましょう！　白鳥の姿が見えなくなると、すぐ水の底へもぐりました。そして、再び、水の上に浮かび上がってきた時は、まるで気が狂いそうでした。アヒルの子は、あの鳥がなんという鳥なのか、また、どこへ飛んでいったのかも知りませんでした。けれども、今までの何よりも、あの鳥が慕わしくなりましたとある。――これは、まさに「……探し求めていたものについにばったりとめぐり遭った時」の「強烈な衝撃」であるが、しかし、このアヒルの子には、まだそれがよくわからないために、「……うらやましいなどという気持ちはちっともありませんでした。あんな優美な姿になろうなんて、どうしてのぞむことができましょう。せめて、アヒルたちの仲間に入れてくれさえしたら、どんなにうれしいかしれないのに！」と思うばかりであり、それを想い出しては、作者（アンデルセン）は、――ほんとうに、可哀そうなみにくいアヒルの子でした、と回想しているのである。

十七、湖の表面には氷が張って……

さて、いよいよ、冬もほんとうに寒く寒くなってきました。アヒルの子は、水のおもてがすっかり凍ってしまわないように、たえず泳ぎまわっていなければなりませんでした。けれども、一晩ごとに、泳ぎまわる場所が狭く小さくなって行きました。張りつめた氷の表面が、ミシミシ音を立てるほどになりました。アヒルの子は、水にとじこめられてしまわないように、絶えず足を動かしていなければなりませんでした。けれども、とうとうしまいに、疲れきって、動けなくなり、じっと氷の中に凍りついてしまいました。

次の朝早く、一人のお百姓が通りかかりました。アヒルの子を見ますと、すぐそこへ行って、木靴で氷を砕いて、家のおかみさんのところへ持って帰りました。そこで、アヒルの子は生きかえりました。

お百姓の子供たちは、いっしょに遊ぼうとしましたが、アヒルの子は、またいじめられるものと思って、びっくりして、ついミルク壺の中へとびこんでしまいました。ミルクが部屋じゅうにとびちりました。おかみさんはとんきょうな声をあげて、両手を高くあげて打ちました。アヒルの子は、こんどはそれにびっくりして、バターの入っているたるの中へとびこみました。それから麦粉の桶の中へとびこんで、また、とびあがりました。いや

はや、たいへんなことになりました！　おかみさんは金切り声をあげて、火ばさみで、打ってかかり、子供たちは、アヒルの子をつかまえようとして、はちあわせをして、笑うやらわめくやら、いやもう、その騒ぎといったらありません。――ところが、運よく、戸があいていましたので、アヒルの子は、そこから逃げだして、たったいま降ったばかりの雪の中を茂みの中へとびこみました。――そして、そこで、冬眠でもしているように、じっとしていました。（本文）

＊　　＊

さて、いよいよ冬もほんとうに寒く寒くなってきました。アヒルの子は、水のおもてがすっかり凍ってしまわないように、たえず泳ぎまわっていなければなりませんでした。けれども、一晩ごとに泳ぎまわる場所が狭く小さくなって行きました。張りつめた氷の表面が、ミシミシ音を立てるほどになりました。アヒルの子は、水に閉じ込められてしまわないように、絶えず足を動かしていなければなりませんでした。けれども、とうとうしまいに、疲れきって動けなくなり、じっと氷の中に凍りついてしまいましたとある。

＊　　＊

例えば、シベリアにいるオオハクチョウやコハクチョウたちは、なぜ、日本へとやって来て、越冬するのかと問えば、それは、まさに「エサ」のためであり、冬のシベリアは、それこそ、「雪と氷の世界」に深く覆（おお）われてしまう。そこで、はるばる海を渡る約四千km（約二週間）の長旅をして、日本へと飛来し、その辿り着いた「湖や沼」その他などで、基本は「水草や藻」（好物は「マコモの茎や根」など）を食べていますが、エサが不足すれば、田んぼなどで「落ち穂や稲の切り株の茎や根」などを食べたりしています。もちろん、人間がエサをやる場合もあるが、それは、主に「……パンくず、トウモロコシ、麦類、その他」の穀物がまかれている場合が多いかと思う。

さて、越冬したハクチョウたちは、三月にはシベリアへ向け日本を飛び立ち、四月には約二週間の旅をしてシベリアへと到着し、五月には巣作りを始めて、約三～六個の卵を産み、その卵は、約三十～四十日を経て、六月には孵化（ひな）になるが、そのひなたちは、親たちと一緒に過ごして成長し、そして、三か月後の九月には、その幼鳥たちも、飛ぶことが出来るようになり、シベリアの湖水（みずうみ）が凍る九月から十月には、今度は、その子たちを連れて、日本へと再びやって来るのである。――ちなみに、オオハクチョウの寿命は、約十五年、一方、コハクチョウの寿命は、約二十年となっている。

＊　　＊

さて、本文では、アヒルの子は、水に閉じ込められないように、絶えず足を動かしていなければならなかったが、とうとうしまいに疲れきって動けなくなり、じっと氷の中に凍りついてしまいました。――しかし、次の朝早く、一人のお百姓がそこを通りかかり、アヒルの子を見ると、すぐそこへ行って、木靴（きぐつ）で氷を砕いて、家（うち）のおかみさんのところへ持って帰ったので、アヒルの子は生きかえりましたとある。

これは、凍りついて「身動きできない状態」から、木靴（きぐつ）で氷を砕いて、家（うち）のおかみさんのところへ持って帰ったということで、これは、まさに一人のお百姓さんに「命を救ってもらった」ということであり、そして、そのお百姓さんの子供たちは、そのアヒルの子と一緒に遊ぼうとしたが、アヒルの子は、またいじめられるものと思って、びっくりして、ついミルク壺（つぼ）の中へ飛び込んでしまい、ミルクが部屋（へや）じゅうに飛び散り、おかみさんはと

んきょうな声を上げて、両手を高く上げて打ちましたが、アヒルの子は、今度はそれにびっくりして、バターの入っているたるの中へ飛び込んでしまい、それから麦粉の桶の中へ飛び込んで、また、飛び上がりました。いやはや、大変なことになり、おかみさんは金切り声を上げて、火ばさみで打ってかかり、子供たちは、アヒルの子を捕まえようとしてはち合わせをして、笑うやらわめくやら、いやもうその騒ぎといったらありませんでした。

これは、「アニメ」などでもよく描かれる、まさに「ドタバタ劇」の一面であるが、それは、まず、アヒルの子は、子供たちにいじめられると思って、びっくりして、「……ついミルク壺の中へ飛び込んでしまうと、ミルクが部屋中に飛び散り、それを見た、おかみさんはとんきょうな声を上げて、両手を上げて打ちますが、アヒルの子は、今度はそれに驚いて、バターの入っているたるの中へ飛び込み、それから麦粉の桶の中へも飛び込むという、次から次へとドタバタが続くことになるが、しかし、運よく戸が開いていたので、アヒルの子は、そこから逃げ出して、たったいま降ったばかりの雪の中を茂みの中へ飛び込み、そして、そこで、冬眠でもしているように、じっとしていましたとある。――つまり、アヒルの子は、どこへ行っても「うまくいかない」ので、結局、冬眠でもしているようにじっとしているしか仕方がなかったのである。ところで、こういう時期は、誰にも「長い人生」の中ではいくらでもあることであり、それゆえ、大事なことは、その時に何もしないのではなく、それでは何年何十年経っても何も変わらないのであり、何よりも大事なことは、自分に合った「場所と目標」を見つけて、いま自分にできる努力を何年も積み重ねて行くことによって、その人の「道」（人生）も、おのずと拓けていくのである。

十八、寒い冬から暖かな春へと……

さて、このきびしい冬のあいだ、アヒルの子が堪えしのばなければならなかった苦しみや悲しみを、のこらずお話することは、あまりにも悲しいことではないでしょうか。――アヒルの子は沼の中の芦のあいだにじっとしていました。そのうちに、いつしかお日様が、再び暖かに輝きはじめました。ヒバリが歌をうたいはじめました。――美しい春になったのです。――その時、アヒルの子はふと、翼を羽ばたいてみました。すると、それは前よりもつよく空気を打って、からだがぐっと空に浮かびました。そして、わけがわからないうちに、とある大きな庭の中に来ていました。そこにはリンゴの木が花ざかりで、リラがよいにおいにかおっていました。その長い緑の枝は、静かにうねって流れている堀割の上にたれていました。ああ、なんと美しい、さわやかな春の景色でしょう！　その時、まっすぐ前の茂みの中から、三羽の美しいまっ白な白鳥が出てきました。白鳥たちは、翼を、さあっとなびかせて、水の上をすべるように泳いできました。アヒルの子は、このりっぱな鳥に見おぼえがありました。そして、不思議な悲しい気持ちにあそわれました。（本文）

＊

さて、この厳しい冬の間、アヒルの子が堪え忍ばねばならなかった「苦しみや悲しみ」などを残らずお話することは、あまりにも悲しいことではないでしょうか。――これは、作者（アンデルセン自身）の「感想」（感慨）でもあるのだろうが、アヒルの子は、沼の中の芦の間にじっとしていました。そのうちに、いつしかお日様が再び暖かに輝きはじめ、ヒバリが歌をうたい始める「美しい春」になったのです。――さて、長い冬から、いよい

よ「美しい春」を迎えることになるが、もちろん、それに気づくのは、いつしかお日様が再び暖かに輝きはじめ、ヒバリが歌をうたい始めるという「自然の変化」からではあるが、しかし、アヒルの子自身、まさに「自分自身の変化」にも気づくようになるのであり、それは、「……その時、アヒルの子は、ふと翼を羽ばたいてみました。すると、それは前よりもつよく空気を打って、からだがぐっと空に浮かびました」とある。これは、自分でも気づかないうちに、自分自身が確実に成長していたということであり、そして、わけもわからないうちに（これはアヒルの子なのに空に舞い上がって）、とある大きな庭の中に来ていました。そこにはリンゴの木が花ざかりで、リラがよい匂いに香（かお）っていました。その長い緑の枝は、静かにうねって流れている堀割の上に垂れていました。ああ、なんと美しい、さわやかな春の景色でしょう！　これは、まさに「春の美しい自然の景色」をながめてそう思う一方、――その時、まっすぐ前の茂みの中から、三羽の美しいまっ白な白鳥が出てきました。白鳥たちは、翼を、さあっとなびかせて、水の上をすべるように泳いできました。アヒルの子は、このりっぱな鳥に見覚えがあり、そして、不思議な「悲しい気持ち」に襲われましたとある。――これは、まだ「自分の姿の変化」に気づいていないからであり、自分はまだ「みにくいアヒルの子」だとすっかり思い込んでいるために、りっぱな白鳥を見て、何か近づき難いような「引け目」（劣等感）を感じているのである。

十九、いつしか美しい白鳥の姿に……

「……あのりっぱな堂々とした鳥のところへ飛んで行こう！　だけど、こんなみにくい僕みたいなものが、遠慮なく近づいていったら、殺されてしまうかもしれない。でも、かまわない！　アヒルたちにこづかれたり、ニワトリにつっつかれたり、鳥飼い場の娘さんにけとばされたり、寒い冬じゅうひどい目にあったりするよりは、いくらましだかしれやしない！」と、こう思って、アヒルの子は水の上に飛んで行って、美しい白鳥たちのほうへ泳いで行きました。一方、白鳥たちはそれを見ると、羽をなびかせて、すうーっとこちらへ向かって来ました。「……さあ、僕を殺してください！」と、哀れなアヒルの子は言かって来ました。「……さあ、僕を殺してください！」と、哀れなアヒルの子は言

＊　＊

さて、長く厳（きび）しい冬の間、ずっと独（ひと）り「引き籠（こも）っていた」アヒルの子は、その余りに長い「孤独や寂しさ」などに堪えかねて、もう「どうなってもいい」と意を決して、まさに「……あのりっぱな堂々とした鳥のところへ飛んで行こう！　だけど、こんなみにくい僕みたいなものが、遠慮なく近づいていったら、殺されてしまうかもしれない。でも、かまわない！　アヒルたちにこづかれたり、ニワトリにつっつかれたり、鳥飼い場の娘さんにけとばされたり、寒い冬じゅうひどい目にあったりするよりは、いくらましだかしれやしない！」と、こう思って、アヒルの子は水の上に飛んで行って、美しい白鳥たちのほうへ泳いで行きました。一方、白鳥たちは、それを見ると、羽をなびかせて、すうーっとこちらへ向かって来ました。「……さあ、僕を殺してください！」と、哀れなアヒルの子は言いながら、頭を水の上にたらして、死を待っていました。――ところが、すみきった水のおもてに、いったい何がうつって見えたでしょう？　それは、自分自身の姿でした。けれども、それはもう、あのぶかっこうな灰色の、みんなにいやがられた、みにくいアヒルの子ではなくて、一羽のりっぱな白鳥でした。（本文）

いながら、頭を水の上にたらして、死を待っていました。――さて、この「……さあ、僕を殺してください！」という言葉は、実に「衝撃的な言葉」であるが、これは、まさに「もうどうなってもいい」と意を決して行動しているのである。――ところが、澄みきった水の面に、一体、何が映って見えたでしょう？　それは、自分自身の姿でした。けれども、それはもうあのぶかっこうな灰色の、みんなにいやがられた、みにくいアヒルの子ではなくて、一羽のりっぱな白鳥でした。――これは、たとえ子供の頃は「みにくいアヒルの子」と呼ばれても、本人の努力次第で、いくらでも「美しい白鳥」へと変身することはでき得るということであり、それを実際に実証してくれたのが、まさに「作者」（アンデルセン）自身であったということである。

二十、美しい白鳥の姿となって……

白鳥の卵からかえったものならば、たとえ鳥飼い場で生まれようと、それはたいしたことではありません。いままで堪えしのんできた、さまざまな悲しみや苦しみを思うにつけ、今の自分を、心からうれしく感じました。今こそ、自分の幸福を、そして、自分を迎えてくれたあらゆる喜びを、はっきり知ることができました。――大きな白鳥たちは、まわりに寄ってきて、くちばしで羽をなでてくれました。――その時、庭の中へ、小さな子供が二三人はいってきました。そして、パンや麦粒を水の中へ投げました。そのうちの一番小さい子が、大声で言いました。「……あそこに新しい白鳥がいるよ！」、すると、ほかの子供たちもいっしょにうれしそうな声をあげました。「……ああ、ほんとうね。新しい白鳥が来たわ！」、みんなは手をたたいて踊りまわりました。それから、お父さんやお母さんのところへ駆けて行きました。そしてまた、パンやお菓子が水の中へ投げ込まれました。人々は、「……新しい白鳥が一番きれいだ！　若くて、美しいこと！」と言いました。年下の白鳥たちは、新しい白鳥の前に頭をさげました。

若い白鳥は、すっかり恥ずかしくなって、どうしてよいかわからないで、頭を翼の下にかくしました。白鳥はあまりにも幸福でした。けれど、すこしも、たかぶるようなことはしませんでした。なぜなら、心の素直なものは、けっして、たかぶるようなことはしないからです。白鳥は、今までどんなに追いかけられたり、ばかにされたりしたかを思いだしました。それが今は、みんなに、すべての美しい鳥のうちでも一番美しい、と言われるのを聞くようになったのです。リラは、水の上の白鳥のほうへ枝を低くたれました。お日様は暖かく、そして、やさしく照っていました。若い白鳥は、羽をさあっとなびかせて、すんなりとした首をあげました。そして心から喜びの声を上げました。「……僕が、みにくいアヒルの子だった時は、このような多くの幸福は夢にも思わなかった！」と思うのであった。（完）

＊　　＊

これは、もう「白鳥になってからの作者」（アンデルセン）の、まさに素直な「告白」文になっているかと思うが、まず、「……白鳥の卵からかえったものならば、たとえ鳥飼い場で生まれようと、それはたいしたことではありません」とある。――さて、ここに「白鳥の卵」とあるが、それは、一体、何かと問えば、それは、人間として「善き性格や資質或いは優れた才能や天分」その他などを内に宿して持っていれば、たとえ「鳥飼い場」（あ

まり恵まれないような環境）で生まれ育っても、それはたいしたことではなく」て、大事なのは、自分に適した「場所と目標」とを見つけて、そこで必要な努力を積み重ねれば、道はいくらでも拓けていくということであり、今まで堪え忍んできた、様々な「悲しみや苦しみ」などを思うにつけ、今の自分を心からうれしく感じました。今こそ、自分の幸福を、そして、自分を迎えてくれたあらゆる喜びをはっきり知ることができました。――大きな白鳥たちは、まわりに寄ってきて、くちばしで羽をなでてくれました。――その時、庭の中へ、小さな子供が二三人はいってきました。そして、パンや麦粒を水の中へ投げました。そのうちの一番小さい子が、大声で言いました。「……あそこに新しい白鳥がいるよ！」、すると、ほかの子供たちも一緒にうれしそうな声を上げました。「……ああ、ほんとうね。新しい白鳥が来たわ！」、みんなは手をたたいて踊りまわりました。それから、お父さんやお母さんのところへ駆けて行きました。そしてまた、パンやお菓子が水の中へ投げ込まれました。人々は、「……新しい白鳥が一番きれいだ！　若くて、美しいこと！」と言いました。年下の白鳥たちは、新しい白鳥の前に頭を下げました。――これは、もう「老若男女」から高く評価され、認められ、暖かく迎えられているということである。

若い白鳥は、すっかり恥ずかしくなって、どうしてよいかわからないで、頭を翼の下に隠しました。白鳥はあまりにも幸福でした。けれど、少しもたかぶるようなことはしませんでした。なぜなら、心の素直なものは、決してたかぶるようなことはしないからです。白鳥は、今までどんなに追いかけられたり、ばかにされたりしたかを思い出しました。それが今は、みんなにすべての美しい鳥のうちでも一番美しい、と言われるのを聞くようになったのです。リラは、水の上の白鳥のほうへ枝を低く垂れました。お日様は暖かく、そして、やさしく照っていました。若い白鳥は、羽をさあっとなびかせて、すんなりとした首を上げました。そして心から喜びの声を上げました。「……僕が、みにくいアヒルの子だった時は、このような多くの幸福は夢にも思わなかった！」と思うのであった。（完結）

＊　＊

「参考文献」

※底本「アンデルセン童話集一二」大畑末吉訳（「岩波文庫」）